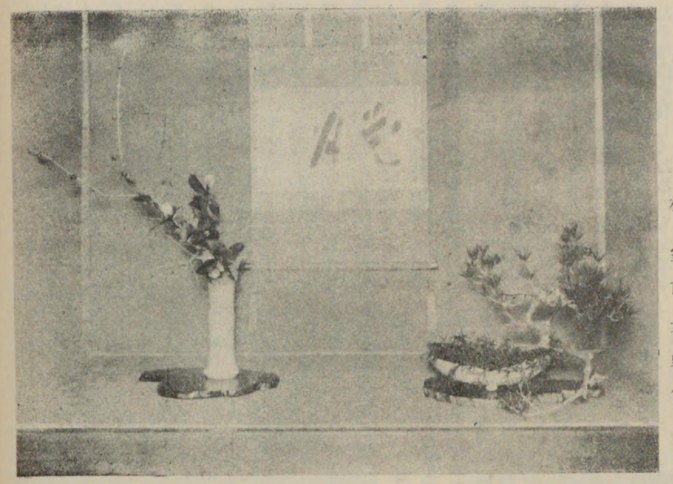
御室未生流花道家元 裏千家茶道教授 榮明齋 林 室甫女史



林室甫女史作

女史は明治十三年十二月七日、愛媛縣松山市出淵町三六番地に生る。本名榮子、松山藩士宮内大藏氏の二女である。

生家は代々松平家に仕へ、父君大藏氏は御測用人として諸般の藩政のことに當り、重望を荷ふてゐた人である。

長じて女史は龜山藩主板倉家の臣、砲術指南役林家に來嫁した。

女史は明治三十二年青葉流御室華務總職靜稚齋花勝師の門に入り生流師範として、社中の養成に努めつゝあつたが、女史の技術には、獨自の創意あるものとなつたので昭和三年一月三十日、御室未生流を樹立し、その家元となつて斯界に打つて出づることとなつた。

得意の花は投入盛花で、かつて照宮殿下御降誕紀念として、奈良法華寺に献花し、その寫眞帖を献上したるため、感謝狀を賜はり、又、忠清北道知事より挿花に對する賞を贈られた。

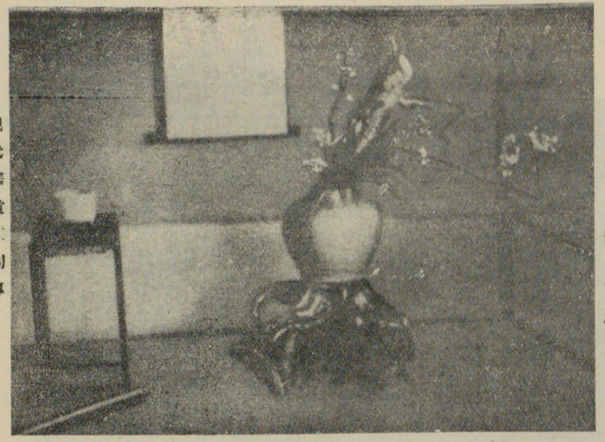
女史平生研究の充實を期すると共に、一般人の花に對する愛着心を喚起したいと努力してゐる。

餘技としては八雲流の琴曲に長じ、その師範免狀を許されてゐる。

夫君また同流の達者、仲に一女ありて圓滿なる家庭である。(大阪市東成區玉江町三丁目三〇五番地)

林室甫女史

家元池坊華道教授 賣茶流煎茶及瓶花教授 沖 靜遊氏



沖靜遊氏

氏は安政三年辰年十一月十日、播州龍野城下に生る。本名を靜馬といふ。

氏は播州龍野脇阪淡路守の舊臣十一歳にして主君の御小姓となり元服後は御側目付を奉仕した。氏の父君は榮太郎といひ、劍槍の指南番として仕へてゐたので、氏も幼よりこの流れを汲んで、斯道に達した。明治初年廢藩置縣後は、龍野において、心形刀流の劍道および新海流の柔道の指南をなす六年、後、警察官として奉職し、明治三十九年に至るまで、勤續したのである。

退官後は一時神戸勞働株式會社に入つたが、約二十年前より隱棲し、閑日月を樂しみつゝある。

氏は武道修業の傍ら鄉里なる池坊佐竹春曉庵師について學んだ。時に僅かに十六歳、後その業を大成したのである。而して、氏は退官と共に、廣島縣吳なる賣茶流茶道家元島村仙遊先生の門に入りて、斯道を究はめ、今や總鑑の重位に居る。又、同流瓶華をも修得する處があつた。なほこの瓶華は、畫題を定めて挿すのを特色とするもので、頗る雅趣あるものであるといふ。

沖靜遊氏

氏は清廉にして德義に厚く、恰も古武士の面影を髣髴するものがある。

餘技は碁、夫人との間に二女あり、眞に清福の家庭である。(神戸市稻葉町七丁目四番地)

遠神流華道教授
裏千家流茶道教授
遠瓢齋 **三浦明甫氏**

三浦明甫氏

氏は慶應三年六月十九日、神戸市大開通十丁目六ノ一に生る。本名を權次といひ、祐規氏の長男である。

生家は播州の藩士であつて、父君祐規氏は藩の馬廻役を勤め、母堂は同藩の佐藤家より入つた人である。

氏は明治二十八年より遠神流家元島津虎人氏に入門して、斯道の研究に從ひ、同三十年早くも師範免許を得ると共に、社中の指導に當り、流祖歿するや、二代家元を援けて、當流現在の繁榮を招來するに至つた。

二代家元歿後は、總務寺岡氏と協力して、流内における諸般の流務を寺岡氏に託し、氏は專ら技術の方面を擔任して、流内師範者の研究を誘導し、且つ三代家元たるべき人の指導に全力を盡しつゝある。

氏が得意の花は燕子花、水仙等である。

ふじ子夫人また茶道の師範として、氏を助けつゝある。

資性溫良にして重厚、信義を重んずること頗る深く、當流の大黒柱として、上下の絶大なる信頼を得てゐる。(神戸市大手筋町六丁目二番屋敷)

三浦明甫氏作

川上清川氏作

正風遠州流華道教授
信州上伊那正風會長
里松齋 **川上清川氏**

華道正風遠州流の起原は遠く三百餘年の昔にして、爾來幾多の巨匠を出してゐる。氏は信州伊那町に生まる。本名兼次郎と云ひ、夙に同流の大家として知られたりし清香齋一心師の門に入りて、一意その研究を續くること多年、その蘊奥をきはめ、師の免許を得て其の遺業を繼承し、明治三十五年より、禮儀作法、生花盛花の教授を開始し、今日に至つたのであるが、今日までに養成したる門下數百名に達し、今や益々盛況を示しつゝある。

川上清川氏

氏は現に信州上伊那郡正風會の會長として、地方華道會のため熱心努力しつゝあり。(長野縣上伊那郡伊那町東町)

◎

又幾世淵となるらん菊の露　昌察

高根より雨はふり來ぬ菊の宿　乙二

雁の聲高さ五尺の紫苑哉　氣葉

池坊龍生派華道教授
小原流盛花瓶華教授
表千家茶道教授
泉松園　伴　翠榮女史

伴翠榮女史

女史は明治元年正月十七日、盛岡市鷹匠小路栃内泰吉氏三女として生まる。本名マキといふ。十五歳の時より母につきて茶湯、生花、三昧線を習ひ初め、後華道は松本いと子師について學び、大に得る所があつた。

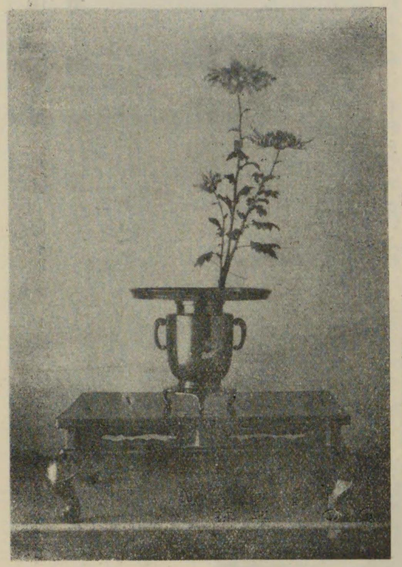
その後明治四十年東京において池坊龍生派家元吉村華芸氏の直弟子となり研究すること年あり、教授職を許されて、郷里に歸り子弟の養成に努め來つたが、女史の長男學業を終へて、福島縣廳に奉職するに及び福島市に轉じ、その後大正七年、長男が現在の郡山地方專賣局に轉勤と同時に、郡山市に移住し、爾來今日に至るまで社中の教養に努め、教授職に推擧せるもの拾數人に及ぶといふ。

斯くの如く、後進の指導に對して熱心なる女史は、目下郡山市に龍生派の華道研究會を組織し、その會長として盡瘁せる一方小原流平一鶯師について盛花を研究し郡山一鶯會長として、大に之が普及に努め、又香華會の理事として斯道のため奮闘しつゝある。

女史が華道に對する立場は、單に花枝の末に拘泥することのみを足れりとせず、花道を以て人心教化の道となし、道義の具現としての華道を標榜して、これに從事しつゝあることは、その見識の凡ならざることを知るに足るのである。

家庭は、長男夫妻及び愛孫一男一女の六人にて、長男は大藏省技術官として專賣局に奉職し、夫人は母君のために華道の補助として盡し一家擧つて、風流を樂しみつゝありと云ふ。（福島縣郡山市堤下町拾參番地）

伴翠榮女史作



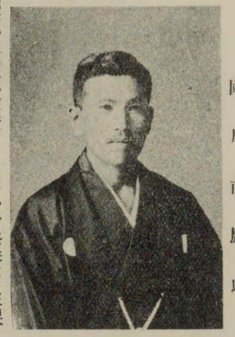
國原南巖氏作

源氏流華道教授
松雲亭　國原南巖氏

氏は明治十四年四月八日、山口縣玖珂郡高森町に生まる。本名を壽遠といふ。家は代々農業を營み、名望家として知らる。父君惣次郎氏は熱心なる宗教家にして、篤實溫厚、殊に花道に趣味あり、南巖氏は其長男に生れ、性溫順、家業をつぐ。

氏は明治二十八年三月、同地の小學校卒業後、桂宗謙師の門に入り漢籍を修む。又夙くより佛教を信じ、常に名利を離れて風流に遊ぶの志があつた。

明治三十二年四月、源氏流宗家松江亭釣月師の門に入り生花を學ぶこと數年、同四十一年二月師範免許を受け、大正四年八月斯道の奥儀を極め、皆傳教授を免許された。その後大正七年二月大日本華道會に入會し、新華道師花法を研究し、九年一月盛花投入花教授を免許された。又、大正十年四月、茶道宗家長谷川千松齋師に入門し茶道を研究し、師範職を免許され、同年大日本禮節學院長松崎双葉師に入門、作法教授を免許された。



國原南巖氏

斯くて各種の免許を得たる氏は、大正十三年四月、山口縣玖西高等實業女學校に囑託を命ぜられ、現在に及んでゐるのであるが、爾來青年團、處女會及び婦人會等に聘せられ、華道教授として常に多忙を極めてゐる。社中は既に八百餘名を出せりといふ。

氏は單に花卉を挿し花型を整へるといふことのみに拘泥せず、常に心身修養を主眼とし、又、艶麗なる洋花よりも野生の草木を挿すに趣味深く、且つ舊來の花型に拘束されず、自然を尊重して、新味を加へ、幾多の新花型を創作し、これに成功してゐる。

氏は門人に對しては頗る親切丁寧にして、如何なる極意といへども、少しも惜しむところなく、やさしく教ふることを以て師たるの道としてゐる。されば社中は氏を父の如く慕ひ入門するもの日々に多しといふ。（山口縣玖珂郡高森町）

梶井宮御流華道師範
表千家茶道教授
一照齋　飛松嶺月女史

女史は明治八年八月四日、熊本縣鹿本郡八幡村大字杉、津原四郎治氏の女として生まる。嫁して飛松姓を名乘る。本名をツネといふ。

女史は幼少より華道に親しんだが、明治四十二年梶井宮御流華道教授免許、大正二年同流師範を免許、大日本華道四明會部長を命ぜられ、大正十二年梶井宮御流臺灣會頭職に任ぜられ、以つて今日に至つたのである。

女史の養成したる社中にして、師範七名、教授四十一名を出しては、生花茶湯を以て觀善觀するは女一人。（臺北市東門町一〇六、一〇三番地）

飛松嶺月女史

家庭は女婿、長女、愛孫男二人

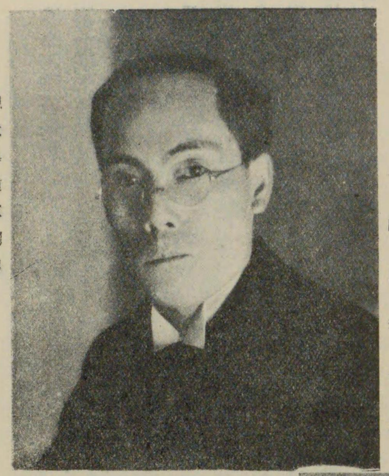
學校囑託として、華道及び、表千家茶道、小笠原式禮法等を教授しつゝあり。

女史が華道に對する意見の一端

女史が得意の花は老松、萬年青、

◎
花いけの耳を隱すや桔梗笠　逸名
◎
光琳の草の風情や花桔梗　闌更
◎
秋海棠西瓜の色に咲にけり　芭蕉
◎
猫の毛のぬれて出で鬼菊の露　岱水
◎
湖は年ふる菊の雫かな　紹巴
◎
野分過ぎて氣樂に咲や菊の花　篤羽
◎
清香をめぐらせけふの菊の風　之白

池坊聲外派教授
素心流瓶華家元
三昧庵　廣田素外氏



現代華道家列傳　廣田素外氏

氏は千葉縣八街町の產、本名を萬藏と呼ぶ、資性高雅にして溫厚、年少の頃より既によく自然を視、花卉を愛好するの風があつたといはれてゐる。

長して學を日本大學に受くるに及び、進んで池坊聲外派の家元、無漏庵小杉聲外氏の門に入り、詳さに斯流の奥堂を究はめて免許を得、傍ら竹內多外氏に就いて瓶華を學び、免許を得たが、後瓶華に於て一派を樹立し、素心流と名づけた。

氏の風格まことに淡々として閑寂世事に拘泥せず名利を度外し、聲咳自ら風流名人の面影を有する、故に氏の作風また枯淡にして併も清楚觀る者をして思はず衿を正さしむるものあるは、蓋しこの高潔なる氏の人格の表れに依るものであらう。將來の大成期して待つべきである。

廣田素外氏作

『流派に拘泥することなく、崇高なる氣慨を以つて修養の點に留意し、將來倫理教育の本然を體し、斯道の向上を圖らんと欲する』と氏は氏の常に言ふ處、蓋し氏にして始めて口にし得べき至言である。

華道の外に茶を籔ノ內流に、歌道を冷泉派に學び、ともに一家をなすの域に達してゐる。

氏は現に法學士として東京帝國大學に助手を勤め、家庭は夫人との間に一男あり和氣堂に充ちてゐる

（市外千住町千住二ノ六六二）

遠心流華道家元
裏千家茶道教授
幸玄齋 谷 哲風氏

哲風氏作

氏は明治二十五年三月二十三日兵庫縣養父郡健屋村餅耕地に生る本名を重太郎といふ。

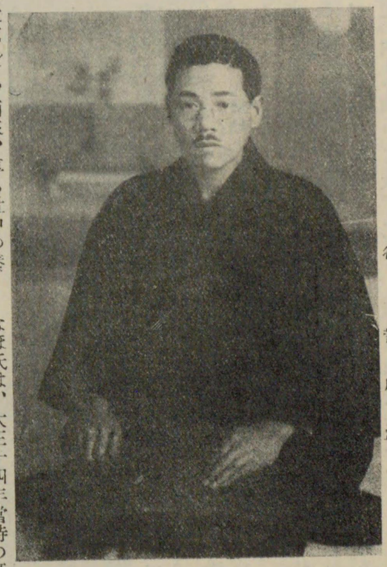
家祖は代々原籍地における一寺の住職として相繼承して來たのであるが、父君の代より農耕に從ふに至つた。

氏は鄉里において、高等小學並に補習學校を了へて、大正六年齡二十四歲の時、播州なる未生流中安師の下に入門、居ること二年にして大阪に出で、同八年九月より大阪遠宗流家元村上梧翠氏の門に入り、學ぶこと六星霜に及んだ。

又、この間小林鷺洲氏について、具さに新華道の研究に從ひ、これを大成して、爾來、專ら社中の養成に從ふに至つた。

しかし、この當時より氏の華道には漸く一轉機を示したので、大正十四年一月、新に遠心流なる一派を創成し、斯界に新旗幟を飜すに至つたのである。

目下流内に研究機關遠心會を設け、その會長として、社中の指導に專心してゐる。當流の幹部としては、田中富藏、濱田種次郎、石田馬吉、坪井慶治、福田幸雲齋の諸氏があり、氏を援けて當流のために盡瘁す。



谷 哲風氏

五二六

なほ氏は、大正十四年當時の攝政宮殿下、大阪府行啓の際、知事室並に便殿等に生花を獻上するの光榮に浴した。

餘技としては俳句、和歌等佳什秀句多し。

アサ子夫人(明治二十七年生)との間に一女がある。

氏は溫厚の君子、しかも研究心强く、常に他流の長を採り、以つて當流の完璧を期するに吝かならず今や流名大に宣揚されるに至る。

(大阪市此花區玉川町二丁目一九〇番地)

池坊玉集派華道教授
柳華庵 志水玉志女史

女史は明治三十二年二月廿四日埼玉縣南埼玉郡岩槻町、志水角治郎氏長女として生まれ、本名をヤス子と云ふ。生家は代々染物業を營み、土地の舊家として知られてゐる。現在營業は令弟常治氏繼承し、隆盛を極めてゐる。父君は現に岩槻町收入役を奉じてゐる。

志水玉志女史作

女史は大正十一年三月より、池坊玉集派家元渡邊華舟師の門に入り華道を修め、十二年三月初傳、十三年三月中傳、十四年三月皆傳を受け、同年五月家元教授職となり、近隣の子女に斯道を教授しつつあり、女史の得意は木ものにして、華道の外、裁縫教授をなし、ミシン、編み物等にも堪能なりといふ。

志水玉志女史

家庭は夫君長次郎氏との間に子なけれども、頗る圓滿の評が高い。

(埼玉縣南埼玉郡岩槻町字市宿二三二七)

湯化粧の雫や落て秋海棠　逸名

むら風や菊より動く草の原　排和

◎

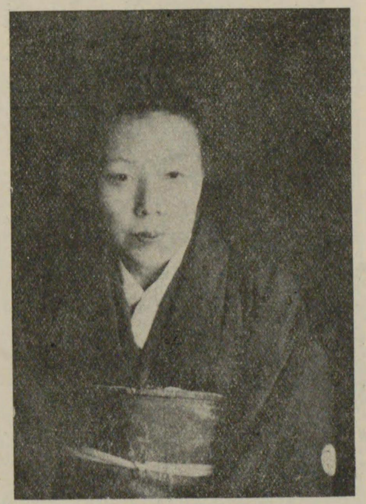
栗めしもゆかしき月や菊の宿　白麻

◎

日本生花司 松月堂古流生花教授 表千家茶道授授 翠宏庵 長尾貴代子女史

女史は明治十三年一月、東京市本郷區元町二丁目に生まる。明治三十六年、北海道旭川において松月堂古流諸國會頭故不老軒西村庄助師の門に入りて華道を學び卅九年十二月、蘭風軒の雅號を授けられ、華道教授の免許を受けた。翌四十年會知に昇進し四十一年會典に進む。

長尾貴代子女史作



長尾貴代子女史

その後大正五年四月より同八年五月まで、東京市本郷區東片町吉田豊秋齋師について、同九年五月より十三年七月まで小石川區臺町鈴木一橋舍師について、華道の蘊奥を學び、昭和三年六月より現在の住所八王子市において華道教授を始め、現に門弟五十餘名あり、極めて熱心に教授してゐる。尚ほ雅號蘭風軒を當時翠宏庵と改む。

女史は趣味として和歌、謠曲を好み、謠曲は特に堪能なりといふ。左に和歌二首を收む。

歲暮感

忘りし身をかへりみて今更に
惜むかひなき年のくれかな

（東京府八王子市本郷町二一）

遠州流華道教授 小原流盛花教授 千愼庵 吉野一寛女史

女史は明治八年二月二日、兵庫縣姫路市に生る。本名をかん子といふ。姫路藩士の家に生れた。

女史は初め英漢學を修め、後兵庫縣保姆傳習所を卒業・鄉里において幼稚園を建設して經營すること二ケ處、現に存在して子女保育の功を擧げ、鄉黨の感謝を得つゝある。

女史は幼少より華道に特別の趣味を有し、明治三十年頃より、遠州流華道を千樂庵一鼎先生に學び同三十七年同流家元千松庵一樹先生に師事、同四十二年家元教授となつた。

盛花は同四十二年より小原雲心師について研修、一時中止してゐたが、後再び始め大正六年六合軒小原光雲先生より、家元教授を免許された。現在華道松風會および小原流國風會の幹事として重きをなす。

茶道は裏千家に達し、煎茶をも修得中である。

女史は敬虔なる基督教信者、早く主人に死別して遺兒を教育し、現に長男は商科大學を卒業、次男は中大を卒ふ。長女又女子大學英文科に入學したが不幸夭折した。

女史は、何事も不足を感じないが、こればかりが痛恨事であると。まことに理といふべきである。

婦風會に屬し、餘力を社會事業のために献げることを無上の慰藥としてゐる。（東京市赤坂榎坂町五番地）

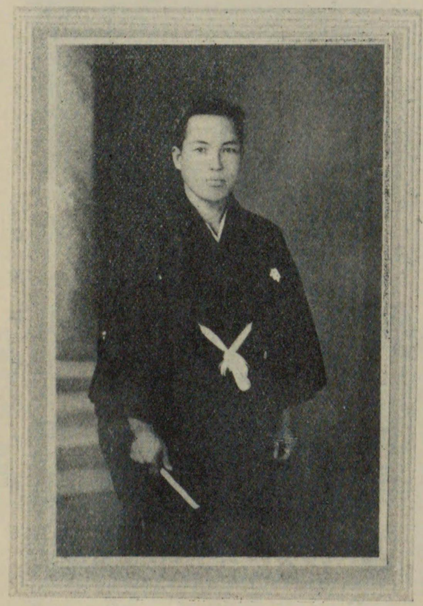
古流御家派華道教授 松玉齋 北原理彦氏

氏は明治二十七年九月九日、東京四谷に生る。捨吉氏の長男、名を彦太郎といふ。

氏は吉野小學校卒業、獨學力行電氣學を修め、東京市電氣局に勤務するの傍ら、華道を修めるに至つた。即ち大正八年八月より、古流御家派家元實井理湖先生に入門孜々として研修の結果、大正十三年四月、皆傳を許され、教授職となり、門葉多くを養ふ。

現に家元總會頭職、松の會副會長の要職にをり、當流の重鎭として、内外に重んぜられてゐる。

家庭はよね子夫人との間に一男一女がある。（東京府下南千住町千住南六八六番地）



北原理彦氏

利休古流華道教授
明心庵 **齋藤春月女史**

女史は大正二年利休古流師範中村靜月師について、斯道の研究に入り研鑽六年、同八年三月皆傳となり、爾來、同府下大島町に生る。本名をソノといふ。

先祖は野州栃木縣の酒造家として、知名の家であつた。

齋藤春月女史

齋藤春月女史作　明心菴春月

會幹部として大に盡瘁且つその技術向上に努力してゐるのである。

女史得意の花は枝物、從來、研究會その他にてしばしば入賞し若しくは表彰されるに至る。

餘技として茶道を研究、頗る造詣深し。

家庭は夫君との二人である。

（東京府下大島六丁目一四〇番地）

山中問答　李太白

問予何意棲碧山。笑而不答心自閒。
桃花流水杳然去。別有天地非人間。

山中與幽人對酌　同

兩人相對山花開。一杯一杯復一杯。
我醉欲眠卿且去。明朝有意抱琴來。

家元池坊花道教授
廣山流投入盛花教授
芳清軒 **渡部霞香女史**

女史は、本名憲子、明治二十四年九月三十日、秋田縣鹿角郡尾去澤村に生る。父は渡部治氏、母堂をスヱ女といふ。

女史は岩手縣立師範附屬小學校を卒業、明治三十七年東京實踐女學校に入學す。

明治四十四年より、池坊東京紫雲會長岡田廣山先生に就き、斯道を研究し、大正七年武藏國生花會頭、東京市生花會頭職となる。更らに昭和三年十月、大日本總幹事となり、今に至つた。現在池坊紫雲會評議員である。

渡部霞香女史

なほ、女史は廣山流投入盛花を、大正三年より研究し初め、現在教授となつてゐる。又、餘技として、石州流の盆景を好くし、山田流の箏曲にも通ず。

家庭は、父君既に沒して、母堂スヱ子刀自だけである。（東京府荏原郡入新井町新井宿山王二六二一番地）

正風遠州流華道教授
貞若齋 **野呂一竹女史**

女史は明治廿一年一月七日、千葉縣北條町に生る。本名をちか子といふ。明治四十五年六月野呂智一氏に嫁す。

女史は十二三歳の頃より、花道の修業に入り、後東京に出でゝ、正風遠州流を習得し、大正元年夫君と共に、北海道小樽に移住、岩井一夢師について、更らに同流の修業に精進し、後、再び東京に出でて以來、同流東京支部の幹部貞觀齋三瓶一聲師について、研修を重ねる處があつた。現に同流の幹部として、常に斯流の發展と技術の練磨に、不斷の努力を拂つてゐる。

野呂一竹女史

女史は夙に宗偏流の茶道を究め又、琴曲に長じて、何れも皆傳の手腕を得てゐる。（東京市外松江町小松川六五〇番地）

古流實派華道教授
千家今日庵茶道引次
松久齋　結城理有女史

女史は明治二十七年十一月二十七日東京市京橋區木挽町に生る。本名を君子といふ。祖先は結城秀康にして父君宗貞氏は宗教家にして日蓮宗機關日宗新聞の主宰者であつた。女史は木挽町小學校を卒へ立教高等女學校に入學明治四十四年三月卒業翌年日本女子大學家政科を修了次で大正二年同大學英文科豫科を卒業した秀才である。

結城理有女史

華道は明治四十五年三月松茂齋門人たりし加藤理華先生に師事し大正七年五月師範を許され、次で石塚理耀先生に就き研究を續け現に華耀會の幹部である。其他投入は早川松雨先生に盛花は工藤光洲先生を師として研鑽共に教授を許され、茶道は裏千家名譽教授堀江宗久先生に學び家元引次に昇進。

女史は雄健にして堅實なる思想の持主である。また姓名學を修めその鑑定に精通して居る。(東京市芝區南佐久間町一ノ三)

雪洲流花道教授
博洲軒　稻村如邑女史

女史は松村次郎吉氏を父とし、同かね子を母として、明治三十九年七月二十一日、茨城縣眞壁郡眞壁町に生る。本名をした子といふ。

女史の幼時一家を上げて東上、女史は東京市下谷高等小學を卒業その後家事に精勵するの傍ら、大正十年雪洲流師範芳洲軒圖師如郁女史について學ぶ。斯くて同十四年皆傳および師範の免許を受け、目下も引續き家元雪洲軒につき、盛花投入を研究中である。その間稻村家に嫁して、琴瑟相和す。

稻村如邑女史

なほ、大正十年より茶道利休止流を同じく圖師歌子女史に學び、同十四年梅月齋の號と共に、師範を許され、尚ほ研修中である。

得意の花は木もの、就中、梅、櫻の二種。

餘技としては、和歌、箏曲。

現在社中を養成する百餘人である。(東京市淺草區小島町五十七)

舊御室御所容眞御流
同御所華務職總目代
同容眞正風流盛花家元
無盡庵　鹿園一秀氏

氏は明治元年十月八日、奈良縣生駒郡大字本多村に生る。本名を增成、俳名を正風又は三徑と號す、奥山善五郎氏の二男、後、大和藥師寺法相宗管長鹿園增忍師の養子となる。

生家奥山家また名家、父君善五郎氏は、庄屋を經て戸長となり、又總代、議員等の名譽職に就任、社會公共のことに盡す處多かつた人である。

鹿園一秀氏

氏は、明治十九年五月、大阪府奈良師範學校において、初等師範學科卒業證書を授與され、同八月小學校訓導を拜命、三十一年四月まで在任し、育英の爲めに盡す處、尠からざるものがあり、その間職務勉勵、寄附行爲等による受賞褒狀を受けた。かくて、同三十二年一月奈良縣生駒郡書記に任用され、同三十九年六月まで在職、三十七八年戰役に際しては、大に盡す處あり幾多の賞を受け、又、同村敎育會長、村尚武會長、村在鄉軍人會長、日本赤十字社村分區委員、愛國婦人會委員部顧問等を囑託され、自治及び公共のために、盡したる功勞は頗る大であつて、しばしばそれぞれ表彰を受け、又、村敎育會長、村尚武會長、日本赤十字社村分區委員、愛國婦人會委員部顧問等を囑託され、自治及び公共のために、盡したる功勞は頗る大であつて、しばしばそれぞれ表彰を受けるに至る。

そして、大正四年には、大禮紀念章、同十年二月には、多年公職に盡せる功勞によつて、勳八等瑞寶章を授けられるの名譽に浴した。

一方、華道の方面は、明治二十四十二年六月より奈良縣生駒郡本多村名譽職村長に推され、大正九年まで十餘年間、在任したのである。

その間、同村農會長、郡農會議員、同評議員、同副會長等に歷任二年一月より、當時奈良縣生駒郡矢田村なる御室御所容眞御流家元御内容眞家無盡庵一水法橋師につき、花道および石洲流茶道を學び、その奥儀を極はめ、同二十六年八月、師一水先生は、自ら高齡の故を以つて、氏に容眞家を讓與し、庵號を授け死後の一切を囑託す。

爾來公私の餘暇を以つて、その敎授に從ふ。

かくて、同三十六年六月、一水先生は舊御室御所より花務職を授けられ、御流の家元を繼承するに至るや、氏は同三十八年六月より、先師の跡を襲ふてその家元を繼いだのである。更らにその後、舊御室御所より、花務職を受け、御流の總目代として、當流の指南に當り、以つて今日に至つた。

そもそも容眞御流の淵源は、人皇第五十九代昌泰五年巳未の昔、宇多天皇法皇となり、京都大内山仁和寺に入らせ給ふた。時に御室

を創建せられ、仁風德澤上下を光被、天下その偉績を仰いで、御室御所仁和寺といふ。法皇夙に草木の自然を鍾愛せられ、しばしば、これを瓶に移して慰み給ふ。その花の規矩たる眞理を形容する意義において、容眞と稱し、ここに容眞御流が現はれたものであるといふ。

爾來、御室には花務職を置かれ、世々家元を繼承するに至つた。而して、御流中興の祖は成龍齋一如であつて、これを成龍齋一間に傳へ、後、故あつて無盡庵一水翁がその跡を承繼したものであり、更らにその跡をわが鹿園氏が襲ふたこと前に述べた如くである。

而して、今や仁和寺においては花道制規を制定し所屬各花道を統轄し、舊御室御所花道總司廳とするに至つた。

氏は今や多くの社中を養ふと共に、大正十四年六月以來、大阪市立難波立葵實科女學校教員を囑託されてゐる。

氏は大正十五年八月、皇孫殿下御降誕紀念として、時の皇后陛下に、生花を獻納、御嘉納の御沙汰を拜するの光榮に浴した。

餘技としては和歌、俳句を好み、

田家夏の旱りに農夫の
苦を思ひて

これに長ず。

てり續きしほる稻葉に賤の男が
涙の雨の降らぬ日はなき

三徑

松子夫人は、花號を一松齋春甫と號し、同じく當流の師範である。

氏、資性溫厚篤實、缺くる處なき、人格技倆の所有者、一世の師表として敬仰されてゐる。(大阪市港區八幡屋松ノ町二丁目六十一番地)

鹿園一秀氏作

舊御室御所容眞御流
同容眞正風流盛花投入

一松齋 鹿園春甫女史

女史は明治十三年六月二十日、兵庫縣下に生る。本名松子、茶號を宗春と號す。同流家元無盡庵一秀先生の夫人である。

女史は明治二十一年四月より、兵庫縣明石市西新町王子小學校および同市片端高等小學校を卒業。同二十六年四月より大內女塾に入つて、裁縫並に女藝一般の修業を積んだ。

同三十二年五月より、同三十八年三月まで、同市細工町山口先生と相携へて、斯界のために盡しつゝあるのである。(大阪市港區八幡屋松ノ町二丁目六十一番地)

り、同四十四年四月まで、夫君無盡庵師について、舊御室御所容眞御流の蘊奧を極はめるに至つた。

大正八年八月より、同十二年十二月まで、大阪江戶堀下通千家裏流家元名譽教授伊藤宗益宗匠について、更らに茶道を究め、台子を許され、同十三年一月より茶道家元引次指南に從事し、以つて今日に及ぶ。

なほ女史は大阪市立難波立葵實科女學校囑託教員として、茶道の教導に當つてゐる。女史は專ら茶道の方面を擔任し夫君無盡庵先生と相携へて、斯界のために盡しつゝあるのである。(大阪市港區八幡屋松ノ町二丁目六十一番地)

松壽流盛花投入教授
芭蕉流煎茶師範

清樂庵 楠 松操女史

女史は東北の雄藩伊達家の舊藩士、岡崎丈治氏の第五女、名を武子と呼び、明治三十三年九月十三日、仙臺市中島町に生る。

大正七年仙臺高等女學校を卒業するや、華道に對する憧憬の念やみ難く、令兄の東都に在住したのを賴つて上京した。松壽流の宗家井上松壽先生につき一意だゞ斯道の秘奧を究はめんことを念じ刻苦精勵して研鑽に努めたので、その進境まことに目覺ましく、大正十年躍進して同流師範の位置に拔擢されるに至つた。

大正十三年四月楠家に嫁して後も修道練技片時も疎かにせず、現に宗家の師範代として、幾多の後進門下の薰陶に努力して居る。

不幸にして未だ愛兒を得ざる女史はひたすら高雅の道に精進し、已に芭蕉流煎茶の蘊奧を極はめて師範となり、更に進んで現に表千家茶道をも攻究中である。女史の恪勤必ず日ならずして大を見るであらう。(東京市外世田ケ谷町下北澤八二四)

楠松操女史

東光古流華道教授
表千家茶道教授
晴光庵 福田秋月女史

福田秋月女史

女史は明治十七年十一月十五日を以つて、神奈川縣橘樹郡日吉村に生る。本名をはつ子といふ。

女史は、幼にして華道に興味を持ち、各流を研修して後東光古流家元東光庵福田松齡氏について、斯流の奥儀を極はめ夙に教授職となつた。

又、茶道表千家を究め、その師範職でもある。

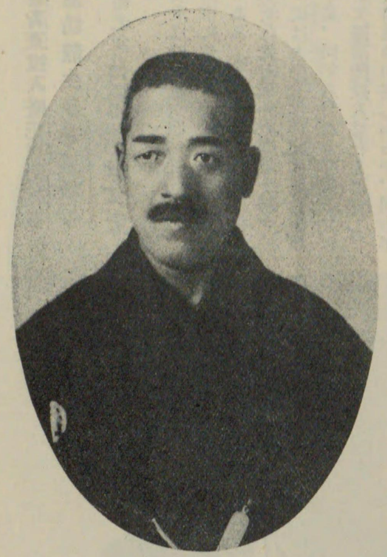
社中多く、當流の中堅として、重きを成してゐる。(東京市外駒澤町上馬五七四番地)

福田秋月女史作

◎

峯の松そめぬも雨の心哉　宗祇
心とや木々は紅葉の霜の松　同
色なしと松にやは見ん初時雨　肖柏
紅葉せぬ松には惜しき時雨哉　眞照
紅葉にも迷はず松の男ぶり　乙由
色かへぬ松にもなじめ虫の聲　都城
松に雨變らぬ色を盡しけり　葛三
染田の中に立けり松ひとり　知廣
むら紅葉松は春見し姿なり　拍水
色かへぬ松の晴れ着や蔦紅葉　几董
色かへぬ御向松の日影哉　岩翁
色かへぬ松洗ひ出す野山かな　河梁
ふんばつて色かへぬ也峯の松　蓼太
色かへぬ島山松の日和かな　同

未生流華道教授
裏千家茶道教授
景流齋 宮武清甫氏



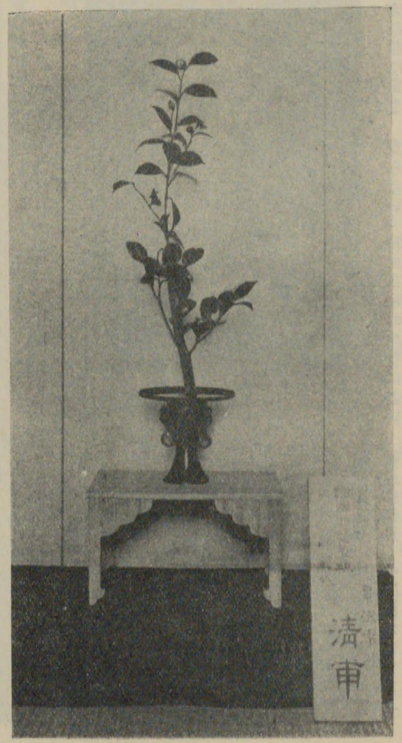
宮武清甫氏

氏は明治十四年九月五日、香川縣丸龜市上金倉町十一番地に生る。本名を右馬太、茶名を宗甫といふ。

氏は關西大學法科專門部の出身、現に警察官吏として奉職してゐる。

明治四十年一月より、茶花道に志し、鄕里において、知人の教へを受く。後大阪に出でて以來未生流師範團野景洲先生の門に入り、師物故の後は、瀧桃華齋先生に師事して、その技を磨き、その奥堂を極はめるに至つた。

現に家元科目選定委員、未生會幹事の要位に居り、流内に重んぜられてゐる。



宮武清甫氏作

氏の華道に對する態度は、人格至上主義とも、いふべきものである。氏は曰く、

『技術の點よりも、道の研究を專らとし、然る後において、技術を磨くことが必要である。要は人格の向上にある。而して將來は華道および茶道共、文官試驗或は教員檢定試驗の如き制度を設け、以つて茶華道の師範家を養成し、且つその素質の向上を圖ることを希望するものである。』云々。

別に武術を好み、且つ邦樂に對して淺からざる趣味を有してゐといふる。

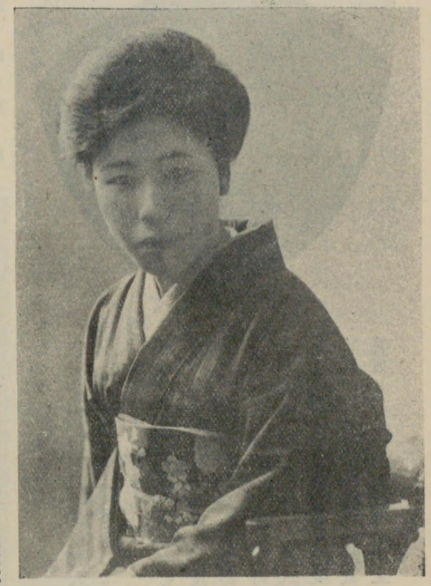
なほ氏はかつて日露戰爭に從軍し、軍功によつて勳八等を受け、更らに警察官として多年勤續の功により、勳七等に叙せられた。

家庭は夫人との間に三男二女がある。(大阪市北區西堀川町十三番地)

蓬清流投入盛花家元幹事
池坊龍生派華道教授
報光堂　日置埰確女史

女史は明治三十四年三月一日、岡山市に生る。士族日置榮次氏の女である。本名を定子といひ、池坊龍生派花號を華晃庵榮集と稱す。

女史は大正七年實踐高等女學校を卒業、同年六月より猪熊先生について蓬清流投入盛花を研究し、一意精進の功空しからず、同十年秋教授を免許され、又、池坊龍生派も蓬清流盛花と同時に、猪熊先生の教へを受け、同十一年教授を許され、昭和二年春これが披露を行つた。



日置埰確女史

又、女史は年十一にして、石州流茶道の門に入り、大正七年奥傳を許され、華道と共に、子弟の教導に當つてゐる。

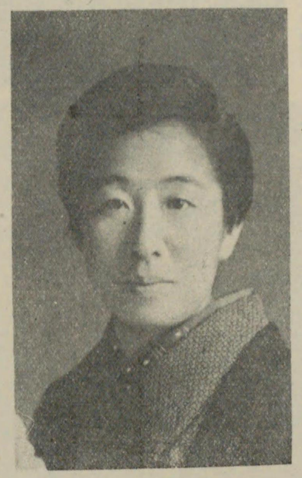
家庭は兩親と姉弟のみにて、和氣堂に滿ちてゐる。（東京市本郷丸山福山町十一番地）

旭古流華道師範
旭松齋　坂野一英女史

女史は明治二十年、東京麴町に生る。本名を八重といふ。

坂野家は十餘代連綿として續く古き家柄であり、祖父は御殿醫として、杏林に知られた名國手であつた。

女史が華道に入つたのは大正の初頭で、師は旭古流家元旭鶴齋押田一貫先生であつた。技術優秀幾許もなくして、教授の職を許され、現に幹事として、同流の間に重きをなし、斯道のために夙夜研磨を怠らない。特に古木の生花において、他の追從を許さぬものがある。



坂野一英女史

といふ。

茶道は幼少時より趣味を持ち表千家、裏千家流等各流派を修業しその後押田先生について、その蘊奥を極め、現に教授の職にある。又、細川流の盆石も研究を重ねつゝありといふ。

現在の社中約五十名、子弟の敬慕を受けつゝある。

家庭は主人歿し、子息夫妻に愛孫三人あり、平和なる團欒の裡に雅道に精進しつゝあるのである。（東京市外駒澤町弦卷二〇四番地）

松月古流華道教授
峰月園　原澤淳子女史

女史は明治三十六年三月十三日群馬縣群馬郡新高尾村に生る。

生家は代々醸造業として、知名である。

女史は女學校を卒業し、更らに東京女子專門學校に入りて卒業、現に女學校教諭の職にあり、育英の事に從ふ。

華道に入つたのは、古いことではないが、夙に斯道に趣味を有してゐた。師は松月古流師範谷龜美水女史であり、現に教授職として公職の傍ら社中を養ひ、且つ一層斯道の研究に精進しつゝある。

現に華道國生會の幹部として、斯界に盡瘁する處が多い。

家庭は主人との間に長女歌津子嬢（大正十五年生）長男安敏君（昭和二年生）の一男一女あり、主人は東京商船學校の出身で神戸市明治海運株式會社に勤務してゐる。（東京市小石川區春日町三四番地）

原澤淳子女史

原澤淳子女史作

◎梅の花匂をうつす袖のうへ軒漏る月の影ぞあらそふ　（藤原定家）

◎ながむとて花にもいたく馴れぬれば散る別こそ悲しかりけれ　（西行法師）

◎風かよふねざめの袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢　（藤原俊成女）

◎散りにけりあはれ恨みの誰なれば花のあととふ春の山風　（寂蓮法師）

古流御家派華道教授
松善齋　松本理淸女史

女史は明治二十六年十二月三十日、島根縣八束郡法吉村に生れた。俗名をキヨノといふ。

女史は松江實科高等女學校を卒業、大正十一年九月、古流御家派家元寶井理湖先生に師事したが、この頃女史は中許の才腕を有し、しかも研修頗る熱心、技倆の熟達著しく、大正十三年四月皆傳に進み、累進して家元副會頭職となり、昭和二年十月教授を開始した。

松本理淸女史

この間家元を補佐し、松の會幹事として、盡瘁大に努め、當流の名聲を發揚するの功勞からぬものがあるといふ。現に同會副會長として、會員を指導し、斯道の振興に全力を盡してゐる。

女史はまた茶道に達し、作法に長じて、典雅の擧措を以つて知られる。（東京市外荏原町小山五八番地）

古流御家派華道教授
松香齋　內田理愛女史

女史は本名愛子、明治三十六年四月六日、東京澁谷町向山に生る。父君大迫愛千代氏は、鹿兒島藩士にして、退職陸軍中尉である。後內田家に嫁す。

女史は、澁谷町長谷戸小學校を優秀の成績にて卒業、後麹町家政女學校に學ぶ。

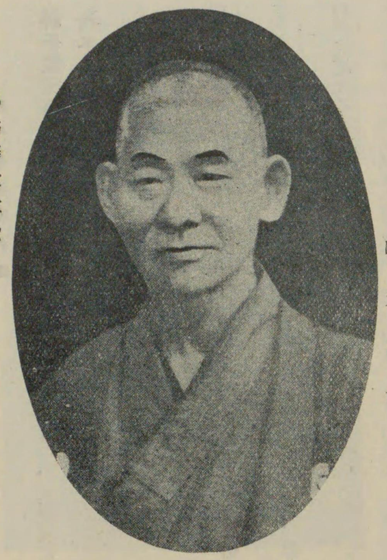
華道は大正八年四月、十七歲にして古流御家派家元に入門し、茶道は同十三年三月より裏千家を修業す。かくて、切磋琢磨の功を積み、昭和二年何れも教授職となり、現に子弟を養成し、專ら斯道の開發と修業とにいそしんでゐる。

內田理愛女史

女史は趣味として、洋樂を愛し、これに堪能である。

家庭は夫君伊佐男氏との二人、氏は澁谷町重員、恪勤の士として信用重きを加ふ。（東京市外澁谷町猿樂四三）

未生流華道家元役者
廣巖齋　國分雪甫氏



氏は文久三年六月十八日、大阪市北區北野町に生る。本名新一郎、七右衞門氏の長男である。

生家は商號を尼ヶ崎屋と稱し、又、金田を姓として、大阪心齋橋通りにおける漆問屋として、盛大なる營業をなしゐたるが、師は彫刻師として志を立て、爾來その道の修業を積んで、斯界における屈指の名人となつた。

氏は十八歲にして未生流五代家元に師事し、三十五歲までその直門として研修すること約二十年、更らに七代家元に師事して倦むなき努力精進の一路を歩んで來た。蓋し、氏は謂ゆる名工氣質を多分に持ち、徹底するまで研究せざれば止まざるの藝術的良心を有する人であるからである。

國分雪甫氏作

その間子弟を養成すること無數現に在阪家元師範代五十餘名の內殆んど氏の教へを受けざるもの稀れであるといふに徹しても、氏の當流における地位とその絶大なる功績を思ふべきである。今や流內の最高地位にをり、巍然たる勢望を有する、また所以なきにあらずである。

茶道の方面も、年三十の當時より、大阪斯界の權威、表千家流福島一景齋先生に師事して、十餘年の研修を遂げ、その蘊奧を極めて、社中の教養に努力しつゝある。

氏は各種博覽會、女學校等に生花を出陳して、感謝狀を得たこと、頗る多數である。

餘技としては碁、狂言、音樂等。ミネ子夫人との間に、一男一女あり、社中また多數を擁す。

人と爲り剛直にして、人に媚びることを忌み、自己の信ずる處に邁進する底の得難き人物である。（大阪市北區旅籠町三五番地）

神千家流華道家元
表千家茶道教授
神齋庵 加藤清月氏

加藤清月氏作（滿一噸）

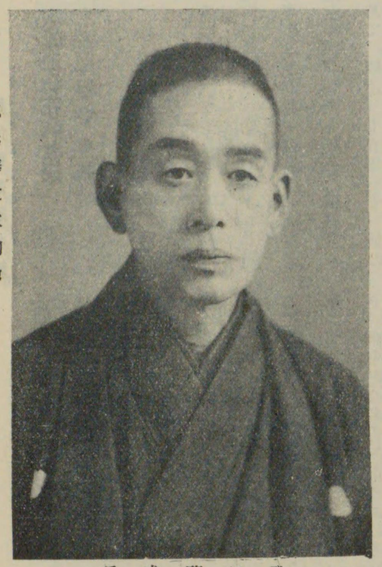
氏は曾て、大正十四年十月、德島毎日新聞社主催、同縣下華道家投票において横綱に當選し、紀念の彫刻入り花器一個を受けたことがある。

又大正十四年、先帝陛下銀婚の御祝儀にあたり、縣より選抜されて、奉祝和歌題『山松』を献上して御嘉納の榮を蒙つたことがある。

（住所德島縣半田町）

加藤清月氏

光石流盛花投入家元
同 盆石盆畵家元
遠山正風花道家元總目代
表千家流茶道教授
光石庵 里曙齋 武田蘆甫氏



武田蘆甫市氏

氏は明治二年七月二十八日、大阪市北久寶寺町に生る。本名を竹治郎といひ、武田直矢氏の男である。生家は累代山城淀の藩士であつた。

氏は大阪商業學校の出身、日清日露の兩戰役に出征陸軍二等主計となり、勳八等を賜はつた。

華道には幼少の頃から趣味を持ち明治十七年三月より遠山流四世家元里曉齋正田一甫先生について學び、大正七年より遠山正流家元福田里子齋先生の門に入つて、具さに研修を積んだ。又、福田先生が遠山正流を樹立するに至るや、氏はこれが帷幕に參し、最も力を盡す處あり、その最高幹部たる家元總目代職となる。

又、これより先盛花投入および盆石盆畵の研究に沒頭し、明治三十七八年光石流盛花投入、同盆石盆畵の家元として、一新旗幟を飜すに至つた。

なほ氏は年二十七歳當時より、古都寧樂に住み、斯道の研究に耽り、大正三年花庵を大阪に移したのであるが、その間明治四十一年十一月、陸軍特別大演習の際、奈良行在所において、明治天皇の御前に生花を献じて、天覽の光榮に浴し、大正天皇皇太子に在した頃、同じく奈良行在所に生花を献じて台覽の榮譽を荷ふた。

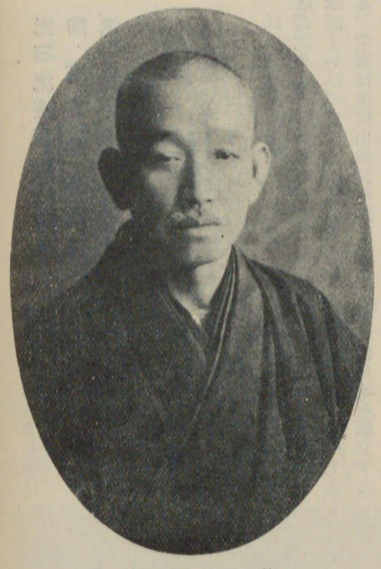
武田蘆甫市氏作

氏は社中の研究機關として、里曙會を組織し、毎月盛んなる研究會を催して、社中の技倆向上に資してゐる。餘技としては、觀世流謠曲、繪畵、俳句等である。

見つゝ來て紅葉に暮て鹿の聲

これ氏の近什である。（大阪市天王寺區烏ノ辻町三四番地）

家元池坊花道教授
名古屋橘會々長
筧　玉堂氏



筧　玉堂氏

氏は明治二年七月愛知縣中島郡起町に生まる。幼少の頃より、同郡奥町池坊五藤一竹翁について華道を學び、刻苦多年その蘊奥をきはめて、明治三十五年三十三歳の時教授職を授けられた。併しながら、氏は初め華道を趣味として修めたるのみにて、郷里において近隣の子弟の請ひを入れて教授するにすぎなかつたのであるが大正元年名古屋市に移住するに及び、專ら華道を以て立つこととなり、爾來熱心名古屋市における同流の發展に努力し、大正六年大日本總華督に補せられ、以て今日に至つた。現に名古屋橘會々長として中京華道界に重きをなしてゐる。

氏は昨年十一月陸軍大演習の際高松宮殿下の御宿(伊藤別邸)に瓶華を謹揮し、又御大典に際し十二月一日恩賜博覽會に立華を奉獻するの光榮を行つた。

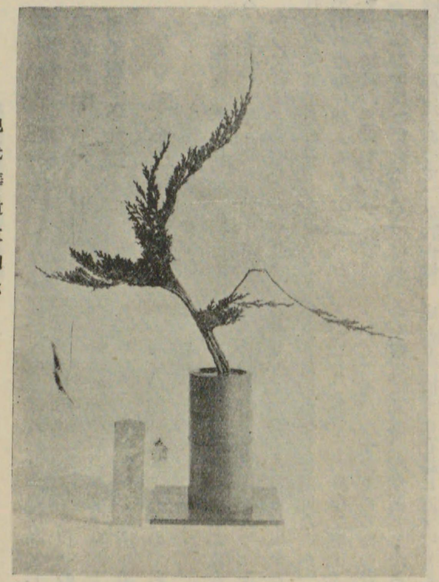
華道に對する意見としては、家元の掟たる花技と共に精神修養を第一とすることの趣旨に從ひ、人をつくることを主眼として教へてゐる。

大正七年四月より名古屋市立第一高等女學校華道教授を囑託せられ、現在に及んでゐるが、自宅及び出張教授共社中頗る多く、今日まで數百名の門人を出してゐる。

氏はまた華道の外、趣味として表千家茶道に堪能である。

家庭は夫人との間に房枝、菊枝の二嬢あり、共に華道に趣味深く、堪能であるといふ。(名古屋市東區西新町一丁目電話東局六四四〇)

筧　玉堂氏作



現代華道家列傳

駿東流華道教授
伯齋流盛花教授
表千家茶道教授
松光齋 **岡田華錦氏**

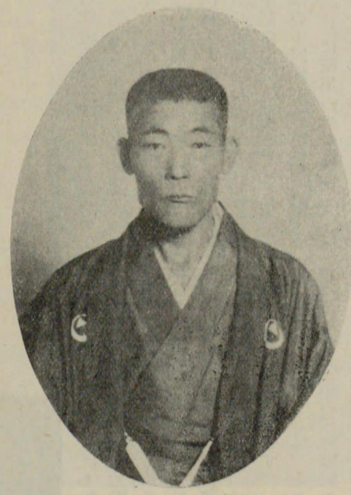
氏は明治九年二月二日、東京淺草北清島町七八番地に生る。本名を金藏といひ、初五郎氏の長男である。

岡田家は代々江戸に住し、維新直前までは幕府の御用商として、豪商の一人であつた。が、維新の變革に際し、父君初五郎氏は、深く時勢の趨く處を察し、木版印刷業を經營して大に功を收めた。

氏は二十五歳の頃より、華道に志し、初め古流を研究して、その技を磨いたのであるが、中途師が歿したので、その後專ら獨自の研究によつてゐた。がたまたま駿東流家元村田華光氏の技風を見て、大正七年その門に入り、爾來熱心に修業、同十一年教授を許され、累進して現に家元會頭の要職に坐ることとなつた。

又、一面大日本華道國風會員として、斯道の振興普及に力を注ぎつゝあると共に、家元研究會には、常に出席して後進の誘導と技術の新工夫に、精進して倦む處を知らないといふ。

家庭は夫人千代子との間に、長男信吉氏あり、信吉氏は淺草北清島町に金物製造業を經營して、盛大に業を營んでゐる。(東京市外千住町中組一〇二四番地)



岡田華錦氏

未生流花道教授
同家元准目代
裏千家茶道教授
廣木齋 奥中圓甫氏

氏は慶應三年十月、奈良市に生る。茶名を宗憲と號す。

氏の父君は工業家であつたが、氏は生來武道を好み、父に秘して黒田の道場に通ふこと二ケ年、たまたま父君の發見する處となる。

しかるに氏の父君は、大和柾木阪柳生の高弟であつて、免許皆傳の達人であつたのである。が、當時は殺伐なる維新變革後の反動として、武技を輕んずる甚しく、現今の如く武道體育の普及せざる時代であつたので、父君は氏の武道修業を以つて、不可なりとしたのである。そして誡めて曰く、

『現今武道ほど身の狹いものはない。これを活用するの道もなく、深夜たりとも安眠することが出來ない。外に何か樂しむ道はないか』と。氏これを諒とし、此道を廢す。

かくて後、たまたまある師の花會を觀るに及び、飜然として悟る處あり、直ちに花道に志すべきことを決したのであつた。そして、未

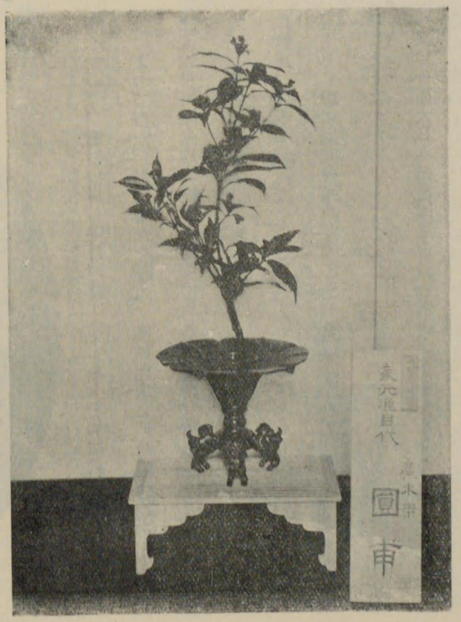
奥中圓甫氏

生流正目代職水谷廣政齋先生の門に入り、學ぶこと數ケ年に及ぶ。

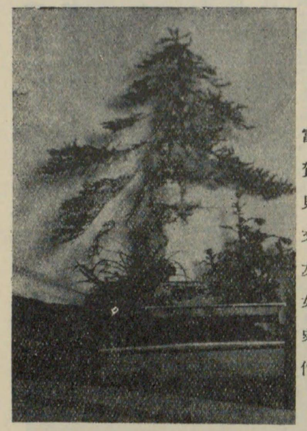
然るに、その頃家運拙く、鄉居を離れるの餘儀なきに至つたので大阪に出で、勞働に從ふこと數年米鹽の資に追はれながらも、斯道の修養を怠らず、よく働きよく努め、夜は必ず同好者と共に刻苦精進して、つひに斯道の奥堂に達し、爾來教導に從ふこと實に二十餘年間、眞に涙ぐましき奮闘の記錄であつた。家元においても氏多年の功勞に對して、酬ゆるに家元准目代の榮職を以つてしたのである。

氏は又他面茶道の研究にも疎からず、元藪の内流を學び、後裏千家流正教授栗山氏の門に入つて、二十餘年の久しきを研修す。

まことに、氏の如きは、その人格その技術その造詣、斯道家の活ける模範といふべし。(大阪市西淀川區海老江上三丁目一三三番地)



奥中圓甫氏作



富賀見文友女史作

園生古流華道家元
園生庵 富賀見文友女史

女史は明治二十九年十二月十五日岩手縣盛岡市本町に生る。本名を松子といひ、富賀見勘四郎氏の女である。

富賀見家は代々の南部藩士であつたが、祖父の代において廢藩と共に、商業を以つて立ち、父君勘四郎氏その後を繼承した。父君は數年前物故したが、年若くして社會事業に志厚く、殊に育兒院、日本赤十字社創立の當時は、大に力を盡す處があつた。又、一面風雅の道にも暗からず、北陽と號して俳諧を好くし、宗匠として諸國を歷遊すること多年に及んだ。又、和歌にも長じ號を北軒と稱した。多くの佳句佳什の中から、二三を左に摘錄す。

富賀見文友女史

綉にせばや海邊の松の初日の出
門松や富士より高き人心
南窓の机上に梅の雫かな
御車のとゞろく音に山里もまれ
ぬめぐみぞ尊かりける

女史は鄉里盛岡において、十七歲の時より華道に志した。大正七年上京して西光古流二世家元神谷正水先生に師事し、居ること五ケ年その蘊奥を極めた。昭和三年暮諸流先輩の推擧と社中の後援により園生古流の一派を樹て昭和四年四月廿八日園生會大會に於て之が披露會を催し今日に至つた。諸流團體大日本園生會の一幹部として斯道のために盡してゐる。

得意の技はハラン、水仙、杜若等々。

又、女史は父君の薰陶を受けて、和歌を好くし、佳什頗る多し。その二三を摘記すれば、

千代かけてよはひのぶてふ菊の
花活けし床の間尊かりけり
日の本の大みしるしと床の間に
妹が手活の白菊の花
節句日庭に咲きたる桃の花瓶に
活けなん吾子の祝ひに

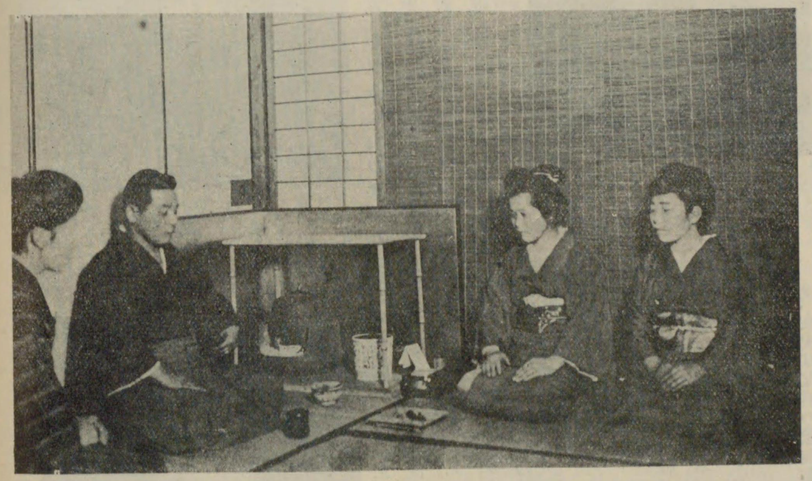
家庭は母堂と一女丸子の三人、愛嬢は武藏野高等女學校に在學中である。(東京市外西巢鴨町宮仲二六〇一番地)

遠州流花道教授
有樂流茶道教授

友齋 加藤一邦氏

氏は明治八年七月三日、愛知縣名古屋市伏見町に生る。名は圓太郎、會社員である。

氏の生家は農家であるが、幼時より繪畫を好み、夙に名古屋市における著名なる佛畫師鬼頭香堂氏の門に入り、師事すること數星霜、その奥儀を極はめ、爾來斯道に專念しつゝあつた。その後——明治三十七年に至り、期する處あり、神戸に移つて畫家として起つの傍ら、貿易業に從事すること十餘年、大に功を收めて、各種の社會事業に貢獻する處、最も多く、市長知事その他の名士と交はり、感謝狀および褒狀を受けたること十有餘回に及んだ。大正十二年大阪に居を移して餘暇を雅道の研究と社中の養成に盡し、以つて現在に至つたのである。



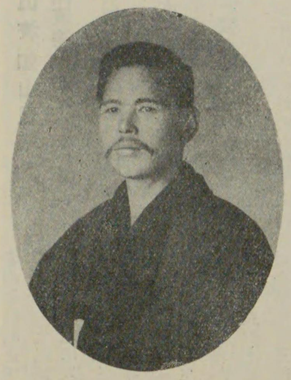
加藤一邦氏（左より二人目）

氏が茶道に入つたのは、明治三十年未だ在鄉の當時であつた。當時名古屋市馬喰町松原松福庵氏の門に入り、有樂流茶道の研究に着手、拮据七年にしてその蘊奥を極はめるに至る。その後師が病を得て歿するや、その夫人をして跡を繼がしめ、自らはその最高幹部としてこれを補佐し、以つて斯道の發展に力を盡す處あり、夫人歿後は自らその系統を繼ぎ、現に日夜これが振興に專念してゐる。

なほ華道は遠州流の蘊奥に達し師範として多くの社中を指南しつゝある。

餘技は謠、繪畫等である。

家庭は夫人フデ子（明治二十一年生）との二人。社中は百數十名の多數に達してゐる。（大阪市東成區鴫野町鐘紡社宅）



中前靜舟氏

眞成流家元總會頭
草州流盛花瓶花家元
茶道表千家流教授
煎茶小川流教授

眞盛齋 中前靜舟氏

氏は明治十四年十二月十日、奈良縣吉野郡賀名生村大日川に生る。本名盛藏、中前信行氏の男である。

中前家は元紀州藩士、櫻本清次郎信行と稱したが、今より三百年前、奈良縣において中前家を立て、代々その地に住した。

氏は十六歳にして上阪し、勉學力行して十九歳の時、早くも一家を樹て、醬油販賣業に從ひ、後、紀州諏訪村小學校教員となり、二十四歳の時再び上阪、江戸堀下通り四丁目七十一番地において、酒商を經營するに至る。

この當時より華道に親しみ初め、その當時嘖々の名聲あつた萬力谷逸堂翁について、眞成流華道を學んだが、技倆拔群、當時の高弟として知られた出口眞了齋氏とは相弟子として、双び稱されたものである。

爾來、いよいよその眞價を現はし、明治四十年頃より、花友會に入り、又、大正五年には自ら發起人の一人となつて、諸流團體花道奬勵會の組織に奔走大に努め、幹事として盡瘁する處多く、更に諸流團體花道松藤會を設立し幹事若しくは顧問として、大に斯道のために力を注いだのである。

中前靜舟氏作

又今より七年前、草州流盛花瓶華の家元を樹立し、更に茶道裏千家および煎茶小川流を究め、薀蓄する處深し。

なほ華道においては、神戸又新日報主催博覽會において、當流の眞價を發揮して、一般の賞讃を博し、更らに京都大德寺に德川公來場の際、その居室に生花を出して大に賞揚さる。

夫人マス子（明治二十二年生）との間に長男清次郎君（大阪高等工業在學）二男賢治君、三男信行君、四男正治君、五男秀雄君等があり、一門大に繁榮す。（大阪市西成區玉出辰巳通二ノ一一番地）

青山流如山派家元
石州流清水派茶道教授
含水園 宮南如山氏

宮南如山氏

氏は本名を得、大阪市西區阿波座下通り二丁目に生る。茶名を清水道關と號す。本來、教育家である。

氏は明治十五年より小學校教師として、教鞭を執ること三十餘年の久しきに及び、その功勞著大なるものがあつた。大正十年公立學校を辭して、自ら德婦小學校を設立してこれが經營に當る。同校は義務教育を完全に受くること能はざる不遇の子女、就中大阪西區新町遊廓の藝娼妓に對し、教育を施すのを目的とする社會的事業である。

氏が華道に入つた動機は、他の多くの人と異つてゐる。卽ち氏はある年——明治二十年の頃、知人の家を訪ひたる生花を、ふとしたことから破損したので、自責の念に堪へず、華道の必要なるを痛切に感じ、爾來發憤してこれが研究に志し青山流津田松養庵先生の門に入つて、斯道の研究に入ることとなつた。居ること多年技大に進み、師の高弟として殊寵を得るに至つたが、たまたま恩師が如山派なる一派を開基するに當り、これを援けて當流の普及發展に力を注ぎ、恩師歿後は選ばれて其家元を繼承して、第二世となるに至つた。

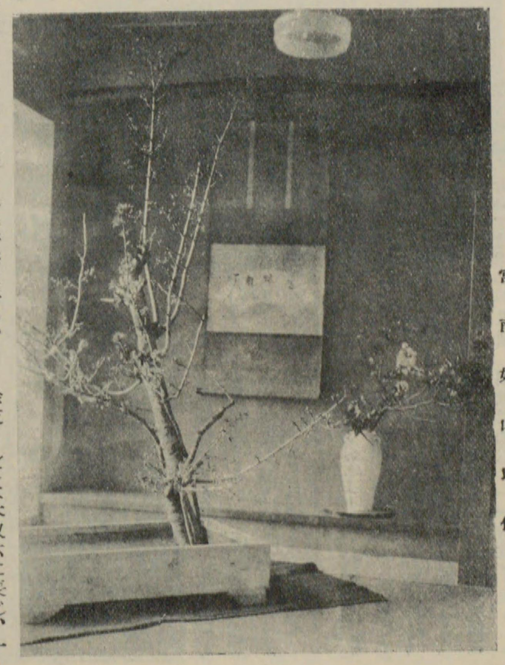
茶道は明治二十五年以來、土佐の人石州流清水派繼承者野崎兎園師の門に入りて、それが研修に努め、大阪において師より台子を受けた二人中の一人となつた。師歿するに際して、無想の傳を許され、現在その流統を繼承す。

氏は中途青山流家元の懇請によつて、一時青山流に復歸し、大阪府取締となつたのであるが、後、家元幹事との意見に相異るものあり再び從來の如山派に還つた。

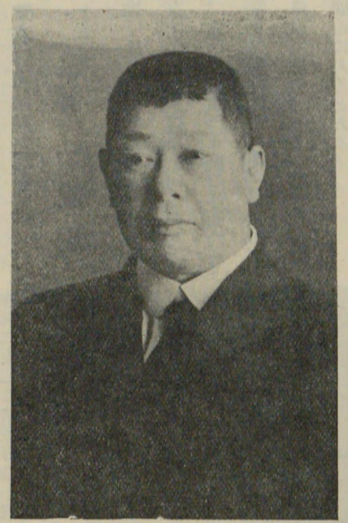
餘技としては本双六に長じ、一時同好者を集めて、これが教授に當つたことがある。

夫人また同流の華道、茶道の達人、中に三男あり、何れも最高學府を出でた俊秀揃ひである。

氏は天資温良篤實、實名を好まず堅實なる道を歩むを以つて信條としてゐる。(大阪市西區阿波座下通二丁目二八番地)



宮南如山氏作



中山二福庵氏

天眞流華道家元
裏千家茶道教授
中山二福庵氏

氏は明治十年九月二日名古屋市中區八百屋町に生まる。本名を福太郎と云ふ。十七歲の頃より父君について相阿彌流華道を學び、その妙所をきはむ。後今より二十五六年前自ら天眞流の一派を開く、氏が華道について常に感じてゐたことは花型樣式の拘束から脫せしめたいといふことで自然の模寫を尊重することであるといふ。

中山二福庵氏作

殊に今日の如き盛花投入花の流行時代においては格花も、枝を曲げ、葉を矯める遊戲から、成るべく脫却しなければならぬ、といつてゐる。

氏は曾て今を去る三年前、名古屋博覽會に、賀陽總裁宮殿下が御來名の際、博覽會當局の囑託を受けて會場貴賓席に瓶花謹揷の光榮を荷うたことがある。

華道の外裏千家茶道に精通し、現に自轉車業を營むの傍ら、社中の養成に努めてゐる。(名古屋市中區八百屋町三ノ九)

茶道瑞穗流家元十五世
玉置一成氏

遠く氏の祖先を繹ると、今より千百餘年前、玉置の庄司の覺え書に、元は二條家より出で藤原姓を名乘り、延喜元年三月三日、和州十津川に於て、十八の鄕を給り、玉置山に入るとある。

元來は岩城の判官と云ふ奥州の人であつたが、朝帝の勅勘を蒙り、奥熊野に流されて、十六代間同地に住んだ。（或は卅代とも云ふ）その何れの代であつたか、天より寶玉降り來つて樹の枝に懸つたことがある。數年の後それが地に落ちたのを檢するに燐形石であつた。夫より玉置と名乘り、家紋にスハマを用ゐることになつた。

其後、玉置の庄司氏清は、熊野々熊野に來つて、庄司氏清の詩に止まつて、氏清の女婿となつた。

延喜より約四百年を經た建武の頃、十三代の玉置の庄司盛高は、鎌倉のため南朝に背いて高野山より十津川に到る間、所々に砦を築いたり柵を構へて、護良親王の通路を遮らんとしたが、命旨を拜して大に感激し、遂に宮方に走せ參じて、紀州有田の郡で大に軍功があつたから、大塔の宮より、直の一字と、洲濱に菊の紋章を給ひ、惣領一人末代まで用ゐる事を許された。

玉置一成氏

そこで、日高郡山路東村に、鶴ケ城を營み、下野守直虎と稱してこゝに住んだ。其舍弟に大宣と云ふ者があつて同郡和佐の豪族川上采女の居常甚だ横暴なるを憤ほり、其城を攻めた所、戰はずして遂に之を陷れたので、手取城と稱けて之に大宣は住んだ。

其十代の後裔、玉置權之守直和は、天正十三年豊臣秀吉が南征の際、豊臣方に與みせんと云ひ、舅の湯川直春は、之に反對の意見を持つた所から、遂に婿舅の戰爭となり、會の瀨で戰つたが直和方利がなく、天正三年三月廿五日城は落された。是に於て飜然悟る所があつて忽ち劍を棄てゝ高野山に登り、剃髮して名も仙光院一咄と稱し、木の實を喰ひて佛學を究め、茶道に熱中し後世を遂ることになつた。此時齡が卅歲であつた。其後間もなく湯川直春は、豊臣の爲め敗れたから、高野に居ること四年にして和佐に歸り、只管風月に親しんだ。而して慶長四年五月廿八日四十一歲で歿した。之が瑞穗流の祖先である。わが一成氏は實に其十五代の孫に當る。

玉置累代の菩提寺たる日高郡早蘇村の信樂寺に十四基の石碑と、五輪の塔と位牌がある。表に『木食行與上人良應法印』裏面に『護國中興仙光院發心卅、木食卅四、入定四十一、慶長四年巳亥五月廿八日入定、玉置從中興大宣及十代。俗名大宮藤原朝臣直和。』とある。

又、同郡手取城の麓和佐村の生蓮寺に先代一淑翁の碑がある。篆額は二條基弘公にして碑文は内田周平氏の撰である。卽ち

瑞穗流中興祖玉置一淑翁碑

翁諱清人號一淑玉置氏和歌山藩士一則子幼聰慧多才藝受數學於父問經義於倉田績劒術宗柳剛流拳法奉鏡心流並獲印可最長泅泳屢供藩主覽甫十七歲命爲京都勤番教藩邸士以武技明治十年西南役以少尉從軍有功旣歸幡然改志深念乎祖業專精茶道終以此訓衆名聲播於海內大正七年八月八日病歿於神戸市春秋六十有七子實之承號一成嗣家襲業翁之先出於攝家二條氏其後居紀州竹原者以勇武顯世襲玉置莊司遂以玉置爲氏其裔有曰氏清者平氏之亡平維盛沒於熊野海其子巴豆丸來熊野弔之卻氏清家氏清無男子養巴豆丸配其女建武中其族有大宣者築手取城於日高郡和佐居焉十傳至直和有故與其舅湯川直春戰不克城陷直和於是有所感悟自號一咄吟嘯風月以茶道爲樂時年三十後數年木食自養入稱曰木食宗匠慶長四年以四十一歲逝是爲瑞穗流茶道之祖翁實其十四世之孫也既以恢弘祖業爲念又有所察於時勢乃謂世所稱茶湯隱居忘世風流好事者之所爲不知本義而唯末節之務是卽技耳吾則本于彝倫而簡素爲儀清廉爲守起居進退皆中其節處已接人無往不可此則道矣非技也且不觀夫祝史與僧侶乎執笏以事神持念珠以說法我亦將操茶筅以導俗也遂枝履巡遊諸州數十年四慕其德就受教者甚衆雖從前蔑視茶湯者至傾耳聽其說於是乎瑞穗流茶道復大興矣翁之訃一傳也其徒無論海內在朝鮮大連臺灣者咸馳至而弔哭焉頃者門人相議將勤其德業于石以傳後昆介人請余文余嘉翁之所好者道而進乎技也輒諾焉而攄狀紀其梗概且繫以銘曰

紹三百年之先業導數萬人之後進猗歟翁之德之才誰謂非一世之俊

大正十三年七月上澣

遠湖内田周平撰

因に同寺に玉置堂と稱する一宇に、流祖權之守自作の木像安置してある。（神戸市多聞通り八丁目、電話湊川四五〇九番）

◎津の國の難波の春は夢なれや葦の枯葉に風あたるなり　（西行法師）

◎夏刈の蘆のかりねもあはれなり玉江の月の明方の空　（藤原俊成）

◎いつもきく物とや人の思ふらむ來ぬゆふぐれの松風の聲　（藤原良經）

◎月はなほ漏らぬ　のまも住吉の松をつくして秋かぜぞ吹く　（寂蓮法師）

◎みやまべの松の梢をわたるなり嵐にやどすさをしかの聲　（惟明親王）

◎水の江のよしのの宮は神さびて齡たけたる浦の松風　（藤原季能）

◎夕月夜汐みちくらし難波江の蘆の若葉をこゆるしら浪　（同　人）

◎昨日だにとはむと思ひし津の國の生田の森に秋は來にけり　（藤原家隆）

◎日暮るれば逢ふ人もなしまさき散る峰の嵐の音ばかりして　（源俊頼）

未生流花道教授
廣養齋 **山下進康氏**

氏は本名德三郎、明治十七年九月二十九日を以つて、現住地大阪市南區鍛治屋町八幡筋に生れた。現に裁縫業を營み、盛業を見つゝある。

氏は十六歳の頃より、裁縫業に志し、專心修練に從ひたる結果非凡の技倆を得、裁縫教師として斯界に重んぜられるに至り、現に多くの子弟を養ふて、これが教導に努力しつゝある。

氏が華道に入つたのは、二十六歳の時からであつた。師事したのは未生流の師範として將又中尾流元として、大阪の斯界に知られてゐた中尾昇甫氏であつた。爾來師の許にあつて研究を積むこと十數年にして、全く技術の大成を見るに至つた。

氏はこの間、家元幹事として、當流のために盡す處多く、現に目

山下進康氏

下はなければならない。

元來、氏は非常に義俠心に強い人であつて、多忙なる本業と華道に對する精進とにも拘はらず、一面において、公共方面のことにも力を傾注して、現に鍛治屋町義勇會幹事、道仁青年團分團長等の職に在り、その統率するこれ等の會は、成績優良の故を以つて賞讃を博し、市および府より表彰されること一再ならずといふことである。

家庭は、イチ子夫人（明治二十四年生）との間に二男一女がある。

（大阪市南區鍛治屋町八幡筋北入）

◎

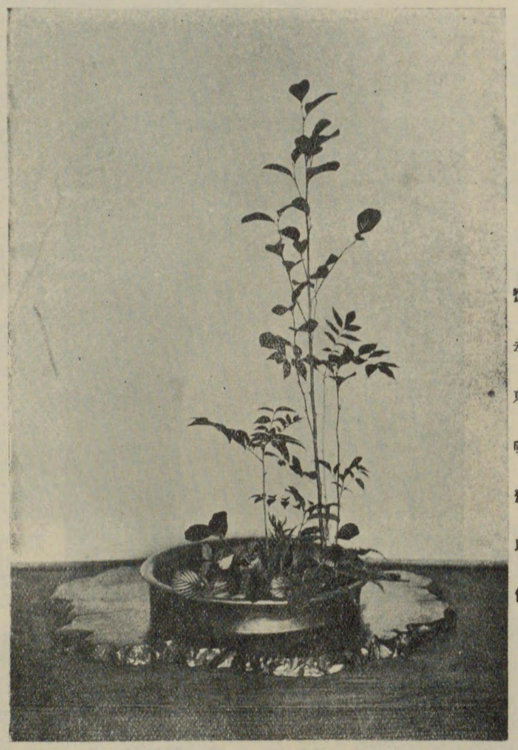
花も亦むら雨涼し森の露　肖柏
むら雨や門の中にて森の花　士朗
女郎花見て行過ぎる人もなし　耜巴
薄散る野に月細きあした哉　心敬
枝折戸に簫の音あり風仙花　珠名

東雲流花道家元顧問
東曉齋 **寶永鯛藏氏**

氏は明治二十一年八月二十六日現住地なる大阪市此花區玉川町三丁目に生る。父は龍吉氏、母をマサ女といふ。

生家は代々木箱その他の製造業に從事してゐたが、氏は自ら考ふる處あり、明治三十五年上京し、京橋廣田洋服店において、洋服裁斷の技術を學び、居ること九年、同四十三年歸阪して、洋服業を開始し、今や家業發展して、市内屈指の洋服店となり、推されて西野田洋服商組合長の任に就き、同業者の共存共榮に力を用ゐ、信望隆々として高いものがある。

氏は花卉に對しては、少年より特別の愛著を感じ、十三歳にして、既に中村東月齋先生の門に入つてゐたのであるが、家業の發展と共に社中の教養意の如くならぬものがあるので、現在では全く趣味として、閑暇を利用して樂しみ、また特殊な人にのみ限つて、指導



寶永東曉齋氏作

の任に當つてゐる。

しかも、氏の斯道に熱心なる。

毎月家元における研究會には、必らず出席して欠かす處なく、家元に微しても、その非凡なる手腕を推知することが出來る。爾來、年少氣鋭の師範者として、畏敬されてゐたのであるが、家業の發展と共に社中の研究會においては、毎時秀逸を取り、また代師範を勤めた程であり、十五歳の時早くも齋號を得たといふの

り拔群であつて、門生中の研究會

のがあるので、現在では全く趣味として、閑暇を利用して樂しみ、また特殊な人にのみ限つて、指導

顧問として、又先輩としての職責を果すことに忠實である。

氏は、從來の型に偏して、花卉の個性と自然を沒却したる弊を改め、眞に自然を摑出する新花道の提唱をなしつゝあるのである。

氏は流儀花に得意なるは勿論であるが、自由花に於て、最も異彩があるといふ。

餘技としては七年前より南宗畫を河野珠石氏に學び技神に入るものがある。又、多能といふべし。

夫人ノブエ子との間に三男一女あり、家門ますます繁榮す。（大阪市此花區玉川町三丁目一四二八番地ノ二）

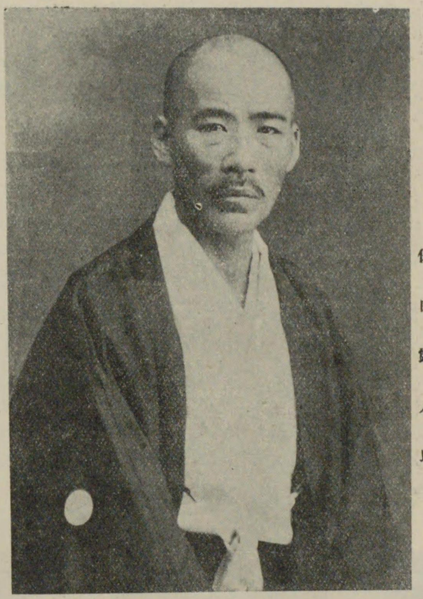
手型挿花法創始者
保田式手型投入盛花實現挿法著者

不識庵 保田露人氏

氏は明治五年九月八日、大阪市北區兎我野町に生る。本名を朔輔、別に是人と號し、著述を業とす。

生家は代々商を以つて業とし、代々天王寺に住す。父君は朔輔氏といひ、二十餘年前六十三歳を以つて歿した。氏は父君の歿後その名を襲ふたのである。

氏は初め容眞流木村一秋齋氏について華道を學んだ。氏が二十歳の時である。後諸流を研究して、造詣する處頗る深く、別に自己獨特の挿法を大成するに至つた。即ち保田式手型投入盛花である。而して大正十一年八月、『保田式手型投入盛花實現挿法』なる一書を著し、大に斯界に寄與する處があつた。而して、同書は天皇、皇后兩陛下並に皇太子、同妃殿下に献上して、乙夜の覽に供し、同十五年既に五版を重ねるに至つたものである。蓋し、氏は從來の斯の種出版物が、その主眼とすべき肝要な氏が深き蘊蓄を傾けたもの、昨年述したのであつて、類書中その比を見ないものであるといふ。



保田露人氏

氏は花道の研究の外、南畵の素養淺からざるものがある。

家庭には志賀子夫人の外、長男彌三郎氏、三女せつ子孃がある。彌三郎氏は生野中學を出で、大阪外國語學校に學んでゐる。(大阪市住吉區住吉町二七二番地)

贈孟浩然　李太白

吾愛孟夫子。　風流天下聞。
紅顏棄軒冕。　白首臥松雲。
醉月頻中聖。　迷花不事君。
高山安可仰。　徒此挹清芬。

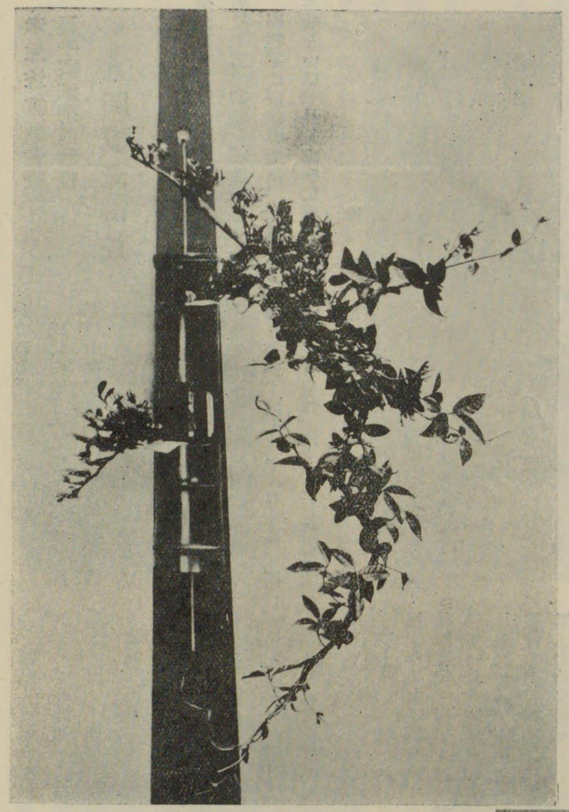
贈崔秋浦　同人

吾愛崔秋浦。　宛然陶令風。
門前五楊柳。　井上二梧桐。
山鳥下聽事。　簪花落酒中。
懷君未忍去。　惆悵意無窮。

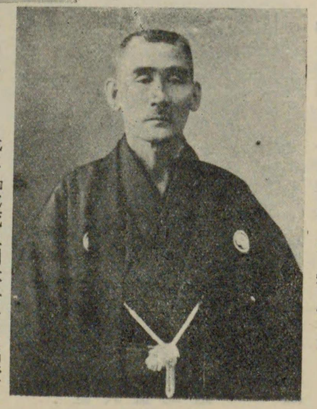
華道千家古儀家元
古觀齋 戸畑宗仙氏

氏は明治元年十月筑前博多に生る、本名を磯吉と稱す。家は代々漆器業を營んだと。

氏は二十三歳にして華道に志し千家古儀を習得す、同流は千利休より連綿として氏は實に其第十四世を繼承したのである。八世福岡の人的野砲雲齋氏は七世京都の人野田學古齋氏に師事して薀奥を極め歸來福岡の地に同流の茶花道を弘め、十三世野上欽氏を經て現代に及んだのであると。



戸畑宗仙氏作



戸畑宗仙氏

氏は『我流祖利休居士は「登り龜」と稱する花器に草花を挿し、時の帝正親町天皇に奉獻したり、身不肖を顧みず、今上天皇陛下御大典に際し、當流傳ふる所の生花の法に倣ひ謹挿して祝意を表した。』と、こゝに掲ぐる作品が即ちそれである。

氏は重厚眞率の性高潔の風流子で、茶花道の教授として實に同地方の重鎭である。餘技として好んで陶器を製造する、氏の手法による香盒、抹茶碗の如きは雅致に富んだ秀品で人の賞讃措かざる所であると。(福岡市大名町四丁目百六十二番地)

未生流華道教授
裏千家流茶道教授
佳芳齋 **岡橋光甫氏**

岡橋光甫氏作

氏は明治十八年五月二十二日、奈良縣吉野郡川上村武木に生る。名は光二、別號を雲龍庵といふ。

岡橋家は南朝の遺臣、家祖を又兵衛といひ、最も由緒に富める家系である。

氏は明治三十八年三月、東京陸軍戸山學校を卒業、陸軍に奉職、現に大阪桃山中學校教諭、大阪府立阿部野高等女學教授囑託である。

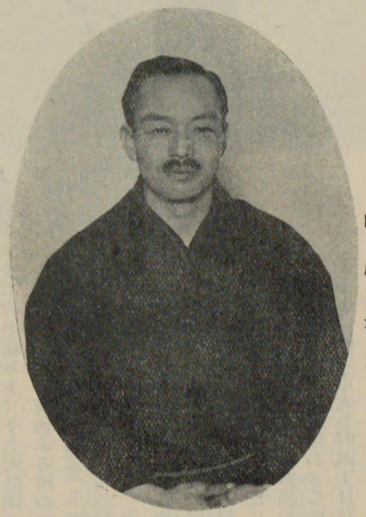
華道は未生流家元日代職前田桃佳齋先生について學び、大正二年三月初傳、同七年十一月中傳、同八年三月奥傳、同九年三月郡會頭、同十年九月准國會頭、同十一年二月師範代、同年九月國會頭、同十三年一月准總國會頭、同十四年六月總國會頭、昭和三年三月諸國准總會頭、同四年二月諸國總會頭と累進す。

又、茶道は裏千家家元的傳教授寺西宗樂先生について、研修すること多年に及び、その蘊奥を極むるに至る。

得意の花は盛花。

餘技は圍碁、謠曲等である。

なほ氏は多年官職に在りし、功により、大正四年十一月御大典記念章を授けられ、同五年十一月勳八等に叙せられ、瑞寶章を授與さる。



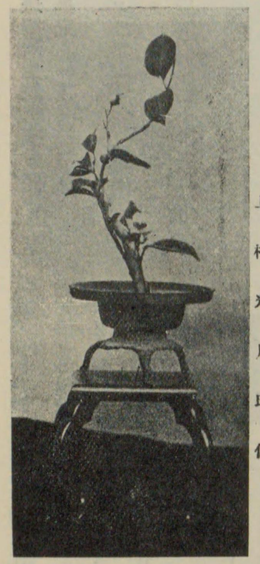
岡橋光甫氏

夫人は同じく茶道華道の名手、就中、華道は未生流先代宗匠の直門として、蘊蓄最も深く、今や夫妻相携へて、專ら雅道の教導に盡し、社中常に多數を擁して、師範代を出すこと頗る多い。又、茶道においても引次者多數を算す。

家庭圓滿、常に春風堂に滿つ。

（大阪市住吉區阿部野筋八丁目五十一番地）

東山未生流華道教授
花月庵流煎茶教授
古流抹茶教授
花好亭 **上村光月氏**

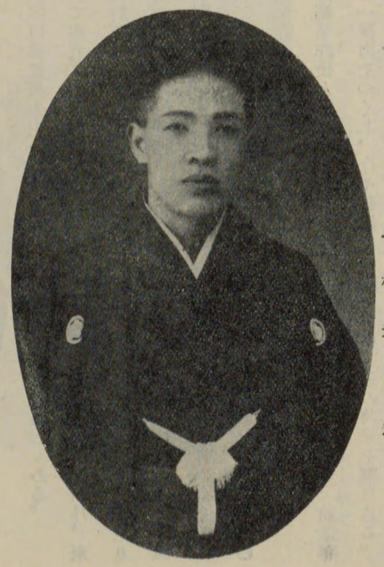


上村光月氏作

氏は明治三十年三月二日、明石市外玉津村字水谷に生る。名を久之といひ、竹内孝太郎氏の二男である。生家は代々農を以つて業として來た舊家であり、嚴父孝太郎氏は、地方の有力者として、村吏員および村の名譽職等を歷任し、且つ華道に造詣深く、夙に元祖未生流の名手として知られてゐた。

氏は奈良縣丹波市町天理教中學校を卒業、後、京都南禪寺に入つて二年間修道の功を積む處があつた。大正十二年神戸の上村家に入婿するに至る。

華道は幼少の時代より、嚴父について元祖未生流を學び、村上家に入つてより、その母堂こと子女史について、東山未生流を學ぶ。蓋し母堂は同流の大家として教へを垂れること五十年、神戸市において名あり、かつて、華道上の功勞によつて、京都清水寺より袈裟一領を拜受したる外、知事その他よりの多數の賞狀感謝狀等を受けた人である。



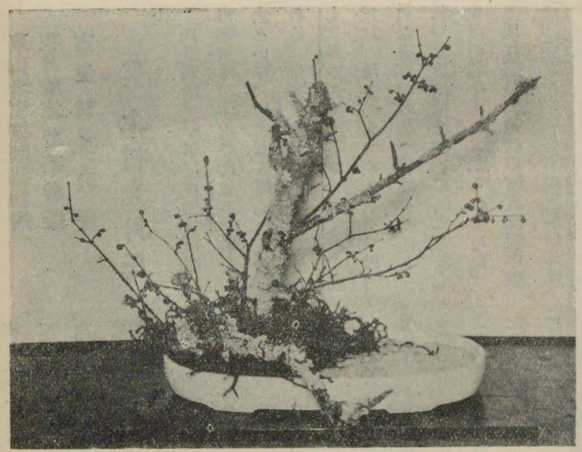
上村光月氏

氏はこの母堂の教へを受くると共に、別に古流抹茶の指導を受け、更らに大阪生玉阪田習軒氏について、花月庵流煎茶を修業す。何れも進境著しく、花道においては間もなく師範を許され、茶道の方面においても夙にその業を大成し、今や神戸唯一の諸流團體茗華會の幹事又は大日本華道團體總本部幹事として、將來ある斯界の新人として斯道のために盡す處頗る多大なるものがある。

餘技亦多く、細川流盆石は名古屋家元に就て習得、師範の技を有し、呼石と號し、和歌は縣下の大家川口磯太郎氏に學び、謠曲は明石の吉川市太郎氏について研修す。

母堂こと子女史は、茶華道の外、又盆石、碁、生田流琴曲等に通じこれが師範である。（神戸市五番町一丁目三一ノ三番地、電話湊川三八七〇番）

斑鳩未生流總國會頭 裏千家茶道教授 景玄齋 中谷重甫氏



中谷重甫氏作

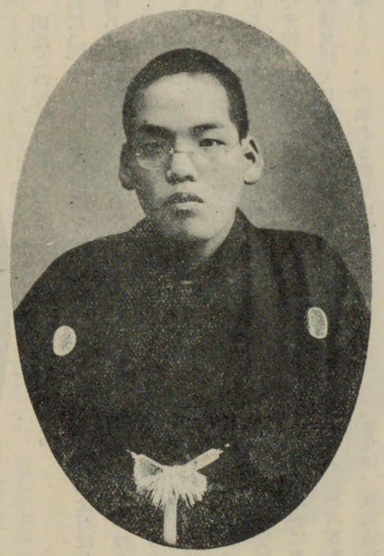
氏は明治四十一年一月二十五日大阪府南河内郡喜志村字大深に生る。名を重吉といふ。

生家は元農を業としたるも、後、一家を擧げて大阪に出で、專ら養鷄事業を營み、現在においては、養鷄區域數丁に及び、四十鷄舍を有する、屈指の大養鷄事業家として斯界に重きを成す。

氏は、大正十四年三月、大阪府立商業學校を卒業、爾後、養鷄事業の經營に當り、以つて今日に至つた。

氏は、大正十四年斑鳩未生流家元宇田景眞齋先生の門に入つて初めて華道に志したが、元來、花卉に對する愛護の念强きに加へ、研究の熱心と頭腦の明晰とは、幾多同門の士を凌ぎ、頭角を抽んで、昭和二年にはその奥傳を極はめて師範免許を得るに至る。

師範免許後といへども、その研究に一層力をつくし、今や總國會頭の要職について、いよいよ斯流の發展向上に力めつゝある。



中谷重甫氏

この間、氏は昭和二年四月、東伏見宮殿下が、舊斑鳩御所御成りの際、師宇田法眼に從つて、御座所に伺候し、生花謹挿の命を賜はり、數々の御下賜品を拜領するの光榮に浴した。

夫人との間に一子あり、前途春秋に富み、その將來を囑目さる。

（大阪市東成區舍利寺町五四番地）

清山眞流華道家元 晴月庵 秋山元易氏

秋山元易氏

氏は慶應三年九月十五日、愛媛縣新居郡玉澤村大字島山に生る。名は義隆、別に鳳樂齋と號す。

生家は舊西條藩士で、父を義兼氏、母をやす子といふ。氏はその長男である。

氏は、早くより大阪に出で、勉學力行して、教育家として立つに至り、その名次第に著聞するに及んだが、感ずる處あつて、後、實業界に身を投じ、鐵工所等の經營に從ふ。後、朝鮮に赴き、花道の教授に數年を送つた。

秋山元易氏作

氏の花道に入つたのは頗る早かつた。蓋し嚴父が斯道に造詣する處深く、謂ゆる斯道の好事家であつたから、幼にしてその薫陶を受くる處があつた譯である。後、諸流を研究して、各その長を採り以つて自己藝術の完成に資したのである。現に大阪華道界においては、最も閥歴に富む長老である。

人と爲り謹嚴にして謙讓、人格高き古武士の風格を具へ、常に現代斯界の弊風を嘆じて、その向上と振作に努力を用ゐてゐる。

愛嬢一人あり、父君の風を受けて華道を究むること深く、特に茶道は表千家を修得する多年に及び何れもこれが師範である。父子相共に雅道につくす。また至慶のこととといふべきである。

（大阪市西成區南神合二七番地）

小原流盛花瓶華教授
小原流國風會幹事
同　一葉會幹事
瓦樂庵　**橋本宗壽女史**

女史は明治二年三月十八日を以つて茨城縣多賀郡大津町に生る。本名をつぎ子といふ。

後、茨城縣水戸藩士陸軍歩兵少佐橋本正壽氏に嫁し、一男三女を擧げた。夫君正壽氏は、明治七年より軍籍にあり、日露戰爭には大隊長として出征、明治三十七年八月十四日、旅順攻撃の際、名譽の戰死を遂げた。享年五十五。

女史は、夫君に從つて、各地を轉住したので、古流、池坊等の華道を各地で研究したが、大正六年春より、專ら平一鶯先生について、小原流盛花投入を研究し、教授職となつて、既に十餘年精進して來たのである。

現在、小原流一葉會および同國風會の幹事として、斯道のため貢獻する處が多い。

茶道は裏千家を極むること三十餘年に及び、教授として多くの子弟を養成して來た。又、煎茶も修業を重ねてゐる。資性温厚にして恭謙、子女の師表として、技術人格兼備の理想的斯道家の一人である。

（東京市麹町區三番町一九番地）

氏家照月女史

家元池坊華道教授
畔柳亭　**氏家照月女史**

女史は明治三十年六月二十二日京都市大宮四條に生る。本名を艶子と云ひ、山田望洋氏の女である。代々京極の武士、祖父は鎗術指役として鍋島侯に仕へた。

女史は京都淑女高等女學校の出身、幼時より華道に趣味を持ち、明治四十年より山下秀芳先生の門に入り、大正九年皆傳を許され、同十年より教授として門下を養ふ。

茶道は裏千家を學び、その奥儀を極はめ、なほ研修に精進す。

將來ある閨秀斯道家として、期待される處が深い。（東京府豊多摩郡杉並町馬橋三八一番地）

米田鹿月氏作

容眞流華道教授
裏千家茶道教授
一靜齋　**米田鹿月氏**

氏は安政四年九月二十二日、大阪市上福島に生る。名を鹿藏といひ、大阪斯界一方の耆宿である。

氏は生粋の大阪人、夙に米穀を業とし、屋號米鹿として知名の老舗であり、且つ業運盛大である。

今や愛嬢夫婦にこれを讓り、自らは隱宅に卜居して、專ら風流韻事に悠遊す。

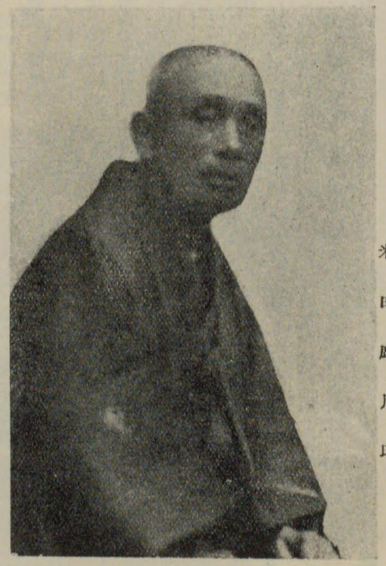
氏は年二十より容眞流二代家元櫻居一閒先生の門に入つて、その技を學ぶこととなつてより、五十有餘年、今や斯流の長老として、家元補佐の職にあり、現家元を援けて、當流現在の盛大を招來するの功頗る大である。同時に一般斯界に寄與する處も、尠少ならざるものあるはいふを俟たない。

例へば、氏は現大阪華道界の權威的諸流團體たる花友會の設立に參劃し、その創立當時幹事として、東山新流管生鶴照齋氏等と共に、最も奔走力を盡したものである。そして同會今日の基礎を築いた功勞は沒すべからざる者がある。

なほ、氏は茶道裏千家十二代又妙齋先生の直門として、師事すること多年、夙來約三十年間斯道に携はり、大阪における大茶人として絶大なる名聲を有してゐるのである。

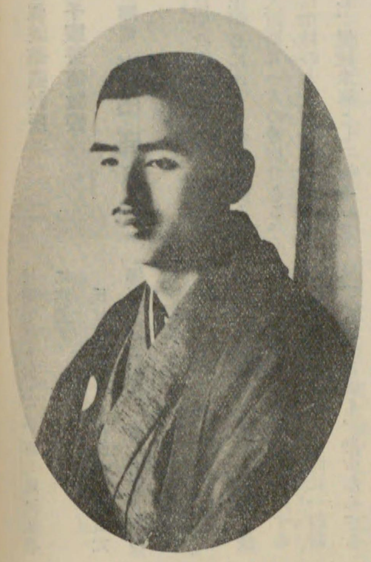
氏は專ら花道茶道のことに心を用ゐ、他の餘技なるものを顧みずたゞ茶席は、遠近にかゝはらず、常に出入して、斯道の三昧境を樂しみつゝあるのである。

家庭は夫人との間に一女あり、父君の業を繼いで、いよいよ繁榮す。（大阪市此花區上福島南二丁目六五番地）



米田鹿月氏

溫古流華道家元補佐
表千家流茶道教授
嘉悅齋 平岡登光氏



平岡登光氏

氏は明治二十九年十月三十一日大阪府下豊能郡南豊島村字穂積に生る。名を嘉藏といひ、平岡傳藏氏の長男である。

生家は累代の豪農として聞え、父君傳藏氏は現に幾多の名譽職に任じ、地方開發のことに力を致す處頗る多く、鄉黨の信望頗る厚し。

氏は大阪府立農學校園藝科を卒業、更らに大阪國學院に入りて、その業を卒ふ。後、大阪府米穀檢査所技師となり、在職三ケ年にして官を辭し、爾後雅道のことに專らなるに及ぶ。

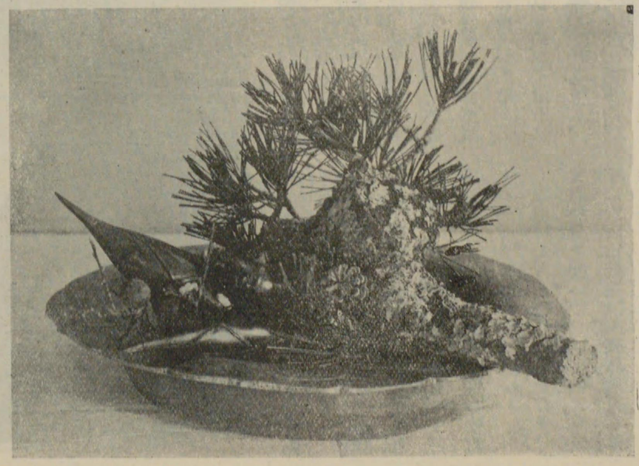
氏が華道に入つたのは、大正元年であつて、未だ農學校に在學當時であつた。師は溫古流家元廣瀨溫古齋先生で、研鑽すること三年、技術他に超へて優秀、師範を免許され、爾來、師の囑望最も厚く、代稽古となつて社中の教導に當る。かくて、累進亦榮進、現在においては、流内最高職家元補佐に任ぜられ、當流の庶務一切を總覽するに至る。

家元廣瀨溫古齋先生は、出雲の人、夙に、各流を究めて、採長補短、自家の創意を加へて一派を樹立したるものである。又、廣瀨氏は知名の化學者であつて、就中防臭塗料發明の權威として知らる。

なほ、當流の講習會は、毎月八回一年修業で既に回を重ねる三十三、卒業生を出す千三百餘人に達し、氏は家元を補佐して、專ら之が講師を擔任するの外、鄉村の女子補習學校、大阪緒方助産婦教習所等の茶華道講師である。

別に細川流盆石に通じ、登石軒と號して、免許皆傳の技倆を有す。又、觀世流謠曲、北畫等をよくす。

家庭は兩親並に夫人コズエ子、仲に二男あり。（大阪府豊能郡南豊島村字穂積）



平岡登光氏作

家元池坊華道教授
東京池坊研究會幹事
春陽亭 岡田花紅女史

岡田花紅女史

女史は明治十一年六月、靜岡縣富士郡加島村に生る。本名を久子といひ、靜岡縣士族水谷治三郎氏の女である。後岡田家に嫁す。

女史は鄉里にて小學校、女學校を卒へ、明治三十五年より華道に志す。師は現東京池坊研究會長山下秀芳先生である。

爾來、孜々として研究、明治四十年五月皆傳、大正六年華道教授となり、同十四年麹々園より分社して麹陽社の創設されるや、その社長となり、翌十五年四月大日本總華督の榮位についた。

岡田花紅女史作

現に東京池坊研究會幹事、池坊昭和會評議員等の要職にあつて、當流のために盡す處甚だ多い。

花道に對しては、師山下先生と同じく皇室中心主義を奉じ、華道により世の弊風を、淨化匡正するの信念を以つて、斯道に精勵してゐる。社中より教授職二十餘名を出し、外に門下多數あり、現に帝國大學附屬醫學部看護法講習科の生花教授である。また茶道に通じ家元千家の教授職である。

資性温和、雅道の師として眞に模範的の人である。

家庭には二男一女あり、長男は文學士、二男は明大に在學、一女は第五高等女學校を卒業し、生家水谷家を繼ぐ。（東京市麹町區上二番町九番地）

斑鳩未生流諸國總會頭
華道景昭會々長
裏千家流茶道教授
景櫻齋 藤本佐甫氏

藤本佐市氏作

氏は明治三十二年九月、大阪府下豊能郡櫻井谷村字野畑に生る。本名を佐一といひ、園藝を業とす。氏の生地は、關西地方において著名なる花卉生産地であり、氏の生家は最も手廣くその生産販賣に從ひ、京阪神はいはずもがな、遠く山陽東海地方にも及んでゐる。嚴父は鄉村の有力者として、村會議員、大阪府農會議員、或は美風會々長等、數多の公職に就き、公共に盡瘁しつゝあり。

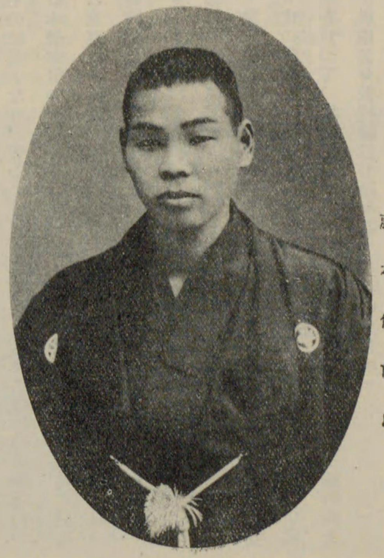
氏は夙に家業たる園藝家として立ち、花卉の栽培に從ふの傍ら、大阪における有名なる未生流の大家瀧先生の門に入り、その技を磨く處あり、後斑鳩未生流家元法眼宇田景眞齋先生について、同流の奥儀を極はめ、現在、當流の重鎭として、その發展と普及に盡しつゝある。

大正十五年四月、東伏見宮大妃殿下が、舊斑鳩御所御成りの節、氏は宇田先生に隨伴して、御座所および御休憩室に生花謹挿の榮に浴す。

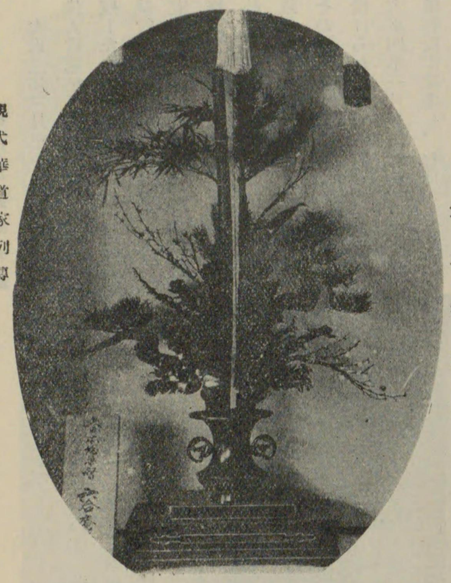
氏は淵厚の君子、仁義に厚く、青年團支部長として共公に盡す外華道の方面においては、景昭會を創設して會長の任にあり。又、景友會執行員および北攝支部長等の樞要に居りて、斯道上に盡す處尠少ならざるものがある。

得意の技は雅清體の花である。

夫人との間に二女あり、社中頗る多く、その門繁榮す。(大阪府豐能郡櫻井谷村字野畑)



藤本佐市氏



大石挹翠氏作

池坊華道教授
大石流投入盛花果物盛教授
高遊外賣茶流煎茶教授
六合庵 大石挹翠氏

氏は明治三年新潟市沼垂町に生まる。幼少にして宮脇玄通師及び寺田德浴師につき皇漢の學を學び關道琳師について茶花道、明清樂、篆則並に篆書等を學ぶ。

明治二十二年十月、池坊代見職大日本總華督武藤松庵師の來越を機として、就いて教へを受く、晝夜練習を怠らず、その十二月、松庵師佐渡に赴くに際し送別花會あり、氏は席上枝垂柳に椿の根〆め五尺以上の大花を古薩摩の大壺に入れて松庵師の激賞措かざりしといふ事である。その翌年三月師佐渡より歸るや。晝夜にわたりて教へを受く。四月末、新潟別院において北越華道大會開かれ、氏も亦山ツヅジの大瓶と金雀花と二瓶を出瓶した。別るゝに臨んで、師に華道修養の道を問ふ、師は毎日一瓶を日課とせよ必ず自ら悟るあらんと教へた。後明治二十六年師また巡教の途次再び教を受け、その時生花皆傳を許され、挹翠の名を授けられた、依て挹翠軒閑哺と號した。氏は師を自宅に請じ、記念のため揮毫を求めたところ、師は即座に數葉を書いて與へた。その中『閑爲水竹雲山主靜待風花雪月權』の語を見て、大に悟る所があつた。松庵師は又盆に風竹の自畫讃を則して與へた。その他華道の研究につき諄々として教へられた。

大石挹翠氏作

明治廿六年、氏は故あつて北海道に移り、農科大學に專科生として入つた。廿九年八月、松庵師の來道を聞き、自宅へ迎へて、十四年振りに師と再會した。此時師は挨拶は後にして先づ一瓶を試むべしとあつたので、氏は庭前の菊を採つて挿した處、師はその妙技を賞した。その後明治四十三年秋、師旭川よりの歸途又教へを受けた此において氏は松庵師の言葉に從ひ、實業を棄てゝ華道につくの意を決した。

大正三年三月三十一日華道界の偉人武藤松庵師七十六歲を以つて歿したので、四月十七日大追悼會執行、同年十一月十七、十八兩日家元月次會に出席したる氏は、華務課長上野啓純師に、今回朝鮮に赴き、華道啓發に努めたき希望を述べたところ、師も大に贊成し、その壯擧を祝して同流生花教授を授けられたのである。よつて氏は大正四年一月釜山に赴き、專心華道教授に從事し、七月三十日第一回、八月三十一日第二回生花會を催した。同年十一月、大正天皇御大禮奉祝華會を知恩寺に催した。氏の花は伊吹眞の立華で、此時始めて釜山に立華及び投入花が行はれたのである。斯くて日を逐うて門人が殖え、盛んとなるに及び、それを妬むの餘り種々の壓迫を氏に加へんとするものがあつたが、氏はあくまで自己の信念と正義を曲げずして進んだので後には皆其の風に服したといふ。

大正六年の暮、氏は雍の間一華一席繪奥相傳を許され、大日本總華規則改正地方華務課設置のことなつたので。氏は昭和二年一月、會頭職に補せられた。同七年四月

大石掬翠氏

督に補せられた。

大正十五年十二月、家元華務課より地方華務課橘會等は一時解散された。昭和三年一月、新規則により、朝鮮南部橘會を創立するや、推されて會長に就任し、教授としての多忙の傍ら、鋭意會の事務に携はりつゝある。

同年十一月又々家元の規則改正により地方華務課橘會等は一時解散された。昭和三年一月、新規則により、朝鮮南部橘會を創立するや、推されて會長に就任し、教授としての多忙の傍ら、鋭意會の事務に携はりつゝある。

氏は家元より功二級章を受け、大邱共進會に立華を出瓶して褒狀を受け、又大正十三年六月一日、門人一同より氏の渡鮮十週年記念祝賀會を催され、同時に記念品を贈られた。

氏は立華生花の外投入を得意とし、大石流又は六合庵式と稱してゐる。餘技として篆刻及び南畫をよくす。

家庭は四男四女、長子は氏の業をついで華道に從事してゐる。

（朝鮮釜山府草梁町六六七ノ二）

十七日、智恩寺にて其の披露會を催した。氏は立華砂物高さ八尺横十二尺餘の大立華を立調して、同地の新聞紙をして賞賛せしめた位であつた。同七年の秋大日本總華部華務課設置の事を請願し、容れられて、氏は課長に推されたが、他三名の委員と上京し朝鮮南部即ち慶尚南北道、全羅南北道、忠清南北道の六道を管轄として朝鮮南

斑鳩未生流諸國總會頭 舊斑鳩御所華務課法務 景友會理事長並備後支部長 裏千家流茶道教授 景陽齋 平井雄甫氏

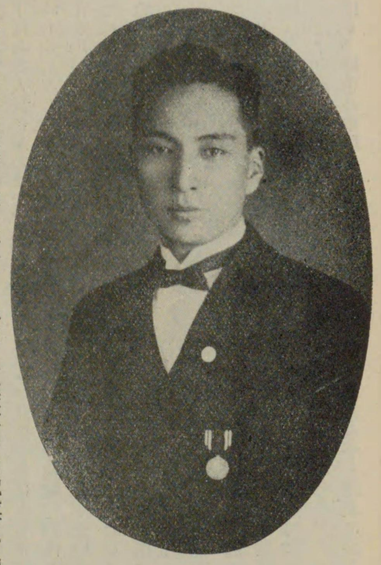
平井雄甫氏作

氏は名を喰雄、明治三十二年九月二十一日を以つて、岡山縣淺口郡連島町鶴新田に生る。長三郎氏の長男、母堂を幸子といふ。

生家は福山市における素封家にして、鄉黨に聞えた名家である。氏は岡山縣倉敷商業學校の出身卒業後大阪に出でゝ、都島に店舗を構へ、雜貨製造輸出業に從ひ、後歸鄉して家業を見る。その大阪に在るや、都島青年團長に推さる。

華道は未生流師範康豊齋素月氏について初めて學び、同時に同師により裏千家茶道の門に入る。かくて、奥傳免許を得たる後、斑鳩未生流家元法眼宇田景眞齋先生の門に入り、大正十五年十月師範免許を受け、爾後、累進して昭和三年四月、諸國總會頭の重職に任ぜらる。現に舊斑鳩御所華務課法務、景友會理事長、同備後支部長等の樞位にあるのである。

なほ、氏はこの間、卽ち昭和三年四月、梨本宮、同妃殿下、中宮寺御成りの砌、宇田先生と共に、御座所および御休憩所に生花を謹挿し、御下賜品の光榮に浴した。



平井雄甫氏

氏得意の花は、南畫化した盛花である。氏は日進月歩の今日、確乎たる信念を以つて、盛花投入を教授するもの少きを慨し、時勢に順應せる自由花の研究を提唱す。

餘技として實生流の謠曲を能くし、その他川柳、圍碁、園藝、野球、登山等々頗る多方面である。

かなえ子夫人との間に二男二女あり、琴瑟よく和し、清福を謳はる。（福山市天神町）

大日本花道 團體總本部

大日本花道團體總本部は、大阪華道界における最も歴史あり且つ有力なる諸流統括の團體である。卽ちその創立は明治二十五年であつて、約四十年の歴史を有してゐるのである。

初めは大日本花道團體大阪本部と稱し、主として先代廣榮齋岡本政之進、佐保安次郎の諸氏が、諸流を統括する使命の下に、提唱したのであつた。卽ち明治二十五年に創立して、翌二十六年春、前記二氏が京都大覺寺當代門跡猊下に謁し、本團體設立の主旨を上奏した處、直ちに快諾許容されたのある。こゝにおいて本團體組織の基礎を固くし、時の執事泉秀明師は、猊下の旨を體して、しばしば來阪、斯道の發展に盡力する處があつた。

こゝにおいて、本團體はその使命に基いて、各流共通の傳書を編集する必要を認め、岡本、佐保兩氏先づ自家秘藏の花道書を蒐めて、これに東西諸國を奔走して蒐集した材料により、その精粹を抽き、刻苦多年にして、七卷の傳書を完成した。明治三十五年、大覺寺門跡高憧龍暢猊下となり、同四十二年龍池密雄猊下となつたが、何れも本團の總裁として推戴し、各地に支部を設置し、その進出は目覺しいものがあつたのである。

然るにその後、大正十年の頃、本部副部長松棚齋玉田氏の時代、本部幹部會の席上にて、意見の相異を來し、幹部數名は辭任して、同氏と共に大覺寺派となつた。そこで、大覺寺は大日本花道團體總本部の名を徹回して、華道司所の名を以つて、獨立するに至つたので、大日本花道團體大阪本部は、大日本花道團體總本部と改稱し、役員の選擧を行ひ、本部長に播州清水寺貫主清水谷善照師を推し、從前の主旨の下に、斯道の發展向上を計るために邁進するに至つた。

大正十五年清水谷本部長辭任につき、役員會選擧の結果、當代廣榮齋岡本玉芳氏本部長に推され、昭和三年一月、本部總裁として、京都東福寺管長尾關本孝猊下を推戴することゝなつた。かくて、同年十一月八日、九日の兩日に渉り、京都東福寺において、御大典奉祝生花大會を擧行し、盛大を極めた。

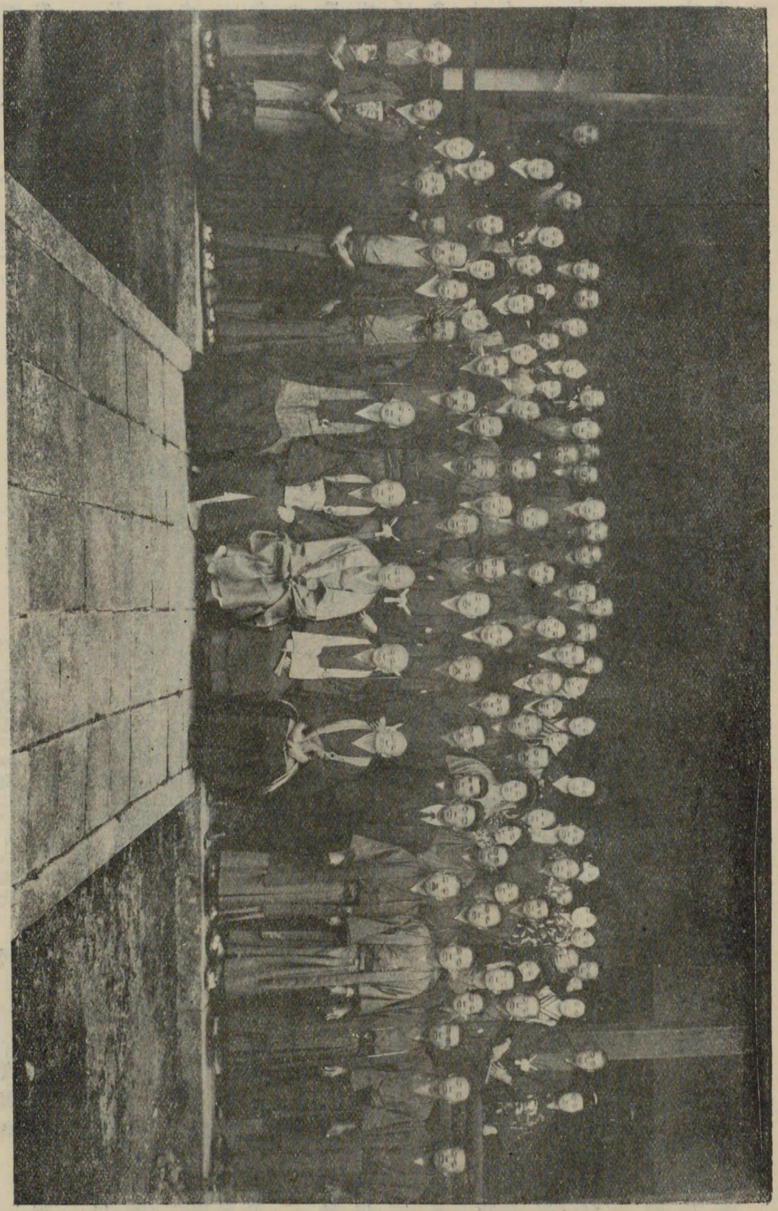
今、大日本花道團體總本部の主意として發表する處を、採錄すれば左の如くである。

× × ×

わが國の禮式は、遠く神代の昔に始まり、その行ひさま〴〵ある中にも、花を飾り花を手向くることは、いとやさしきことにして、最も人の好むところ、今も昔に變ることなし。上は畏くも朝廷より、下は我等人民に至るまで、慶びの時も悲しみの時も、必ず草木の活花を用ゐて、その式場を飾れり。これ花は清淨にして、よく禮にかなひ、且つ優美なれば、式をしてよく意味あらしむ。蓋し、花道の起る所以も亦こゝに由るところあるべし。

其昔、聖德太子は、技能に秀で給ひ、花を手折りて御瓶に挿み給へば、自然と天地人三才の形象備はり、挿花の妙趣を深く御感ましまし、後世花を賞玩するものは、宜しくこの法によるべしと言ひ給ふとなり。これ實に皇國挿花の濫觴とす。

そもそも皇國挿花は、人皇三十三代推古天皇の御宇、聖德太子に始まり、下つて弘仁の頃南都元興寺護命僧正、花を愛玩せられ、その後、延喜年間空海上人、卽ち弘法大師は、挿花風流の道をも究められしかば、玆に恐れ多くも、聖慮を寄させ給ふ。天皇嵯峨の山水を愛し給ひ、遂に此處に宮殿を造られ、嵯峨院と稱し奉る。それより、足利義政及び豊臣秀吉等の時代に至り、花道、茶道とも世に盛に行はれ、珠光、紹鷗、利休と代々相傳へて、其法式も亦完成するに至る。利休は天地の理義を考究し、之を理合して能く其原則を定め、更に面白く花藥を作り出されたり。德川時代に至り、斯道の趨勢彌々盛となり、諸流の發起亦從つて多く、花道の規則稍々嚴重となり、其道に堪能なるは勿論、人格も亦百人を凌ぐに非らざれば、其道の人に非らずと謂ふに至る。



（昭和念記寺總本・會大花生觀本東大御部本總團團道華本日大・日七月一十年三和昭）

玆に獨り未生流の家祖、上田廣甫は、能く正統を汲み、花道三才の卷等を著作し能く斯道に盡す。

されば、世の遷り變るに從ひ、花道の流儀もまち〳〵となり、遂に定まる規矩を失ひ、知らず識らず其本源をも忘れ、何れも我が流になづみて、他流の門を訪ふ人少なく、あまつさへ、互に誹謗りあふが如き、擧動さへあるに至るは、風雅を本旨とする斯道の禮儀にも悖り、洵にかなしき事なり。冀くば、道の友たる諸流の諸氏と、清き樂しみを俱にし、而も、力を協して益々進み、斯道の隆盛を圖らんことを。

玆に於て、我等感ずる所あり、古道をさぐり、本源をたづね、以つて流を清くせばやと、花道の統一を圖らんことを願ひ、卽ち大日本花道團體總本部を創立して、花道の淵源を定め、全國各地に管領支部、又は支部を設置せんとするなり。夫れ既に流を汲みて、其源泉を知らざれば忠ならず、則ち是れ我が團體の設立する所以なり。

嗚呼忠にして誠なる諸君よ、其流儀の何たるを問はず、本團體に加盟せられて、高雅優美なる、我が花道をして、いよ〳〵文明の花とせんか、嫩なる陽、妙なる陰、而も輒ち花格共法に應へば、人の精神を深からしめ、道德是に具はり、容儀亦斯の道より出づ。姿勢正しく、花顏優美なれば、活潑優良の志氣を養ひ、其花、芬しき香りは、すべての汚臭を去りて、自然衞生に叶ふべし。左れば、外國の人も、夙に、我が花道を賞讚し、既に道を學びつゝありとかや。希くば、我が國光を益々中外に顯かし、幾千歲の久しき名譽の斯道を世界に傳へ、いよ〳〵光輝を熾んならしめんことを、同好の諸君に望み、併せて我が諸流團體の趣意の主要を述ぶること爾り。

因に當團體の幹部は、左の諸氏である。

總　裁　東福寺管長長尾關本孝
總本部々長　法眼廣榮齋　岡本玉芳
同常務幹事　法眼光南齋　松本清甫
同　法眼廣旭齋　堀榮甫
同　法眼廣秀齋　森田英甫
同幹事　法橋花樂齋　澤村彥甫
同　光州齋　峰山大雄
同　廣悅齋　杉原龜甫
同　春容齋　高橋駒甫
同　廣芳齋　中尾久甫
同　廣園齋　岡島佐甫
同　廣園齋　上村光月
同　廣園齋　梶樂甫
同　廣盛齋　池宮幸甫
顧　問　三木得堂
贊助幹事　富花齋　井村山甫

なほ、本團體本部長廣榮齋岡本玉芳氏は、未生流の大家にして、大阪斯界の長老である。又茶道は千家表流に達し、號を月尙庵龜甫といひ、盆石に通じて號を春山亭玉甫と稱す。

現に大阪市立難波精華女學校花茶道部教授、中大江家政女學校、花、茶道部教授、市立東江學校同部講師等を擔任して、斯道のために盡す處甚大である。

大正十年八月二十八日、天臺宗より法眼の稱號を授けられ、種字袈裟を賜はる。（本部大阪市東區德井町一丁目二十七番地）

花樂軒古流生花家元
表千家茶道教授
花樂軒　菊池小八郎氏

氏は岩手縣盛岡市の人、明治三年十二月生る。號を梅翁齋といひ、外に紫雲閣、通玄齋、無得宗爲等多くの雅號を有す。

父は菊池隆元と呼び南部藩の神職で、双鶴山太敷堂正一位稻荷神社の別當を務め、後維新後は私塾を設けて幾多の子弟を教えた。氏も亦父君より數學及び漢學等を學んだが、幾程もなく父君の物故に會ひ、氏は早くより夙に人生行路の辛酸を嘗めて人となつたのであつた。

十六歲始めて花道の手ほどきを受け、松月堂古流を學ぶ、二十歲にして家元植松雅德氏の免許を受け、後三十七年岐阜の人國枝花子先生に就きて學び、更らに後五大坊佐藤牧水老師に就きて具に斯道に累進し、大正五年全國花道會議は不傳とせられた寶卷であるが、氏は地位に依り、大正五年佐藤牧水師よりこの相傳を受け、後これを基礎として花樂軒古流の一派を創始し、今日に及んで居る。大正七年縣立高女に花道教師を、翌八年茶道教師を囑託せられ、更らに同十五年縣立女子師範に花道教師を囑託せられ、爾來教職にある。また昨年十月、今上東北の野に軍を閲はせし砌、畏くも御講評所に生花を謹挿して、聖上及各皇族殿下の御族情を慰め奉るの光榮を荷つた。

菊池小八郎氏とその作品

氏は花道の外俳諧は梅室正統梅の本第五世を繼承して梅月庵宗山と號し、茶は京都不審庵表千家々元直門として老練の譽れが高い。

得意とする處は孟宗竹の水揚、花菖蒲及高山性大物の生方等である。（盛岡市内加賀野）

斑鳩未生流諸國總會頭
舊斑鳩御所華務課法務
景友會會計
裏千家流茶道教授
景昇齋 田中留甫女史

女史は明治二十三年九月二十四日、大阪府下北河内郡二島村字稗島に生る。本名をとめといひ、寺内家の四女であり、十九才にして田中家に嫁す。同家は現に雜貨商を營み、盛大である。

女史は大正十年、斑鳩未生流家元宇田景眞齋先生の直門として、斯道の研究に入る。研究五星霜同十四年四月、國會頭師範を免許され、越えて昭和三年十月、諸國總會頭に昇進するに至る。

田中留甫女史作

女史も亦この間、南都法華寺における三親王殿下、御眞影奉安御祈願式および高松宮殿下並にダニー親王殿下、中宮門跡御成りの際、宇田先生に從つて、献花の榮に浴し、御紋章入り御盃を下賜さる。

茶道も花道と同時に宇田師について裏千家流を學び、現に師範として子弟を養成す。

女史は盛花および草花を得意とし、餘技として歌澤に長ず。

人と爲り溫良、責任感强き人格者であつて、景友會設立以來、會計の任にあつて、當流のために盡瘁今日に至る。

夫君惣三郎氏との間に一男あり社中多く一門繁榮す。(大阪市東成區蒲生町五六三番地)

田中留甫女史

夏月古流華道家元
夏月庵 和田美光女史

女史は埼玉縣大里郡明戸村字新井栗原清二郎氏の女にして本名を夏子といふ。栗原家は上州小泉の城主富岡家より出でたる名家にして富岡金彌の長女すみは女史の祖母である。父君はその次男であつて生糸商を營んだ。而して女史の本業は横濱市に於て乾物業を經營して居る。

女史は普通學修了後祖母君につきて遠州流華道を修め、その技大に見るべきものがあつたが、自己の嗜好に適せずとなし半途にして轉じて古流を習學すること十餘年、其の間種々の草木を庭園に栽培して具にその生育狀態を研究したものであると。

斯くて自ら發見したる手法と花容とにより大正十二年三月五日一流を樹て夏月古流と稱し、多數の門弟を教養しつゝ今日に至つたのである。

和田美光女史

和田美光女史作

女史は『私は性來の愛花癖とでもいひませうか、このめまぐるしい程忙しい業務に從事しながら只の一日でも生花が無かつたら愉快にその日を送る事が出來ないのです、それ故夫の許可を得て小閑を偸んで皆樣の御手を取り共に研究し修養に資するのが何よりの樂みで愉快に日を送つて居ります』といふ。華道が近時漸く職業化に墮せんとする傾向ある時に當り。女史の如きは眞の意味に於ける花道家であることが思はれる。

得意の花は棕梠、万年青、菊、水仙等である。

女史はまた餘技として茶道及び和歌を好み共に堪能である。家庭は一男二女の五人で極めて平和圓滿である。(横濱市中區長者町一ノ六)

御室未生流華道教授
榮久齋 **小野好甫女史**

女史は現住地大阪市北區澤上江町の生れ、本名を好子といふ。

女史の生家は、現在の地における資産家であつて、裕福なる生活をなしつゝある。女史は同家の三女であつて、都島高等小學校を卒業後は、教育者として立つべく、師範學校に學ぶ素志であつたが、都合によりこれを變更して、裁縫および花道を以つて、立つことを決意したのである。

かくて、昭和二年三月、御室未生流家元林榮明齋氏の門に入り、その技を磨くこととなつた。研究心の旺盛と、年少氣鋭の女史は、夙夜努めて怠らず、その進境特に目覺しいものがあつた。卽ち研修幾何ならずして、早くも師範代の資格を有するに至つたが、なほも研究を續け、技いよいよ圓熟するにおよび、昭和四年一月、許されて師範代となつた。研究に從ふて教導してゐるが、師の女史に對する期待は、頗る大なるものがあり、

小野好甫女史と其の作品

なほ、女史の兩親は、何れも斯道に對して趣味深く、女史に劣らぬ程の熱意を以つて、女史の斯道に精進するを激勵しその進境を見て唯一の慰樂としてゐるといふ。女史の異常な進境の裏面には、かゝる理解ある兩親の努力に負ふ處も多いのである。

何れにしても、女史將來の大成は、まことに刮目に價するものがある。

別に裁縫に達し、書を好くす。(大阪市北區澤上江町十丁目三〇番地)

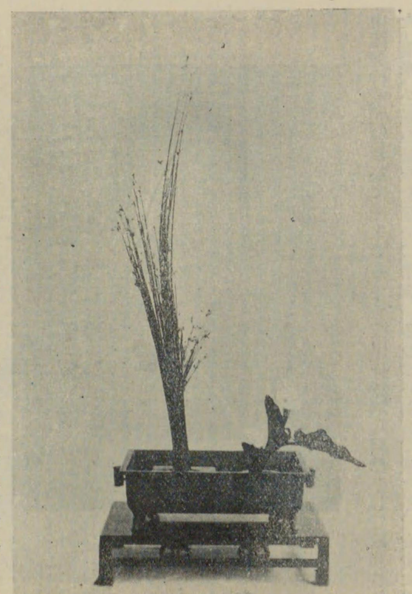
露ながら折りてかざさむ菊の花老ひせぬ秋の久しかるべく　(紀友則)
心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花　(凡河内躬恒)

正派青山流華道師範
加藤裁縫女學院長
豐松亭 **加藤豐雅女史**

女史は明治十四年一月を以つて東京市外大崎町居木橋に生る。本名を豐子といひ、井上勇次郎氏の女である。生家は土地の豪農、嚴父勇次郎氏は、謹嚴なる人格者であつた。明治二十五年五十三歲を以つて歿す。

女史はこの嚴父の薰陶を受けて人となり、年十七にして、同じ土地の素封家である加藤榮吉氏に嫁した。間もなく當主である倉吉氏(明治三十二年生)と三歲で夭折したきよ子孃とを擧げたが、夫君榮吉氏は、折柄勃發した日露戰爭に上等兵として出征し、明治三十七年八月十四日、旅順に近い碾盤溝の激戰で、名譽の戰死を遂げた。その壯烈なる武功は、當時の新聞紙上に稱へられたものである。

この時、榮吉氏は二十五歲、女史は二十三歲であつた。中隊長吉田少尉から、榮吉氏の遺髮とその自筆の戰中日記とを添へて、勇士の死を弔ふ切々たる書翰に接したのは、當主倉吉氏が五歲のいたいけ盛りであつた。



加藤豐雅女史作

若くして未亡人となつた女史は夫の死に對して、如何に悼み悲んだことか。それはこゝに記すまでもない。が、忙しい農家の加藤家にあつては、主人なきの主婦として、子女を養育するの傍ら、農事にも携はり舅姑に對する孝養、亡き夫への供養等寸暇もない有樣であつた。しかも、女史は織い女の手を以つて、實によくこれ等の任務を果した。そして、界隈においても稀に見る貞婦として、推稱されるに至つた。が、女史はこれだけに止まらなかつた。卽ち三十八年自ら發奮して、裁縫を學ぶことゝなり、渡邊裁縫女學校に入學したのである。當時、周圍の人々は驚いて、農家の女風情が氣でも狂つたのではないかと蔭口を叩く人もあつたといふ。しかし、克己心の强い女史はこれに堪へ忍んで、その所期の希望を貫徹すべく努力した。そして前校長渡邊辰五郎氏の力添へで、普通科高等科を卒業し、高等師範部をも聽講して、大正七年三月までこれを繼續したのである。

その間女史は、附近の娘さん達を集めて、裁縫の敎授を始めてゐた。そして追々盛大になり、千坪に餘る廣い邸内には、間口十間奥行三間總二階の校舍が出來上り、大正八年十一月には、東京府から公認されるまでになつた。翌九年の三月十五日を期して、名も加藤裁縫女學院とし、花々しく開校式を擧げるに至つた。その開校式には志賀重昂、神田乃武男、鳩山春子、吉村女史等知名の人々が參列し盛んなものであつた。

爾來女學院内には、百三四十名の女生徒と幼稚園に五六十名の園兒とが收容された。女史の着實な家庭本位の敎育方針は、世の認める處となり、年々歲々學院の門を潜り、薰陶を受けるものが多くな

つた。そして、女史は夫君の名と自分の名とに因んで、豊榮會なる學友會を設け、毎年一回開催することになつたが、それは素晴らしく賑かなもので、女史多年の苦辛も、やうやく果を結んだかに見えたのであつた。實際こゝに至るまでの十餘年間における女史の努力と苦辛と忍耐とは、容易ならぬものがあつたのである。そして、行く行くは、高等女學校にまでするといふ卒業生達の希望もあつたのであるが、多年に亘る奮鬪は、女史の健康を著しく害したのと、經營上の難點、お孫さん達の教育等いろんな事情のため、生徒を各學校に預けて、昭和二年の學期初めから一時休校を餘儀なくされたのである。これは、女史に取つても卒業生にとつても、頗る遺憾なことであるに違ひない。

けれども、既に女史の手に薫陶された人々は七百人に餘り、既に社會の各方面に出で有爲の婦人となつてゐる人が多い。又、名門名家の子弟では、出羽大將の若夫人、加藤定吉大將の姪御さん、佐賀縣

加藤豐雅女史

の多額納稅者松尾廣吉氏の三令嬢その他多數の人々がある。そして、再び女史の健康でも恢復すれば、同校の再興となつて、現はれるのも期待されるのである。

さて、女史の華道に入つたのは、二十四歳の頃からで、師は正派青山流先代家元堀麥松園先生であつた。爾來、公私の餘暇を割いて精進し、二十八歳の時奥傳となつて、師範職となり、後現家元についても學び、昭和二年十月には會頭職となつて、亭號を許されるに至つた。

また茶は裏千家を花道と同時に學び始め、その奥儀を極めてゐる。

女史は一面非常に仁俠であつて人の苦境を目堵してはこれを傍觀するとこが出來ず、常に自ら薄ふして人のために盡す處が、どれ位ゐであるも知れない。七百人の母校出身者から慈母として敬慕されるのはいふまでもなく、女史に接したあらゆる人々から慕はれてゐるのである。かつて、日獨戰爭に際しては、卒先慰問袋を戰地の兵士に送り、その溫い心をどの位ゐ兵士達から感謝されたことか。そして陸軍省からは感謝狀に添へて、見事な三つ組木杯を贈られ、又、震災の當時は、生徒を指揮して無料で罹災者の衣類から夜具蒲團の裁縫を引き受け、年の越える翌年までこれを繼續し、時には徹夜することもあつたといふ。

昭和三年大崎町々長は、女史の多年に亘る功勞を表彰し、又、時事新報社では、同年『感謝される人々』を全市に求め、女史をその一人として擧げ、筆を極めてその篤行を表彰する處があつた。

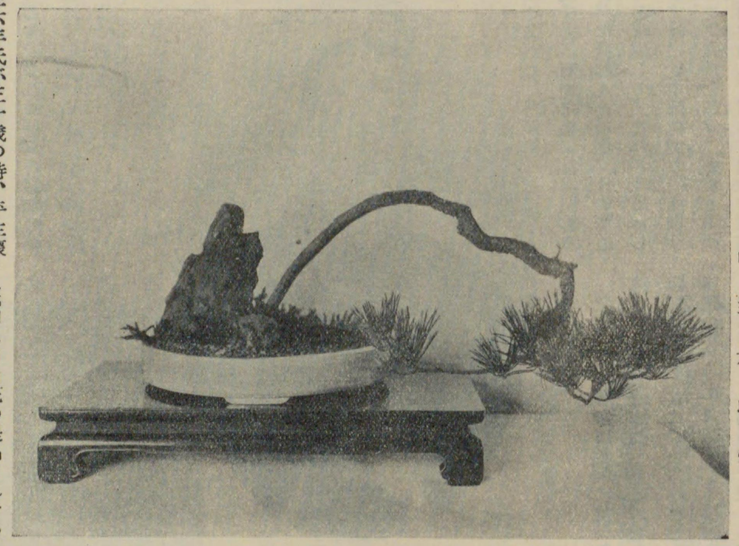
家庭は、當主倉吉氏とその令夫人光子(明治三十五年生)との間に愛孫一雄君(大正十二年生)智子嬢(昭和元年生)正君(昭和四年生)の六人、倉吉氏は早大國文科出身であるが、夙に電氣の研究に興味を持ち、無線科學研究所を設けて、ラヂオ界の權威として知られてをり目下中央放送局技術部に勤務してゐる。(東京市外大崎町居木橋二一一番地、電話高輪三一一五番)

二葉流華道家元
日本華道協會理事
一葉庵 堀口玉方氏

氏は明治廿一年三月二十日、三重縣伊勢松阪町に生る。本名を榮三郎といふ。故龜吉氏の男である。

生家は代々宗教家であつて、十二代相繼承する由緒正しい家柄である。父君龜吉氏は、特に園藝の趣味家として知られた人であつた。從つて、氏は幼少からこの方面の趣味を解し、十六歳の時鄉里松阪町の未生流華道師範について學び、二十歳にして師範者たり。

後なほ研究を重ねてゐたが、氏の向上心は久しく鄉里に止るを許さず、二十三歳の時單身大阪に出で、斯道大家の門を叩いて、各流の蘊奥を極めたのである。しかし、氏はその技術の大成と共に在來の花道に不滿を感ずるに至り、



堀口玉方氏作

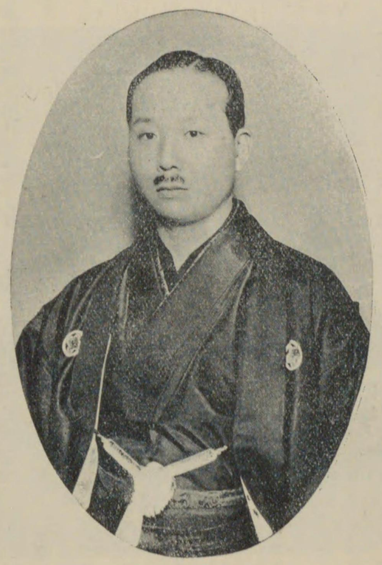
大正六年氏が三十歳の時、平生懷抱する理想を世に向つて發表した。卽ち自由花の提唱これである。そして、二葉流と名命しこの家元を樹立した。

氏の自由花は、謂ゆる眞の藝術としての華道を完成するにあつて、その內容は盛花、瓶花、景花、小品花等を含んでゐるものであつた。當時の華道界は、流儀花にあらずんば花道にあらずといふ狀態にあつたのであるから、氏の新提唱は、斯界の耳目を唱導し、氏を目するに反逆者とするものもあつたのである。

しかし、その後時代はあらゆる意味において、急旋回を遂げた。斯道界ひとり、この潮流に超然たることは出來ない。盛花瓶花その他氏の謂ゆる自由花は、駸々として發達を遂げ、今や如何なる流派もこれに超然たることを得ない程の盛行を見るに至つたのである。氏の非凡の花才の趣く處、深くも時代の傾向と一致したのである。

氏は華道に對しては、多くの意見を抱藏してゐる。卽ち、

『凡そ華道の眞精神は、花を生かすといふ一言に盡きてゐる。しかるに、舊來の流儀に囚はれ、謂ゆる型に辨り切つた生け方は、この華道の大精神に悖りはしないか？自由な囚はれない心を以つてその花を自然に生かしてこそ、眞の華道の大道が開ける。例へて言へば、人間の衣服でも、紋付の禮裝は必要であるが、だからといつて、これ以外を用ゐてならぬといふことはない。否、紋付以外種々な縞や絣や模樣やを取り入れてこそ、趣味があるのである。又、その種々な好みによつて、その人の個性なり趣味なり教養なりが、表現出來るのであつて、そこに衣服としての藝術味があるのである。これと同樣に我が華道における我々の自由花が、取りも直さず衣服における種々な縞物であり、模樣物であり、絣であるのである。我々の自由花は、盛花、瓶花、景花、小品花等の總稱であるが、これ等は何れもそれぞれの藝術的な理論を持つてゐて、これこそ眞の意味の花道であると信ずる。』といふのがその要旨である。



堀口玉方氏

氏は去る昭和二年二月、同志六名と共に發起人となり、日本華道協會を組織して、これが理事として盡す外、社中師範者の研究機關として紫紅會を設け、また社中師範候補者のために紅蓼會を組織し、何れも毎月一回研究會を開き、これが教導につくしてゐる。更らに二葉會を組織し、全社中の爲めに、春秋二季大會を催す等、氏の努力は生々として、躍動しつゝあるものがある。

今や、氏の努力は各所に美果を結び、その門前に教へを乞ふもの踵を接すると共に、市内の各婦人團體の爲めに講師として招聘され、神戸市にも出張所を設くるの繁榮を呈してゐる。

氏は獨學力行した人であり、又文才に富み、これまでに『飾花のしほり雅題金玉』二冊、『華術二葉の卷』『華術性情の卷』『華道天地の卷』『草木やしなひの卷』等の著がある。就中最初の一書は、最も力作であり、洛陽の紙價を高からしめたものである。

別に趣味として書道、俳句を嗜み、何れも秀拔の域に達してゐる。試みに近吟三四を摘錄して、その全豹を窺ふことにする。

御大典を祝して

滿園の菊滿開の香や秋麗

雜　吟

つかの間に明月となり草の雨

秋の雨水に細々消ゆるかな

秋の蝶冷たき風に追はるゝよ

行く秋や朝顏の種こぼれつゝ

家庭は幸惠夫人(明治廿八年生)との間に、長男幸男君あり、夢悪相和す。(大阪市南區鰻谷仲之町六二番地)

雪洲流花道教授
茶道利休正流
絖洲軒　林　如鑑女史

女史は栃木縣安蘇郡舟津川村の人福地氏の二女、明治二十二年一月を以つて生る。本名鑑子。

栃木縣佐野町尋常小學校を經て同地の裁縫女塾に入り業を卒ふ。明治三十五年上京、深川區池内裁縫所に入り、五年間專心裁縫の研究に從ふ。

明治三十九年、現主人林氏に嫁し、明治四十四年より約二ケ年間、遠州流生花を學び、大正二年より雪洲流正花、利休流茶道を圖師歌子女史について、專攻するに至り、同十年師範免許を受けた。

大正十四年より更らに雪洲流宗家中村如遊氏に就き、盛花投入の秘奥を研究し、現在に及ぶ。

女史が好む花は、盛花にあつては、カキツ、フトキ、睡蓮等、正花にあつては柳。

なほ、女史婚嫁先林家は、その先武田氏の臣、林播摩守と稱し、勝賴公天王山に敗戰して以來、新潟縣左近なる僻遠の地に隱棲、他と交渉を斷ち、婚姻何れも同族を以つてし、一村皆林姓にて、現に六十二戸の多きに達してゐる。夫君林氏は、卽ちその總本家の三男である。

又、女史の生家福地氏は、唐澤山城主俵藤太秀鄕の別系に屬し、その祖を福地多左衞門と稱し、代々椿田に住した。後女史の祖父菖藏氏の代より栃木縣舟津川村に住するに至つたものであるといふ。(東京市下谷區谷中眞嶋町二番地)

專敬流生花松壽流盛花教授
芭蕉流煎茶式教授
西澤玉秀亭女史

女史は靜岡縣笠原郡笠原村の人幼少の頃より華道に志し、專敬流生花を同流教授中村師及び宗家京都綾小路林莊右衞門師について研究すること十二年間、教授職を授けられ、引つゞき研究の傍ら十四年間教授に從事し、又松壽流盛花を東京井上松壽師に、芭蕉流煎茶式を東京手島蕉雨師について學び現今の住所青島市において教授に從事しつゝある。現在專敬流青島幹事長の任にあり。

女史が華道に對する感想としては、この高尚にして風雅なる技藝の練磨によりて、十分なる心身の修養を圖り、時代の惡風潮を排撃せしむべしと云ふにある。(支那山東省青島市大連路二號)

西澤玉秀亭女史

古流花道教授
二世 松隣齋 **岩崎理德女史**

女史は埼玉縣北埼玉郡田ヶ谷村に生る本名をかく子といふ。家世々農家にして父君は同村々長及び縣會議員等名譽の職を奉じて居る。

岩崎理德女史作

華道は一世松隣齋理德氏に就て研修しその堂奥を極め師範に累進して一世の花號を繼襲するまでに至つた。之と同時に一世松隣齋福田氏は隱居して松林齋理仲と改號した。福田理仲氏は言ふ『我流にて用うる馬盥は花盥と改稱し轡の花留は廢止したし、又梅の水くゞりの花型は水をくゞる迄に至らず花枝は水上にありたし、又水仙は出性に基きて少しく技巧を加へることに改良したし』と、女史もまた常に同じ意見を持ち之を實行して居る。(埼玉縣北埼玉郡田ヶ谷村)

中野理生女史作

古流華道教授
松中齋 **中野理生女史**

女史は埼玉縣北埼玉郡忍町の人本名を理子といふ。

華道は古流初世松隣齋福田理德氏に師事して研修の功を積み累進して師範を許された、熱誠にして前途多望なる閨秀である。(埼玉縣北埼玉郡忍町忍)

高山政實女史作

東未生流華道家元
山實齋 **高山政實女史**

女史は明治二十四年九月十五日橫須賀市不入斗町に生る、本名を政子といふ、中里關次郎同やま子の女である、中里家は清和源氏の出にして代々農を業とした。

女史は普通學を修了して明治三十七年華道に入り新未生流を習修した。

大正五年初傳、中傳、奥傳、郡會頭を經て郡會師に躍進、同六年、國會師、國會頭、諸國師範代、諸國宗會頭、准家元目代と順次昇級家元教授に補し、橫幕一廉を授與された。

大正五年家元初世今井篁甫先生より東未生流の流名を許さる。同時に新未生流茶道宗匠たることを差許さる。

大正六年三月家元未生齋篁甫先生より左の如く旌表せられた。

大正二年以來新未生流ノ奥儀ヲ極メ社會ノ師範タル資格ヲ保チタルニ依テ其功績ヲ旌表ス

其他大正六年海軍海光社より同年軍艦山城艦長より、昭和三年四月相陽新報社より、同年六月市内鶴久保校長より何れも感謝狀若くは褒狀を受けた。

女史が華道に於ける經歷の概要は叙上の如くである。かくて昭和三年夏、東未生流の一派を樹立し、專念斯道に精進を續けて居るのである。

得意の花は菊、松等餘技は盆石(橫須賀市不入斗三五三)

高山政實女史

池坊龍生派華道教授
登月齋 林 シヅ女史

女史は明治三十二年十二月十六日、福島縣北會津郡門田村堤澤に生まる。大正五年春、會津高等女學校を卒業す。

林しづ女史

女史は現に鄉里小學校に奉職し傍ら華道を子弟に教授して、斯道のために盡しつゝあるのである。

女史の得意の花はあやめ類である。

尙ほ女史の父君は長年若松の專賣局に勤務し、老後は村長として村のために盡瘁せし名望家であつたが、今や故人となり、現在は母堂と侘しく平和の日を送つてゐる。

（福島縣北會津郡門田村堤澤七六）

（八）

花の中に月を抱ける蓮かな　箕山
薄く濃くそめよ梢の秋の露　宗祇
千々の色になるも一木の心哉　同

華道は大正八年三月、當時若松市に居住せし池坊龍生派田中要子師につきて研究をつゞけ、同十年三月登月齋の號を受け、十一年四月まで同師に師事し、教授職となつた。

林しづ女史作

雪洲流華道教授職
奏洲軒 川北如琴女史

女史は明治二十二年十二月五日愛媛縣越智郡今治町に生れた。父は峰雪利惣太、母は久子。女史本名を千代子といふ。

長じて川北家に嫁す。川北家の先代川北朝鄰氏は、旗本中井家の數學家として、著名なる人であつた。その門下には林、長澤の兩大家を出してゐる。

女史が斯道に入つたは、大正八年十一月であつて、師は現雪州流家元雪洲軒中村如遊氏である。研學數年その功空しからず、同十一年に師範の免許を受け、更らに同流の盛花投げ入れも修得、同十五年師範の職に就く。

得意の技は、常盤木類。

餘技としては、刺繍を好み、從つてその技に長ず。その他すべて刺繍に類する技藝には、何れも堪能である。

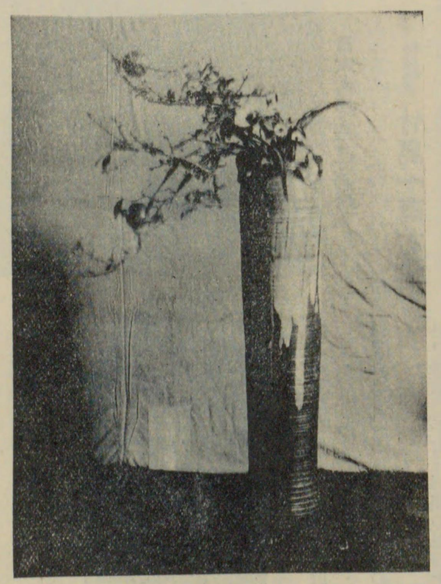
家庭は主人、主人父母二人、愛兒一人の五人であり、靄々たる和氣に滿つ。（東京市外澁谷町永住十四番地）

無聲流華道師範
玉兒園 細川花桂女史

女史は大阪市の生れ、本名を伸子といふ。元横綱大錦として、一代の盛名を謳はれた細川卯一郎氏の夫人である。

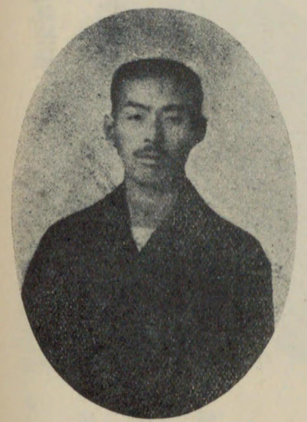
女史は初め本間氏について古流華道および茶道を研究した。同氏歿後の大正八年より瀧家彫刻家として知られてゐた豊川光永氏について、投入を修業し、後更らに無聲流家元宮原無聲先生に師事して、專ら投入盛花を修業し、昭和二年師範職を許されるに至る。

夫君細川氏は、頗る多藝多趣味の人で、尺八、圍碁、書道、乘馬、劍道等に通じ、又謠曲にも堪能である。從つて、女史も謠曲に達してゐるのは勿論、表千家茶道にもその奥儀を極めてゐる。（東京市京橋區築地二丁目五番地、電話京橋四一〇六番）



細川花桂女史作

尾州古流華道家元
尾州庵 **立花雪堂氏**


立花雪堂氏

氏は明治二十二年四月八日、福島縣伊達郡保原町に生る。本名孝之、本業は仕立業である。

祖先は尾州藩に出入し、華道のことに携つてゐたが、後、池谷鑑次郎なる人の代となり、華道專門を以つて尾州家に仕へた。そして後、尾州古流の一派を樹てた。元は美笑流および遠州流系に屬してをり、當流は明治三十年前後最も盛大を極めた。

氏は二十二歳の時より、同師について當流を極はめ、大正九年その免許を受けたが、師は大正十二年の震災の厄に會ひ歿したので、その二世を繼いで今日に至つた。門葉相當に多く、孜々として斯道のために盡瘁してゐる。

夫人かつ子との間に長男孝太郎君、長女由子嬢、二女信子嬢の一男二女がある。(東京市淺草區玉姫町四十五番地)

日本古流華道教授
松蓮齋 **竹島一南女史**

竹島一南女史

女史は明治三十七年十月六日、東京市外代々幡町代々木堀江善明氏の二女として生まる。本名をタツ子といひ、竹島氏に嫁す。

成女高等女學校に學びしも病氣のため中途退學し、大正十五年十月より華道を日本古流家元角田一忠師につきて學び、熱心研修の結果、昭和二年七月師範の免許を受く。女史の得意とする花は立生け、磯馴れ、小手鞠、菊等である。

研究熱心、從つて技術優秀、加ふるに春秋に富み、將來を期待される。(東京市外代々幡町南笹塚一〇六六番地)

大和斑鳩御流 皇國池坊流 華道教授
嘉龍園 **富士田秀甫女史**

富士田秀甫女史

女史は本名を嘉代といひ、明治三十五年二月東京市本所區横網町一丁目に始めて呱々の聲を擧げた幼にして母を亡ひ現在も猶某會社に勤務しつゝある父君を扶けて、二弟を養育すべき立場に置かれた女史は、はやくより家政のことにも日覺め、一面またよく風流の道を愛好し、東京家政女學校在學當時より夙に家元小島專甫師の門に學び、研鑽多年具に蘊奥を究めて瀧奥傳を相傳され、東京府副幹事より、進んで大日本國會司を免許さるゝに至つた。

盛花は女史の最も得意とする處であるが、同じく、小島師に就いて學んだ。茶道、盆石も相當の點にまで達してゐる、外に和歌、書道の餘技もあつてまことに多趣多藝な人である。(府下瀧野川町田端一七四番地)

大和斑鳩御流 皇國池坊流 華道教授
繁翠園 **中川專秀女史**

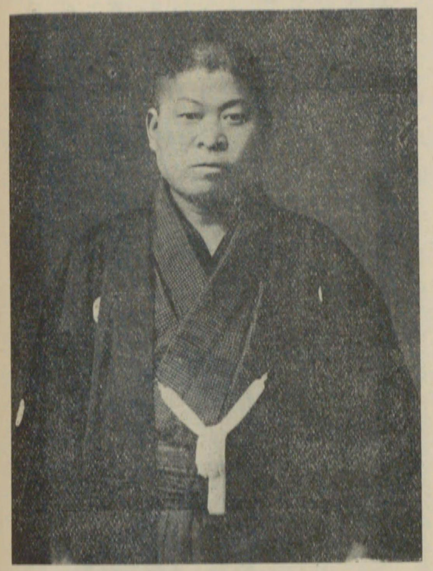
中川專秀女史

女史は本名繁野明治三十七年一月、廣島縣加茂郡仁方町に生る。年齒未だ弱きも、嘉龍園秀甫氏と並んで小島專甫師門下の俊秀と稱せられる。鄉里に於て高等小學校を修了後、裁縫手藝の學校に學んだ。

母堂が鄉里にあつて池坊流の華道を教授されつゝあるものから、女史もまた幼時より、母堂に就きて同流を學び、大正十五年上京するに及んで、小島專甫氏の門に入り、花道及び茶道の教えを受け漸時技倆を認められ、免許皆傳を授けられ、府縣幹事職より累進して、目下大日本國副會司の地位にある眞に華道を理解し、家庭生活に對するその價値を認めて修養し、それに依つて個々の家庭の和樂を計り、延いては國民思想の淳化に努め度い、とは女史の華道に對する遠大なる抱負の一端である。

得意とする處は杜若、餘技として茶、手藝を好くする。(東京市外高田町雜司ヶ谷一四一)

日之出古流生花盛花
投入花二世家元
庭壽齋 外山一喜氏



外山一喜氏

氏は明治十八年五月十七日、三河國豊橋市に生れ、本名を喜市といふ。

氏は東京府立職工學校を經て、藏前高等工業建築科を卒業し、現に建築請負業を營む。

又、華道には早くより趣味を持ち、古流および遠州流を學んだが、後日の出古流一世家元庭千齋一芳先生について研究多年、その高弟として上下の信頼最も厚く、家元を補佐し、門下を養成して、當流のため大に盡す處があつた。

さて、當流は宗家庭松齋一曉に創始され、初代を庭千齋一芳が引き繼いだが、宗家一曉は東京京橋五郎兵衛町の人、また一芳は下谷御徒町の生れである。氏は久しい以前から第二世家元を襲ふべく、先代家元の懇望があつたがこれを固辭し、專ら補佐の重任に甘んぜんとしたのであるが、師の要望と同輩門葉の懇願いよいよ切なるものあるにより、先師の歿後その後を繼いで現在に至つた。

外山一喜氏作

茶道は牛込赤城下に住した利休流の師範正瓢庵黒澤宗月氏について學び、その奥儀を極めた。

家庭はせん子夫人との間に、長男靜康君（大正二年生）二男昇司君（大正四年生）の二子がある。（東京市本所區若宮町四六番地）

石井伸子女史作

日本生花司
松月堂古流
石竹軒 石井伸子女史

女史は、明治三十八年一月三日、現住地東京府下淀橋町新宿三六八番地に生る。

祖先は石井治郎左衛門と稱し、土地の大庄屋を以つて知らる。後、分家して石井平藏といひ、當主石井平五郎氏に及ぶ。氏はその第六代である。代々土地の素封家として名高く、現に神戸海上火災保險會社代理店をなしてゐる。

女史は、現主平五郎氏の女、母堂を志尾子といふ。小學校を出て、府立第八高等女學校に學び、その第二回の卒業生である。

その斯道に遊んだのは頗る早く初め正眞古流家元松月庵昇壽師に就いて學ぶこと六年、皆傳を得て師範職となつた。が、その後、大正十四年より松月堂古流家元顧問高野不及庵先生について、同流の秘奥を習得し、現在師範職にある。

石井伸子女史

女史は、花道を學ぶものは、初めより一流一派に偏することなく、先づ諸流を比較研究して、その最も會心の流派を以つて、自己のものとして定めるやうにありたいといふ希望を持つてゐる。從つて研究頗る熱心技亦秀拔、不及庵門下閨秀の隨一といはれる。

女史は、斯道以外にも、頗る趣味廣く、裁縫に巧みに、丹青の道に秀で、茶道作法等にも達す。

得意の花は、牡丹。

女史は、趣味としての花道研究家であるが、現に數十名の社中あり、且つ不及庵先生について、なほ、熱心に斯術の鍛練に、いそしみつゝある。

家庭は、父母、夫君との四人。（東京市外淀橋町字新宿三六八番地）

二條家御花所靖流生花教授
南宗派投入花教授
清風盛花教授
久田流茶道教授

清逸園 **蟹江含露氏**

蟹江含露氏

氏の本名は權次郎。明治元年五月五日、愛知縣愛知郡鳴尾村に於て蟹江作左衞門氏の三男として生まる。家は代々豪農にて庄屋を勤めた。

明治十三年小學校を卒業後、家庭にあつて漢學等を學んだ。明治十八年八代流に入門し、同二十年三月故あつて靖流家元八尾滋德園氏の門に轉じ、二十四年累進して師補に進み、挿法、水揚法の總傳を受けた。

四十五年三月臺灣に支部開設されるや、氏は家元より推されて支部長となり、大正三年十一月臺灣花道會設立と共に、推されて幹事として台覽を賜はるの光榮に浴すること一再に止まらないと。

二十七年三月師傳に進み、翌二十八年床飾法の總傳を受く。二十九年職を臺灣に奉じて渡航。三十七年二條家より掛軸一卷、同三十八年紫幕一張を受領し、同時に家元より家元幹事に推薦された。

氏の最も得意とするは、梅、水仙、燕子花等である。餘技には和歌、謠曲、繪畫等ありて共に造詣がある。

夫人秀子女史は久田流茶道、靖流生花共に教授格にあり、又小笠原流禮法熨斗水引等の教授をなして居る。(臺灣臺北市御成町一丁目)

古遠州流華道教授
小原流國風會々員
表千家茶道教授

操月庵 **關 一利女史**

女史は明治二十六年七月、神奈川縣下に生る。本名を和代といひ、神職井上與兵衞氏の長女である。

生家井上家は、代々宮師として著名であつたが、父君の時代より神職となつた。が父君は早く歿し、女史は明治四十五年關家へ嫁す。

女史は生來蒲柳の質であつたため、趣味もあつたのであるが、健康上の目的から、華道を學ぶに至つた。卽ち大正十三年より大杉一陽先生について、古遠州流を學び、同時に表千家茶道をも修めた。而して、華道、茶道共に大成し、更らに小原流盛花をも研修し、現に教授として、將又小原流國風會員として、盡す處が多い。

女史は教授法に對する改革を必要とし、且つ放任主義を排して、心身の健康法として、同一の効果があり、現に病弱なりし、女史が、飽くまで懇切に導くことを主眼として、茶道に入つて以來、見違へる程健康體となつたのでも、その効果は知れるので、廣く一般に奬めたいといつてゐる。

關一利女史

なほ、女史は書道を十四五歳の頃より、坂宮中御歌所寄人の理事鈴木建善氏について學び、號を時雨と稱し、草書に別して巧みである。茶名を柏樹庵知稽齋宗悅といふ。

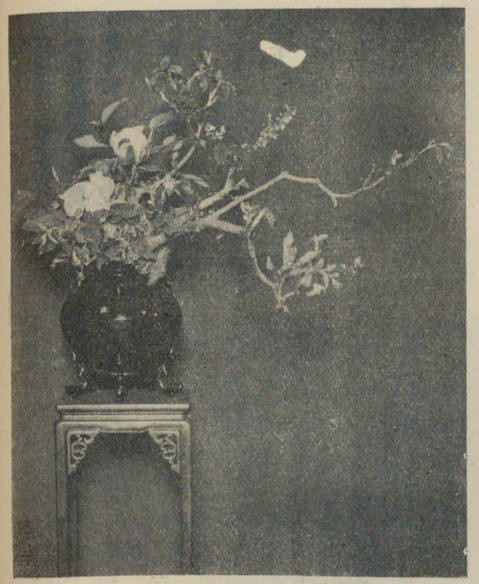
夫君昌弘氏は、運送業を營みゐるも、一面趣味の人で、特に華道茶道には、理解が深い。夫君との間に一女斯道に入つて以來、見違へる程健育代嬢(大正六年生)がある。

(東京市京橋區三十間堀三ノ一、電話銀座四八一八番)

家元池坊華道教授
小原流盛花瓶花教授
芳松庵　藤川東峯女史

女史名は道子、明治三十七年五月二十四日、千葉縣下に生る。東京青山女學院の出身である。

女史は大正十年春より、千葉市において、伊藤紬浦女史につき、池坊華道を學び、大正十三年十月より師範となる。



藤川東峯女史作

小原流は大正十四年一月より、笑月庵伊藤雪峰女史の門に入り、幾何もなくして教授となつたが、現に同師についてその研究を怠らない。技術秀抜、將來ある閨秀として望を囑さる。

茶道も同じく伊藤雪峰女史について、表千家を研究中である。

この外箏曲、長唄、洋樂の多方面をよくし、就中洋樂はピアノに長じてゐる。（千葉縣千葉市長洲一〇一一番地）

小原流盛花瓶華教授
宗守流茶道師範
光星　安原晴子女史

女史は明治十七年九月十日、滋賀縣犬上郡彦根町東新町に生る。本名を晴子といふ。尾崎家の出、後安原家に嫁す。夫君安原氏は久しく大阪造幣局官吏として、重要なる地位に在りたる人、後、退官して、電氣精煉所長として、斯界に重きをなす。

花道は約廿五年以前より、遠洲流を學び、一家の技を具へてゐたが、更に大正十一年より小原流家元に入門し、その技を髣髴たる處あり、夙に家元教授を許され、現に多くの社中を養成すると共に、大阪割烹學校花道教師として在任す。

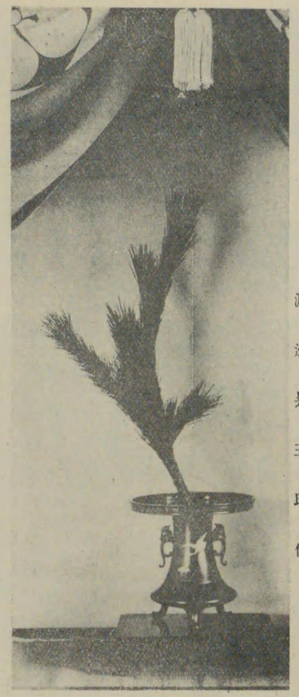
茶は宗守流を同じく二十五年前より學び、現在は專ら趣味として三昧境を樂しむ。

女史爲人溫良貞淑、奥床しき人柄の人として社中の敬愛を集む。なほ夫君は頗る茶華道を愛し、その造詣も淺からざるものがあるといふ。仲に二女あり眞に至幸の家庭である。（大阪市東區仁右衞門町二九六番地）

青山流晃玉派家元
大日本花道隆青會々長
景芳園　渡邊晃玉氏

氏は明治十五年十二月二十五日、千葉縣安房郡神戸村洲宮渡邊喜左衞門氏の二男に生れた。本名角太郎。幼少にして慈父を亡つた氏は、母に仕へ孝養至らざるなく、孝子の名近村に傳はり、十三歲の時、時の郡長より孝子として表彰されるに至つた。

早く父を亡つた氏は、小學校を卒へるや專ら家事の農業にいそしんだが、家業の傍ら、居村の僧職某に就いて讀書と挿花の技を學んだのが、實に氏の今日あらしめる基礎であつたのである。二十一歲の時、青雲の志やみ難く、意を決して上京、具に辛酸を嘗めて苦學すること數年、後帝國鐵道院に職を奉ずるに及んで、嘗て腦裡を去らざりし花道の奥義を探らんと當時斯界に名ありし古流の教授某氏に就いたが不幸にして間もなく命に依つて任地を轉ぜられ、新任地に於て古流の教授者がなかつたので止むを得ず遠州流に轉じた、かくて同流に學ぶこと五ケ年、大正九年一月官を辭し、臺灣電氣工業會社酸素工場長として渡臺したが

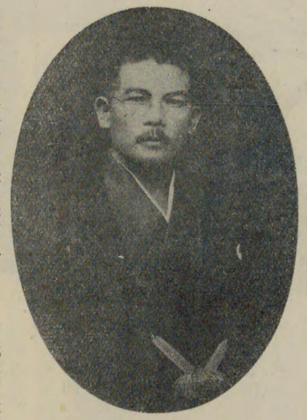


渡邊晃玉氏作

同時に花道櫻會々長に選ばれるに至つた。

されど、常に遠大なる抱負を持して進んで來た氏は大に考ふる所あり、師の諒解を得て同門を退き、更に師を變じて南青山流家元四世吳竹園宗月師の門に轉じ、專心努力終に家元師範代にまで進んだ。

氏は境遇上止むを得ず當時臺灣には未だ同流の教授者なく、三度び流を變じて櫻花遠州流に入門し、精勵大いに努めたので幾何もなく家元師範に擧げられ、



渡邊晃玉氏

師を變へること四度、具さに各流の長短を觀取して大いに悟る所あり、意を決して酸素工場長の職を抛ち昭和元年青山流晃玉派なる一派を樹立するに至つた。時代は進化して吾人の生活様式は著しく歐化した、花もまた時代と共に進むべきで飽くまで建築生活等の様式に適應調和して行くべきである、とは氏の花道に對する抱負である。

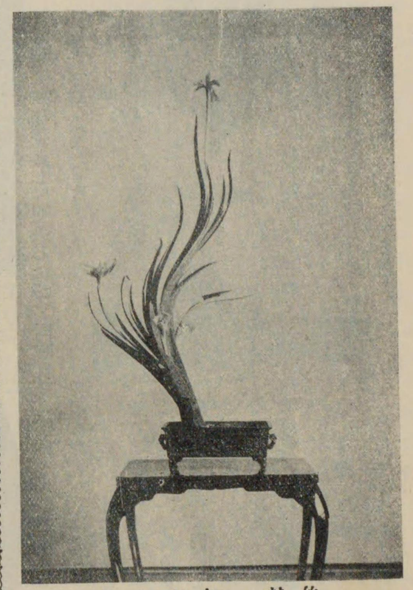
氏はまた皇室尊崇の念厚く、その心事風貌正に志子の面目あり、其門下に說くに先づ忠孝の道を以つてするとの事、斯の如く謹嚴そのものゝ如き氏も半面に於ては、月明に自ら輕舸を繰つて南國の情調に浸るの風流心あり、盆栽、庭園等にも相當に造詣が深い。夫人禎子氏との間に一男あり夫人は小笠原流折物式典具一式に秀で、自家にありて教授しつゝある。（臺灣臺南市西門町五ノ三五番地）

眞道遠州流家元預り
土佐諸流挿花大會評議員
揚康齋　竹村一友女史

女史は明治五年二月の生れ、本名仙子、高知市小高阪は氏の生地である。二十歳にして花道に入り、貞月齋一橋氏に後揚月齋一橋氏に嫁して、琴瑟よく和し、賢夫人の令名高かつた。

揚月齋一橋氏は、元貞月齋と號し、正風遠州流土佐國總取締役・高知縣家元代理として聞え、流系は正風遠州流四世貞松齋一馬師より分立して眞道派起り、一橋氏更めて大正三年眞道遠州流を起してその初世家元となつたものである

昭和二年一橋氏の歿後、女史は家元を預つてよく流派内を制統し益々子弟の教導に努力されつゝある。女郎花、檜扇、菊等を得意として用ひ、また茶道に精通して居る。（高知市ザコバ橋元）



竹村一友女史作

眞道遠州流華道教授
揚桂齋　立石一有氏

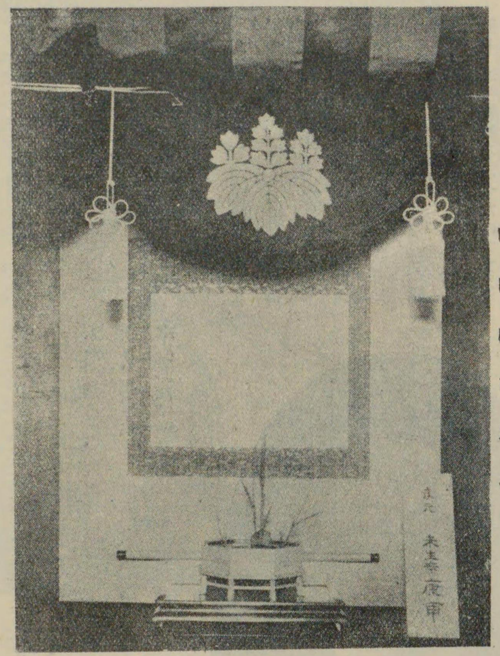
氏は明治十八年八月十五日、高知市中新町に生る、本名は長壽、年二十歳にして、當時土佐諸流挿花會々長として令名ありし正風遠州流家元代理貞月齋一橋師の門に入り、夙に俊秀の聞えが高かつた。大正三年一橋師眞道遠州流を樹立するに及んで、拔かれて家元花務職の地位にあり、昭和二年二月一橋師の歿後は、本部の教授として同流内一般の指導に專念し、家元代理格となつてゐる、傍ら氏の門下の組織する挿花花友會の會頭及び土佐諸流挿花會の副會長を兼ねて居る。

立石一有氏作

最も得意とする處は燕子花、梅菊、松等で、また自流の外、古流池ノ坊、晴山流等にも通じ、餘技としては茶道、盆景を好くすると。（高知市唐人町二七）

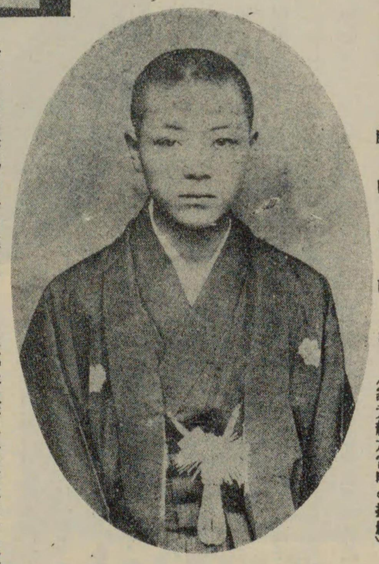
華道未生流八世家元
未生齋　肥原康甫氏
同家元執事
廣晴齋　中山文甫氏

當流は關西華道界において、池坊と併稱される一大流派である。



肥原康市氏作

その流祖は姓を山村氏、通稱山碩といひ、初め香林堂一甫と號し、後に未生齋一甫と稱した。寶曆十一年東武に生れ、幼少より挿花の技を好み、各流に亘つて、その蘊奥を極め、後、感ずる處あり、未生流の一派を樹てたのである。一甫の所說超俗、風格卓朗、よく諸流を風靡するに至り、又一面、易學および神儒佛の學に通じ、文章をよくし、著書頗る多く、後、明を失したが、なほ花道を教ふるを休めなかつたといふ文政七年十月九日、病を得て歿す。行年六十四であつた。



肥原寀市氏（家元繼承當時の撮影）

二代未生齋廣甫宗匠は、但馬の產、姓を上田、名を安太郎、號を不濁齋廣甫と稱し、幼少より初代一甫宗匠に師事し、天稟の花才を稱揚された。後、嵯峨御所に出仕し、文久元年七月十四日卒す。時に七十一歲。

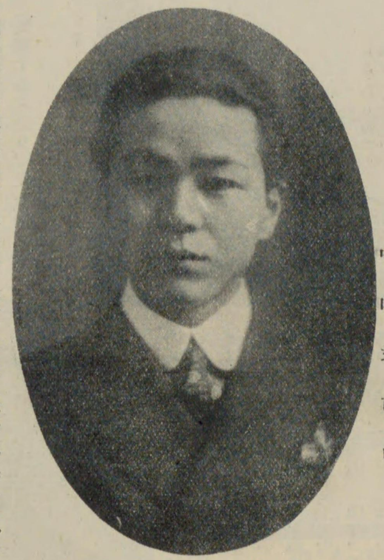
三代未生齋一甫宗匠は、二代家元の長子、名を安之丞といふ。同じく嵯峨御所に仕官、上田越後と稱したが、不幸三十三歲を以つて早世した。從つて、流統を繼ぐものなく、同派は四分五裂せんとする危機に瀕した。ここにおいて、二代の高足にして、三代の補佐たりし肥原源甫、奮然起つて、これが收拾に努め、その功績著大なるものがあつた。よつて、明治二十一年全國師範代大阪に集合して、源甫宗匠を四代に推したが、固辭して受けなかつたので、その高足

黒川義甫が四代宗匠に推された。黒川氏名を義見といひ、浪速天滿超泉寺の住職であつた。明治二十七年二月二十五日卒す。

五代宗匠は肥原源甫であるが、同宗匠は四代宗匠卒去の前年、即ち二十六年十二月、高齢八十二を以つて寂した。蓋し、同宗匠は當流二代三代に仕へ、四代を養成し、流歩艱難の秋に際し、よく當流の基礎を固めた當流中興の大柱石であつたので、その死を惜しむ全國の門葉相議し、源甫宗匠を五代に列し、未生齋號を謚つたのである。而して、爾後、肥原家を以つて當流を世襲することに決定したのであつた。

六代は未生齋貴久甫、五代源甫宗匠の夫人であつた。本名をきくといひ、明治三十五年七月九日、七十四歳を以つて歿す。

七代は未生齋勝甫、本名を勝二といひ、肥原家の親戚中山家の二男であり、肥原家を嗣ぎ、明治三十五年九月、七歳にして七代を襲ふた。然るに、大正九年四月二十六日、年僅かに二十六歳を以つて卒去した。門葉何れも愛惜して惜かなかつた。同宗匠はかく早世したが、早くより資性穎悟にして敦厚、擧措典雅にして寡言大器の風があつた。果せるかな長ずるに及んで、家元憲章を再議制定し、宗家百年の計を樹つると共に、道の興隆を圖り、又、財務の整理散逸せる圖書の蒐集、傳來書および新書の刊行等を企て、幾多不朽の足跡を殘したのであつた。



中山文甫氏

大正三年その桃山中學時代において、大正天皇攝河泉大演習御統監のため、大阪に行幸あるや、その献花を命ぜられ、又翌大正四年四月、大正天皇陛下御即位大典奉祝紀念の花會を淡路町美術倶樂部に催し、出瓶者三百五十空前の盛觀を呈した。蓋し、未生流が駸々たる勢ひを示すに至つたのは、この七世宗匠の時代であつたのだ。

八代は未生齋康甫、名を四郎といふ。現宗匠であつて、前七代の令弟である。大正九年五月、年十六にして、八代家元を繼ぎ、後、兵庫縣今津甲陽中學を經て、東京法政大學文科に入り、その業を卒へた。

これより先、その家元繼承紀念の大會が、大正十年四月、大阪中央公會堂において開かれたが、その大會は設備内容において、從來の類型を破つたのみならずあらゆる點において、新記錄を作つた。出瓶數だけについて見ても、その數約七百五十に達したのである。

春秋に富む康甫氏を載く、當流の前途は、まことに祝福されたものといふことが出來やう。特に同家には廣晴齋中山文甫氏のこれを補佐するありて、いよいよその基礎盤石の如きものがある。(大阪市北區市之町十七番地、電話北一四一六番)

三先流華道幹事長

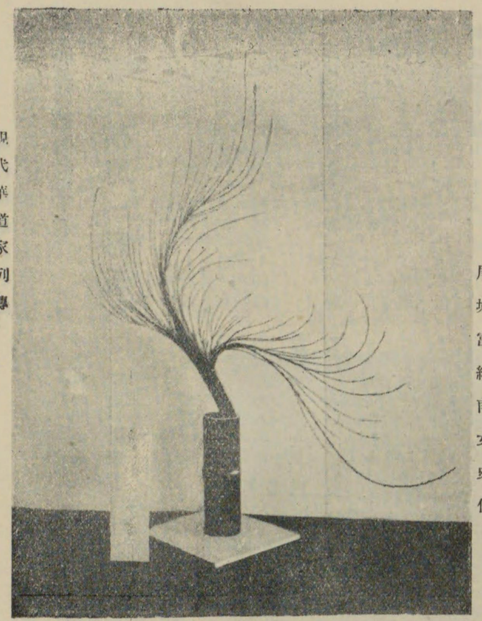
金閣齋 **尾城富納甫女史**

女史は明治五年四月十八日、大阪市北區寺町に生る。本名を富納といふ。

生家は舊彥根藩主伊井家の家臣であつて、約三十年前に、上阪したのである。

女史は夙に華道に志し、三先流を學んでその奥儀を究め、現に當流改傳者として法司の高位に在り、幹事長の重任にある。

女史は資性溫厚にして貞順、又、信義の念に篤く友情に富み、輕姚なる現代稀に見る風格の所得者である。されば、家元物故當時、その令息若冠なるにより、これをよく補佐し、或は未亡人を助けて、當流の基礎を鞏固ならしめ、更らにその發展を劃し、盡す處最も多く、當流中興の恩人を以つて目されてゐる。

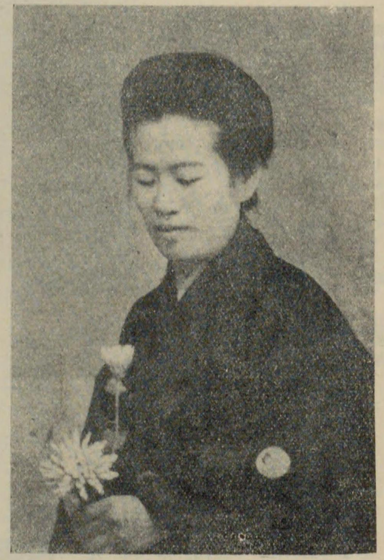


尾城富納甫女史作

得意の花は柳である。

女史は前年市内本庄なる幸松寺奥殿新築落成の砌、家元光甫宗匠と共に新殿の床飾り並に生花盛花を陳列し、別に献香献茶をなし、來臨の村雲尼公殿下の感賞を博し住職よりも、御菓子一臺、茶碗一對並に感謝狀を贈られた。

又、明治四十五年の交、當時の知事犬塚勝太郎氏の官舍において内外貴顯の園遊會あるや、生花數十瓶を陳列し、抹茶席を設けて、立禮の手前頗る興趣を添へ、知事初め出席の内外人の賞讃を博する處大、特に外人の讃辭を寄するもの最も多かつたといふ。

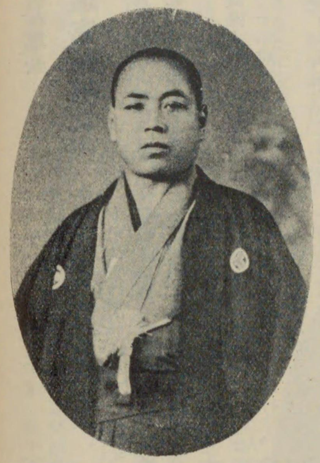


尾城富納甫女史

更らに德風學校開校式に際し、生花を寄附し、立禮の抹茶席を設けて、興趣を添ふる等公共的事業に對して寄與する處が頗る多いのである。

夫君曇藏氏との間に一女あり、社中多數を養ふ。(大阪市北區寺町一丁目七番地)

美笑流華道教授
美月齋 **横尾一窓氏**



横尾一窓氏

氏は明治十九年十二月二十七日新潟縣東頸城郡牧村泉に生る。本名を軍平治といひ、横尾助七氏の男である。

横尾家は累代新潟において、農を營み舊家として知られ、代々戸長村長等を歴任して來た。氏は風流の道に志深く、明治三十五年令姉に家督を譲りて上京、同三十八年より美笑齋戸田一樂翁の門に入りて、斯道を研究することになつた。

爾來、刻苦研修、戸田宗匠の殊寵を得、翁のある處、常に氏の影を見ざるなしといふ程、一日もその側を離れることなく師事して修道の功を積んだ。

而して、氏は戸田宗匠の意を受けて、門下の作品を直すことを許され、多年門下の教養に努力して來たのである。

又、茶道は、明治四十年頃より戸田翁に學び、今やその奥儀に達してゐるが、なほ、熱心修道の努力を怠らない。

資性溫和、聊かも粉飾を加へぬ如何にも風流人らしい風流人である。氏は流石に戸田翁の信頼厚い人だけに、技術風格東都斯界において、嶄然として頭角を抽んでてゐる。

家庭はみつ子夫人との間に、子女四人ありて、頗る平和である。

（東京市京橋區本八丁堀一丁目一五番地）

横尾一窓氏作　五九八

家元池坊華道教授
小原流盛花瓶華教授
細川流盆石教授
東海園 **大西美月女史**

女史は明治二十三年四月四日、東京本郷駒込神明町に生る。名を富美子といひ、大西謙輔氏の長女である。

大西家は山口縣士族、累代軍學者として、毛利家に仕ふ。嚴父謙輔氏は、幼にして好學、夙に東都に出でゝ研學多年、後、官海に入つて警察署長を歴任し、目下は官を辭して餘生を送る。

女史は東京府立第一高等女學校の出身、明治三十一年春より、野呂先生について池坊華道を學び、研修五年にして教授を許さる。又、小原流盛花瓶華は、大正十四年四月より、高橋榮子女史について修業、現に準教授であり、小原流國風會々員として、斯道のために盡瘁してゐる。

なほ、女史は細川流盆石を、明治三十五年より研修し、同四十年教授となり現在に及び、琴曲は幼少より鍛練して、明治四十一年以來教授を許され、頗る堪能の聞えが高いのである。この外、裏千家茶道にも詳しく、實に多方面に亘つて、才能を發揮す。

大西美月女史

女史は花道に對して曰く『華道本來の使命は、精神の修養、德性の涵養であるから、これを行ふものは、このことを第一に考へなければなりますまい。例へば婦人がこの道に携はるとすれば、先づ女性本來の淑德、貞順の美を涵養し發揮することに心掛けなければならないと思ひます。勿論。花道も藝術である以上その技術方面も十分に鍛練しなければなりませんが、第一は精神の問題であると信じます。近來、兎角斯界に目堵される自己宣傳、功利主義的賣名の如きは、全く斯道の冒瀆でありませう。先づ人の師表として立つに足るだけの人格、精神なくして、人を教へ導くことは、到底不可能であるばかりでなく、人の子を賊するものであることを信じます』云々。

女流斯道家としての意氣、抱負、まことに欽すべきではないか。

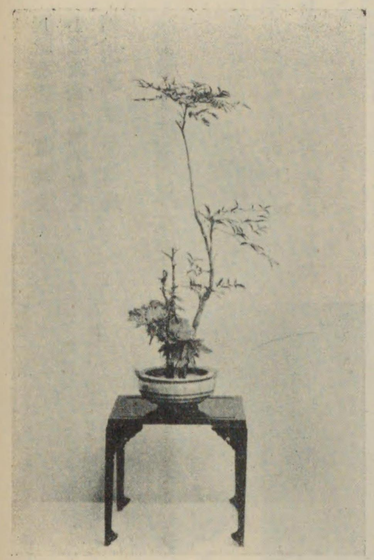
家庭は嚴父謙輔氏と令妹との三人であり、嚴父は老來兎角健康勝れず、女史は一身を献げてこれに仕ふるの餘暇、雅道のことに潜心してゐるのである。（東京市本郷區駒込林町四〇七番地）

◎梅の花たが袖ふれし匂ぞと春やむかしの月にとはいや　（源通具）

◎散り散らず人もたづねぬ故郷のつゆけき花に春風ぞふく　（慈圓法師）

◎櫻花夢かうつゝか白雲のたえてつれなきみねの春風　（藤原家隆）

容眞流華道總目代
裏千家流茶道教授
一秋齋 木村九月氏

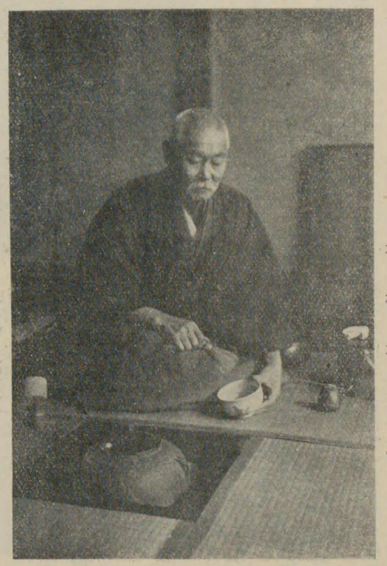


木村九月氏作

氏は安政三年一月一日、大阪市西區本田通一丁目に生る。本名を重助といひ、茶號を宗成といふ。

生家は骨董を業とし、斯界に著聞したるものであるが、氏は夙に獨立を企圖し、先づ米穀業を營み、更らに時計商、金庫商等を經て、鐵工所の經營をなし、頗る盛大を致す。後、事業界を隱退し、風流の事に專らなるに至つたが、現に大阪市の橋梁等には、氏の製作にかゝる材料が、多數存在するといふことである。

氏が華道に志したのは、頗る古いことに屬し、約五十數年前のことであつた。當時、西區本田に在住した富豪にして且つ雅道の趣味家であつた故西田新左衞門氏について、瓶華盆栽等を學び、後、明治二十四年より容眞流二代家元の門に入つて、斯道の業を大成するに至る。入門以來實に三十有八年氏が斯道の修業のために盡したる努力と、斯界に貢獻したる功勞とは實に夥しきものがある。現に、當流の最高職役總目代の地位にあり、補佐米田氏と共に、家元を援けて流儀のために、盡瘁して倦む處を知らない。



木村九月氏

又、茶道は裏千家を十二代家元又妙齋先生に學び、夙に一家をなして、子弟を指南すること、頗る多數に達す。

夫人との間に一男二女あり、別に謠曲、骨董を好愛し、老來、意氣頗る軒昂、恰も壯者の慨がある。(大阪市天王寺區眞法院町七十五番地)

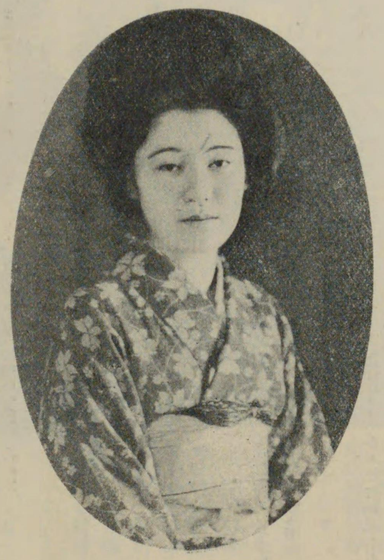
日本古流花道教授
家元補佐職
松宥齋 神尾一袖女史

神尾一袖女史作

女史は明治三十九年六月十二日、山形縣米澤市柳町に生る。本名を八重子といひ、庵號を菊月庵と稱す。

生家は代々鄉里における資產家であり、女史は遊學の爲め上京、業成りて現に板橋小學校及び、板橋女學校に敎鞭を執りつゝある。

華道は大正十三年以來、日本古流家元角田一忠先生の門に入つて學ぶ。爾來累進してその奥儀を極はめ、昭和二年十一月皆傳となり、次いで研究科に入つて、一層その技を練り、昭和三年六月家元補佐の重任に座ることゝなつた。現に、奉職中の小學校上級生に斯道の敎授をなし、又、板橋女學校においても、花道の敎授を兼ねつゝあるのである。



神尾一袖女史

女史は文學を好み、茶道を修めるの外女藝一般に通曉し、溫良淑德、未來ある斯道家として、家元の嘱目する處である。(東京市外王子町下十條原町一丁二八番地)

池坊龍生派華道教授

壽香園 **森永清養女史**

女史は名を末子といひ、明治二十八年七月十七日、福井縣大野に生る。吉田千足氏の女である。後、森永家に嫁す。

兩親は何れも士族、維新以後實業に志し、父君は夙に鑛山經營の事に從ふ。

女史は鄕里の高等女學校を卒業、後、上京して東京美術學校に學んだ。

華道は學校時代古流を學び、卒業後の大正五年以來、池坊龍生派師範豊秋軒戸田内女史の門に入つて、その技を練磨するに至り、同十年皆傳を許され、以來教授として子弟を養ふ。

得意の花は、木ものよりも、花のついたものであるといふ。

餘技としては音樂を好み、特に琴曲に堪能である。

主人は高等海員、久しく海上勤務に從つたが、昭和二年陸上勤務となり、現にロンドンに在勤する由。仲に一女あり、佛英和高女に在學、ピアノ、水彩畫を得意とし、才媛の譽が高い。(東京市外巣鴨町平松一五〇一番地)

森永清養女史作

◎

綠なる一つ草とぞ春は見し秋はいろいろの花にぞありける　(讀人不知)

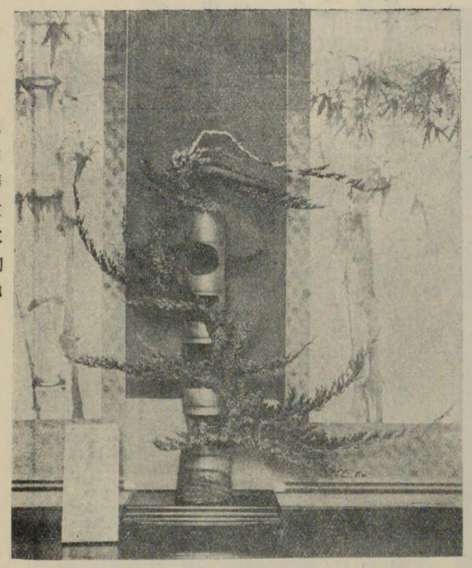
◎

名にめでゝ折れるばかりぞ女郎花われ落ちにきと人に語るな　(僧直遍照)

櫻花遠州流華道家元
櫻流盛花投入景花家元
櫻花遠州流盆景砂繪家元
同　熨斗水引
表千家流茶道
賣茶流煎茶師範
小笠原流諸禮式

大日本櫻會總裁

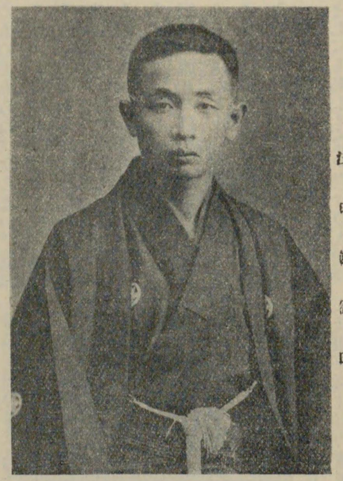
雲勝齋 **淺田眞仙氏**



淺田眞仙氏作

氏は長崎縣西彼杵郡福田村の人明治二十三年二月十四日孤々の聲を擧げた。父は彌吉氏、氏はその次男である。幼時千太郎と呼ばれたが、八歲の時故あつて眞仙と改めた。故にこの名は氏の通稱である。

初め氏は父君の業を繼いで工業家たらんとし、十六歲まで工業學校に學んだが、同年秋不圖したる動機より自家が櫻遠州流華道の嫡流なることを知るに及んで、家元再興の念押ふべくもなく、終に學業を拋つて花道の研究に專念し、自家に傳來する花書に依り專ら獨習に努めた。



淺田眞仙氏

當時臺灣臺北市にあつて、梶井宮御流華道を教授しつゝありし松尾熊吉氏は、氏の叔父であつた。故を以つて氏は二十二歲の春渡臺して松尾氏に師事し、鋭意花道を究はめ叔父の歿後其後を受けて教授となり傍ら、平川吉松氏の門にて同流の蘊奧を究はめた。

大正六年十月十日終に家元を再興して櫻花遠州流と改名した。また臺灣花道會幹事となり、更らに大正十三年四月臺灣合島華道諸流聯合會成立するや。氏は推されてその會長となり、斯界のために盡力すること多大であつたが、大正十五年八月鄕里長崎に歸省し今日に及んでゐる。

遠州流華道十一代千登庵一盛師の時代、師範職春櫻庵一京師一派を工風し、文化二年二月櫻遠州流を樹立して宗家となり、文政六年四月八十歲にて歿した。其息春櫻庵一眞師二代目となり嘉永四年二月八十一歲にて歿したがその子父祖の志を繼がず、自家元は一時中絕したもので、氏は實に一京師五代の孫に當るのである。氏は夫人仁智子との間に一男一女がある。

(長崎市上筑後町一四)

眞生流華道家元
『花道藝術』主幹
眞生齋 **山根翠堂氏**

氏は明治二十六年三月八日、兵庫縣下山崎在に生る。名を廣治といふ。山根嘉市氏の長男である。

氏は夙に華道に興味を持ち、廣く諸流を研究し、大正三年春、年二十二にして未生流華道を學ぶ。後自ら悟得する處あり、十餘年前眞生流の一派を開いて斯界に雄飛するに至る。

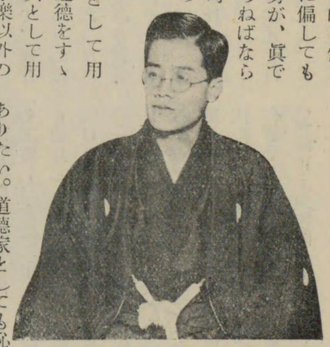
山根翠堂氏作

氏は大阪斯界の新人を以つて知られ、又、文筆に長じて雜誌『花道藝術』を主宰す。外に『新時代の挿花』『投入盛花生花讀本』『投入盛花講座』等の著書あり、何れも洛陽の紙價を高む。

氏の華道に對して懷抱する處の意見、抱負、理想頗る多し。その手記せる一斑を示せば左の如し。

『今後の生花は、「眞」のみではいけない。「善」のみでもいけない。「美」のみでもいけない。宗教的にも偏してもいけない。道德的に偏してもいけない。藝術的に偏してもいけない。生花それ自身が、眞であり善であり、美であらねばならない。宗教であると同時に道德であり藝術であらねばならない。

生花の歷史をふりかへつて見ると宗教の禮儀として用ひられた時代もある。道德をすゝめる（勸善懲惡の）道具として用ひられた時代もある。享樂以外の何物でもない惡藝術に墮した時代もある。併し今後の生花は、宗教の儀禮的材料ではなくて、宗教そのものであらねばならない。道德をすゝめる道具ではなくて、道德そのものであらねばならない。藝術品らしいものではなくて、藝術そのものでなくてはならない。即ち、花を生けることそれ自身が宗教であり、道德であり、藝術であらねばならない。眞善美合一の姿、それが今後の生花でなければならない。



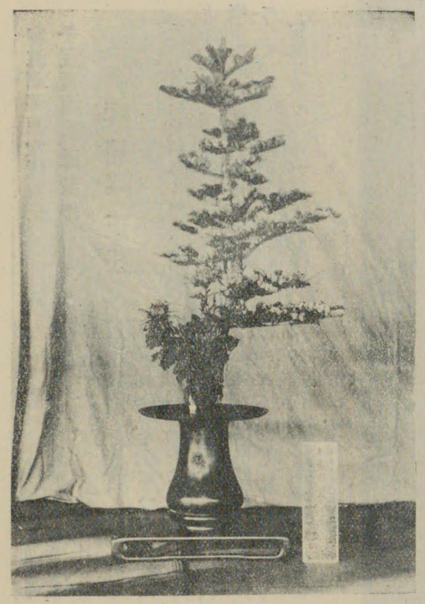
山根翠堂氏

從つて今後の華道家は、宗教家としても恥しくないだけの人間でありたい。道德家としても恥しくないだけの人間でありたい。その上に、藝術家としては、決して人後に落ちないだけの素養と技術を持つて居らなければならないのである。審美學を研究し、他のあらゆる藝術に親しみを持ち、花術の練磨に精進すると共に、進んで眞の道德、眞の宗教に心を向けなくてはならない。かくてこそあらゆる人を華の道に導くことの出來る眞の華道家たり得るのである。』

氏別に南畵を好み一家を成す。

家庭は夫人との間に長男登君、二男有三君、三男修君の三男あり。

（兵庫縣西宮市香櫨園）



金指政月女史作

無聲流華道教授
金花園 **金指政月女史**

女史は明治四十年六月廿六日、神奈川縣鎌倉郡川口村片瀨に生る。本名を政子といふ。

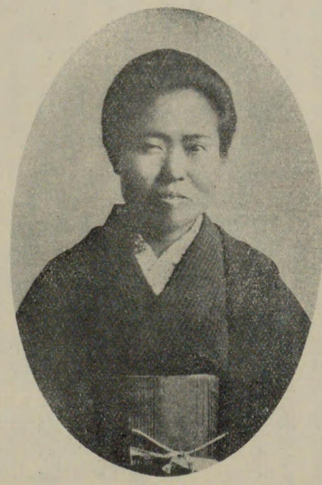
女史は大正九年川口高等小學校を卒へ、後、神奈川高等女學校を卒業す。

大正九年六月、無聲流家元會頭職、蓮沼昇月先生の門に入り、初めて華道に志す。同十四年奥許を得、同年四月先生の物故するや、家元宮原無聲先生の直門となり、一層その技を磨き、今や年少にして同門の最高幹部となり多大の信望を把持し、前途を囑望される。

得意のものは、筋通し物、葉組物等である。餘技としては箏曲、茶道等何れも堪能であるといふ。

家庭は兩親、弟妹四人あり、平和裡に雅道のために精進す。（神奈川縣鎌倉郡川口村片瀨）

家元池坊華道教授
廣山流盛花投入教授
靜波園 **沖　春光女史**



沖春光女史

女史は明治十九年八月七日、香川縣多度津町に生る。本名をリヨといひ、沖畢平氏の女である。母堂をカツ子といひ、父君は書畵骨董の趣味に深く、その鑑識に長ず。

女史は、茨城縣立高等女學校を卒業、更らに同校補習科に學んで、これを修業した。

華道には明治四十年頃より、專心親しむに至つたが、その師として仰いだのは、池坊花道界における耆宿として、今に欽仰されてゐる故武藤松蕃先生であつた。當時、武藤先生は下總古河に在り、大正四年までその教へを受けた。

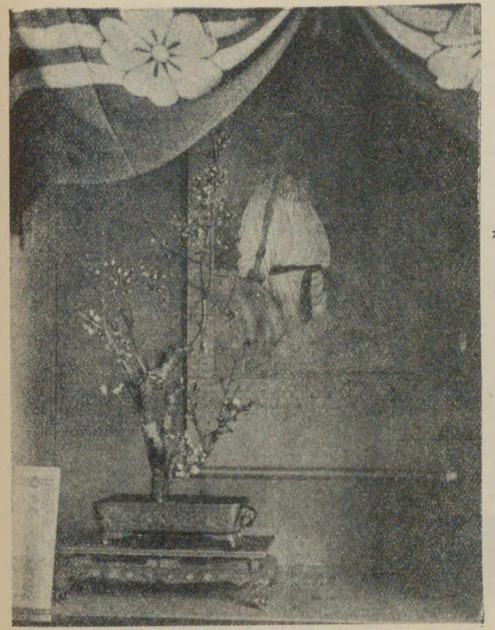
次いで、大正五年より池坊東京紫雲會長岡田廣山先生に師事し、以つて現在に至る。

女史は育英事業に從ふこと多年現に東華小學校訓導の職に在り、專ら趣味修養として斯道を學び、別に茶道にも通ず。（東京市麹町區土手三番町一五番地）

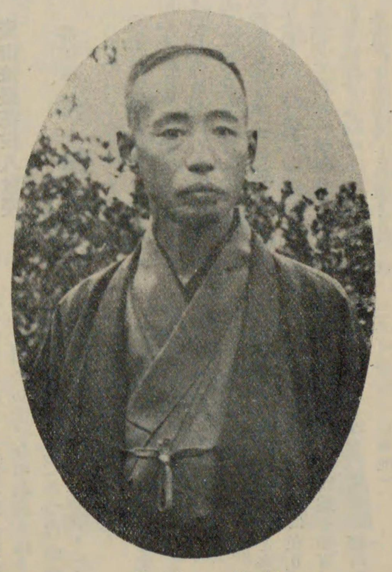
容眞流華道六代家元
千家裏流茶道教授
成龍齋 櫻居一正氏

氏は本名を大島誠といひ、明治九年十一月二十三日を以つて、大阪市東區德井町一丁目谷町西入るに生る。

當流は俊成大額の創始する處にして、大嶺先生は成龍齋一如と號し、播州加西郡尾崎村多聞寺の住職であつた。天保十八年一月、その門弟に法燈を讓り、隱棲して專ら花道三味の生活に入る。二世は初代の甥櫻居眞平(成龍齋一圓)で嘉永五年一月、家元を繼ぎ、三代はその令孫櫻居寅之助(成龍齋一好)明治二十八年一月これを繼ぐ。四代は二代の三女菊重女の夫安田伊三郎(成龍齋一圓)が明治三十一年一月に繼承し、五代はその夫人菊重が、四十二年一月跡を襲ひ、一實と號した。而して六代は卽ち現家元で、大正十二年四月三日、家元を繼承したのである。氏は二代の長女鹿野女の二男にして、三代家元の實弟に當るのである。



櫻居一正氏作



櫻居一正氏

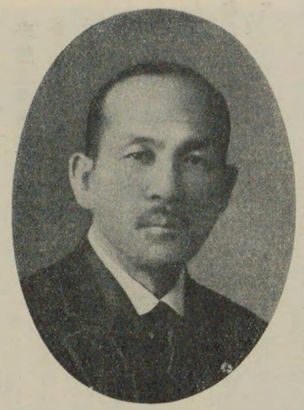
氏はかゝる家柄において人と成つたので、年十五歲より斯道の門に入り、特に四代家元成龍齋一圓先生の薰陶を受けること深く、その業を大成したものである。爾來、當流は遂年發展して、今や大阪斯界一方の雄として重きをなし、門葉全國に普く、流運隆々として興るに至る。

氏人と爲り溫厚にして眞摯、深く內外の推服する處となる。

別に裏千家の茶道に達する外、餘技として俳句に長じ、觀世流謠曲等に通ず。

夫人また華道、茶道に達し、夫君を援けて、門葉の指導に專心し、仲に一男あり、圓滿なる家庭である。(大阪市東區德井町一丁目谷町西八)

宏道流花道家元目代
大阪府立今宮職工學校教諭
清雲齋 勝田秋月氏



勝田秋月氏

氏は明治九年八月一日、廣島縣廣島市鐵砲町に生る。名を覺一といひ、勝田朝光氏の二男である。

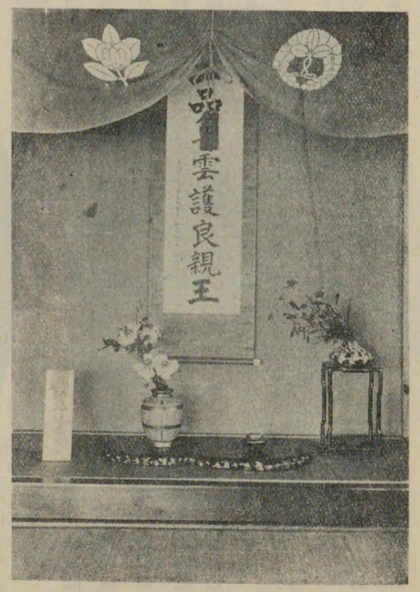
生家は累代廣島藩士、家祖は勝田武右衞門吉久といひ、初名を正三郎又は仁左衞門、姓は藤原氏である。文錄四年四月伊勢に生れ福島正則に仕へ、大小姓を勤め食祿七百五十石であつた。氏はその十二代に當る。

氏は廣島中學校を卒へ、更らに廣島工業學校を卒業し、直ちに廣島市立工業學校教諭となり、大正五年大阪府立今宮職工學校教諭に轉任し、以つて今日に至つた。

氏は十四五歲の頃より花道の研究に入つたが、これは氏の伯父が宏道流十三世家元松雲齋一泉氏であつたので、自然斯道に入つたものである。爾來、學業の傍ら、斯道の研究に耽り、奥傳、皆傳、準師範師範を經て、主宰となり目代職に進んだ。目代職となつて既に二十年になる。從つて、氏は當然家元十四世たるべき人であるが、公務多忙のため、目代職として閑暇を以つて斯道を樂しむと共に、松風會を組織して、盡す處多し。

當流は寬永三年松雲齋和泉廣島が創始したもので、今より二百九十七年前に當る。爾來、流統連綿今日に至つた由緒ある流派である。

氏は茶道を最も好み、裏千家を研修すること多年に及び、その他弓術、繪畫、俳句等に趣味を有してゐる。



勝田秋月氏作

氏の近詠に、

梅咲いて草鞋の干場變りけり

この水は都に行くか閑古鳥

耳といふ邪魔のものあり冬籠

八荒に光威かゞやく黃菊哉

以つて、氏の俳句が如何に洗練されたものであるかを知るべきであらう。●

氏は現在多忙なる公務に服してゐるので、專心華道に力を盡すことが出來ないが、將來は斯道の爲めに、專らになることと思はれる。何れにしても、敎養あり學識あり、斯界稀に見る好紳士である。

家庭には朝子夫人、長女菊代孃、三男寬一君、三女文代孃、五男秀時君等がある。淸福なる家庭である。(大阪市西成區西四條一ノ四六九番地)

未生流華道家元顧問
未生會副會長
不昧流茶道教授
廣直齋　柳　信甫氏

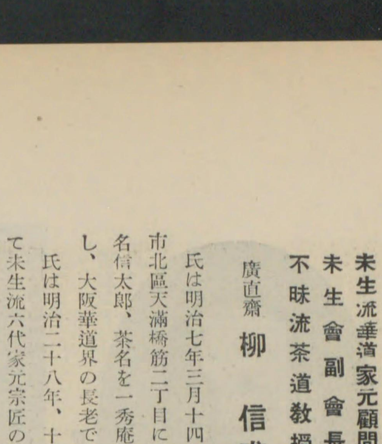
柳信甫氏肖

氏は明治七年三月十四日、大阪市北區天滿橋筋二丁目に生る。通名信太郎、茶名を一秀庵宗信と號し、大阪華道界の長老である。

氏は明治二十八年、十八歳にして未生流六代家元宗匠の直門として、初めて華道の研究に入つたのであるが、現在當流多數の門葉ある中において、六代宗匠に親しく教へを受けたものは、流内たゞ一人氏あるのみであるといふ。以つて、氏の華道における閲歴を知るべく、且つその功績の程を推すに足るであらう。

現に家元顧問の最高地位に居り、圓滿なる人格、優秀の技術、常に流内師範代を導き、その融和を圖ると共に、外に向つて斯道の發展に力を致しつゝあるのである。

氏は大正八年以來、官幣大社住吉神社神樂女の花道教授を囑託されてゐるが、文字通り十年一日の如く、これが教授に盡瘁してゐる。



柳信甫氏肖

又、昭和三年五月、師範三十年紀念並に家元總目代披露に際し、『葉蘭組方圖解』を著はし、同年十一月御大典紀念出版として『組葉物挿方圖解』を公にした。何れも氏が長き華道生活の尊き體驗と蘊蓄とを披瀝したもので、その内容の豊富にして說示の懇切なる、何人にも理解され得る、斯界希罕の名著といはる。されば流内は勿論、他流よりの希望者、相次いで後を絶たざる程であるといふ。

又、昭和三年五月、師範三十年紀念並に家元總目代披露に際し、『葉蘭組方圖解』を著はし、同年十一月御大典紀念出版として『組葉物挿方圖解』を公にした。何れも氏が長き華道生活の尊き體驗と蘊蓄とを披瀝したもので、その内容の豊富にして說示の懇切なる、何人にも理解され得る、斯界希罕の名著といはる。されば流内は勿論、他流よりの希望者、相次いで後を絶たざる程であるといふ。

爲人重厚篤實、名利に淡く宣傳を忌み、只管社中の養成と當流の發展に餘念なきものの如くである。現に未生會副會長の重職に在る。

氏は又、不昧流の茶に達し、師歿後はその引次として、氏の許に傳書一切保管されてゐるのであつて、普通なれば當然家元を名乘るべきであるが、氏はこれを敢てなさず、只管、斯道の至境を樂しむを以つて他を顧みないのである。以つてその人格を知るに足るべく、家元續出の今日、まさに一服の清涼劑とするに足るものがあらう。

夫人との間に二男二女あり、悉皆されたる家庭である。（大阪市北區天滿橋筋二丁目二二番地）

岩松篁甫女史作

新未生流華道家元二世
未生齋　岩松篁甫女史

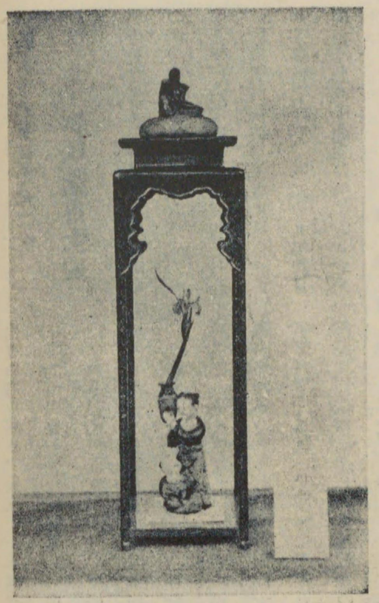
女史本名きく子。千葉縣夷隅郡の産、明治十年七月十六日呱々の聲を擧げた。明治二十五年七月相州横須賀に轉住、性來風流に志あり茶華道を好み、同二十九年四月同地小島久子先生の門に入りて未生流華道を修め、後三十一年轉じて同流山田豐子先生に師事して中許に進み、同三十五年四月、更に新未生流初代家元未生齋篁甫今井宣法先生に就き研修を續け、刻苦勵精その蘊奥を究め、同三十六年五月教授補を許され、次で同四十年五月家元目代に、同四十三年五月家元代理に累進し、子弟教養の傍同流の爲め渾身的に盡瘁是努めた。

岩松篁甫女史

斯くて初世家元歿後、師の遺志を繼ぎ新未生流家元二世を繼承し未生齋篁甫を襲名したのである。之が披露の儀は即ち大正十五年一月十一日であつた。

女史が二世家元を繼承するや、先師今井宣法先生の德を永久に頌するため、社中の諸氏と協力し巨費を投じて横須賀市山王の勝景大勝利山忠魂堂地内に立派なる頌德記念碑を建立し、大正十五年十一月六日盛大なる除幕式を擧行すると共に、同市若松町軍港ビルデングに於て供養を兼ねたる一大花會を開催した。以て女史が斯道に於ける熱誠と高潔なる人格とが窺知されるのである。（横須賀市中里町二九〇番地）

大古流華道三代家元
大古齋 川口正甫氏



川口正甫氏作

氏は安政三年十一月十一日、神戸市東尻池一丁目に生る。本名を吉右衛門といふ。

氏の生家は、五代以前より現住地に住み、素封家として知名な家柄である。

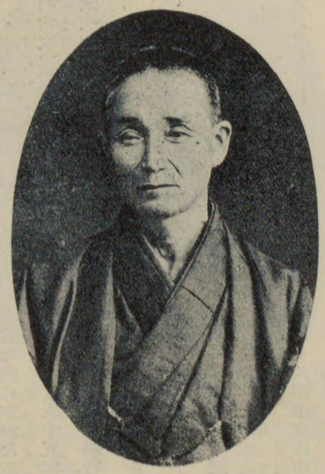
氏は夙に風流の道を好み、幼少の頃より大古流二世家元大古齋玉甫先生の門に入り、華道を學ぶに至り、二十三歳にして師範代の免狀を得、爾後專ら流儀の普及宣揚に力めたが、恩師歿するに及ぶや、同門一同より推擧されて三代家元を繼承し、以つて今日に至つたのである。

而して、當流の斯界にあつて、最も異彩あるは、葉蘭の組み立てにあつて、この點は他流の追隨し得ざる玄妙の技術とせられ、代々の家元は何れもこれに意を注いで、當流の聲價を揚ぐるに努めて來た。

なほ、氏について、特に牢記すべきは、氏が華道の師家となつて以來、既に長年月を閲みしたが、終始一貫無料を以つて教授し、未だかつて、これが報酬を受けしことのないことである。蓋し、氏は家に巨萬の資ありと雖も、眞に風流を友とする超俗の士にあらずんば、到底不可能のことであらう。

氏は別に骨董の趣味あり、その鑑識眼頗る高く、又、菊栽培の上手として、斯界にその名を喧傳されてゐる。

夫人との間に三男三女あり、何れも高等教育を受けて、俊髦才媛の譽が高く、稀なる子福者として、健勝さる。(神戸市東尻池一丁目二十七番地)



川口正甫氏

古流華道家元會頭
二世松得齋 齋藤主理啓氏

氏は安政二年十一月二十八日、富山縣東礪波郡城端町に生る。本名を吉右衛門といふ。前に同町會議員、消防組頭として久しきに亘り在任、現在は推されて古物商組合長の任にあり、同地方の名望家として知らる。

氏の鄕里城端町の華道界は、古來立華、佛花の外には、遠州流のみであつて、氏もまた同流に親しみつゝあつたが、たまたま明治二十六年九月一日、古流家元六世松盧齋廣岡理德先生所用を以つて來城す。時、恰も毎年の佳例による城端別院善德寺の生花會であつたので、氏等は理德先生に一瓶を所望した。が、折り惡しく材料がなかつたのであるが、理德先生はあたりの杉の枝を剪らせ、美事なる一瓶を生けたのであつた。蓋し、その出來榮えは全く驚異に價したのである。ここにおいて、氏等は二二指導を受け、いよいよその流派と理德先生の技術に服し、何れも同先生に歸依して、その教へを乞ふに至つた。氏と共に入門した人に、松堯齋長谷川理靜氏等があつた。

齋藤理啓氏

かくて、氏等は當流の門に入り、爾來、交代にて金澤に出で、理德先生の指導を受けてゐたのであるが、墨二十七年五月より理德先生の門下にして會頭たりし故松得齋吉田理扇先生が、御家職のため來城、十一月末まで滯在するに及び、氏等は大旱に雲霓を得たる思ひで、稽古に專心したのであつた。

以後、理扇先生は每歲數回來城すると共に、理德宗匠にも年一兩度の出張を乞ひ、同地における當流は駸々たる勢ひを以つて普及され、氏はじめ長谷川氏等は、師範を免許されるに至つた。

後、理扇先生は物故するに至つたが、每年善德寺の會には家元の出張を乞ひ、現在に至るまで繼續してゐるといふ。この間、氏等の努力は報ひられ、大正十五年に至る頃には、東西兩礪波郡における家元師範代および師範合せて十四名を算するに至り、師範以下二百五十餘名に達す。

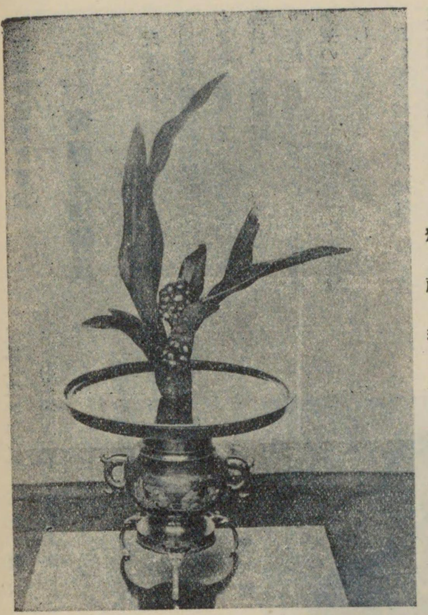
ここにおいて、家元においては、その取締りとして、會頭一名を免許することになつたのであるが、氏は衆望を負ふてこれが任に選ばれ、同十五年十二月宗家花庵神前において嚴肅なる授與式を擧行、現家元理興先生より免狀を受け、會頭會に列するに至つた。同時に故理扇先生の松得齋を繼承して、二世となり、それまでは松韻齋理啓と號した。爾後、同地方の會頭たるものは、この號を襲ふ定めであるといふ。

かくて、同年より氏等主唱の下

に同地方の家元師範代並に師範一同は、福光町、城端町等に會し、宗家より松務齋廣岡理創先生の出張を乞ひ、毎月研究會を開催し、その向上を企圖しつゝあり、その精進眞に敬服に價する。

なほ氏は茶道千家裏流に達し、聽松庵理啓と號す。

令息は同地方織物會社の重役として、重きに任じてゐる。(富山縣東礪波郡城端町六七五番地)



齋藤理啓氏作

東山新流華道師範 石州流茶道教授 鶴巣齋 泉 圭子女史

女史は、明治二十二年三月十四日、大阪市西區立賣堀北通り六丁目に生る。名を圭子、代々大阪實業界において屈指の豪商としてその名聲を傳へられ、現に父君泉伊助氏は、織物商として錚々たるものである。

女史は伊助氏の二女、幼時より、花道を好み、明治三十四年、年僅かに十三歳にして、東山新流家元管生鶴照齋宗匠の門に入り、研修に精勵すること數年、女史の熱心なる精進の結果、師も亦大いに嘱目し、教養にも特に力を盡したので、技自ら日を追ふて上達し、明治三十九年十一月には、早くも齋號を得るに至つた。以來師範として立つと共に、專心研究努力を續けつゝ、全くその奥儀を究めるに至つた。現に總會司の要職に在る。

女史は一面において、茶道にも夙に、深き趣味を有し、花道に進むのかたはら、管生鶴照齋宗匠の教へを受けて、石州流茶道を修め、現にその師範である。

かくの如く、女史は風流の道に長ずると共に、各種の才能を備へて、よくその他の女藝にも通じ、就中生田流箏曲は最も特意とする所であるといふ。(大阪市西區新町南通三丁目二七〇番地)

泉 圭子女史

新未生流華道教授 松眞齋 小幡雪甫女史

女史は新潟縣中蒲原郡青山の人、村松藩士田代信榮氏の長女である。本名をイキ子といふ。

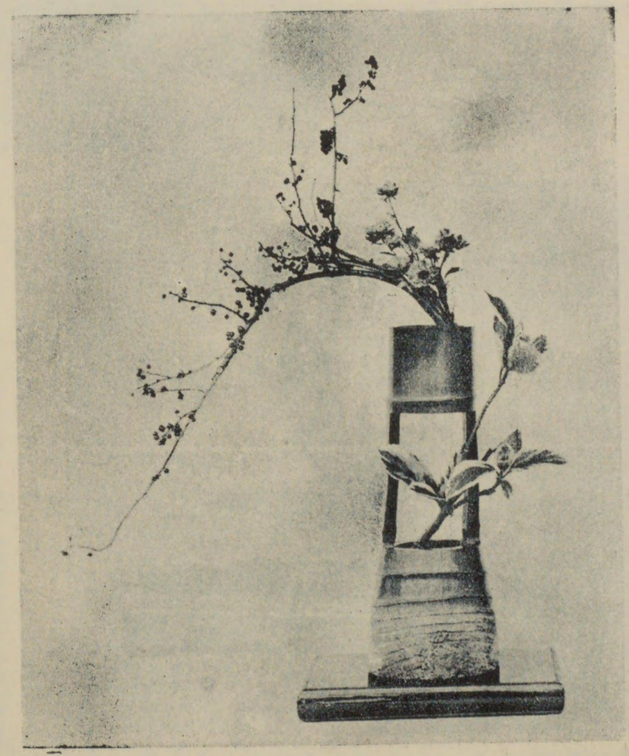
女史は初め古流の花道を習修して奥儀を極めたが、後大正五年十二月新未生流二世家元未生齋岩松篁甫先生に師事して新未生流を研修することと多年、其の奥堂に達し同十四年拔擢されて家元目代に昇格し專心多數の門生を敎養しつゝ今日に至つた。(神奈川縣三浦郡衣笠村)

小幡雪甫女史作

新未生流華道教授
松朝齋 稻木稻甫女史

女史本名を稻木朝子といふ。横須賀市公鄉二二五番地に生る。

女史は横須賀市立横須賀高等女學校を卒業し次で東京戸板裁縫女學校に入學、專ら裁縫手藝を習學、同校卒業後、大正七年より新未生流華道を習修すること年あり、其蘊奥を極む、大正十五年三月十五日累進して家元目代の高職を許さるゝに至つた。尚孜々として倦まず斯道に精進を續けて居る。(横須賀市公鄉二二五番地)



稻木稻甫女史作

新未生流華道教授
風月齋 押谷晴甫女史

女史は明治二十七年横濱市根岸町に生る、本名をよね子と稱す。

女史は茨城縣立高等女學校出身の才女にして、華道は大正元年より新未生流を習修し、熱心にして技能拔群、大正五年には已に多くの階級を越えて家元目代に昇進した、而して尚進んで研鑽を續け、大正十五年十二月十五日家元代理の最高幹部に昇格したのである。頭腦明晰、技能非凡の人である事が知られる。(横濱市中區根岸町三〇三七番地)

押谷晴甫女史作

小原流盛花瓶華教授
同一葉會幹事
同國風會幹事
清光軒　佐伯百合女史

女史は明治二十九年四月二十四日、東京小石川久堅町に生る。本名を千代子といひ、佐伯晉海氏の女である。

父君晉海氏は、宗教家にして同時に社會教育家、明治四十年以來大正六年まで、私立同和小學校を設立し、晝間は小學兒童を收容、夜間は中等科を開講して、多くの子弟を教養し、數年前から第五兒童學園を經營しつゝある。

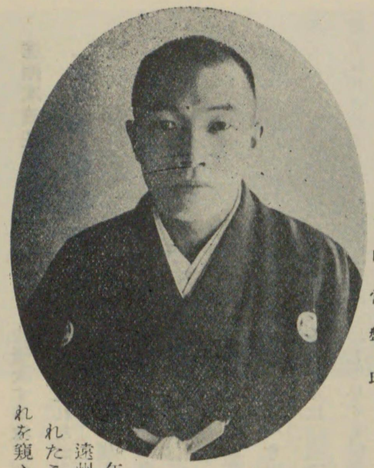
女史は大正三年春より、古流師範松本先生の門に入り、研修する五年、その蘊奥を極め、同七年より平一鶯女史について、小原流盛花瓶華を修得し、現在教授として多數の社中を養成してゐる。

又、茶道は大正八年以來、橋本　津、清元等々、澁い處にも堪能であるといふ。

その外筑前琵琶をよくし、常盤家庭は父君晉海翁古稀に近き高齡を以つて健在し、母堂さだ子刀亦又鑓鉾として壯者を凌ぐものがあり、清福に滿ちたまことに惠まれたる家庭である。（東京市小石川區久堅町九十九番地）

佐伯百合女史

崇祖流華道家元
信水齋　上田常盤氏

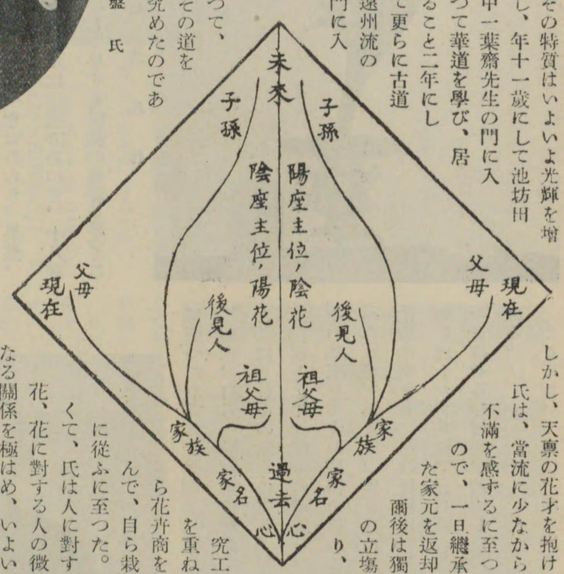


上田常盤氏

氏は明治二十八年九月二十一日、奈良縣北葛城郡二上村關屋に生る。宗教家であつて、權大教正の職にある。

生家は地方の富豪として、連綿たる家系を有し、且つ代々社會事業に多くの貢獻をなし、鄉人の敬仰を集めてゐる。

氏は性來花卉園藝を好愛するの念强かつたが、長ずるにおよんでその特質はいよいよ光輝を增し、年十一歲にして池坊用中一葉齋先生の門に入つて華道を學び、居ること二年にして更らに古道遠州流の門に入つて、その道を究めたのである。



しかし、天稟の花才を抱ける氏は、當流に少なからぬ不滿を感ずるに至つたので、一日繼承した家元を返却し爾後は獨自の立場より、研究工夫を重ね傍ら花卉商を營んで、自ら栽培に從ふに至つた。かくて、氏は人に對する花、花に對する人の微妙なる關係を極め、いよいよ大正十五年崇祖流なる一派を開くに至つたのである。

この崇祖流はその名の示す如く根本精神を家庭道德に置き、花型の如きもすべて天地、陰陽、過、現、未等、何れも傳來の家族制度の美風を基準とした獨得のものである。

氏は曰く、

『凡そ花道の妙諦は花に挿されず人に挿されず、修養による確固たる信念がなければ眞の花は生からない。又、自然美のみでは公道に添はず、信念なき花は盆栽に等しい。況んやその指導に從事するものには、人格の修養において、先づ完全でなければならない』と。

氏はこの信念を以つて、未だ現在に滿足せず、日夜これが研究に努力を惜しまないでゐる。

氏は徹頭徹尾、信念の人であつて、その高潔なる人格は、人の敬慕措かざる處、夙に祖先崇拜會を起し、全國に二十萬の信徒を有するといふ。又、從つて識見高邁、名士にして氏の門を叩くもの相次ぐと宜なる哉、崇祖流創始以來、日淺きに拘はらず、既に五百名の社中を有することや。

餘技としては俳句、書道等々。

笑子夫人（明治三十五年生）は、千家茶道の達人、中に二男一女がある。（大阪市北區老松町一丁目十七番地、電話北八四六番）

遠州本流花道家元
一眞齋 中塚松清氏

中塚松清氏作

氏は明治十三年十一月十五日、兵庫縣有馬郡生瀬村に生る。本名を清一といふ。

生家は鳥取市糸氏戸家である。後、有馬なる中塚家に入りて繼々。養家は代々商業を營み、數百年連綿繼承する地方の舊家である。

氏は生れながらにして華道の趣味を體得し、僅かに年六歳にして遠州流本木一鶴齋氏の門に入つて斯道を學んだといふのであるからその異常なる斯道に對する志向と才能を知るべきであらう。果然、その進歩は急速であつて、十八歳にして早くも師範の免許を受くるに至つたのである。

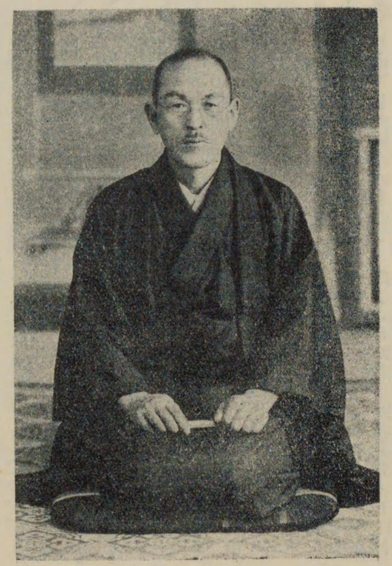
爾來、自ら一層研究に精進すると共に、社中の教導に當り、年少師範家として、嘖々の名聲を得、その將來を多大の期待を以つて迎へられた。かくて、年と共に氏の造詣は深まり、その技倆は圓熟の極に達したと共に、自ら氏の個性を發揮せる新境地に到達したのである。

ここにおいて氏は、深く感ずる處あり、大正十一年に至り、遠州本流なる一派を創始してこれが、普及發展に努力するとなつた。そして今や、斯界にその獨特の花型を以つて、一大異彩を添ふるに至つたのである。

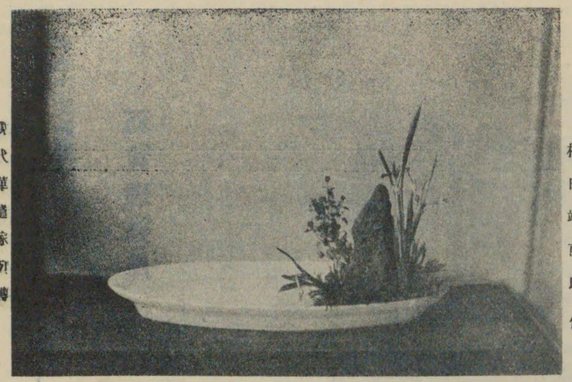
餘技として養太夫を好み、入神の域に達するものがあるといふ。

家庭はカメ子夫人（明治十七年生）との間に一男一女がある。

（大阪府三島郡吹田町）



中塚松清氏



松田靖甫氏作

未生流諸國總會頭
表千家流茶道教授
醒心流 煎茶 教授
詳得軒 松田靖甫氏

氏は明治十七年四月六日、大阪市北區兎我野町に生る。本名を巖といふ。

生家は郡山藩士であつて、祖父は御側用人を勤め、父君は原木辰之進重則といひ、町奉行および御馬廻役を勤めた家柄である。氏は辰之進氏の二男、後、大阪における著名なる表具師、松田家に入婿した。

氏は三十歳の時、未生流師範國分雪甫氏の門に入り、斯道を研究すること六ケ年、許されて師範となつたが、氏はこれに滿足せず、更らに同流七世家元の直門となつて、具さに修業の功を積んだのであつた。別に盛花を竹屋流上田梅翁氏について學んだ。

又、茶道も華道と同時に、國分先生の教へを受くる六年の後、千家表流師範生方貴一氏の内弟子となり、修業すること九閲年の久しきに及んだ。

そして、煎茶は醒心庵流家元について、研究に從ふこと八年、斯道の蘊奥を盡く極め盡したのである。

氏は別に茶料理の大家尾上善五郎氏について、斯道の精粋を極はめてゐる。研究心の旺盛なる氏は、同時に何事もこれを大成せしめねば止まぬ克己心の所有者である。

かくて氏は、その何れの方面においても、一流の大家としての才腕を有してゐるのである。

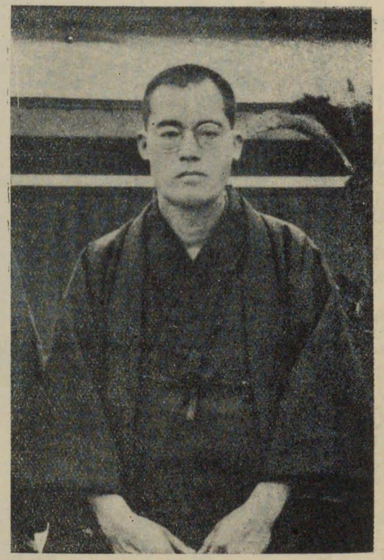
又、華道家の人格向上と、その修道場たる稽古場の神聖保持について、卒先努力を拂つてゐる。

得意の花は葉蘭、水仙、燕子花等々で、かつて、大正十四年皇孫殿下に献花し、御大典紀念博覽會に出品して、何れも感謝狀を受くるの光榮に浴す。

餘技は謡および盆石。

加世子夫人との間に一男あり、夫人は千家表流茶道の大家である

（大阪市北區兎我野町一四〇番地）



松田靖甫氏

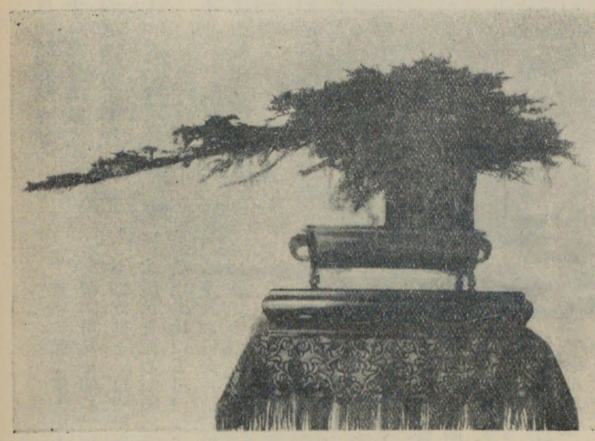
◎

月夜にはそれとも見えず梅の花香をたづねてぞ知るべかりける（凡河内躬恒）

いつまでか野べに心のあくがれん花し散らずば千代も經ぬべし（素性法師）

古流花道教授

松光齋 **羽賀理榮氏**



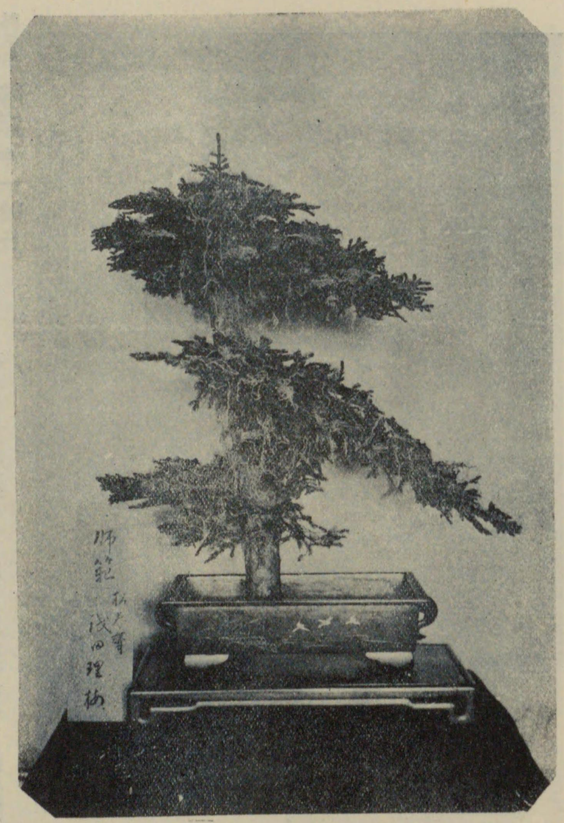
羽賀理榮氏作

氏は福島市の人、本名を榮太郎と稱す、花道を古流八世家元松盛齋柿谷理閑先生に就きて習修すること年あり、その堂奥を極め累進して家元會頭職の要位にあり、氏は斯道研修の爲に内地樞要の地は行啓に際し樺太廳の命を受け、豊いふ迄もなく、滿洲朝鮮までも見原公會堂御座所に生花を裝典して學し、十餘年前より樺太大泊に於台覽の光榮に浴し、また御召列車て專ら花道の教授に從事し多くの内にも謹挿し、樺太廳及び樺太鐵門生を教養しつゝ今日に至つた。道廳より謝狀を受け無上の榮譽を荷つた(樺太大泊町西二條二丁目)

羽賀理榮氏作

古流花道教授

松春齋 **淺田理梅女史**



淺田理梅女史作

を習修し、第八世家元柿谷理閑先生より師範の允可を得た、現に樺太大泊町王子製紙會社に勤務の傍(樺太大泊町王子製紙會社内)松光齋理榮先生に就きて古流花道ら斯道の教授に從事して居る。

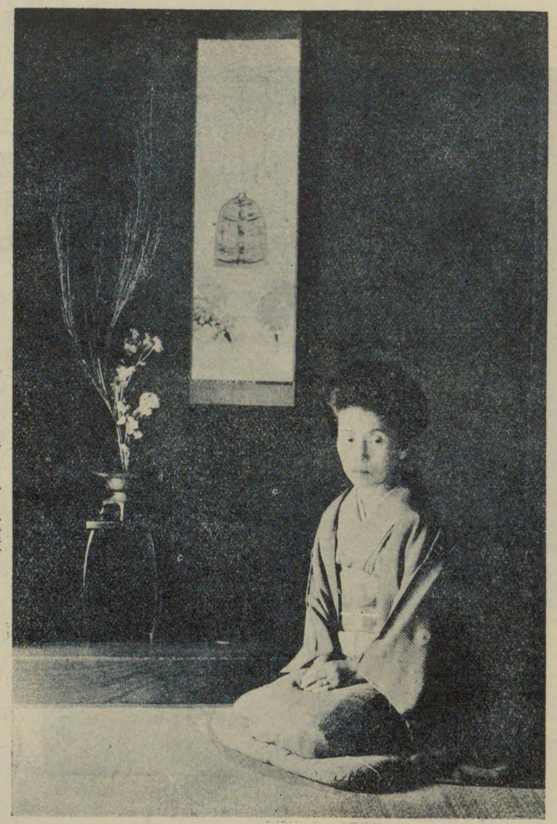
女史は靜岡縣田方郡湯島に生る

正風遠州流家元師範
眞正花道研究會總理
靜風齋 峰岸中一峰氏

峰岸中一峰氏と其の作品

氏は群馬縣の人、安政五年十一月十七日生る。本名を峰岸久三郎と稱す。本業は伊勢崎銘仙機業で會の總理として知らる。羣松園蓬ある。花道は正風遠州流にして夙に其の蘊奥を極め師範として多く月の別號がある。（群馬縣佐波郡境町二五一番地）の子弟を教養した。眞正花道研究

正風遠州流華道教授
眞正華道研究會幹事
旭松園 川村莞月女史



川村莞月女史と其の作品

女史の本名はすて子といふ、明治十四年五月六日、群馬縣佐波郡境町に生る、華道は靜風齋中一峰先生に師事して正風遠州流を習修し、許されて教授と選せられ熱心斯道に精進を續けて居る。（群馬縣佐波郡境町四三五）

正風遠州流華道教授
眞正華道研究會幹事
眞松園 小平觀月氏

小平觀月氏と其の作品

氏は明治二十四年三月十九日の出生栃木縣足利市の人である。本名を辰三郎といふ。花道は靜風齋中一峰先生に就いて正風遠州流を習修すること多年許されて教授に進み、眞正華道研究會幹事として熱心斯道の爲に盡瘁して居る。

（足利市井草町二三九五番地）

遠州御流華道家元
舊御室御所華務職
花月庵流、石川流茶道教授
一秀齋 川口香雲氏

氏は鳥取縣鳥取市丹後片原町の人、本名を辰三郎といひ、洋服商を營む。

氏は年十二三の頃より、鄉里鳥取市において、正風遠州流を學んだが、明治三十年上阪して、憲兵隊に職を奉ずると共に、その繁劇の餘暇を割いて、春山流華道を學び、更らに大正十四年、舊御室御所華務職を命ぜられ、後遠州御流の一派を創設したのである。

氏は花道の研究と共に、煎茶花月流の重鎭岩井琴月庵氏の門に入りて修業、更らに、石州流佐々木宗甫氏に就いて、茶道を講究する處あり、つひに何れもその奥堂を極はめ、現に多數の門下を養ふ。

氏は今までに、茶、華道を通じてその門下より有力者を多數輩出してゐるが、これ等師範代五十餘名を以つて松濤會を組織し、これが會長となつてゐる。同會の使命とする處は、專ら茶花道の本領たる和敬、清寂の精神を旨として、社中の智德涵養と思想の練磨を企圖するにあつて、多大の成果を收めつゝあるのである。

同會の幹部として、氏を補佐してゐる人は、左の人々である。

（幹事）
三谷秀贐齋氏
村上秀盈齋氏
辻井秀香齋氏
堀　秀正齋氏
伊藤秀操齋氏

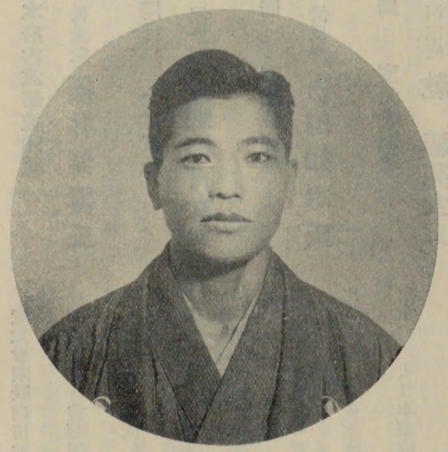
（幹事兼會計）
太田秀操齋女史
小谷秀月齋女史

（幹事）
中舍秀進齋女史
畑　秀貞齋女史
今井秀韻齋女史
西川秀艷齋女史

以上の十一氏が最高幹部として內外に活躍しつゝあるのである。

氏の造詣する處深奥なるに加へ社中を敎導するに、斯く懇切なるを以つて、氏の社中が特に傑出して、何れも特異の光彩を放つに至るのも、偶然でないことが首肯出來るのである。（大阪市浪速區櫻川二丁目一〇九五番地）

駿東流華道教授
同家元幹事
松銀齋 佐瀧華富氏



佐瀧華富氏

氏は明治三十年九月二十七日、栃木鹽谷郡片岡村に生る。本名を銀藏、佐瀧富次氏の三男である。表具師を業とす。

氏は大正十四年三月より、駿東流家元村田華光氏の門に入つて、斯道に遊び、昭和三年四月皆傳となり、同時に師範となつた。

氏は相弟子水谷華勝氏山中華笑氏等と共に、孝人會を發起し、祖先崇拜師匠敬慕の趣旨により、先づ村田氏先考の碑を建立すべく努力しつゝありといふ。

現に家元幹事の要職にあつて、當流の發展に盡す處大である。

家には兩親健在し、夫人との間に二男一女あり、家業亦繁榮す。（東京市本所區柳原町一ノ一〇）

無双眞古流花道教授
萬國師範總色位
東山流盛花瓶花師範
同　流家元幹事

清水庵　**酒井繁水女史**

女史本名を繁野といひ、明治三十四年五月三日、兵庫縣下に生る。小學を卒へて後、東京に遊學、三崎會館内英學塾に學ぶ。

後、大阪に至り、大正十三年三月より、無双眞古流代官、東山流盛花瓶花家元蓮池蓮月堂宗匠について、生花および盛花を學び、大正十五年十月、無双眞古流師範を許された。同時に萬國師範總色位の要職に任ぜられ、又、東山流盛花瓶花師範となつた。

かくて、社中を養ふと共に、ますますその技を磨き、今や家元幹事として、當流の普及發展に努力してゐる。

茶道は、裏千家を研究し、これが師範である。

又、女史は、多趣多能の人で、あらゆる女藝に通じてゐる。就中、裁縫、長唄、舞踊、箏曲等に最も秀でゝゐるといふ。（大阪市住吉區天王寺町二〇五一番地）

水府古流華道開祖
傳光堂　**櫻井紫雪氏**

水府古流開祖櫻井紫雪氏は本名梅吉。水戸市外常磐四九四五番地に在り、家元を補佐し當流の發展に盡瘁し、且つ大日本華道會水戸支部の主事を勤め斯道界に令名がある。氏の女白田琴松女史また華道に造詣深く、更生流と稱する一流を樹て、大日本華道會水戸支部を設置し、支部長の職に在りて專念精進して居る。氏は同流の顧問をも兼ねて居る。

家元會頭職乾福苑女史の本名は梅育女史に二世家元を讓つた。

同　二世家元
洞松庵　**大野梅育女史**

同　家元會頭職
清風庵　**白田如水氏**

同　家元會頭職
洞窓庵　**乾　福苑女史**

家元會頭職白田如水氏は本名東一。水戸市外常磐四九四五番地に在り、家元を補佐し當流の發展に盡瘁し、且つ大日本華道會水戸支部の主事を勤め斯道界に令名がある。氏の女白田琴松女史また華道に造詣深く、更生流と稱する一流を樹て、大日本華道會水戸支部を設置し、支部長の職に在りて專念精進して居る。氏は同流の顧問をも兼ねて居る。

家元會頭職乾福苑女史の本名は梅育女史に二世家元を讓つた。

山中松堂氏作

新未生流花道家元
表千家流茶道教授

山中松堂氏

氏は明治四年二月一日を以つて堺市に生る。

氏は幼時より風流の道を解し、夙に華道および茶道を斯道の大家某氏について學び、また自ら工夫を凝すと共に、未生古流その他の各流派を究め、自ら獨特の創意を加へるに至つた。かくて、大正十三年いよいよその大成を見るや、新未生流なる一派を創始し、家元として斯界に活躍することになつたのである。

又、茶道も早くより、その奥儀を極むる處があり、現に表千家流の師範として、多くの子弟に指南してゐる。

氏は昭和三年十月開催の大阪市大禮紀念交通電氣博覽に際しては社中の俊秀と共に、生花を出瓶して、世の注目を惹くと共に、主催者より感謝狀を贈られた。

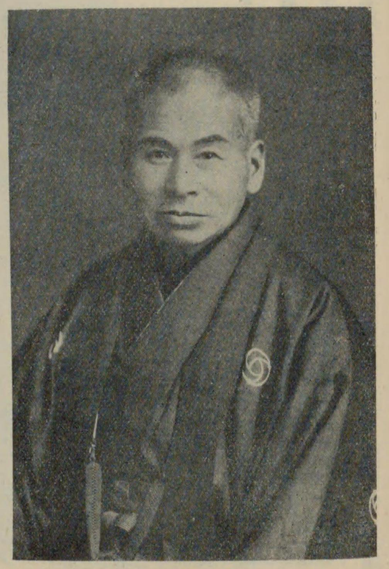
又、これより先、大正十一年の頃、英國皇太子殿下御來朝の際、大阪朝日新聞主催にて各流大家の生花寫眞を献納するに當り、氏も選ばれてこれを献納し奉り、同社より感謝狀を授けられ、その他學校公共團體よりの賞狀感謝狀等は枚擧に遑がない。

氏は餘技として和歌、書道を好む。その近詠一二を示せば左の如くである。

田家の朝
朝な〳〵おちぼをひらふ村雀
ほの門田にともを呼ぶ聲

初冬の雪
足あとのつくもかしこく清らけき神の御前につもる白雪

夫人エツ子との間に一男二女あり、長男重三氏は會社員なるも、華茶道をよくし、花號を溪泉茶號を月秀と號し、父子相携へて雅道にいそしむ。また欣すべき限りである。（大阪市浪速區鷗町二丁目九〇番地）



山中松堂氏

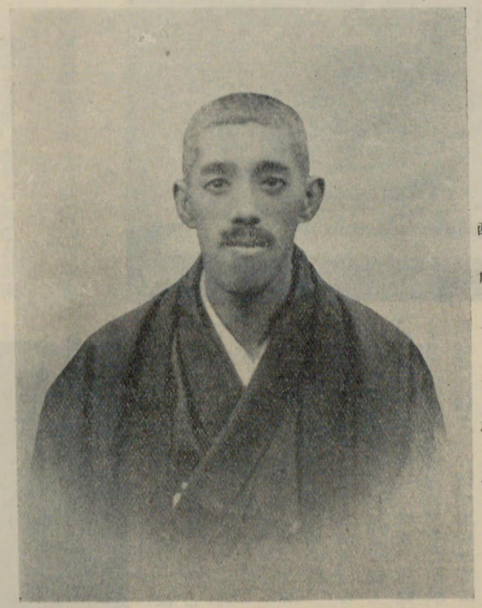
去風流盛瓶花家元
西川一草亭氏

氏は現代盛花界における第一人者、まさに小原流と共に、當流は斯界を二分するの概がある。

氏は京都の人、その生家は押小路菱屋町における舊家で且つ豪商であつて、代々源兵衛と稱した。氏は名を源次郎といふ。

氏の祖父は和風亭と號し、茶華道の達人であつた。現在の上京區淨土寺馬場町に一時庵なる茶庵を設け、風流三昧に遊び、父君源兵衛氏も、祖父の風を繼いで、和風齋と號し、斯道に造詣する處頗る深く、斯界に著聞するの好事家であつた。

氏はこの遺風を受けて、早くより斯道の門に入り、研究することを樹立するに至り、爾來、時人の推讃を博する大、流風靉々として今や全國に普く行はれるの盛運を招來したのである。



西川一草亭氏

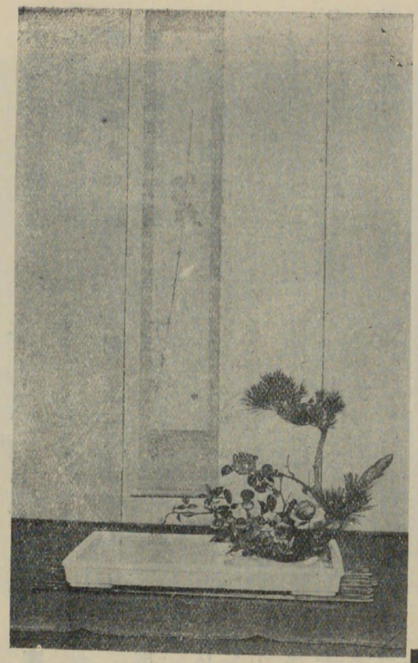
頗る深奥、特に氏の好尚と時代の趨向を察する明とによつて、盛花瓶華の研究に潜心し、つひに自らの創意を以つて、去風流盛花瓶花

氏は現在祖父の一時庵を再興して、別墅とし、其處に現住してゐる。稱して去風洞といふ。

氏は常に個人展覽會を東京三越京都高島屋、その他の各地において開催して、大にその技風の眞價を宣揚するに努めてゐるが、何れもその風格の高雅なるには、鑑賞者をして三嘆せしめて止まぬものがある。氏の流風世に廣く行はれるもの、また偶然ならずといふべしである。

又、出張所を京都押小路麩屋町東、東京麹町下六番町、大阪東區今橋三丁目等に設けてゐる。

夫人との間に三女あり、長女富子、二女文子の二嬢は何れも府立第一高等女學校に在學し、三女雛子嬢は小學に在學す。(京都市上京區淨土寺馬場町、電話上五六三番)



廣瀨琴甫女史作

弘洲風盛瓶華師範
表千家流茶道教授
隆彰齋 廣瀨琴甫女史

女史は明治三十年九月二十八日、大阪府中河内郡曙川村刑部に生る。本名を琴子と云ひ、藤田實次郎氏の二女である。後廣瀨家に嫁した。

生家は地方の名望家として知られた家柄である。

女史は幼時より花を愛し、自然に親しみ、明治四十四年、十五歳にして、鄉里葦牙流師範撫松齋芳美師の門に入り、華道を研究すること數年に及ぶ。かくて、廣瀨家に嫁して上阪し、大正八年以來自由花の大家弘洲風盛瓶華家元辻井

廣瀨琴甫女史

弘洲先生の門に入り、具に研修の功を積み、同十四年師より師範を免許されたのであるが、女史は研究頗る熱心、多數の社中を養ふの傍ら、引續き師の下において、その研鑽を怠らないのである。

現に交友會幹部として、斯道のために盡瘁す。

別に長唄の趣味あり、名手の域に入るといふ。

家庭は夫君との二人、頗る圓滿である。(大阪市住吉區天王寺町二一九〇番地)

小原流盛花瓶華教授
小原流國風會幹事
同 常盤會理事
裏千家茶道教授

理笑 **小西通惠女史**

女史は明治十四年七月十七日、東京市に生る。本名通惠、茶號を宗晉と稱す。

女史夙に華道の趣味あり、特に盛花瓶華を好愛する處深く、大正七年小原流家元に入門して、研鑽專ら努むる處あり、技術群を拔いて進歩し、同九年家元教授を許されるに至る。

爾來、門葉を養ふことに力をつくし、現に小原流國風會幹事、同常盤會理事等の職にあり、東都當流における、一方の重鎭として、重きに任じてゐるのである。

別に裏千家茶道を修得し、造詣する處、頗る深きものがある。

家庭には母堂と愛孃あり、清福なる團欒を樂しみつゝある。(東京市赤坂區青山南町二丁目七六地)

◎
木の下に旅寢をすれば吉野山花の衾を著する春風　(西行法師)

◎
山寺の春の夕暮來て見れば入相の鐘に花ぞちりける　(能因法師)

◎
惜しと思ふ心は糸によられなむ散る花毎にぬきてとゞめむ　(素性法師)

◎
吹く風に誘へつくるものならばこの一本はよきよと云はまし　(讀人不知)

◎
春の野に若葉つまむとこしものを散りかふ花に道はまどひぬ　(紀貫之)

家元池坊華道教授
青花庵 **青木照月女史**

女史は明治十二年八月二十四日、香川縣三豐郡粟島に生る。本名は繁子、父君を青木吉元氏、母堂を房子といふ。

青木家の姓は源氏、後、改めて藤原氏となる。代々鷹司家諸太夫として仕へた名家である。

女史は大正元年下關市において奥野友月師につき、池坊華道を學び、其さに技術を練磨する處あり、後、上京して大日本池坊松櫻會幹部鈴木玉星先生に師事、一層その修道の功を積み、今や同社中の幹部として、斯道のために盡すこと、頗る多大である。

趣味は園藝、この方向において一家を成すといふ。

夫君青木延三氏は、昭和三年二月歿し、今や三男四女の慈母として、傍ら斯道の三昧境を唯一の慰樂として、精進しつゝあり。(東京市外杉並町阿佐ヶ谷八六五番地)

青木照月女史

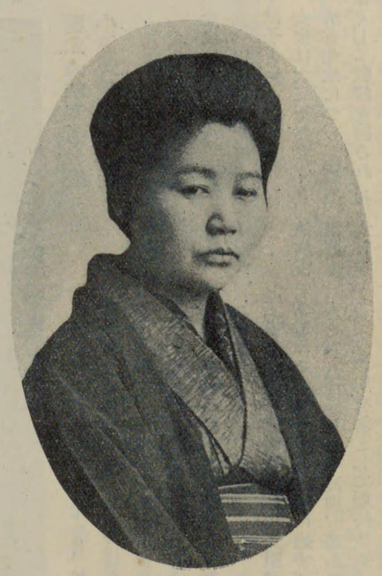
宮地光甫女史作

三先流花道教授
小原流盛花瓶華教授
表千家茶道教授
宮地光甫女史

女史は明治十二年十月、廣島縣御調郡中庄村に生る。本名をアキ子といふ。

明治四十年春より、大阪において三先流華道を研修、これが師範となり、後、朝鮮京城に移り、大正九年五月東上、同十三年三月より笑月庵伊藤雪峰先生の門に入り、小原流盛花瓶華を究はめ、現に東京小原流國風會員として、斯道の開發のために盡す處があり、後、家元師範に推され、今日に至る。

茶道は明治四十五年、在鮮當時より表千家を修業、後、伊藤先生の教へを受けて教授職となり、以つて今日に至る。(東京市外阿佐ヶ谷松山二六七番地)



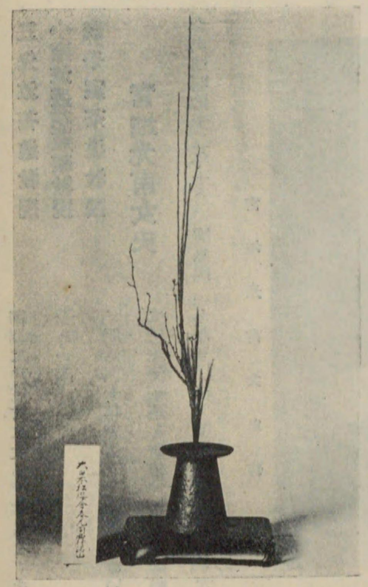
宮地光甫女史

將又雪峰社中國光社の最高幹部として、斯界に重きをなしてゐる。

家元池坊華道教授
小原流盛花瓶華教授
川崎市華道會幹事
春光園 平野清山女史

女史は明治三十四年一月九日、靜岡縣濱名郡三方原村に生る。西村氏の女である。本名を春子といふ。

女史は大正七年十月、未だ郷里にある當時より池坊教授小池宗樹氏につき研究し、上京後、卽ち大正十二年春より、博應亭鈴木玉星先生について、その技を練磨し、昭和二年一月教授職となつた。技術抜群、その將來を最も嘱望される閨秀の一人である。現に大日本松櫻會博垂社幹部。



平野清山女史作

又、盛瓶花は鈴木先生に入門と同時に、小原流盛花瓶華の研修を積み、昭和三年十月師範となるに至る。

なほ茶道は宗偏流を究はむ。(神奈川縣川崎市南河原一〇〇番地)

家元池坊華道教授
小原流盛瓶華教授
柳系軒 湯川和風女史

女史は明治十八年五月十七日、東京神田區東髙閑町に生る。本名を歌子といふ。

女史は大正十年春より、池坊市川清香先生について研究、幾許もなくして教授を許され、後、大日本松櫻會山田晴雪氏の門に入り、一層その蘊奥を極はむる處があつた。

湯川和風女史

更らに大正十二年五月より、伊藤雪峰女史について、小原流盛花瓶華を學び、現に小原流國風會員として、雪峰先生幹部社中として、斯道の研磨と振興に、餘念なく努力しつゝある。

茶道は表千家敎授、別に長唄、常盤津その他一般の女藝に通ず。人と爲り溫雅にして高尚、豊かなる天分の所有者として期待さる。(東京市外世田ケ谷町下北澤新屋敷九九〇番地)

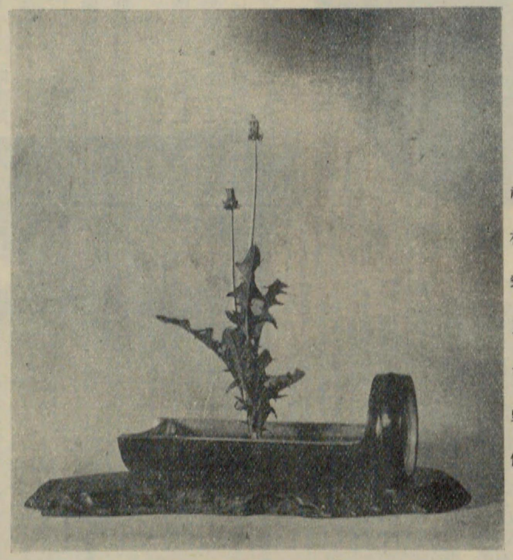
神林翠月女史

家元池坊華道教授
小原流盛花瓶華教授
春林園 神林翠月女史

女史は明治二十五年四月、東京麹町番町に生る。本名を八重子、矢秩甚太郎氏の三女、母堂を多津子といふ。

生家は累代徳川の旗本として、由緒深き名家、女史の叔父君寺島大造氏は、彰義隊の戰士であり、しかも僅かに生き殘つた三名中の一人であつた。嚴父甚太郎氏は、武藝に熱心且つその達人であり、母堂も亦薙刀の名手であつて、一面花道にも造詣深かつた。

女史は四谷小學校を卒へ、外人經營の愛住女學校を卒業、後、主として技藝方面を專攻、明治四十五年神林清一郎氏と結婚す。夫君は軍人出身で、現に大倉組に勤務中である。



神林翠月女史作

女史は母堂の感化を受けて、早くより花道に趣味を持ち、その道にいそしんだのであるが、趣味以上に魂を打ち込んで、研究し出したのは、大正十二年に愛兒を一人失ふたのに動機してゐる。蓋し、斯道によつて心身の惱みを轉換しこれを克服しやうといふ氣持ちからであつた。

當時、女史は夫君が要塞司令部附として、基隆に在任したので、その地の髙橋翠石女史に就いて研究し、翠月の號を受け、後、内地に歸つてから櫻井翁に就學した。

昭和二年十一月より、東京池坊の名手といはれる松櫻會幹部鈴木玉星先生に師事し、爾來いよいよその技を磨いて、適れ名手の譽が高い。現に大日本總花鑑である。

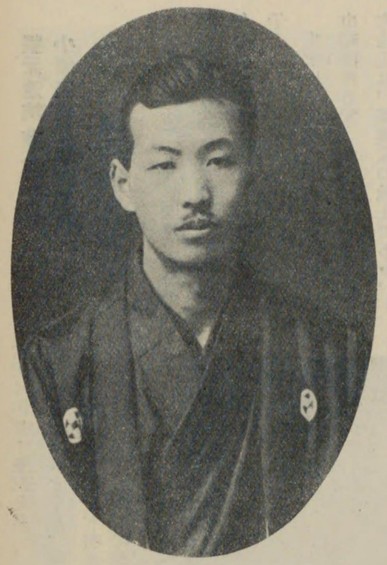
女史は天與の麗質、加ふるに江戸つ子肌の明快さと、旗本氣質の幽雅さとを兼ね具へてゐる。

餘技として絞染に長じ。又、俳句、和歌、和樂の全般に通じ。頗る多趣味である。

夫君との間に長男晃君(世田ケ谷中學在學)次男亘君(海城中學在學)の二子あり、何れも俊才で、就中亘君は小學より優等を通してゐる。夫君の軍隊式規律尊重と共に女史亦規律正しく、家庭は整然として一糸亂れず、見るから清々しい感じを與へる。(東京市外世田ケ谷三宿三一番地)

家元池坊華道教授
神奈川縣生華幹事
小原流國風會顧問
川崎市華道會幹事

清芳軒 **石野東耕氏**



石野東耕氏

氏は新潟縣中頸城郡直江津町の人、明治二十六年一月五日を以つて生る。

氏は幼少より畫才の天稟を有し既に四歳の時より彩管をとり、郷人を驚嘆せしめたものである。長じてその才能いよいよ加はりたるも、身體虚弱であつたため、中學校を中途にして退き好める丹青の道を志すべく、明治四十五年笈を負ふて都に出で、南耕、栖鳳に師事して、四條派の風を究はむ。後更らに世界的國畫としての新日本畫に進まんと志し、結城素明氏について、これが指導を受け、造詣する處深し。

爾來、各展覽會に出品して、金銀賞を受くること十數回、就中、『喜月長汀』と題する氏の創作は、稀に見る逸品として推賞さる。

然るに氏は、繪畫と共に、華道の研究必要なるを感じ、池坊の名手博應亭鈴木玉星先生の門に入つて、斯道に參するに至つた。爾來、玉星先生の懇篤なる特別指導を受け、大正十三年四月皆傳、同十五年大日本松櫻會に出席、茲年ならずして教授職を許さる。

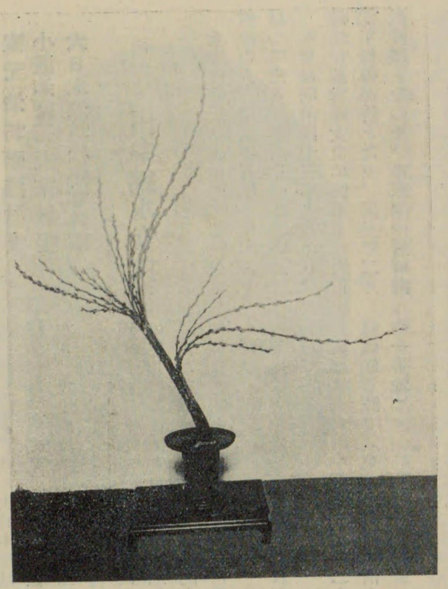
石野東耕氏作

氏は、夙に日本の床において、車の兩輪の如き關係にある書幅と活花とが、何等調和することなきを遺憾とし、書と花との融合諧調を企圖すべく、玉星先生と協力してこれが新生面の打開に努む。

家庭は夫人との間に三男一女あり、夫人は教育家として、既に十五年間教職に在り、平和なる家庭裡に、各自の天職にいそしむ。別に氏は俳句を好み、彫刻に巧みに、斯界の新人として嘱目さる。(神奈川縣川崎市榎町十三番地)

古流自生派家元
古流華道教授
小原流盛花瓶華教授

松葉齋 **松田理幾女史**



松田理幾女史作

女史は明治二十二年五月八日、東京日本橋本材木町二ノ八に生る本名を幾代といひ、村主(スグリ)安右衞門氏の三女である。

村主家は紀州の出、父君の代まで四百餘年七代を經過する土地の舊家であつた。父君安右衞門氏は、夙に東上して建築家として起ち、特に製圖家として、嶄然頭角を抽いてゐた人である。一面、風流の道に志厚く、古流華道および茶道に對して趣味が深かつた。なほ、女史の實兄村主松次郎氏は、同じく建築技師である。

女史は明治三十七年、十三歳にして花道遠州流の門に入り、更らに同三十九年春より宮根理信先生について、古流華道を學ぶ。天與の花才と不斷の精進とは、その進境群を抜き、累進して大正元年には、家元幹事長の榮位につき、又、同門によつて組織される喜樂會長となり、後、更に家元顧問となる。

又、同七年四月より小原流盛花投入を乾先生について學び、これが教授職を許され、更らにその蘊奥を極むべく、昭和二年春以來、伊藤雪峰先生について學ぶ。

かくて、女史は長き花道修業の道程において、技術の點において、新發見をなすと共に、廣く華道に對して、幾多の抱負を持つに至つたので、昭和三年十一月三日、古流自生派花道家元を樹立し、斯道革進の一路へ進出するとなつた。

松田理幾女史

茶道は夙に表千家流を究はめ、別に生田流、山田流の箏曲に通じ、三絃にも非凡の手腕を有す。

家庭は夫君松田爲安氏との二人爲安氏は土木技師として、目下東京府廳に在勤し、趣味儼かに、書畫を愛し、花道に對しても理解淺からざるものがあるといふ。(東京市小石川區宮下町二十二番地)

家元池坊華道教授
小原流盛花瓶華教授
大日本池坊松櫻會幹事
柳秀庵 **田中錦水女史**

女史は鹿兒島縣川邊郡加世田町村原の人、明治十五年三月四日を以つて生る。本名をつるといふ。

女史は明治四十三年九月より、池坊伊藤雪峰女史に師事し、大正元年皆傳免許となり、同三年二月教授職となつた。爾來、一層研鑽の一路を進み、現に大日本池坊松櫻會幹事、同國榮社々長の要位に在り、又、小原流盛花は、同十二年三月以來、伊藤先生の教へを受け、現に教授職として、小原流國風會に屬してゐる。女史は雪峰先生の最古の弟子であり、從つて同門中の最高幹部として、盡瘁今日に至つた。

茶道は表千家を極はめ、これが教授である。

家庭は夫君田中信次氏との二人佗儷頗る睦じ。(東京市本所區清水町一番地)

田中錦水女史作

家元池坊華道教授
小原流盛花瓶華教授
笑華庵 **内藤和風女史**

女史は本名を幸子、明治十九年十一月、山梨縣甲府市に生る。

大正十二年四月以來、伊藤雪峰女史について、池坊華道を研究、同十五年十月師範を許され、爾來精進し來つた。又、小原流盛花瓶華を、同十五年春以來、同じく伊藤雪峰先生に學び、後、教授として子弟を養ひ、一面東京小原流國風會に屬し、又、小原流研美會に入りて、一意研鑽の路を辿つて倦む處を知らず、今や伊藤先生社中の幹部として、斯界に重きを以つて遇せらる。

餘技として箏曲に長じ、表千家茶道に達す。(東京市外澁谷町景丘四九番地)

内藤和風女史作

現代華道家列傳

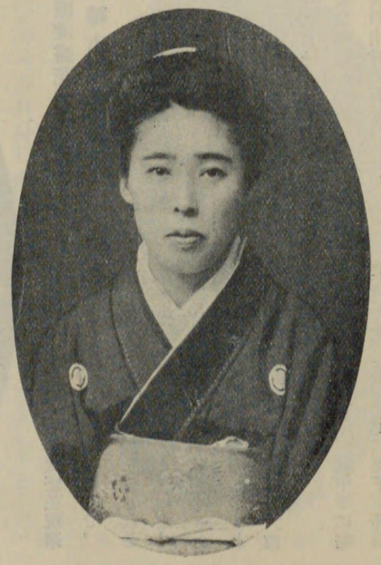
近藤喜月女史

家元池坊華道教授
川崎市華道會幹事
佳樂園 **近藤喜月女史**

女史は明治十二年四月八日、新潟縣刈羽郡柏崎島町に生る。本名をとき子といふ。

女史は大正十二年三月より、博應亭鈴木玉星先生の門に入り池坊華道を修め、刻苦三星霜、同十五年四月皆傳となり、教授の職に就く。爾來、一層斯道の眞髓を極むべく、引き續き同先生の懇篤なる指導を受くると共に、目下川崎市華道會幹事として又、大日本松櫻會博垂社の幹部として、斯道のために力を致しつゝある。

女史人となり恭謙、その花道を究むるは、偏にその高雅なる興趣に味到せんが爲であつて、子弟を養ふは、その樂しみを衆と共に分つに外ならないのである。(神奈川縣川崎市旭町一丁目四十四番地)



森下翠月女史

家元池坊華道教授
川崎市華道會幹事
玉泉亭 **森下翠月女史**

女史は明治十九年十二月二十九日、東京芝口二丁目に生る。本名をのぶ子といふ。

大正三年五月より、博應亭鈴木玉星先生について、池坊華道を學び、昭和二年四月教授となるに至る。爾來、大日本池坊松櫻會員として、又、川崎市華道會幹事として、一層その蘊奥を究はむることに專心し、今や鈴木先生社中によつて組織される博垂社の幹部として、斯道のために盡す處頗る多いのである。

趣味として三絃を好み、茶道に通ずる處深し。

夫君森下正人氏は、齒科醫院を經營し、頗る繁榮を見つゝある。(神奈川縣川崎市宮本町川崎市役所前、電話川崎六四四番)

家元池坊華道教授
春秀軒 渡邊柳月女史

渡邊柳月女史

女史は明治二十年一月十五日、福島縣田村郡三春大幡町に生る。名を秀子といひ、增子茂市氏の女である。母堂を八重子。生家增子家は、養蠶業を營む。

女史は大正三年より東京市において、富小路稻子先生の門に入り、池坊華道を研修、拮据精勵すること三年、同七年より大日本池坊松櫻會博應亭鈴木玉星先生について、その業を大成す。現に正教授の職にあり、頗る功績大である。

餘技として琴曲を能くし、茶道裏千家を學ぶ。

家庭は夫君との二人、只管斯道の研修と、子弟の養成を專らとす。資性順良にして快活、技術優秀の聞えあり。(東京市外淀橋町柏木九四二番地)

小原流盛花瓶花教授
川崎市華道會幹事
齋藤玉園女史

齋藤玉園女史

女史は明治三十七年四月二十三日、神奈川縣三浦郡浦賀町に生る。本名を靜江といふ。

女史は神田一つ橋、共立女子職業學校の出身である。

大正十五年以來、博應亭鈴木玉星先生について、小原流盛花瓶華を研究、爾來研鑽の功を積んで、昭和二年春、同流教授を許されるに至る。又、池坊華道も同先生に師事して研究に入り、目下孜々としてこれが研究に努力しつゝある。大に春秋に富み、前途の大成を期待さる。

趣味としては音樂、就中琴に堪能であり、又、手藝に達す。(神奈川縣川崎市南河原二〇〇番地)

吉田正宗氏作

常盤御流華道家元
石州流茶道教授
松雲堂 吉田正宗氏

氏は明治二十一年四月六日、奈良縣生駒富雄村に生る。茶名を柳雪庵宗正といふ。

氏は鄉里において學業を修め、後上阪して華道界に入り、爾來、諸流を究はめて大に悟得する處あり、大正九年自ら常盤御流の一派を樹立して、斯界に新旗幟を飜すに至つた。而して、氏の技術は實に超凡、かつて大正十一年二月十一日、神戸湊川小學校において、大日本茶道專興會主催の二時間三十六瓶競爭會に出席し、僅かに五十五分を以つて完了、出席者を驚倒せしめたことがあつた。

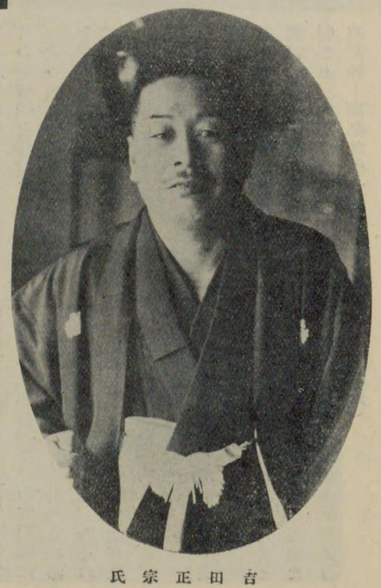
茶道は石州流を能くし、花道と共に廣く子弟を養ひ、今や大阪市內は勿論、奈良、神戸、郡山、堺等に出張教授をなしつゝある外、家政女學校花道教授其他の團體講師として寧日なき活躍をなしつゝあるのである。

又、社中の機關として、柳雪會および常盤會等を組織し、流內師範の向上に資してゐる。

餘技としては、謠曲和歌、俳句等に達す。その近作句に、

跳釣瓶汲む若水や鶏の聲

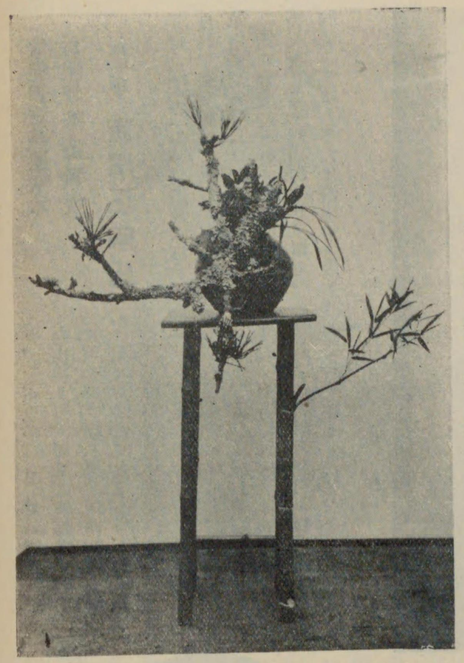
夫人との間に愛嬢あり、夫人愛嬢共に華茶道の名手として、氏を援け、門葉の養成に專心す。



吉田正宗氏

なほ、氏は資性磊落にして俠骨あり、一見何人をも引きつくる魅力あると共に、然諾を重んじて、一度び引き受けたる事は、成し遂げずんば休まざるの責任感と意志とを有す。されば、氏の恩顧を蒙るもの頗る多く、特に後進に對する懇切の誘導は、何れも推服して措かざる所であるといふ。(大阪市西成區西皿池町一番地)

斑鳩未生流華道家元
舊斑鳩御所中宮華務職
景友會々長
景眞齋 法眼 宇田洞甫氏



宇田洞甫氏作

氏は明治二十五年四月十五日、奈良縣生駒郡法隆寺に生る。名を德藏といふ。

氏の生家は代々舊斑鳩御所に奉仕したる家柄にして、氏は斑鳩尋常高等小學校を經て桃山中學に學ぶ。氏は斯界稀に見る熱と意氣の人仁俠果敢にして、優柔不斷は氏の最も忌み嫌ふ處である。

また幼にして花卉を愛し、明治四十年未生流の大家故圓野氏の門に入り、大正六年師の歿するに迄事研鑽を積む。

大正八年に景友會を組織して斯道の發展、社中の教養に資し、越えて同十一年には南都山村御殿の華務職を仰付かり、更に、翌十二年には、舊斑鳩御所中宮の華務職を仰付けらる。

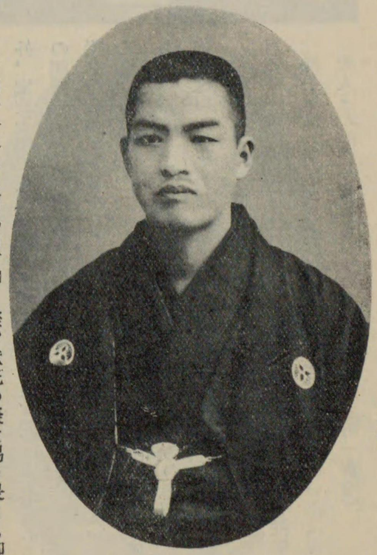
此の頃より氏の進境に轉機を來たし、大正十三年中宮門跡より法眼位を授與せられ遂に翌十四年に至り、斑鳩未生流の一派を創立す。

此の間、氏は高松宮、久邇宮、伏見宮各殿下を始め奉り、其の他の各國殿下中宮御成の節は、常に床飾り及生花を仰付かり、大正十五年、當時の皇后陛下南都法華寺御成りの際、献花の榮を賜り畏くも御紋章入り御盃を賜はつた。

續いて、昭和三年十一月十五日、御卽位御大典の折は、中宮門跡に隨行仰付けられ、宮中御內儀に參內、數々の御下賜品の上、おそれ多くも皇后陛下より、竹屋女官長を經て、御下賜金一封を賜る等、其の榮譽枚擧に暇がない。

なほ、氏は裏千家流の抹茶を良くし、又、歌澤を好み基に長ず。

家庭には兩親なほ健在、夫人との間に四女あり、家庭的にも惠まれてゐる。(大阪市北區東野田六丁目一一八番地)



宇田洞甫氏

遠春流華道家元
諸流茗華會常務
遠春齋 東 宗春氏

東宗春氏作

氏は元治元年七月二十四日、兵庫縣水上郡佐野村に生る。本名を昇之助といふ。

生家は稻次を姓とし、農を業としたるも、氏は幼少にして花を好み、常に四季折々の花を手折りて、これを瓶裡に挿すを唯一の樂しみとしてゐたといふ。やゝ長じて後志を決し、兩親の許可を受けて、同村佐藤庄之助氏について、池坊華道を學ぶ。夙夜精勵拔大に進んだが、一日些細のことより、師の侮辱に會ひ、年少にして覇氣滿々たる氏は、直ちに師の下を去つたのである。かくて、明治十一年の頃、同縣下松井郡田原村淨欣寺住職について、美笑流を學び、更に同十四年神戸に出でゝ、遠神流祖島津先生について研學すること三年、意見を異にし、遂に自ら一派を創始して遠春流と名命、以つて今日の盛大を見るに至つた。

東宗春氏

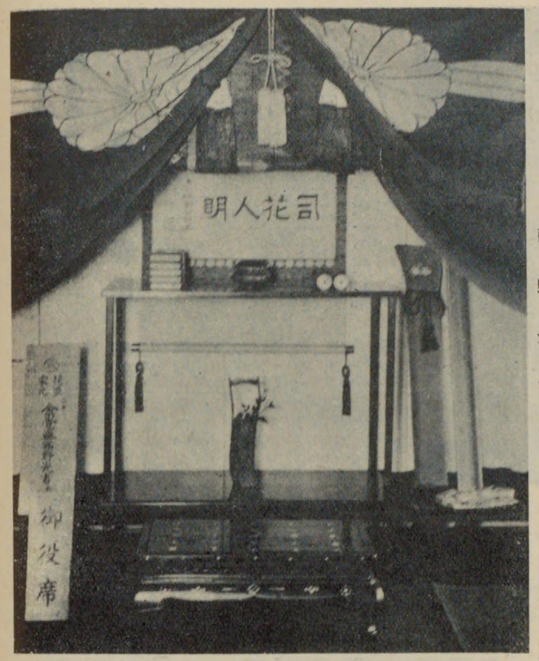
今や氏は神戸市における斯界一流の大家として門葉最も多く、又、諸流團體茗華會の常務として、專ら斯道のために犬馬の勞を惜しまない。

茶道は明治二十五年初春より、舊姫路藩士矢內又知齋宗逸師の門に入り、千家裏流を極はめ、同三十六年春、引次ぎ教師を免許され、以つて今日に及んだ。

なほ、氏は資性覇氣に富み、一家を成すに至るや、かつて年少の氏を侮辱せる舊師佐藤氏を訪ひ、葉蘭五十枚を生けて、その眞價を示し、佐藤氏をして、驚嘆且つ陳謝せしめたといふ。以つて氏の負け嫌ひの面目を髣髴することが出來るではないか。

(神戸市多聞通り五丁目一七一)

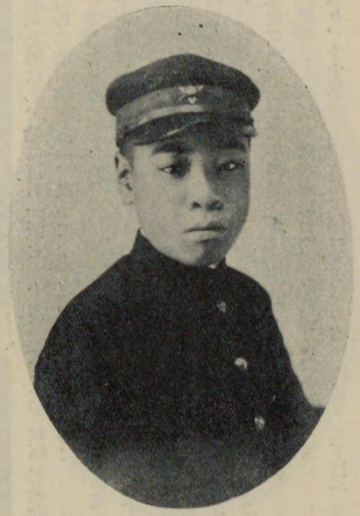
三先流華道家元二世
金覺齋 西野光甫氏



西野光甫氏作

氏は大正三年七月五日、大阪北區曾根崎中一丁目に生る。本名を繁次といひ、當流初代西野光甫氏の男である。

西野家は、近江の出にして累代彦根藩に仕へ、武道を以つて聞えたる家柄である。維新後の明治三年、一家を擧げて、大阪に出で、祖父(先代の父君)は、北區梅ヶ枝町にト居して、無念流武道の指南をなすこと六年、偶々病を得るに及び、道場を閉ぢて、爾來、小笠原流折物禮式、花道未生流、茶道裏千家、西賓および志野流香道の指南をなすに至る。



西野光甫氏

初代光甫氏は、この父君の薫陶を受けて、各道の奥儀を修め、明治二十二年五月諸道の免許皆傳となる。又、別に市内東區小山松薫堂において薫香調製法、岸薫堂において唐薫調査法を研究、何れもその秘傳を受くるに至つた。

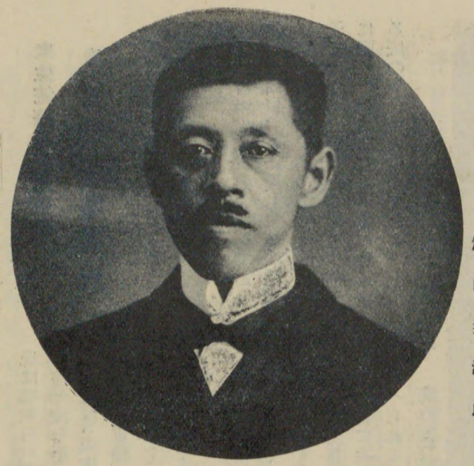
かくて、明治二十八年、市内南區在住佐保安甫氏の紹介によつて、京都舊嵯峨御所大覺寺に至り、花道の溫奥を極はむる處あり、三先御流花道總會司を免許されるに及び、同年四月四日、現在の三先流なる一派を樹立したるものである。爾來、專心斯道の指南に志し、しばしば高貴の御前に咫尺して、御用を蒙ること前後十數回に及ぶ。大正十二年七月十七日、病を得歿するに至る。享年六十であつた。

初代光甫先生歿後は、直ちに現家元がこれを繼承したのであるが現家元は未だ若年なるにも拘はらず、天稟の花才あり、現に學業にいそしむと共に、母堂および流内幹部の後見によつて、孜々當流のために精進の一路を辿りつゝある

(大阪市北區曾根崎中一ノ二九)

爲田式盛花投入家元
萬穗流盤石家元
文化盆景家元
神戸市立第一高女
同上女子商業學校
西宮高等女學校
講師

萬穗軒 爲田隻潮氏



爲田隻潮氏

氏は明治十六年七月十五日、兵庫縣下明石に生る。その名を精三といふ。

明治四十二年七月、東京帝國大學林學實科を卒業す。かくて、明治四十四年より兵庫縣立農學校教諭となり、花卉園藝を專攻し、在任十六年間に及び、昭和二年二月辭任す。

氏はその專攻學の上から、夙に華道に興味を持ち、就中、盛花投入花は氏が最も關心を持つものであつたから、早くよりこれが研究に着手し、安達式其他の溫奥を極はむるに至つた。

しかし、氏はその深き植物花卉上の智識より、在來の手法にては滿足することが出來ず、夙に獨自の見地よりの研究に從つてゐたが、大正十五年十一月に至り、從來の研究全く大成されたので、ここに爲田式盛花投入なる一派を創成したのである。

爲田隻潮氏作

氏の提唱にかゝる盛花投入は、花卉栽培上の知識を活用して、植物天賦の美趣を遺憾なく表現することに努め、高尚にして自然味に富んだ處がその本領とされる。

特に岩石を活用した盛花の如きは、在來のそれの如く、たゞ、場塞ぎに岩石を用ゐるのとは、その趣を全く異にしてゐる。卽ち礦物特殊な莊重美と植物の生氣潑溂たる生物美とを巧みに調和せしめ、彼の南畵の雅趣を生花によつて表現せんとするものであつて、全く氏獨自の天地である。

又、盤石盆石等にも、獨特の技を有し、日本盆景協會創立十週年紀念盆景大會に『湖上靜波』を出品して、二等賞を受け、御大典奉祝盆景大會に『通ふ千鳥』を出品し、優良賞を受けた。

なほ盛花においては、陸軍對抗演習の際、宴會場明石小學校に各宮殿下御前に、盛花を獻じ、殊の外賞讃を博した。(兵庫縣明石市櫻町一丁目)

未生流華道家元目代
廣玄齋 栃谷虛甫氏

栃谷虛甫氏作

氏は明治七年一月一日を以つて石川縣下金澤市に生る。名を儀一郎といふ。

氏は當未生流古參の師範であり爲人眞面目、人に接して頗る穩和叮寧であるが、謂ゆる當世式の才子ではなく、感情を重んじて信念に強く、濁富よりも清貧に甘んずる底の氣骨稜々の士である。

氏は郷里石川縣金澤市において一時遠州流を學んだが、大阪に出づるに及び、未生流を究はめ、目下家元目代の重職にある。氏は技術上氣韻を重んじ、宣傳賣名といふことを嫌ふ。そして、挿花家に珍らしい讀書家で、その範圍は古書新書に渉り、東西に及んでゐる。從つて藏書頗る多く、氏の書齋は宛然たる書庫を成すといふ。

氏の性格を反映するに足る話柄として、嘗て次の如きことがあつたと傳へられる。

明治四十四年六月、當流最高重職の某氏が、眞未生流なる一派を創立せんとしたことがあつた。これを聞き知つた氏は、奮然として起ち、當時の高職者並に在阪師範代と協力一致して、宣言書を發し、謂ゆる侃々諤々、大義名分を明かにし、以つて宗家の興隆の基礎を鞏固にしたのである。

爾來、氏は至誠一貫當流の爲めに努力し、現在見る如き當流の隆盛を招來した。その功勞眞に偉大なるものがある。

又、目下制定され居る家元門人章は、實に氏の發案せる圖案であつて、氏はこれを當時の家元補佐中山文甫氏に進言し、中山補佐もその案を妙なりとして採擇、氏に一切の製作を委託したのであつた。よつて氏は、鋭意これが完成に努力し、折柄大正四年四月、大正天皇御大禮奉祝全國挿花大會を大阪淡路町美術倶樂部において開催した際、完成せる門人章を出席者に頒布したのが、當流門人章の門葉の手に渡つた嚆矢である。

大正十年四月、第八世未生齋康甫宗匠繼承紀念全國挿花大會を、大阪中央公會堂で開催せる當時、

栃谷虛甫氏

氏は一人會計の重任に當り、終日奮闘、以つてこの未會有の大會を無事閉會するに貢献する處があつた。が、特に牢記すべきは、氏が大正十年七月、著作權の方面より肥原未生流を乘り取らんとせる不正漢の現はれた際における、氏の妥當にして勇敢なる應戰振りであつた。卽ち氏は門下の某辯護士に事件を託し、公正なる裁判の結果、不正漢を一蹴し去つたのである。が、歷史的内容的に正統なる肥原未生流の勝利は、當然のことであつたとは云へ、氏の努力の功による處、大なるものがあつたのである。

氏は、現在の大阪未生會にも、功勞頗る多く、豪放濶達の會長を補ふに、氏の明敏緻密の頭腦を以つて、會計の重任に當り、今日の盛大に貢献したのである。又、流内研究機關百練會相談役として、内外より畏敬されてゐる。

この外直門の門葉を指導する外大阪府立生野高等女學校の囑託として、多數子女の教養にも任じつゝある。

趣味としては、讀書藏書の外、謡曲を能くし、千家裏流の茶道に達し、號を宗虛といふ。

要するに氏は、未生流の一大柱石であると共に、道德運動を本位とすべき華道界において、缺くべからざる高潔なる人格者である。

（大阪市北區天滿橋筋一丁目八）

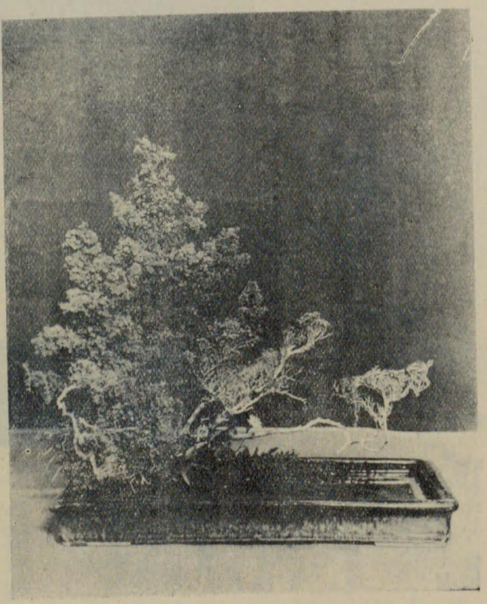
家元池坊華道教授
大日本池坊松櫻會幹事
小原流盛花瓶華教授
玉秀園 岸田清光女史

女史は明治三十四年一月二十五日、東京芝田町八丁目に生る。本名を靜といふ。

女史は大正九年春より、池坊與芝望月氏について、初めて華道を學ぶ。しかし、女史は生來斯道に趣味を有してゐたので、それ以前にあつても、斯道のことには、夙に意を用ゐてゐたのである。かくて、大正十三年その業を大成し、更らに鈴木玉星先生の門に入つて、その蘊奥を極むることとなつた。

小原流盛花も、同時に鈴木玉星先生について學び、現に教授の職にあるのである。

女史は天禀の花才に加へ、研究に熱心、研究會には優秀花として受賞すること枚擧に遑なしといふ程である。



岸田清光女史作

大日本池坊松櫻會には、設立當初より盡力し、現に幹事の要位に在り、玉星先生社中の幹部として盡瘁す。

嚴父岸田靜香氏は、書家として著聞し、女史亦その感化を受けて、書に巧みに、文學の趣味深し。

（東京市芝區田町八丁目三番地）

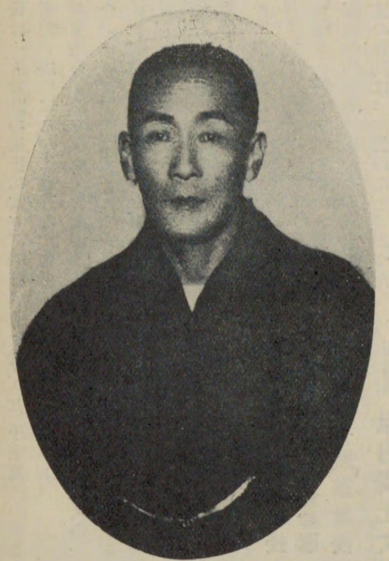
遠神流華道家元總務
諸流茗華會々計
遠浦齋 寺岡宗春氏

氏は明治九年五月五日、神戸市今出在家町一丁目に生る。名を春太郎といひ、治郎兵衛氏の二男である。

生家は舊藩公より帶刀御免の大庄屋として、連綿なる家系を有し、現在陶器製造を業として繁榮す。氏は明治二十七年以來、別に蓄音器商を營み、現に蓄音器商組合副組長の任にあり、斯界の重鎭として活躍す。

華道には明治三十年、初めて遠神流家元の門に入り、爾來精進今日に及ぶ。

そもそもこの遠神流は、明治初年島津一虎氏によつて、創設されたるもの、後相隣氏二代家元を繼承し、大に當流儀の發展を期したのであるが不幸にして早世し、しかも三代は未だ幼少の故を以つて、氏は多數同門の士より、推擧されて家元總務の地位に就き、事實上家元を預つて、諸般の事務を執掌しつゝあるのである。又、流内師範代を以つて組織せる遠神會を統率し、當流のために最善の努力を捧げてゐる。



寺岡宗春氏

寺岡宗春氏作

又、一面において、在神諸流團體たる茗華會の會計として、盡力すること多年、その功勞最も著し。

前記蓄音器商組合副組長の外、別に今出在家衞生評議員、和田校懇話敎育會幹事等の公職にあり、多方面に向つて、その才能を發揮してゐる。

餘技として長唄に長じ、俳句を好み、同じく宗春と號して一家を成す。

夫人との間に三男一女あり、至福の家庭として知らる。

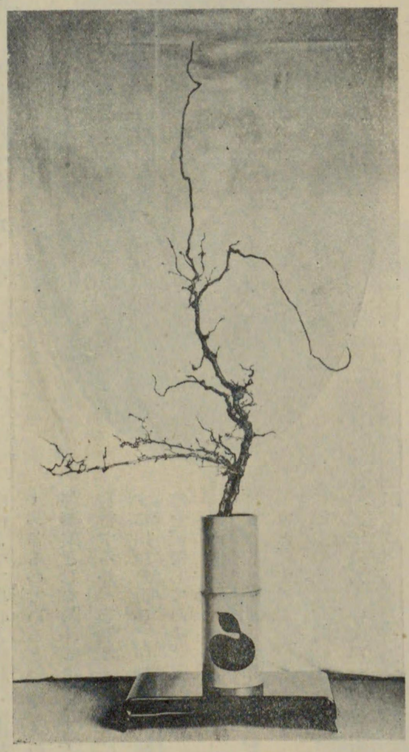
（神戸市今出在家町一丁目一二八番地、電話兵庫一一〇五番）

未生流華道家元目代
同 流百練會委員長
廣信齋 岩瀨誠甫氏

氏は明治十六年二月十四日、現住地大阪市西區立賣堀北通二丁目に生る。

氏の生家は鯖江藩士であつて、連綿たる家系を有してゐる。廢藩と共に大阪に出て、父君は醫を業とし、杏林に知られた名手であつたが、氏はその業を繼がず、會社員として現在に及んだ。

華道には入つたのは十七歲の時で、未生流荒木白鳳氏に師事した。當流の重鎭桃華齋瀧瀧市氏とは、謂ゆる相弟子として、殆んど同歩調を以つて、十餘年間その技を磨いたのである。一時一身上の都合で華道から遠ざかつてゐたが、再びこれに從ふことになつた。蓋し、その深き蘊蓄は、長く斯道に遠ざかることを、他が許さなかつたからである。そして、現に目代職の重位に就くに至つたのであるが、まことに當然の歸結といはなければならない。



岩瀨誠市氏作

氏は頭腦精密、頗る研究心の深い人である。從つて、花形の如きも、徒らに廣きにわたらず、常に狹く深きを以つて目標として、專念研鑽を積むと共に、社中の敎導に際しても、この方針の下に當つてゐるといふ。

別に氏は、未生流家元師範代中堅組を以つて組織せる百練會の委員長として、流内技術の鍛練と振興とのために、多大の盡瘁をなしてゐる。

なほ氏は、當流の機關雜誌『桐華』誌上には、常に清新卓拔なる論文を發表して、後進を導いてゐる。そして、當流内の最高幹部として、將又斯道家として、常に第一線に立ち、獨歩の地位を占めてゐるのである。

氏得意の花は杜若、水仙等々であると。

はる子夫人（明治二十二年生）あり、圓滿なる家庭を營む。（大阪市西區立賣堀北通七丁目一四番地）

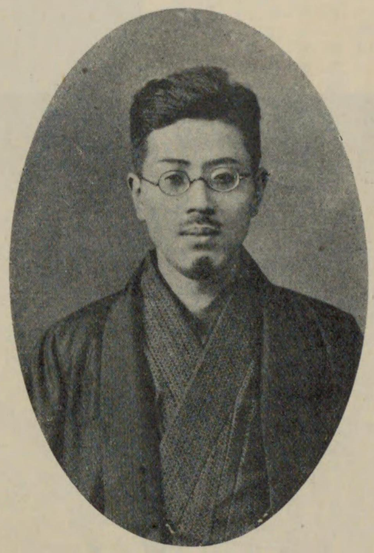
未生流華道教授
同家元雜誌『桐華』社長
華道家元百練會專務理事
未生婦人會名譽顧問
一草亭 宮本珞甫氏

氏は明治二十六年十一月二十六日、大阪市北區河内町に生る。田中彌三郎氏の二男、名を藤太郎といひしも、僧籍に入るに及び德隆と改めた。淨土宗の僧侶である。

生家は京都西陣織物業者として、二百年の歴史あり、五十年前父君彌三郎氏大阪に出でゝ同業を營む。

氏は關西大學に學び、後日蓮宗權僧正松尾髯學師について宗乘修了、次いで日本基督教牧師百島操氏に師事し、更らに淨土宗大僧都菅原正隆氏に師事して今日に及んだ。

花道には幼時より自然に趣味を有し、夙に未生流家元教佐たりし荒木白鳳先生の門に入つて、斯道を學んだ。後、六代宗匠直門柳廣直齋先生（現家元顧問總目代）に師事し、その蘊奥を極はむるに至つたのである。



宮本珞甫氏

氏は大の流祖讃仰者であつて、絶對傳書神聖主義を奉じてゐる。

氏は曰く『華道は畢竟流祖の「いはゆる人倫の道にして、更に他の事にあるべからず」の金言を信奉すべく、華道家は道德運動を以つて、本務とすべきなりと信ず。而してその究極は、自然と信仰および人間生活の偕和にあり。故に他面些か自由なる天地を流外一般社會に作らんがために、宗教世界と花の世界を習合し、珞艸院なるものを設立す』云々。

而して珞艸院は眞華道（順自然）の提唱と、活宗教（稱名念佛）の鼓吹によつて身心と物財の淨化をすゝめるものであるといふ。その附帶事業として隔月に雜誌『珞艸』を發行する外、宗教および花道に關する出版を行ひ、印刷部、代理部等を經營してゐる。

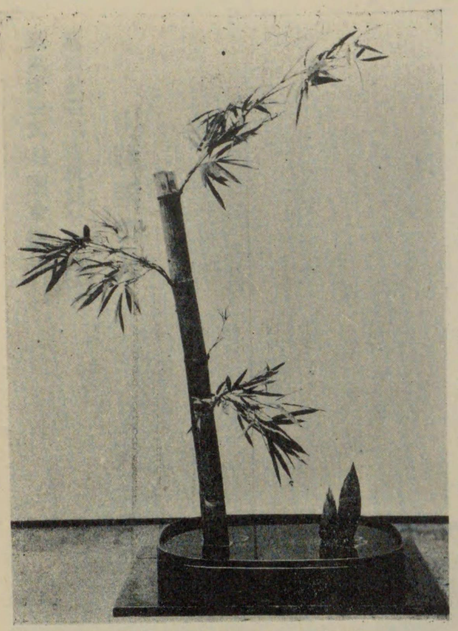
氏は又不昧流茶道に達し、號を一窓と稱す。

得意の花は葉蘭の流格。

鶴子夫人との間に一子良左右君がある。

大正十三年流祖百年祭紀念事業の一として、未生流機關雜誌『桐華』の發行されるや、宗匠よりその主宰者に任命され、大に流名宣揚に力を致し、現にその任にあつて盡瘁す。

當流の一逸材として、流内に重んぜられると共に、大阪斯界の一新人として、將來を期待される人である。（大阪市北區東野田町六丁目十八番地）



西田耕市氏作

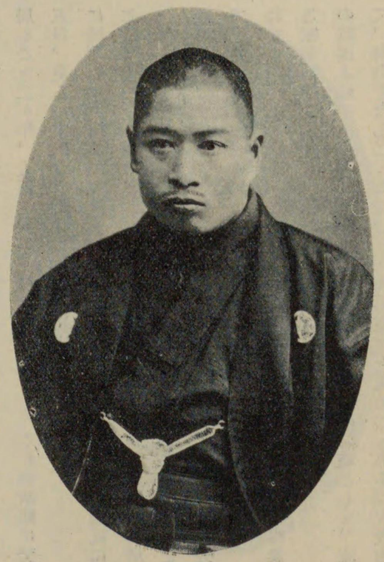
斑鳩未生流華道目代
景友會副會長
同執行委員長
裏千家流茶道教授
景關齋 西田耕甫氏

氏は本名を彌一郎といひ、明治二十七年四月、大阪東成區野江町三丁目に生る。

生家は累代土地の豪農にして、廣大なる土地を有し、代々篤行多く、鄉黨の信賴厚き名家である。

氏は、明治四十四年未生流大家故園野先生の門に入り、專心斯道を學び、一家を成すに至つたが、師の物故に會ひ、轉じて斑鳩未生流家元宇田先生の門に入つて、一層その業を大成するに至る。

かくて、大正九年師範免許、爾後、累進して當流の最高位目代の榮位に昇り、今や最高幹部として、家元を補佐し以つて、當流の振興普及に專らである。



西田耕市氏

かつて、氏は南都法華寺において御執行の御眞影奉安祈願式の際御參列の三親王殿下の御前に、師宇田氏と共に伺候して、挿花謹挿の光榮を荷ひ、畏くも御紋章入り御盃を下賜さる。

又、大和大峯山主眞和尙と共に、南都山村御所に參殿し、伏見宮文秀女王殿下に拜謁を賜はり、御座所に生花を謹挿し奉り、數々の御土產品を下賜され、一代の面目を施した。

夫人また園野先生に未生流を學び、後宇田先生について、斯道を極はめ、夫君と共に當流のために、努力精勵しつゝあり。又、夫妻共に裏千家茶道に達す。

社中多く、當流の重鎭として、內外の信賴厚し。

一男あり、祝福されたる家庭である。（大阪市東成區野江町三丁目）

山野繁甫氏作

斑鳩未生流總國會頭
舊斑鳩御所華務課法務
景昭齋
山野繁甫氏

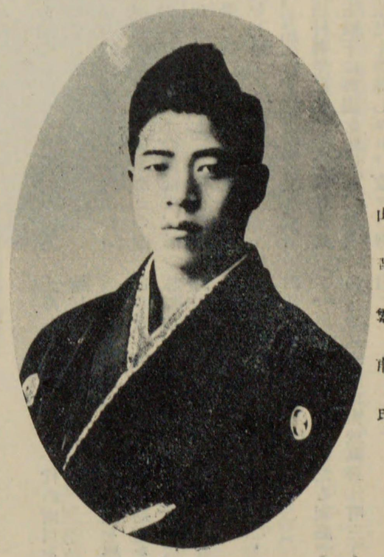
氏の名は繁雄、明治三十五年八月十五日、大阪市住吉區西長井町に生る。

父君は早くより花卉商を營み、現在川口屋と稱し、盛大に業を營み、大阪屈指の大問屋として知られてゐる。

氏は大阪英進高等小學校を卒業、專ら家業に從ひ、傍ら風流の道を好み、夙に華道三先流の門に入つて、研學すること五星霜に及び、技倆練達したるも、更らに向上を志して、眞未生流の門に遊び、居ること二ヶ年、大正十五年五月、更らに宇田景眞齋先生に師事して、斑鳩未生流を學ぶに至つた。

勿論、多年諸流を究めたる氏の進境は、頗る顯著であつて、累進現に總國會頭の要位に座るに至る。爾來、多忙たる家業の閑暇を利して、一層の精進と社中の養成に向つて、努力をなしつゝある。

また、茶道は裏千家流を學び、孜々としてこれが研修に努めてゐる。



山野繁甫氏

氏もかつて、師宇田景眞齋氏に隨從して、梨本宮殿下舊斑鳩御所御成りの際、御座所に獻花の命を蒙り、御下賜品を拜領するの光榮に浴した。

氏は曲生花を以つて、最も得意の花とする。

將來ある當流の師範として、流内の嘱望を荷めつゝある。(大阪市北區木幡町一六一番地)

山本李甫女史作

斑鳩未生流總國會頭
舊斑鳩御所華務課法務
景友會評議員長
裏千家流茶道教授
景晃齋
山本李甫女史

女史は明治二十七年二月五日、大阪市北區新喜多町に生る。名を李子といひ、山本家の二女として生る。

生家は商業を營み、繁榮を呈す。女史は生來花卉を愛好し、手藝に巧みなる處より、夙に華道および裁縫を以つて身を立つべく決意し、東成區鯰江高等小學を經て、その研修に入ることとなつた。

かくて、大正十一年四月、斑鳩未生流家元宇田景眞齋先生の直門として、斯道に入り、爾來、天稟の花才を發揮し、同十五年國會頭師範免狀を授けられ、更らに昭和二年、總國會頭に榮進以つて今日に至る。

山本李甫女史

茶道も同先生について、裏千家を學び、これが教授を許されゐてる。

この間、女史は南都法華寺において、三親王殿下、御眞影奉安御祈願式御執行の際、宇田先生に隨つて、獻花の命に浴し、畏くも御紋章入の御盃を下賜さる。

又、續いて東久邇宮大妃殿下およびスエーデン皇太子舊斑鳩御所御成りの際、御座所に生花を挿獻し奉るの光榮に浴し、御下賜品の榮譽に浴したのである。

女史は盛花を得意とし、又、舞、長唄等の餘技に堪能である。

社中多く、母堂はる子刀自と共に、清福なる家庭を樂しむ。(大阪市東成區巽町八六一番地)

池田小夜甫女史作

斑鳩未生流總國會頭職
舊斑鳩御所華務課法務
景友會幹事
裏千家流茶道師範

景眼齋 **池田小夜甫女史**

女史は山口縣佐波郡出雲村伊賀地の人、名を小夜子といふ。

女史の生家は、鄉國における有力者にして、父君勘吉氏は、町會議員として、令兄また役場高級吏員として、町政に盡瘁しつゝあり。

女史はその四女であり、奥畑高等小學校を卒業して、裁縫女學校を卒業し、後上阪現に會社員として勤務す。

大正十年斑鳩未生流家元法眼宇田景眞齋先生について、斯道を研究するに至つたが、その研學の熱心なる師をして驚嘆畏敬せしめた程である。從つて、技倆の上達も眼覺しきものあり、現に總國會頭として重きに任じつゝある。

なほ、舊斑鳩御所華務課法務に任ぜられ、景友會幹事の要位にもあるのである。

又、茶道も宇田先生について、裏千家流を學び、今やその教授職として、何れも子弟の養成に努力しつゝあり。

池田小夜甫女史

得意の花は、柳、杜若、水仙等々である。

餘技としては琴曲を好み、これに堪能である。

社中また頗る多し。(大阪市西區市岡町市場通二丁目二番地)

高井溪甫女史

現代華道家列傳

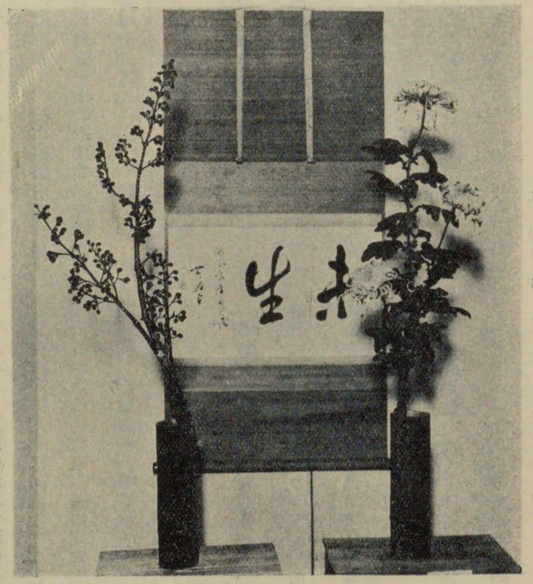
未生流花道教授
東山流盛花瓶華師範
東山流家元幹事
裏千家流茶道教授

竹流齋 **高井溪甫女史**

女史は明治二十一年一月一日を以つて、福井縣阪江郡東十合村に生る。本名をタニ子といふ。

女史は年十七にして、大阪に出で、二十二歳より未生流花道を研究するに至つた。師匠は笹岡竹流齋氏であつて、大に修道に精進、師の嘱目する處となり、間もなく師範を許された。爾來、門下を養ひ既に多くの門下を輩出してゐる。

又、盛花瓶花を東山流家元蓮池蓮月堂宗匠に學び、具さに研究の功を積むこと五星霜餘、大正十五年十月、同流の師範を許され、爾來、累進して現在は同流家元幹事の樞要を占め、斯界の一權威を以つて目されてゐる。



高井溪甫女史作

女史は研究心旺盛、毎月家元の花會には、一日と雖も怠ることなく、その技を磨くことに精進すると共に、家元を援け後進を導くに懇切を極めてゐる。

なほ、茶道は二十歳の頃より、岸本宗喜氏について、千家裏流を研修、師範を許されて現在に及ぶ。

夫君留吉氏は、合同運送株式會社に勤め、目下朝鮮主任の地位にあり、手腕信用ある有爲の人として、嘱望されてゐる。(大阪市西淀川區大仁本町三丁目三十一番地)

正心遠州流華道家元
豊月齋 **富岡盛一米氏**

氏は明治三年二月八日、香川縣仲多度郡象郷村に生る。名を宜永といひ、森久米八氏の三男である。後――明治二十八年日清戰役中、富岡有水氏の養嗣子となり、同年八月養父の職を繼ぎ、深川富岡八幡神社々司に補せられ、昭和三年九月七日奏任官を以つて待遇されるに至つた。

氏はこれより先、明治十九年十二世豊月齋盛一米となつた。

氏は、一面公共のことに盡す處多く、このために賞を受くること數を知らず。かつて、賞勳局總裁よりも表彰されるの榮を得た。

社中多く、特に豊鳳齋盛一羽、豊日齋盛一山の兩氏等、俊髦の士が多い。

家元池坊華道教授
廣山流投入盛花教授
松花園 **松田香山女史**

女史は明治十一年五月九日、東京京橋舟松町に生る。名をはる子といふ。

女史は明治三十八年より岡田廣山先生の門に入り池坊生花を學び、漸次五ヶ條、七種、草木集、定式卷、廻生卷、生花卷を許され、數十回の花會、および家元代見武席目付となり、次いで薄盤、華盤、藤松庵先生出張の際における春秋床構、紫幕等を許されて、會行司研究にも早くより入り、家元岡田二季十數回の花會には、常に幹部に昇進、皆傳後は順次職役二十有廣山先生の指導を受け、夙に皆傳役を經て、大正十一年四月三日、として盡力し、同地における當流最高職役大日本生花總幹事および の普及發展に資したるの功勞、實雛間を許されるに至る。 に夥しきものがある。蓋し、同地における闔秀斯道家として、最も知られたる人である。

なほ、女史は廣山流投入盛花の家元岡田夫人とよ子との間に二女あり、長女好子孃は、夫君盛彦氏を迎へ、嗣子となし、目下官幣大社札幌神社宮司の職にあり、次女秋子孃は私立中村高等女學校の教諭として令名がある。(東京市深川區富岡門前町、府社富岡八幡神社々司)

氏はまた和歌を嗜み、謠曲に達し、頗る多趣味である。

家元池坊華道教授
無所得庵 **眞田斧月氏**

氏は明治二十年五月二十日、群馬縣高崎に生る。本名を良巖といふ。少にして紀州高野山に赴き、具さに修道研學を重ねて、その業を大成した。

華道は明治三十七年より東京の三光軒井村吟月氏について研究、大正二年教授となり、更らに累進して同十二年最高職役大日本總華督となつた。

大正二年四月聖心會を組織し、橫濱華道界のために、盡瘁する處頗る多かつたが、震災に際して同會の不振を來すや、更らに吉野翠氏を初めとして、有力なる教授十數名あり、皆傳者のみでも五十名に達してゐる。

趣味また廣く、茶道、俳諧、繪等に達し、就中、俳諧は『藻潮草』を自ら刊行すること多年、繪は大場澹翁氏について南畵を學び、一家を成してゐる。

氏の近業にいはく、

國擧げて壽ぎまつる日や菊さかり(斧月)

なほ氏は一面自治の方面にも、力を竦かにせず、青年會副組長として十餘年、衞生組合副組長としても多年盡す處が多い。(橫濱市磯子町八八〇番地)

家元池坊華道教授
廣山流投入盛花教授
松翠園 **石渡雅芳女史**

女史は明治十五年八月一日、橫濱市戸部町に生る。本名こん子、生家は累代の德川藩士であつた。

華道は明治三十五年より初め、橫濱市における池坊開拓に最も功勞のあつた人。岡田廣山先生およびその他の人々と共に、每歲春秋二季に渡つて大會を催し、幹事として大に活躍した。大震災に際して、靜岡に避難し、同所において池坊および廣山流投入盛花を廣め、教授者數名を殘して、後上京し、現住所に寫眞材料商を營むの傍ら、斯道のために努力してゐる。(東京市下谷區南大門町四番地)

家元池坊花道教授
千家表流茶道教授
松壽軒　龜井龜瑞女史

女史は、明治二年を以つて、東京に生る。名を喜代子といふ。

明治三十年頃より、池坊生花に趣味を持ち、これが研究に志す。當時、女史は横濱にあり、池坊花道教授鶴松軒鬼頭彦十郎氏について、斯道を學ぶ。鬼頭氏は、名古屋の人、斯流の名手であつた。師事する十餘年、同四十三年夫君に死別するの不幸に會するや、一層斯道に精進するの志を決し、池坊東京紫雲會長岡田廣山先生に就き、その蘊奥を極むることになつた。

斯く研鑽多年、生花の眞髓は、單に形のみによるものでなく、天地間の元氣とその實相をそのまゝに活けるにあることを悟得し、爾來、大に斯道のために盡瘁する處があつた。されば女史の名聲日に高く、有吉横濱市長、當時の知事井上孝哉氏等の信任を受け、今上陛下攝政時代には、獻花の光榮に浴する等、特記すべき事柄が尠くなかつた。

當時、横濱は古流の天地であつたが、女史の異常なる努力は、今日の同派隆運の基礎を固ふし、清正會の設立されるや、最初より幹部として奔走これ努め、この功によつて、家元より大日本生花華督を賞授されたのである。しかるに、大正十二年の大震災に際しては、倒壊家屋の下敷となつたが、辛じて九死に一生を得、神戸の知人を頼り、一族と共に下神、以つて同地に定住することとなつた。

女史は嗣子龍司良君あり、目下浦和高等學校に在學し、俊才の譽高く、その成業を唯一の樂しみとなしつゝ、一面多數の社中を養成して、斯道の發展と研究に潜心してゐる。（神戸市會下山三丁目）

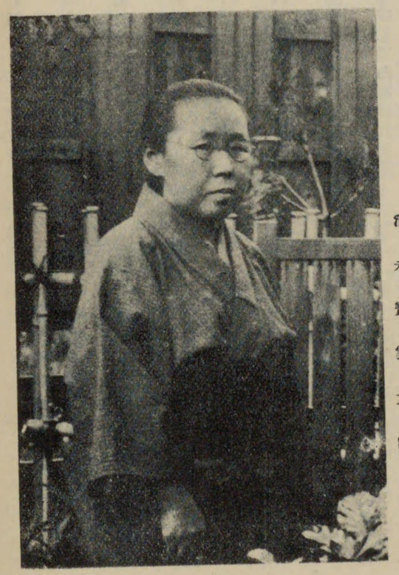
池坊龍生派華道教授
龍永軒　池永寶雲女史

女史は明治二年三月十六日、伊勢に生る。本名をたつ子といふ。

明治三十七年以來、池坊龍生派大家今井氏に師事し、爾來三十餘年斯道のため、盡す處頗る多く、現に伊勢國會頭職として、當流に重きをなしてゐる。

資性溫厚、慈母の親しみを以つて、門下を教導し、傑出せる斯道家を出す尠少でない。

別に裏千家の茶道に通じ、これが師範である。（東京市外澁谷町字永住二二番地）



池永寶雲女史

正風弘祖第三世
巖松齋　石田貞一鵬氏

氏は明治十七年一月二十日、埼玉縣北足立郡木崎村下木崎四十二番地に生る。本名を長雄といふ。

石田家の祖は石田彈正豊房の末にして代々名主を務め舊家にして豪農であつた、父君吉藏氏は實に其十六世の孫であると、明治十七年故ありて現住所に居を造り茶業を營んだ、氏も父の後を受けて引續いて製茶自園製造販賣業に從事して居る。氏の祖父は代官所に勤務し傍ら書道の教授及び名主役を務め、花道は初世貞松齋一馬師に學び仙松齋石一長と號した、父君もまた村會議員、戸長、傳習所主幹其他多くの名譽職にあつた。氏もまた其の衣鉢を受け小中學を卒業し、次で高等蠶業、高等產業、高等農業、全國農業倉庫講習所等各專門の教育を受け其の薀蓄する所により地方產業界の牛耳を握つて居る、而して製造品は全國品評會、各博覽會等に出品して受賞すること屢次である。

氏が花道に於ける經歷の一班を叙すれば、明治三十三年祖父仙松齋一長師に就て正風遠州流を學び、同三十七年正風弘祖第二世故巖松齋高弟師範故峨松齋貞一寶師につき具に研磨修養し其奥堂を極めた、同四十年師歿後、其の社中及雅友一統の推擧により同四十一年第二世師範裏松齋を襲名、同四十五年師の建碑除幕式の當日襲名の披露の花筵を故師の宅に於て開催せり、爾來師の遺志に基き專心斯道に志し多數の門下を教養し今日に至つた、明治四十年以來氏の養成したる社中は實に一千五百餘名の多數に達して居るといふ。

昭和三年三月雅友一統の推擧に依り正風弘祖巖松齋貞一鵬の第三世を襲ひ同年十一月十一日武州大宮町氷川公園ホテルに於て披露の生花大會を開催した。

抑も初世巖松齋は同流の祖であつて文化文政の頃大江戸を初め全國に當流を弘めた、江戸に三千五百人其他全國に一萬餘名の門生を教養し四十七歳にして嵯峨御所より法眼の藝位を拜受した程である。而して獨り花技に於て達人たるのみならず博學多識の人で多數の傳書を完成し『松の翠』上中下三卷、『極秘懐中傳』上下二卷の著がある。嘉永三年その社中である所の官幣大社氷川神社三官主の主催にて同社前に奉花大會を催したる時は特に嵯峨御所より田川氏が花見分として列席した、現に同社東寄南に其の大碑銘があると、尚同弘祖は二十九年間中絶したれば、第五世貞松齋氏は常に之を憂ひ、再三同門中に中興を慫慂したるも其の期に至らず遂に他界した、されば氏が三世襲名の大會には現第六世貞松齋氏は態々京都より列席して祝意を表したのであると。

氏は大正十一年皇太后陛下大宮片倉製茶所に御成の節挿花台覽の光榮を荷つた外、高貴の方々に挿花を御覽に供したる事は一再に止まらない。

氏は『近時花道は家庭的に非常なる發展をなしたが、今一層上下の別なく一般的民衆的に發展せしめねばならぬ、それには短日月にその一般を習得し得らるゝ事、女子に對しては殊に其必要を感ずる、徒に技巧に走らず花卉の自然を尊重して時代化することが必要である』との意見を持ち專心研究に精進して居る。

氏は多趣味の人で石州流の茶道觀世流の謡曲、天神眞揚流の柔道に堪能で何れも免許を得て居る。

家庭はいと子夫人との間に一男二女あり、長男は大學を卒へ、長女は高女を卒業し女子職業學校家庭科にあり、次女は家庭にありて極めて和平である。（埼玉縣北足立郡木崎村大字上木崎二一三八）

池坊龍生派華道教授
龍川園 川島霞峰女史

女史は明治二十一年八月十二日、栃木縣芳賀郡山前村字東大島に生る。同村西念寺住職井上萬千代師の息女である。本名を喜代野といふ。

父君の在住する西念寺は、東本願寺派に屬し開祖以來數百年の法燈をかゝげ來り、同派中においても格式最も高し。父君井上師は先師の後を繼いで、數十年に及び、人格學識具はり、鄉人の崇敬を集めつゝありといふ。

女史は年十九歳にして上京、川島家に嫁し、夫君に從つて臺灣に赴いたが、居ること三年、不幸にして夫君は土匪の襲撃に會ひ、同地に客死した。女史は當時殘されたる子女一人を伴ひ、綿々の恨みを懷いて、孤影悄然歸京したのであつた。それより獨立の計を樹つべく決意し、つひに華道において、その方途を發見したのである。蓋し、華道は女史が最も好愛する處のものであつたからである。

川島霞峰女史作

かくて大正元年春、池坊龍生派師範原島先生の門に入り、精勵大に努めたる結果、技術日々練達、大正三年秋には早くも皆傳を許されたが、教授となるに至つた。爾來子弟の養成に專心したが、女史の教授は全く物質を度外して、親切熱心、現に淺草實科高等女學校の囑託として、奉職しつゝあるも最初の三ケ年は全く無報酬であつたといふ。そは愛娘が同校に在學してゐたがため、奉恩の意味もあつたのである。しかし、惜しむべきは愛嬢が大正十五年九月、卽ち同校を卒業した翌年、不慮の病を得、芳紀二十の妙齡を以つて幽明境を異にしたことである。

爾後、女史が一層斯道の精進に力を盡すに至つたことはこゝにいふまでもない處であらう。

なほ女史は表千家茶道に達し、山田流箏曲を好くす。

（東京市淺草區田島町九二番地）

◎

雨そゝぐ花橘に風過ぎて山ほとゝぎす雲になくなり　（藤原俊成）

縫雲未生流花道教授
表千家流茶道師範
絲霄齋 加地春甫女史

女史は明治三十七年三月廿日、愛媛縣宇摩郡新立村新瀨川に生る。本名を春子、石川葭三郎氏の二女である。大正十四年加地家へ嫁す。愛媛縣立宇摩高等女學校の出身である。

生家石川家は、德川時代の素封家にして、幕末時代にありては、土佐藩主山内侯江戸參勤の途次、常にその宿房にあてられた由緒深き名家である。又、婚家加地家は、伊豫西條藩主松平侯の大庄屋であり、且つ鄉士たりし、名譽の家柄である。

加地春甫女史

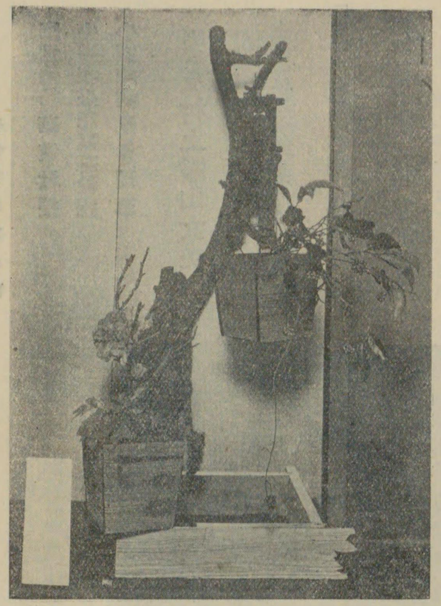
女史は女學校時代、容儀科において、花道の素養を作つたのであるが、大正十年女學校卒業後、一層斯道に心を傾け、同十四年絲雲未生流家元横田茂甫先生の門下となり、爾來、研修を加へて累進、昭和三年一月第一級皆傳を受けて師範とり、當流のために盡す處が多い。

又、茶道は大正十四年より、同じく横田先生について、表千家流を學び、その妙味を體得し、更らにその悟性への精進をなしつゝありといふ。

別に趣味として和歌をよくし、園藝にも深き造詣がある。

家庭は夫君並にその兩親あり、和氣藹然たるものがあると。

女史爲人雅順、將來ある閨秀華道家として嘱望さる。（大阪市港區石田布屋町三ノ一三九）

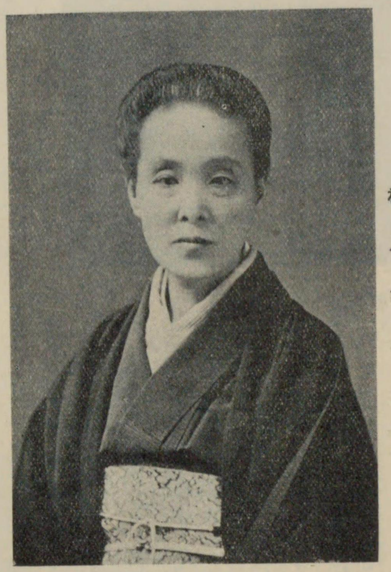


現代華道家列傳

家元池坊華道教授
小原流盛花瓶華教授
小原流國風會理事
春曉亭　村上霞山女史

女史は明治五年京都府保津川村に生る。實名は富野である。

華道は明治二十年頃村上宗僊氏に就きて池坊を習修し、同時に毎月二回上野啓純氏の下稽古にて第四十二世家元專正宗匠の直傳を受けた、現池坊華務課長後藤春庭氏など〻相弟子であつたと。當時觀世音の命日、月の十七日には會て缺席した事のない熱誠さで、一路精進を續けその堂奥を極むるに至つて教授を許され、和服裁縫と共に門生の教養に專念した、明治二十七年東都に出て東京出張所華務課長石田正翁氏に屬して尚研究を怠らず、門葉大に茂り分社奉峰社を許され社長として盡瘁すること多年、大日本總華督の最高役に



村上霞山女史

進み以て今日に及び、現に池坊東京華道會の幹部である。蓋し東都坊門の一大功績者である。

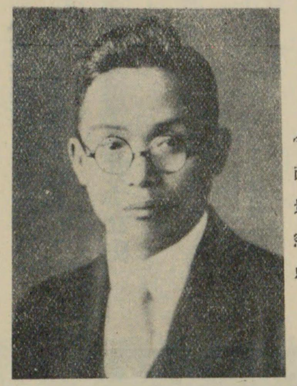
女史はまた小原流盛花瓶華二世家元六合軒光雲先生に師事して盛花瓶華を研修し、有志を糾合して田口理惠、平一鶯の諸氏と共に研究團體研盛會を設立しその發展に努力した、同流が今日の大をなす大に與つて力ありといふべしである。小原流國風會が設立せらるゝや理事に就任し聲望共に高い。

（東京市本鄉區丸山新町三十八番地）

先春流　華道家元
裏千家流茶道教授
一薰齋　今西景窓氏

氏名は幸五郎、明治二十四年二月二十五日、大阪市東成區森小路町に生る。

氏の生家は、十數代現住地にあり、連綿相繼ぐ舊家であり、又富豪として名望家としてその名大に顯る。從來、各種社會事業に貢獻する處、頗る多大であり、現に氏は古市在鄉軍人分會長、同青年團長、森小路町總代、教育會理事、大阪市教化委員、大宮神社氏子總代等の公職にある。以つて氏の社會的聲望の盛んなるを察すべきではないか。



今西景窓氏

華道には年僅かに十三歳の交より、當時大阪東區釣鐘町在住の名手、遠州流師範福島一景齋宗匠の門に入り、研究すること十數年、その明晰なる頭腦を以つて、具さに斯流の蘊奥を極むるに至る。而も更らに氏の技風は別に獨特の新機軸を出すに及び、大正十一年先春流の一派を樹立し、以つて今日に至つたのである。當流創始に當つては、故渡邊霞亭氏の後援により、流名は清岡子爵の命名によつたものである。

爾來、當流は年と共に、屢々たる勢ひを以つて、發展の一路を辿り、各地に支部を設けて、その普及刮目に價し、又スエーデン皇太子殿下、秩父宮殿下、東伏見宮大妃殿下、閑院宮殿下等の御前に獻花の光榮に浴す。又、昭和四年五月、聖上陛下大阪行幸に際しては、行在所大阪城紀州御殿に、生花謹挿の大命を拜するの光榮に浴した。

今西景窓氏作

餘技としては寫眞、玉突等何れも玄人の域に入るといふ。

家庭は母堂並に夫人の外、一男一女あり、健養すべき家庭である。

氏爲人高潔、巨富を擁してしかも物慾に恬淡、且つ公共心に富み、仁俠の念頗る厚し。（大阪市東成區森小路町六八二番地、電話東三八三六番）

小原流盛花家元幹事
千家裏流茶道師範
香風遠坂マサ子女史

女史名はマサ子、明治十七年三月二十五日を以つて、群馬縣前橋市廓町に生る。

女史は資性溫良貞淑の人、夫君は陸軍將校として、日清、日露の戰役に從軍、赫々たる武勳を建てた人である。

二十六歲の當時、女史は夫君に從つて神戸に移り、小原流盛花家元に入門、爾來技術の向上顯著、その夫君の物故に會するや、一層

遠坂マサ子女史

その研修に精進し、專ら趣味として斯道に從ふ。現に家元幹部として、將又扇港斯道界の權威者として、斯道界のために、盡瘁する處最も多し。

又、茶道はその婚家以前より、千家裏流を修業、蘊奧を極めて現に敎授として、多數の門下を養成しつゝある。

餘技としては謠曲を能くし、又、盆栽に深き趣味と造詣とを有するといふ。

（兵庫縣神戸市熊內町五丁目三十四番地）

未生流華道敎授
裏千家茶道敎授
米倉如水氏

氏は明治二十四年五月六日、兵庫縣有馬郡有馬町に生る。本名を房次郎といふ。

生家は有馬町において旅館業を營み、盛大を極はめつゝあつたが、氏は別に期する處ありて、家業を兩親に託し、二十三歲にして上阪、直ちに現住所において花商を開き現在に及んだ。

氏は上阪と同時に、村上一樹園師の門に入り、斯道を研究すること數年、二十七歲にして松月堂古流家元植松子爵の門に入り、居ること五年諸國總會頭の地に進んだ。後、流內において意見を異にし、未生流荒木白鳳氏の門下として、

米倉如水氏と其の作品

研修を重ね、大に囑望されて同師の顧問となり、最も流內に重んぜられるに至る。

その後、白鳳先生頹齡と共に、隱棲するや、自己門下の師範代並に門下と共に、佐伯未生庵師の客位となり、現在に及ぶ。

氏は一面、徒らに流儀花に囚はれることを不可とし、專ら自由花の必要を提唱して、これが普及に努力してゐる。蓋し、斯道界における進步主義者として、斯界より囑目されてゐる。

得意の花は盛瓶花である。

ゆき子夫人は裏千家茶道を造詣する處深く、夫君を援けてこれが敎授の任に當つてゐる。

社中また多く、斯界の中堅として牢固たる地位を占有す。

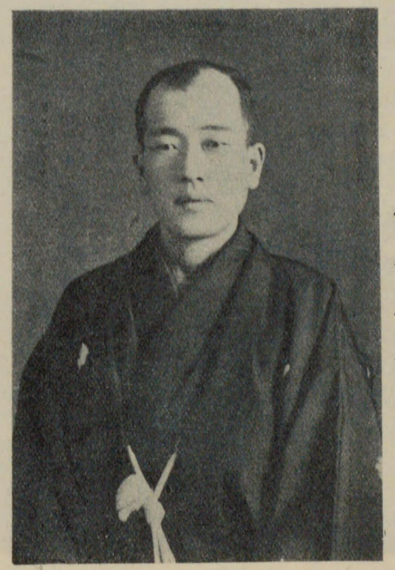
（大阪市北區曾根崎中二丁目五十二番地）

未生流華道八代家元
未生庵 佐伯一甫氏

氏名は幸太郎、明治三十一年十一月十五日、大阪市北區木幡町に生る。未生流八代の家元である。

そもそも當流の始祖は、寶暦年間但馬の人、田沼一甫の創始せるもので、田沼氏は夙に諸國を遊歷して、各流華道の粋を極はめ、遂に未生流を創始したものである。後、二代を未生齋廣甫（現在の齋家）に讓り、自身は未生庵一甫と號して、廣く諸國に流統を廣むべく、行脚に出で、後、大和國櫟の木において歿す。

茲においてその女二代未生庵を繼承し、大阪に出で、東區高麗橋二丁目に卜居、大に流名宣揚に力をいたした。現に流祖の墓は、大和入寂の地にあり、代々その祭祀を忘らざるは勿論、五代未生庵一甫の代に至つて、再建現在に及ぶ。



佐伯一甫氏

なほ、流祖の行脚に出づるに先達ち、兵庫清盛眞光寺に靈を祭るべきを遺言したので、現に同時にその靈を祭つてあるといふ。

かくて、當流家元は、累代未生庵一甫を名乘り、流祖傳ふ處の『未生庵一甫』なる印判を使用するのみでなく、その正統なるを證するため、家元繼承に際し、流祖相傳の秘密箱と稱する小箱を繼承することに規定されてゐる。而してこの箱は正統者にあらざれば、開披すること能はず又開くべからざるものとされてゐるのである。

今や氏は家居を、風光明眉なる地に相し、朝夕風流三昧の境を樂しみ、斯道の普及振興に努力しつゝあるのである。（兵庫縣武庫郡住吉村唐松七八四番地）

なほ、現八世家元一甫氏は、前途頗る春秋に富み、しかも、技倆優秀にして、爲人溯達、接するものをしてその德風に感化せざれば止まざる統師の大器を備へてゐる。當流の前途亦祝福されたりといふべし。

なほ、當流の門葉は、全國各地に亙つてゐるが、就中、關西の地においては、その勢力最も盛大であること、人の知る如くである。

現家元たる氏は、別に茶道にも達し、その蘊奧を極む。

四家謹之助氏作

眞成流華道教授
眞曉齋 四家謹之助氏

氏は明治二十五年九月十九日を以つて、現住地、大阪西淀川海老江町に生る。

氏の生家は七代以前より、現地に住居する舊家であり、且つ資産家であつて、氏の先代より商業に從事したが、氏は父母の業を繼がず、その豐富なる財力を以つて事業家として活躍するに至つた。

而して、氏は今や大小幾多の事業會社を經營し、或はこれに重役たるの外、共公事業の方面にも關係すること八團體、これらの表彰狀感謝狀のみにても、數十に達する程である。以つて氏が社會的地をト知するに足らう。

氏は、乎十五にして、當時眞成流の師範として、錚々の名ありし、小林眞旭齋氏（現在の新華道提唱者小林鷺洲氏）に師事し、研修すること二星霜、後、同流家元眞成齋萬力谷宗匠の門に入り、技を磨くこと數年、大正四年會司に累進し、なほ研鑽を積むこと三閱年及び、具さに當流の蘊奧を極むるに至つた。

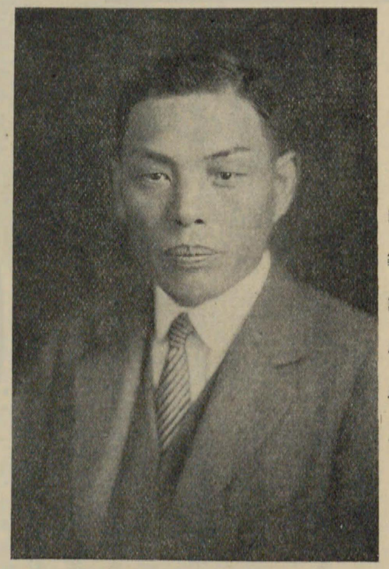
氏は資性篤實にして俠氣に富み特に師を思ふの情頗る厚く、業成るや當流の普及と舊師に報ゆる爲め、何等物質的報酬を受くることなくして、自邸附近の有志者を斯道に導き、熱心に斯技を敎ふる所があつた。爲めに氏の門にあつまる同好者頗る多きに達し、斯道の開發に資する處大であつたが、事業の繁忙漸く甚しく、ために一時これを遠ざかるを餘儀なくされるに至つた。

かくて、現在では忙中の閑を割いて、時々自ら斯道の三昧境に遊ぶを樂しみとす。

一面氏は研究心旺盛にして、現在においても、數多花道の文獻を涉獵すると共に、實地について葉蘭の研究に潛心してゐる。

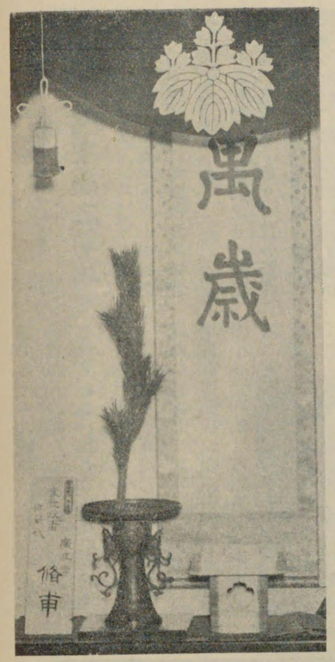
餘技としては、淨瑠璃を好み、入神の境にあるといふ。

滿壽子夫人（明治三十三年生）との間に、一男一女があり、清福なる家庭である。（大阪市西淀川區海老江町上二丁目一九九番地、電話土佐堀四七一七番）



四家謹之助氏

未生流華道役者
千家裏流茶道教授
廣正齋 **駒田修甫氏**



駒田修甫氏作

氏は安政元年六月一日、三重縣河藝郡椋本村に生る。駒田八左衛門氏の二男、名を兵次といふ。

生家は代々鄉國の鄉士にして、父君八左衛門氏は、年寄役を勤め、令兄は庄家たりし名家である。氏亦明治維新まで、鄉士として勤務したるも、維新後の明治八年神戸に出でゝ警察界に入り、爾來明治三十五年まで、兵庫警察界に活躍した。

華道は年二十歳の頃より、未生流家元五代未生庵先生に師事し、爾來、忙中を割いて精進する處あり、約二十三年前より師範として立ち、現在に至るまで、多數の門弟を教導し、現在神戸市における未生流内の最古參者にして、又最高級者であり、更らに斯界の長老として重きを成してゐる。

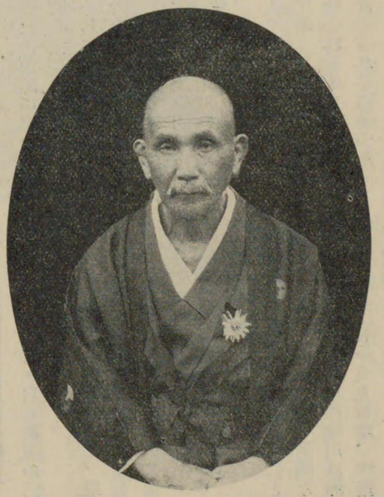
茶道も華道と共に、千家裏流の修業を積み、現在的傳教校の最高位に在るのである。茶名を宗丘と號す。

氏の長き華道生活において記すべき多くのものあるが、その内天皇陛下皇太子に在せし頃、軍艦伊勢にて神戸に入港の當時、軍艦内御室に獻花し、金一封御下賜の光榮に浴し、多大の面目を施した。又氏が六十二歳の交、湊川神社に獻花獻茶したる外、貴人の前に獻花獻茶の數は、枚擧に遑あらざる程の多數である。

餘技として、觀世流謠曲を好み、これに達す。

家庭は、夫人の外に、令息夫妻あり、圓滿至幸の家庭を營む。

（神戸市花隈町三二〇番地）


駒田修甫氏

未生流華道教授
同家元準目代
桃佳齋 勳六等 **前田永甫氏**

氏は明治十四年四月一日、兵庫縣三原郡神代村國衙に生る。名を永藏といふ。

氏は鄉里三原郡三原高等小學校を經て、明治二十九年兵庫縣立洲本中學に入學、同三十一年八月上阪して、東區博勞町二丁目全科醫高橋素平氏方において、醫學を修業の傍ら、成章塾において、漢學及び數學を修業した。

同三十五年一月、第四師團歩兵第三十七聯隊に入隊、三十六年十二月陸軍三等看護長に任ぜられ、翌三十七年三月、動員令下るや、同六月陸軍二等看護長となり、同年九月大阪豫備病院附を命ぜらるる同年末更らに歩兵第三十七聯隊附となり、同三十九年三月大阪衛戍病院附となり、同年四月戰役の功によつて、勳七等に叙し、青色桐葉章及び金三百圓並に從軍記章を下賜さる。

かくて、同四十二年九月、第四師團軍樂隊附、同四十四年八月大阪衛戍病院附同年末大阪陸軍地方幼年學校附となつた。大正四年大禮紀念章を授與され、同六年八月陸軍上等看護長に昇進、同年十月勳六等瑞寶章を授けられ、同年七月に郡會頭免狀を授與さる。更らに同四年四月准國會頭、同年十月華術師範代免狀を許され、五年三月國會頭に任ぜられた。それより六年四月准總國會頭七年四月總國會頭、八年四月諸國准總會頭十年四月諸國總會頭等を經て、十四年九月家元准目代となり、昭和三年四月家元紋章紫幕を免許され、現在に及んだ。

前田永甫氏

又、この間大正九年五月より、大阪市立泉尾家政女學校教員を囑託され、同十一年三月同校廢校と共に大阪府立泉尾高等女學校書記を拜命し十二年三月退職、同時に同校の教授を囑託され、同年四月大阪市立高女華道教授を囑託さる更らに同十二年三月市立眞田山實科女學校教員囑託、同十三年四月府立清水谷高等女學校教員を囑託され、昭和三年九月府立大手前高等女學校教員を囑託され、何れも現在に及ぶ。

氏や人格高潔、技風超凡、その風を望んで、社中亦頗る多く、當流の重鎭として重きを成す。（大阪市東區東雲町三丁目二四二番地、電話東三〇五一番）

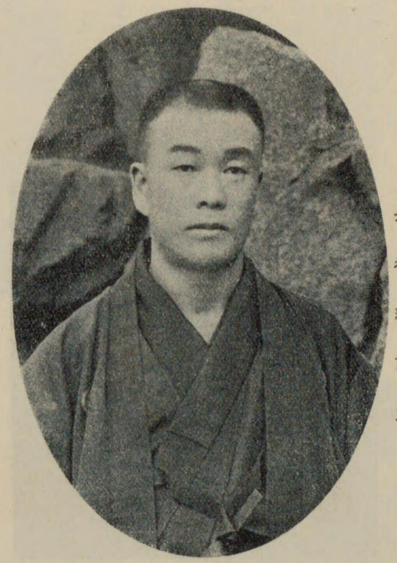
未生流華道諸國會頭
廣豊齋 長谷泰甫氏

氏は明治十七年五月二十四日、大阪西區京町堀五丁目に生る。本名を米次郎といひ、荒木家の二男である。後、氏が二十六歳の時、長谷家にを繼いで、今日に至る。

養家は當時、盛大に商業を營みをり、氏もまたこれに從事してゐたが、大正九年嗣子三郎氏に家督を讓つて、自らは夫人と共に現地に隱棲し、以つて好める華茶道に專らなるに至つた。

氏は大正三年、大阪東區釣鐘町なる未生流師範現同流淮目代西村廣松齋東甫先生につき、初めて華道を學ぶことになつた。研究すること四星霜、大正六年師範を許され、その後家業の傍ら趣味本位に立つて、同好者の請ふがまゝに教授してゐた。

而して、隱棲後は、專心斯道になる道を選んで、眞の花道精神の發揮に努め、社中を導くや頗る懇切を旨としてゐる。今や、隆々としてその名聲が高いのも、決してゐる。



長谷泰甫氏

偶然ならざるものがある。

氏は流内中堅師範を以つて組織されてゐる百練會の副委員長に推され、技術の琢磨と當流の發展に努めてをり、內外から頗る重んぜられてゐる。

なほ氏は華道の外に、茶道の研修にも淺からず、千家表流盆點の地位に在り、茶名を晴玄と號してゐる。

氏得意の花は頗る多く、就中水仙、杜若等である。

家庭はリキ子夫人との間に一子あり、幸福なる家庭として知らる。

（大阪市北區東野田町九丁目二一〇番地）

◎

蚊帳たゝむ夜や銀瓶の萩芒　支考
萩芒其外は只花野かな　錦城
白菊の行儀にならへ萩芒　李閣
千種咲く中に知る名や萩芒　風瘟
萩をこえ芒をこえて遠砧　士朗
草でなし萩萩薄菊桔梗　長頭丸
よい中の隣や垣に萩芒　八子
道ばたの松をのりこす芒哉　寬美
撫でられて兎見返る薄哉　庵月
穗芒に思ふまゝなる野分哉　芭蕉

正風容眞流華道家元
裏千家茶道引次
一鳳齋 堀 元甫氏

氏は明治二十二年二月十一日、岐阜縣海津郡高須村に生る。名を元忠といふ。堀鍊吉芳忠氏の男である。

堀家は代々高須藩士で、祖父一八郎翁は、自由黨に屬して、板垣退助翁等と共に國事に奔走する處があつた。父君は三十歳の時大阪に出で、商業に從ひ、今より三十年前四十七歳で歿した。母堂久子刀自は古稀に達する高齡を以つて健在、專ら、生花、和歌、俳諸等を嗜み、鄉里にあつて餘生を樂しみつゝある。

堀元甫氏作

氏は十九歳の時り、花道遠山流および茶道裏千家を學び、大に華道界における盛花會としての最初の試みであつたといふ。

又、數年前主唱者となつて、諸流團體松藤會を組織し、初め幹事として薦瘁し、後顧問として現在に及んだ。同會は謂ゆる諸流の親睦と向上とを兼ね、春秋二回大會を催し、斯界に寄與する處大である。

氏は市實科高等女學校、およびその他の團體（病院看護婦）の囑託を受け講習を行ひ、又、各種博覽會等において受賞することしばしばである。

社中の研　機關に鳳容會あり、常にその向上を期してゐる。

餘技としては和歌に長ず。（大阪市此花區今開町一ノ二〇番地）

弘州風盛瓶花師範
表千家流茶道教授
隆郁齋　石井增甫女史

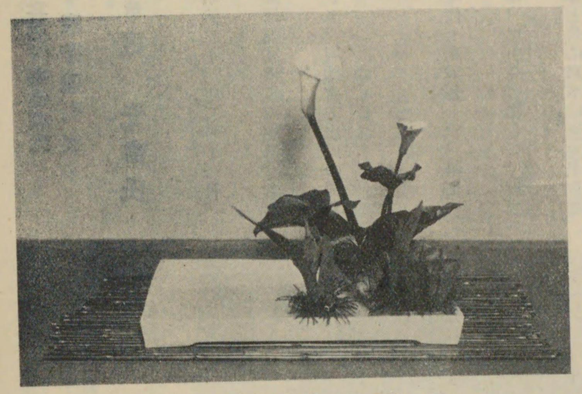
女史は名を美花子といひ、明治三十四年二月五日、大阪市南區笠屋町一番屋敷に生る。

女史は石井家の三女として生れ、後同姓の石井氏に嫁す。資性頗る快活の人である。

花道は大正十二年より、大阪天下茶屋在住未生流師範谷玉甫女史の門に入り、大にその蘊奥を極はむる處あり、後、時代の趨く處を察し、自由花研究の必要を感じて昭和二年弘洲風瓶花家元辻井先生の門に入つたのである。しかし、女史の天稟と淺からざる花道の造詣は、その上達刮目に價するものあり、昭和四年一月には、早くも師より師範免許を得るに至つた。

女史は別に趣味として長唄に長じ、よく一家をなす。

家庭は夫君との二人、社中頗る多し。(大阪市西成區姫松町通一丁目十七番地)



石井增甫女史作

石井增甫女史

家元池坊華道教授
小原流盛花瓶華教授
裏千家流茶道教授
光園　加藤マサ子女史

女史は東京本所千歳町の生れ、本名をマサ子といふ。

花道は趣味として約三十年前より、池坊の門に入りて學び、漸次累進して、現に准目代の高位にあり、夫君歿後より、專ら斯道の教授に從ふ。

又、大正十四年以來、小原流盛花を研究し、技抜群間もなく家元教授となり、現に兩々相俟つて、社中の養成に從ひつゝある。

茶道も亦幼少より裏千家を學び、風に師範となつて、花道教授を極はむ。

女史は大阪相愛女學校を卒業、後直ちに未生流大家荒木白鳳先生の門に入り、斯道の研修に入り、更らに大正十年小原流盛花家元小原光雲先生に師事し、何れも技術優秀、師範を許されるに至る。しかも、一層その蘊奥を極はむべく、精進の一路を辿ると共に、門下の養成に盡してゐる。

裏千家茶道は大正八年より修業に入り、間もなく引次ぎを受け、現に家元今日庵宗匠について、その秘奥を學びつゝあるのである。

趣味として長唄、謠、常盤津等を好み、何れも一家を成す。

夫君との間に一子あり、母堂亦矍鑠として、頑健を誇る。(大阪市北區木幡町三十一番地)

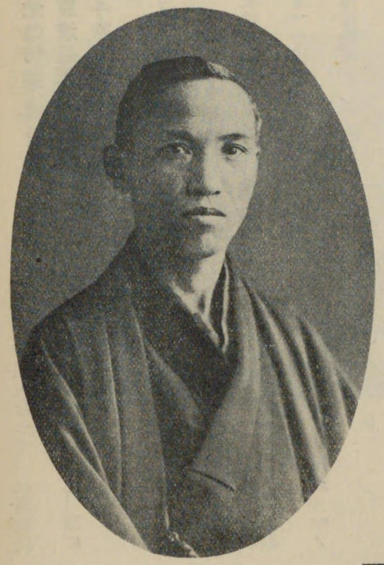
小原流盛花瓶華家元教授
未生流花道教授
裏千家茶道教授
光玉　山中道子女史

女史は明治廿七年三月十八日、大阪市東區道修町二丁目に生る。

本名を道子、藥種問屋山中家の長女であり、現に同業を營みて盛大

山中道子女史

池坊東京華道會會長
曉華園 林 鶴遊氏



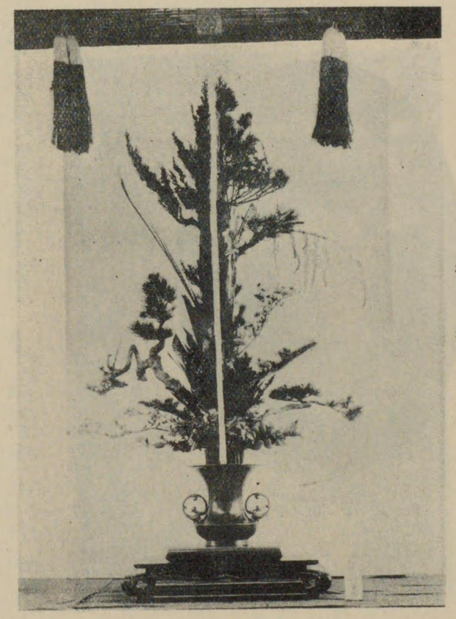
林鶴遊氏

氏は岐阜縣揖斐郡揖斐町の人、明治十三年二月十五日を以つて生る。本名を治郎七といひ、林秀助氏の男、東都池坊界一方の重鎭である。

生家は現に農を業としてゐるが、その先は織田時代における美濃十傑の一人、稻葉一徹であつて、爾來、連綿今日に至る由緒深い名家である。

氏は、明治二十四年より、華道に志し、鄉里における斯道の大家河合源左衞門先生について、池坊を學ぶ處があつた。又、茶道は林滋園先生について、その蘊奥を極めたのである。

後、明治四十四年十一月上京、一層斯道に精進すると共に、門下を養ふことに努め、今や社中千數百人を出し、その功勞偉大なるものがある。



林鶴遊氏作　六七二

曩に東都池坊大團體の一なる池坊華道研究會の副會長として、斯界に隱然として重きを成し、更らに昭和四年六月、池坊東京華道會を設立し之を主宰するに至る。

春子夫人（明治十三年生）との間に長男勇君（明治四十年生）二男小十生君（大正六年生）三女ひろ子嬢（大正十年生）の二男一女があり、圓滿平和なる家庭である。（東京市外原宿一三二番地）

昇玉流華道家元
螢雪庵 保科峰一氏

氏は明治七年一月八日宇都宮市塙田町に生る、保科次郎氏の男である。同家は代々宇都宮藩主戸田家に上席家老として仕へたる名家であると。父君次郎氏は文武兩道の達人にして、殊に書道をよくし書家として知られ多數の門弟を有した、祖父君も亦趣味の人にして自ら無塵軒と號し古流花道を皆傳まで習修し和歌に堪能なりしと、氏は祖父君の指導を受け幼時より風流の志があつた。青年時東京に於て藥學修業の傍ら、當時名聲あり し正風遠州流鷹派五世家元小高室内及び店頭の裝飾美術化等にも過渡期に際しては、住宅の構造、進花道を創始し昇玉流として發表したのである。現に社中の研究機關螢雪會を設け本部を宇都宮市西塙田町に全國に支部を置きて多數の會員を抱擁し盛況を呈して居る

氏は昭和二年十一月都新聞主催全國華道家投票に衆望を荷ひて十傑に當選し、聲望共に高し。現に其の當選者の花團都木和會の同人として斯道に盡瘁しつゝある。

家庭は夫人春枝女史、長女文子嬢（高女卒業）次男久男氏（中學在學中）あり、圓滿和平である。

（宇都宮市塙田町三二七番地）

興風古流華道家元

松楓齋　**西尾理錦女史**

女史は舊幕臣にて極めて嚴格なる家庭に入と成り、幼少の頃より花を嗜み、十七歲にして古流花道と千家今日庵の茶道を學び、刻苦精勵二十有餘年に及び斯道の蘊奥を極め妙諦を體得した。

昭和二年十一月都新聞主催全國華道家投票十傑に當選し、頓に名聲が揚つた。同年十二月侯爵久我常道氏其他有力者後援の下に研究機關興風會を設立した、また時に興風古流と稱する一流を樹立し推されて之が家元となり、一層斯道の發展と向上に努力を續けて今日に至つた。

興風會の役員は　の諸氏で毎月研究會を開催し一路斯道に精進しつゝあり。

總裁　侯爵　久我　常道
會長　松楓齋西尾　理錦　女史はまた都新聞十傑當選者の
總司　高橋　理伯　花團都木和會の同人として斯界に
補佐　鈴木　理作　知られて居る。女史はまた池坊流
倉田　理重　の立華に興味を持ち、興風古流と
島田　理常　しての立華をも編案すべく研究中
代師範　中田　理花　であると。（東京市下谷區谷中坂町
江上　理圭　六十五番地）

清和古流華道十世家元
表千家茶道教授
巖松齋　**中川一昇氏**

氏は明治二年五月二十五日、山梨縣東八代郡英村大字中川に生る。本名を軍造といふ。當流九代家元青松齋一鷄氏の息である。

中川家の祖は、中川左近太輔源太郎義明といひ、弘錄元年中川村の民家に偶居し、爾來、同地に留りて神官となり、又不老庵一甫と號して、花技三昧境を樂しむ。これ當流の濫觴である。

かくて、二代春秋庵一翁、三代春草庵一景、四代春壽庵一枝、五代春松軒一光、六代禎松齋一桂、七代松祥齋一器、八　千松齋一天、九代青松齋一鷄を經て、明治二十八年九月、氏がその十代を襲ふにいたつた。

氏は、郷里において製糸工場を經營し、華道には十八歲より研究に着手、その蘊奥を極めて、家元十世を繼承後、甲府市において、華道教授に從ふ。この間同市へ先づ以つて精神修養が第一條件なりと呼號して、多くの人々に無料教授を開始し、一般の感謝を買ふと共に、斯道のために多大の貢獻をなしたのである。

大正二年橫濱に移住し、同十一年秋特別大演習に際し、今上陛下攝政宮として御行啓の砌、大本營を能くし、號を花蝶と號して俳句に巧みである。

神奈川縣廳に生花献上の御用命を拜す。

親を懷ふ
涼しや親の植ゑたる松の下

故郷へ寄す
坂越して見れば花咲く名所哉

年の阪ゆれば花の麓かな

長男定義氏目下、千葉縣四ツ街道野戰砲兵四聯隊に入隊中であり、次男喜一氏は實業に從ふ。社中多く、正教授の數も相當數に達す。

因に氏は生來頑健にして洒脫、平生八十歲を以つて目的を達し、百歲にして門弟一同を集めて、大往生を遂げる心掛けであるといふ。以つてその意氣の旺んなるを思ふべし。（橫濱市福富町西通り三十九番地）

小原流盛花瓶華教授
家元池坊華道教授
松山一聲女史

女史は本名秀子、別號を秀香といふ。明治十三年九月二十五日、東京牛込に生る。舊伊達藩士牧野貞哉氏の六女である。二十二歳にして、司法官松山計雄氏に嫁した。

女史は、芝櫻川小學校を卒へ、明倫塾に學び、後更らに立教女學校に入りて卒業す。

華道は十七歳より、池坊柴田八郎先生について學び、累進して現に大日本總華督の最高位に在る。小原流は大正八年に正教授となり、爾來、多くの門下を養成して來た。現に鎌倉大町、同由井ケ濱に出張所を置き、川崎に研究所を設け、社中數百人を擁してゐる。既に教授となつたもの三十人、皆傳三百數十名を出す。

女史は理想的研究會を作ることを目的としてそのために努力し、一面現代の華道界が金錢萬能主義であることに嫌厭たるものあり、この弊習打破に向つて、大に力を用ゐてゐるといふ。

餘技としては裏千家茶道、寶生流謠曲等々である。

主人計雄氏は既に物故したが、在官時代の功によつて、從五位勳四等に叙せられた。

家庭には二女千鶴子(女學校卒)三女惠美子の二孃の外、長男忠の一男二女があり、何れも女學校中學校に在學中である。(横濱市南太田町東耕地二二〇〇番地)

宏道流華道教授
晃雲齋
竹内樂說氏

氏は明治十九年九月、神奈川縣高座郡藤澤町に生まる。本名を八十吉といふ。父君は植木商を營んでゐたが、氏は商業を志して、明治三十二年東京に出で、商業見習ひに從事し、傍ら華を好む所から、遂に華道に入るに至つた。

明治三十四年頃、大和古流及び千家古流を師につきて學び、後明治四十二年より、宏道流小林日雲齋師の門に入り、斯道の研修をつゞけ、今日に至つたのであるが、現在商業の傍ら、子弟の教養に努力し、現在社中五十名を有す。家庭は夫人エイ子との間に長女好子の一子あり、極めて圓滿である。

(神奈川縣高座郡藤澤町藤澤五五六番地)

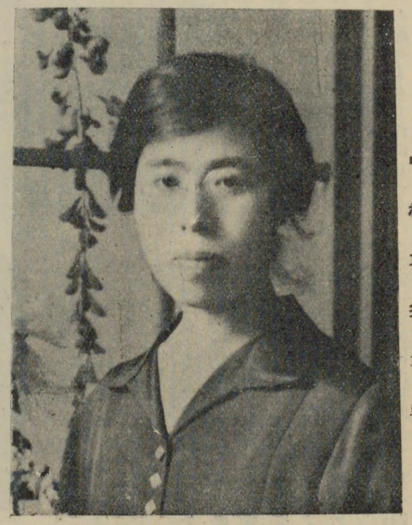
◎

木犀の書はさめたる香爐哉　嵐雪
木犀の花の香强し雨上り　春郊
頂間見の梟に木犀匂ひけり　也有
木犀や寺の匂ひは櫻より太無
木犀や秋もほのめく梅の藪　同
木犀やほめて廻れど木は見えず　同
朝日より紙燭して見る芙蓉哉　硯渓
霧雨の空を芙蓉の天氣哉　芭蕉
夕露を花にとぢこむ芙蓉哉　成美
牡丹より芙蓉の花の見事哉　馬來

竹屋流華道教授
綠艸庵
中村正秀女史

女史は東京本郷駒込神明町に生る、實名を須磨子といふ。父は醫師堀口謙齋、母は歌人にして同菊子の女である。

華道は竹屋流關東家元石原正風先生に師事して、文人投入盛花、及び煎茶を習修し、その堂奥を極め國會司に昇進し、東京に於て數年間教授に從事した。

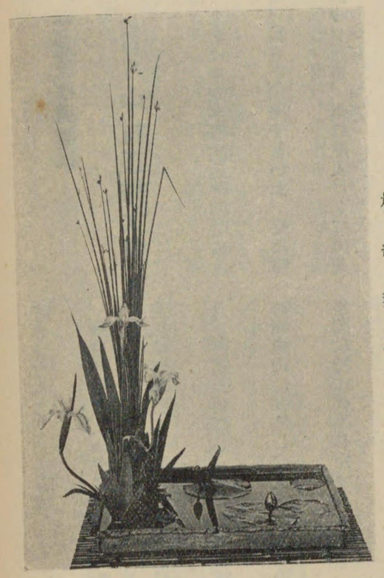


中村正秀女史

大正十五年英領加奈陀に渡航し、晩香坡市に教場を開設し、門下の教養に鋭意精進して居る。彼の地に於ける門生二百餘名に達し前途頗る有望であると。(英領加奈陀晩香坡市ダンレー七街一四三番

家元池坊華道教授
素堂風盛花投入家元
表千家茶道教授

岸部素堂氏



岸部素堂氏作

氏は名を修三、明治十六年十二月九日、大阪市浪花區河原町二丁目に生る。岸部保松氏の男、大阪市立商業學校の出身である。

生家は商業を營み、豪商として知られてゐた。氏は早くから斯道に趣味を持ち、年十三にして遠州流を修めたのであるが、その後學業の進むに從つて一時中止し、校門を辭して後、再び池坊華道に精進することになつた。

かくて、二十七歳の時、師範となるに至つたが、素より資産を擁しての趣味本意であるから、門下を養ふと共に、ますます精進の一路へ邁進したのである。從つて職役も次第に昇進し、數年前最高職役大日本總華督となつた。大阪斯界の中堅として聲望が高い。

氏は自己直屬社中の外、婦人團體十三母の會および母の會神戸支部等の講師として教授すると共に、大阪花道團體大阪中央會の一員として、多數の婦人に無料教授をなす等、斯道の振興のために、盡す處頗る多大である。

又、自ら主唱者となつて、大阪池坊同人會なるものを組織、その代表者として活躍し、更らに社中の研究機關として、若葉會を組織し、年二回の大會を催す。

茶道は表千家家元直門となり研窮すること多年、蘊奥を極む。

その外の趣味も多方面に亘つてをり、文藝、俳句、謠曲、俳畫等を嗜んでゐる。その近吟を示せば、次の如くである。

留守に來て水仙さむし佛の灯

大洋に富士よろよろと初日影

家庭は重子夫人（明治二十一年生）との間に長男鷹士君（日本大學商科在學）二男昇君（府立北野中學在學）三男昌生君（市立鬲町商業學校在學）長女万喜子嬢、二女田鶴子嬢、四男保孝君、三女輝子嬢の四男三女あり、子福者として羨望さる。

（大阪市浪速區河原町二丁目一四五二番地、別宅兵庫縣甲山甲陽園）

岸部素堂氏

家元池坊華道教授
小原流盛花瓶花教授
藪ノ内流茶道師範

香霞園 宮原華雲女史

女史は明治十七年九月十一日、東京麹町富士見町に生る。名を恭子、岡山藩士津田弘道氏の三女である。

生家は累代池田公の奉行、父君弘道氏は壯時司法官として令名あり、後、岡山市二十二國立銀行の頭取たりし人である。

女史は岡山縣立高等女學校を卒業、後法務官宮原末太郎氏に嫁す。夫君末太郎氏は、後大阪において辯護士となり、二十餘年間華城法曹界に活躍したのであるが、約八年前に長逝した。

而して女史は鄉里岡山市に在る頃より、池田香月先生について、池坊及び藪ノ内流茶道を修めて師範となり、後大阪に出づるに及んで、小原流家元師範奥野先生の門に入りて、盛花瓶華の研究に入つたのである。

宮原華雲女史

昭和三年春上京して以來、東都斯流の大家伊藤雪峰女史の門に入つて、なほその研究を繼續し、技いよいよ圓熟の境に入る。

餘技として琴曲、謠曲および洋樂等に堪能である。

故夫君との間に一男一女あり、長男穣氏（明治三十三年生）は、早稲田大學英法科の出身、目下大正運輸會社に勤務し、長女道子嬢（明治三十八年生）は、兵庫縣立第一高等女學校の出身、音樂に長じ、特にピアノに巧みである。（東　市外大井町原五二二一番地）

雙月流華道教授
小原流盛花教授
表千家茶道教授
瑞峯 **野口清子女史**

女史は明治二十八年四月二十五日、青森縣下北郡下風呂に生る。素封家嵯峨慶助氏の長女である。父君慶助氏は函館および樺太に、廣大なる漁場を有し、本邦樺太漁業開拓の功勞者と云はれる人である。女史は後會社員野口恭三郎氏に嫁した。

女史は北海道函館在住の古遠州流並に小原流盛花師範阿部鑑子女史について、生花および盛花の研究に着手す。阿部先生は、同地において、今日に及んで居る。女史は又同じく家元に於て盛花投入の研究を積み、已に一家をなしてゐるが更に女史の經歷としては、四十年一月戸板裁縫女學校入學、同四十三年七月卒業、四十四年東京和洋裁縫女學校に於て、裁縫教授法講習を受けた。また同年四月同校教員養成科へ入學、大正三年四月卒業、現に松本和洋裁縫女學校を經營してゐる。(松本市四谷町一五三二番地)

野口清子女史

かくて、大正十四年上京したのであるが、女史の求道心の厚き、自らの精勵との結果、技倆抜群前途大に嘱望されるに至る。然るに次にその普及を來し、現在同地方の花道は、隆々たる勢ひを以つて發展するに至つた。蓋し、女史は同地方斯道の開拓者としての偉大なる功績を擧げたのである。

おいては勿論、全國的にも知名な大家であつて、女史は師の薫陶と自らの精勵との結果、技倆抜群前道の普及宣傳に大努力を試み、漸直ちに伊藤雪峰女史について、更らに小原流盛花の研究に出精して倦むなきものがある。

なほ、女史の舊師阿部先生は、昭和三年從來研究の結果を綜合し、別に雙月流なる一派を樹立するに至つたので、同時に女史もその家元師範として、今日に至つた。

又、女史は茶道も函館當時より、知足庵後藤宗朴先生について、表千家を修め教授となる。

外に生田流琴曲、賓生流謠曲等を能くす。(東京市外戸塚町八四四番地)

利休古流華道教授
美心庵 **佐々木晃月女史**

女史は明治十二年九月十日、長野縣北安曇郡常盤村西山區に生る。本名ます、父君宗元氏は醫師として令名があつた。

明治四十四年四月より大正十二年四月まで利休古流家元榮心庵傾月師に就き華道の傳授を受け、皆傳の免許は大正七年十一月授けられた。大正七年より九年まで家元補佐職を務め、また大正十一年四月以來利休古流洗心會の幹部として

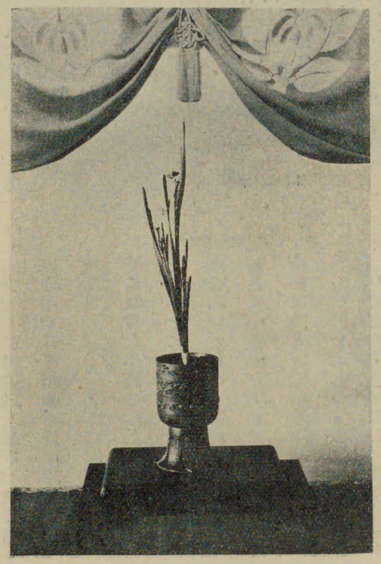
◎
さくら花ちりぬる風のなごりには水な
き空に波ぞたちける　(紀貫之)

家元池坊華道教授
同　松清社々長
小原流盛花瓶華教授
翠香庵 **日暮清風女史**

女史は明治二十年二月廿日、千葉縣下に生る。本名を登女といふ。明治四十年の交より、池坊華道の研究に入り、爾來、次第に興味を深くし、現在大日本正教授、松清社長の地位に在る。女史は生來斯道を好んだこと勿論であるが、一面斯道修業が精神修養上、偉大の効果あるを感じ、一層その研究に力を入れたのである。

又、昭和三年一月より、東都小原流の名手伊藤雪峰女史についてその研究に入り、教授となつたが、なほ只管その蘊奥を極はむべく精進中である。技術最も優秀前途を嘱望さる。

茶道は志乃流を學び、別に長唄、箏曲等の趣味を有す。(千葉縣東葛飾郡西海神八〇〇番地)

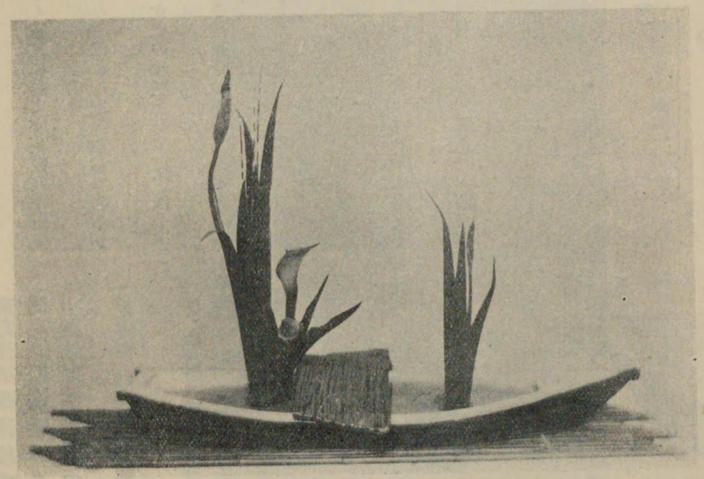


日暮清風女史作

南宗瓶華教授
小原流盛花投入教授
喜晴軒　本多玉英女史

薩南の風雲危急を告ぐる明治十年八月一日、女史は東京市本郷區金助町二番地に呱々の聲を擧げた父君は野田宏通氏と呼び、氏はその長女である。本名玉子。

お茶の水附屬小學校を經て明治女學校に學び、後夫君本多芳氏に嫁して琴瑟よく和し、二男二女を儲けたが不幸にして男は何れも夭折した。氏が花道に志した動機は、農藝に多くの趣味を持し千葉縣下に於て農場をさへ經營した夫君芳氏の感化にも依るが、またより大なる誘引は實にこの悲嘆を醫さんがために外ならないものがあつたのである。



本田玉英女史作

女史は始め古流を學び、次で南宗瓶華初代早川松雨氏に師事して精勵恪勤、著々として進境を示し、終に教授を免許されたが、知らんとするところに飽くまで渇仰して息まない女史は、昭和三年更らに轉じて小原流を志し、現在研美會會長工藤光洲氏の薫陶を受け、優秀の成績を示しつゝある。

女史は資性溫厚にして圓滿、一度び女史の溫容に接したる者も、その洋々春の如き風格と慈母の如き溫顏は長く忘れ得ない處であるといはれる。

二女の內長は神藏氏に嫁して東京にあり、次は門脇氏夫人として大阪に在住する。

花の外に幸流鼓、及び裏千家茶道を好み、何れも相當の域に達してゐるとの事である。(東京府下下大崎一八八神藏氏方)

家元池坊華道教授
小原流瓶華盛花正教授
高澤秀月女史

女史は本名照野、池坊に於ては祥光園郁靄と號す、明治二十三年八月北越新潟に生れた。

明治三十六年東京日本女學校に入學、同四十年夫君雅雄氏を迎え翌年相携えて京都に移つた。氏が始めて花道に志したのはその折で四十二年池坊教授職吉田春子氏の門に學び、四十四年皆傳を得進んで家元に入門、大正元年脇教授、同七年家元教授を免許された。

大正十二年八月より工藤光洲氏に就きて小原流盛花瓶華の薫陶を受け、成績常に群を拔き、大正十五年正教授を得た。

人に接して溫厚細心、眞卒の天性はよく女史をして今日あらしめたものといふべきである。

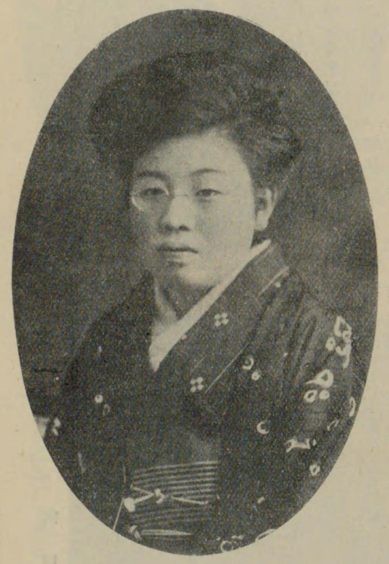
餘技として山田流箏曲、表千家流茶道を好くする。東京國風會員(東京市牛込區原町三ノ四二)

高澤秀月女史と其の作品

小原流盛花瓶華教授
古流生花師範
松嶺齋　茂木理千女史

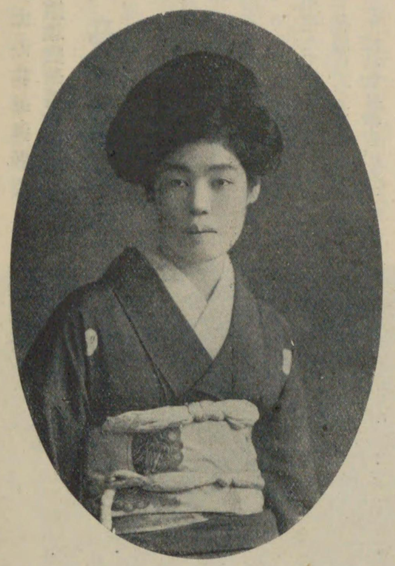
女史は明治三十六年二月四日、栃木縣足利市昌平町に生る。本名を千代子といふ。父君は茂木桂之助、母君は同くま子である。

華道は初め古流を習修し、技能熟達、各階級を經て師範に昇進した、後小原流盛花瓶華に志し、研美會長工藤光洲先生の門に入り研鑽すること年あり、累進して正教授に昇格して今日に至る。熱誠にして技能卓越、大に將來を囑目されて居る。(東京市麹町區元園町一丁目三十四番地)



茂木理千女史

弘洲風盛瓶花師範
遠州流花道諸國總會司
茶道表千家流教授
煎茶花月庵流教授
榮清齋 **熊田光枝女史**



熊田光枝女史

女史は明治三十六年十一月十八日、現住地大阪市南區高津四番町三四九番屋敷熊田家の五女として生る。

女史は幼時より草木花卉の類を愛し、大正四年早くも、高津一番町在住遠州流師範岩井榮玉齋先生の門に入つて、華道を學ぶに至る。爾來、精進の功顯著にして一家を成し、現に當流内の重鎭として、嘱望を集めてゐるが、更らに自由花の研究を志し、昭和二年より弘洲風盛瓶花の家元辻井弘洲先生の門に入つて、當流を研修し、その進境拔群なるを以つて、同四年師範を免許された。

又、茶道は表千家流および花月庵流煎茶を究はめ、何れも師範の地位にあり。

この外長唄、俳句、園藝等の趣味あり、何れも至藝の域に入るといふ。

女史は兩親兄弟十一人の靄々たる大家族の内にあり家政を執るの傍雅道への精進に專らである。(大阪南區高津四番町三四九番屋敷)

熊田光枝女史作

遠山正流花道教授
遠山流盆石教授
同　盛花投入教授
裏千家流茶道教授
里梅齋 **木下惠美甫女史**

木下惠美甫女史

女史は明治三十一年十月十九日、岡山縣邑久郡牛窓町に生る。本名を惠美子、盆石號を嶺美齋欣月、茶名を宗惠と號す。繁吉氏の長女である。

女史は幼少の頃より大阪に出で、堂島第二小學を卒業、花道はその頃から、遠山正流家元福田里了齋先生の門に入つて學び、累進して師範となり今日に至つた。

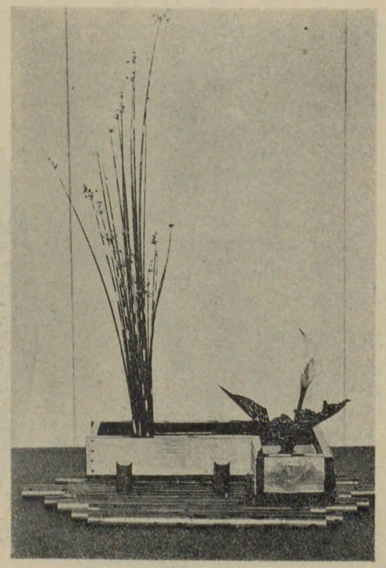
盆石は夙に家元平田桂園氏について修業、その奥堂に達し、盛花投入も同氏について修得した。

茶道は明治四十四年以來、川崎宗卯先生に師事して、研鑽を積み、その蘊奥を極めるに至る。

大正十五年以來、市友會の幹事として盡す處が多い。

餘技としては二絃、長唄、地唄等々何れも頗る堪能である。

家庭は夫君繁氏との間に三人の子女あり、夫君は少壯實業家として、前途を嘱目される人である。



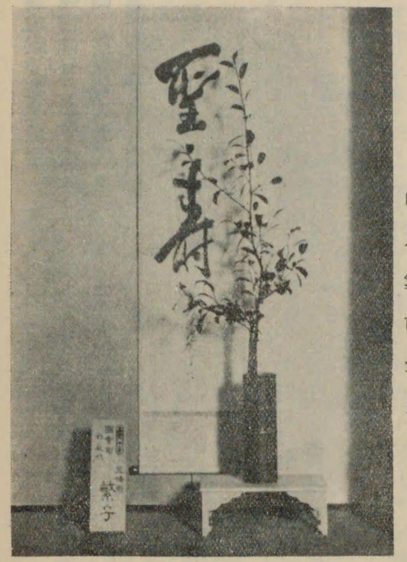
木下惠美甫女史作

從つて女史の花道は謂ゆる趣味本位のものであつて、悠々自適、風流の境を逍遙するものであり、まことに健全すべき境地にある。

(大阪市港區辨天町三丁目三番地　電話西一五五五番)

柿の花立ちよるばかりありしより人の咎むる香こそしみけれ　(讀人不知)

未生流華道教授
茶道裏千家教授
三修齋 山片繁甫女史



山片繁甫女史作

女史は明治十九年五月二十二日、新潟縣高田市三ノ辻町に生る。名を繁子といふ。

生家は高田藩士三和家にして、現在は商業に従事す。女史は同家の長女、後山片家に入嫁した。

華道には夙に趣味を有し、その未婚當時より研修する處あり、後嫁して夫君と共に神戸に移るや、未生流華道を專ら研究して技大に進む。後夫君の歿するや、大阪に出で、茶華道の師範として、多くの門葉を養ふに至つた。

山片繁甫女史

女史は大阪華道界においても、有數の閨秀名手であるが、未生流内の系統なく、全く獨立獨行の立場にある人である。それだけに斯道上における修養には、刻苦精進する處、頗る大なるものがあつたのである。

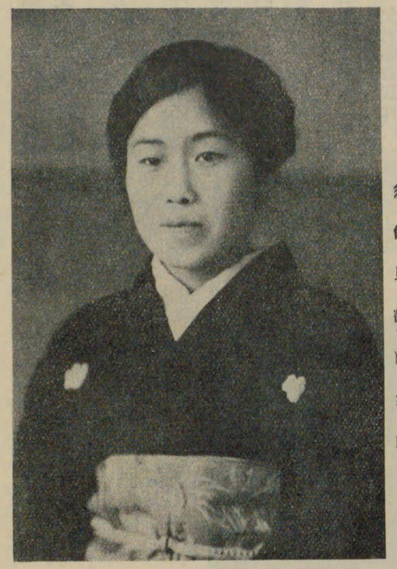
故夫君との間に一子あり、目下神戸高等工業學校に在學中にして、俊秀の聞えが高い。女史唯一の樂しみは、令息の大成である。

（大阪市港區辨天町一丁目一七番地）

又、女史は流儀花の外、盛瓶華においても、特に卓越せる技倆を有する人として畏敬せらる。

緣雲未生流花道教授
表千家流 茶道教授

須佐見鶴甫女史



須佐見鶴市女史

女史は明治廿七年五月五日、を以て大阪府豐能郡池田町に生る。本名を鶴子といふ。大阪裁縫技藝學館の出身　ある。

女史は大正四年より、緣雲未生流家元横田茂甫先生の門に入り、初めて華道に志し、研究三年の後第一級皆傳を許され、家元師範となつた。

現に緣雲會の幹事として、同門中の重鎭である。

茶道は表千家流を、同じく横田先生に學び、夙に師範の地位を得てゐる。

女史は風流の道以外に、社會改善に對しても多くの理想を有し、特に服裝改良問題に就いては、深い造詣と信念とを持つて、その提唱をなし來つた。就中、小學兒童並に一般女學校の服裝改良については、自ら率先してこれが改善を主唱し、大に社會的に活躍する處あり、今や女史提唱による改良服が、漸次一般社會に普及を見るに至り、寄與する處尠少ならざるものがある。

現に大阪服裝改良研究會に屬し、市の囑託を受けて、この方面に重きをなしてゐる。

須佐見鶴市女史作

又、大阪家政女學校教諭として、裁縫並に花道の教鞭をとり、多くの子弟を訓化しつゝある。

女史は頗る多趣味であつて、三絃、長唄、常盤津、觀世流謠曲等々を好くし、その他女藝のすべてに通じてゐる。

吝性明敏、新時代の活動的婦人として、典型的の人である。（大阪市住吉區杭全町住宅地七〇號）

弘洲風盛瓶花教授
交友會幹部

渡邊長洲氏

氏は本名を長次といひ、明治二十二年十月十七日、愛媛縣喜多郡大洲町に生る。渡邊彌吉氏の男である。

生家は代々魚問屋として知られ、父君彌吉氏は、一面花道未生流の趣味家であり、又、茶道の造詣深き人である。

氏は中學を卒業し、家業に從ふの傍ら、父君の風を受けて、風雅の道を好む。たまたま大正十年春、弘洲風盛瓶花家元、辻井弘洲先生が、大洲町において、講習會を開催するや、その會員として研究、爾來辻井氏の藝風と人格に傾倒して、これが研究に一層力を入れるに至る。元來、藝術家的素質の豊かなる氏は、その進境目覺しく、翌年九月には、既に師範を許されるに至つたのである。以つて、その拔群の進歩を察すべきではないか。

渡邊長洲氏作

現在では辻井氏の師範代として、大洲町において、講習大會を催し、當流の普及に甚大の寄與をなし來り、氏の名聲はいよいよ高きに至つた。又、指導の懇切と熱心とを以つて、門下の信賴頗る深いものがある。

なほ、氏は家元春秋の生花大會等にも、多數の會員を指導し、又、交友會幹部として、よく家元補佐の任を完ふす。氏才氣煥發、思想堅實、好箇の師範である。

別に煎茶を極はめ、割烹の趣味深し。(愛媛縣喜多郡大洲町)

弘洲風盛瓶花師範
未生流華道教授
表千家茶道教授

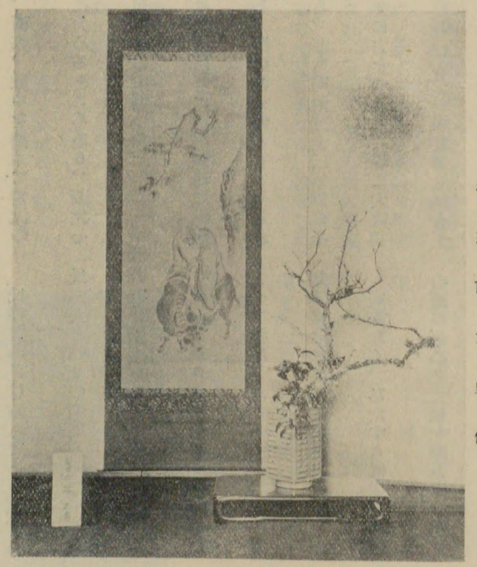
谷玉甫女史

女史は明治十三年二月十五日、現住地たる大阪市西成區南神合町に生る。

女史は明治四十四年より、辻井弘洲先生について未生流華道を修め、爾來、熱心に研究の結果、累進してこれが師範を許され、辻井先生門下の古參者として、斯道のために功勞頗る多きものがある。

後、辻井先生が、大正三年弘洲風盛瓶花を創始するや、女史はこれが研究に入り、この方面においても、最も古き技術家として、重きをなして來た。

又、茶道表千家に通じ、その師範である。(大阪市西成區南神合町五三番地)



谷玉甫女史作

◎
春が香の降りおける雪に紛ひせば誰か別に分きて折らまし　(紀貫之)

◎
春の色の到り到らぬ里はあらじ咲ける咲かざる花の見ゆらむ　(讀人不知)

◎
あはれてふことをあまたにやらじとや春に遲れてひとり咲くらむ(紀利貞)

◎
木傳へはおのが羽風に散る花をたれにおほせてこゝろなくらむ(素性法師)

◎
わがやどの花見がてらに來る人は散りなむ後ぞ戀しかるべき　(凡河内躬恒)

◎
櫻花散らば知らなむ散らずとて故郷人の來ても見なくに　(惟喬親王)

◎
一本とおもひし菊を大澤の池の底にも誰かうゑけむ　(紀友則)

◎
咲きそめし宿しかはれば菊の花色さへにこそうつろひにけれ　(紀貫之)

◎
主しらぬ香こそにほへれ秋の野にたがぬぎかけし藤袴ぞも　(素性法師)

◎
君が植ゑし一むら薄蟲の音のしげき野邊ともなりにけるかな　(御春有助)

帝國遠州流華道家元
天正齋 岩本風月氏

氏は万延元年九月十日、鳥取縣東伯郡下北條村に生る。本名を劫外といひ、地藏院住職である。

氏の生家は代々僧侶であつて、氏は大正四年以來、現寺に住職として在住してゐる。

氏が華道に入つたのは、明治三十二年のことで、師は正風遠州流高木正月先生であつた。居ること十星霜、具さに斯道の蘊奥を極はめ、當流の普及發展のために、功績頗る大であつたが、正月先生歿後は、感ずる處あつて、別に一派を樹つこととなり、帝國遠州と號して、爾來、社中を養ふて當流の普及に力めるところあり、漸次その流布を見るに至つた。

氏は華道の外に、菊栽培に趣味を有し、斯道の大家として知られてゐる。即ち明治三十二年以來その研究に力をつくし、現に大阪兵庫兩府縣に亘る同好者を糾合して、菊遊會を組織し、これが統率の任に當つてゐる。

菊遊會は毎年一回、大阪市市岡パラダイスにおいて、菊花切花の大會を催し、年々その盛大を來してゐる。

氏得意の花は南天である。蓋し、氏が人と爲りの高風を象徴するものといふべきか。

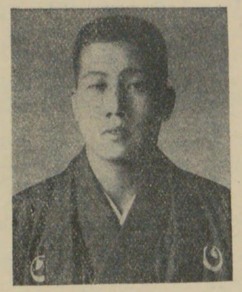
社中は現在五十餘名、氏の手によつて指導されたるもの、その數頗る多きに達してゐる。

家族なく、ひたすら佛道と風流の道に專心して他を顧みず、眞に羨むべく敬仰すべき境地に悠遊してゐる。(大阪市此花區櫻島北通り一番地)

◎

濁らぬを池の心の蓮哉　昌休
筆洗ふ流や蓮の花一つ　曉臺
蓮ふみて物知顔の蛙哉　卜柳
蜻蜓の羽すき通る蓮哉　蒙野
蟬時雨ふるや蓮の花曇　吟江
曉は蓮にこそあれ白牡丹　古井
取こして牡丹を蓮の臺哉　蓼太
木々高く竹深し扨蓮香る　且永
蓮の香や人もありかぬ苔の庭　士朗
蓮さくや水細々と魚の道　吟江
いつか來た牡丹の寺ぞ蓮の花　太無
曉は櫻に負けず蓮の花　同
川骨や花の君子に付まとひ　同
蓮池はまづ中こみの花瓶哉　弘永
鯉はねていよいよ蓮の匂ひ哉　百萬
川蟬の一夜寢て行蓮哉　業言
香一爐蓮に錢を包みけり　其角
折られても又花いけの蓮哉　茂昭
羅に遮る蓮の匂ひ哉　蕪村
口紅の天人ゆかし蓮の花　文可
人柄もしるき家居や蓮の花　它谷
蓮の香や茶には百歩の貰ひ水　闌吏
蓮活て心の淤泥忘れたり　蓼太

駿東流華道教授
同　家元幹事
松梅齋 山中華笑氏



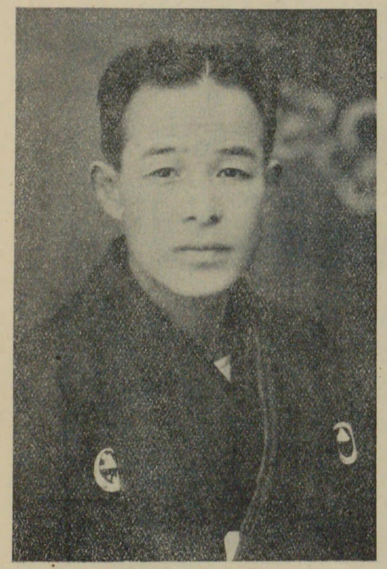
山中華笑氏

氏は本名梅次郎、明治三十七年、千葉縣印旛郡根郷村に生る。山中庄次氏の三男、仕立業を營む。生家は祖父山中忠兵衛氏の代まで、堀田公の藩中であつた。氏は令兄の夭折に會ふて、山中家を嗣ぐに至つたものである。

氏は大正十二年十一月、駿東流家元村田松軒齋氏の門に入り、初めて華道を學ぶ。かくて拮掘精進すること數年、昭和三年四月皆傳を許され、師範となり、現に同家元幹事の地位にあつて、當流のために盡瘁する處頗る多し。

氏も亦水谷、佐瀧の兩同門と共に、孝人會を組織したる一人であり、常に祖先崇拜を念とし、師に仕へて頗る忠實、社中の模範を以つて目せらる。前途亦春秋に富み、當流の新進として、大に望みを囑されてゐるといふ。(東京市本所區茅場町三丁目一番地)

駿東流華道教授
同　家元幹事
松清齋 水谷華勝氏



水谷華勝氏

氏は本名清次郎、東京日本橋に生る。

氏は、大正十二年八月より、駿東流家元村田華光氏について、斯道を學び初め、爾來研修に出精、技倆大に進み、同十五年九月皆傳師範職となる。目下家元幹事の職にあつて、家を補佐し且つ子弟を養成す。

氏は祖先崇拜の念厚く、又、從つて師を思ふの志が深い。かつて、山中、佐瀧兩同門と相圖り、孝人會を組織し、先づ第一着手として師村田家の祖先を祀るべき碑を建立するに決し、爾來、着々工を進めつゝめりといふ。以つてその爲人を察すべし。(東京市本所區綠町二ノ二八番地)

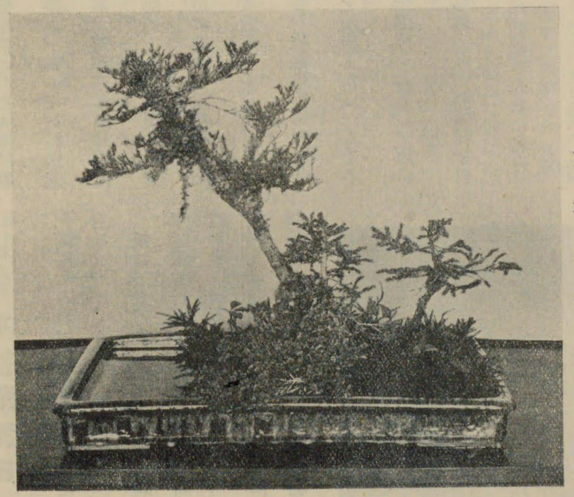
遠州新流華道教授
中尾流盛瓶花教授
表千家流茶道教授

旭翠齋 **西本紹甫氏**

氏は明治三十四年三月十一日、大阪北區中野町二丁目七一番に生る。本名卯一郎、西本萬吉氏の養嗣子である。

嚴父萬吉氏は、大阪における屈指の名彫刻家である。氏は大正十二年三月、西本家に入婿した。

氏は大正十年、遠州新流家元小村秋月先生の門に入り、斯道を研鑽すること三閱年、同十三年十一月師範代の免狀を受け、爾來、一入力を入れてその研磨に精進すると共に、別に中尾流家元中尾昇甫先生について、自由花を學ぶ。かくて、兩々相俟つて、何れも進歩著しく、昭和三年十一月、自由花の准師範免狀を同家元より、免許されるに至つた。



西本紹甫氏

又、茶道は千家裏流を小村先生について學び、更らに表千家を中尾師について修業す。

餘技としては尺八であつて、夙に斯界の名手上田流上田竹童氏について、具さに研修を積むこと五星霜、その皆傳を受けて今や新進の名手として知られ、華、茶道と共に、多くの門弟を養ひつゝあるのである。

得意の花は自由花。

家庭は母堂と二人、人と爲り重厚にして篤實、君子の風格を有し、現に在鄉軍人都島分會本部理事として盡瘁しつゝあり。(大阪市北區中野町二丁目七十一番地)

日本古流華道教授

松詠齋 **人見一導氏**

氏は明治三十一年五月一日、栃木縣下都賀郡壬生町に生る。小島政信氏の二男である。本名を正市といふ。小島家は代々下野鳥居藩士で、既に二十餘代になるが、氏は生家を出でゝ、人見家を繼いだのである。

氏は大正十四年六月九日、日本古流家元松梅齋角田一忠先生の門に入り、斯道を研究し、爾來、技術日に練達、昭和三年三月皆傳を許され、同時に教授職となつた。庵號を永樂庵と稱す。

別に傭軒流茶道を志し、目下熱心に研究中である。

家庭はヒサ子夫人との二人琴瑟よく和す。(東京市外野方町新井四〇〇番地)

靜美流華道教授
靜山軒 **田中綠葉女史**

女史名は益子、千葉縣市原郡戸田村上高根に生る。永野儀三郎氏の女、母堂を富貴子といふ。後、千葉縣長生郡一宮町田中周氏に嫁す。

女史は女子大學家政科を卒業、後更らに同校英文科に入りて業を卒へ、更らに同校寮監の地位にあつた人である。

趣味を有し、山下松夙に花道に浴す。

田中綠葉女史

得意は投入盛花であり、技術優秀、加ふるに教養ある閨秀斯道家として、東都斯界に最も異彩を放つ。(千葉縣長生郡一宮町)

未生流花道師範
廣遊齋 奥田龜甲氏

氏は萬延元年五月六日、大阪市北河内郡四ノ宮上馬伏に生る。本名を龜太郎といひ、茶號を灰坊、俳名を河内庵龜年と稱す。

氏の生家は代々豪農であり、且つ名望家として知られてゐる。

氏は明治二十八年朝鮮に渡り、朴泳孝氏と親交を結び、大に朴氏の政策を援助する處あつたが、朴氏内務大臣となるや、謂ゆる東學黨の亂が勃發したので、志を伸ぶる能はずして歸國した。しかし、その間氏は、現在朝鮮唯一の貿易港たる仁川の築港を完成し、巨大なる足跡を印したのである。

歸國後の氏は、大阪市に居をトし、先づ工業家として起つべく決意し、染色事業に從ふてその緒につくや、漸次毛糸編物およびメリヤスの製造事業を開始し、着々として成功するに至り、工業界に不拔の地位を占むるに至つた。

氏はまた一面發明の才に富み、特許權を得る十數件に達してをり明治三十七八年戰役には、防寒具の考案をなし、次いで防寒用靴下を考案して、一躍巨萬の富を捆得し、氏の占むる工業界の地位はいよいよ牢固たるものあるに至つた。後更らに鑛業方面にも進出して、浦山鑛山の經營に從ひ、その手腕名聲をいよいよ高からしめたが、約十年前高齡と共に、事業界を引退し、專ら風月を樂しむの身となつた。

しかも、氏の勃々たる事業的熱意は、容易に銷磨せず、現に二の豊富なる財力を以つて、農村の副業奬勵を志し、多數の專門家をしてこれが實驗研究に、從はしめつゝありといふ。

氏は、大正元年未生流國分雪甫氏の門に入り、初めて華道に志したのであるが、氏が生來の才能と多方面に亘る知識は、華道においてもその進歩著しいものがあつた。しかも、何事に對しても創意を有する氏は、在來の花道稽古なるものに對し、著しい欠陷のあることを感じ、これが改革を行ふべきを提唱するに至る。卽ち氏は大衆を相手として一齊教育の方法を考案したのであつた。

かくて氏は大正八九年頃、大阪今橋緒方病院助産婦看護婦學校を初め、その他四ケ所の女學校に生花教授として、この新教授法を實施し、大に好成績を擧ぐるに處があつた。

氏の意見としては、次の如きものであつて、大に肯綮に當るものがある。卽ち、

『花道の教授は先づ基礎觀念を築く必要があるので、初めは十分筆舌によつて、その圖解等を說明し、その根本を理解せしめたる後、これを實際について、教導するやうにすれば、その功果を一層發揮することが出來るのである。』

といふにある。

氏は餘技として、俳句を嗜みて一家の風格を具へ、またひねり、（土器製造）に、頗る練達してゐる。（大阪府北河内郡四ノ宮大字上馬伏）

改傳元祖未生流家元
神戸市茗華會常務
日本風教會々長
蒼龍齋 石倉可甫氏

石倉可甫氏

氏名は熊太、明治十年一月四日、兵庫縣津名郡洲本町に生る。先代當流家元蒼龍齋石倉可甫翁の男であり、扇港華道界の重鎭である。

氏は青壯年時代教育家として立ち、大に功勞があり、華道は夙に父翁に就いて當流の精粹を極めた。そもそも當流は、明治三十四年四月、氏の父翁が創設したもので、父翁が同四十三年七月、歿するに及び、氏これを繼承して二代となり今日に至る。

又、自由花の研究には夙に着手して、明治四十二年の交、既に獨特の盛瓶花を發表し、關西斯界に異狀なる刺戟を與ふる處があつたのである。而して當流は駸々たる勢ひを以つて、神戸の斯界に發展し、今やその流風を慕ふて氏の門に集るもの頗る多く、關西各地は云はずもがな、内地到る處にその門葉を有し、更らに滿鮮等の植民地にもその發展を見るに至つた。

氏資性篤實仁俠、後進の指導、諸會の斡旋等には、利害を顧みずしてこれに當り、又、物慾に恬淡にして、斯界稀に見る人格者として敬仰される。蓋し、技風の卓拔に加ふるに氏の高風を以つてす、當流が駸々乎たる勢望を有するに至れることの偶然ならざるを推知することが出來るであらう。

されば、氏は教育界方面の信任最も篤く、大正十二年四月十二日、當時の鎌田文相より、兵實六三號を以つて生花、茶道教員認可證を授與され、現に左の十數校　教師として在任、斯道のために盡してゐる。卽ち神戸市立第一高等女學校、同女子技藝學校、同華合女子技藝學校、同生田川夜學校および處女會、同入雲高等女學校、同小野柄小學校處女會、同上筒井高等技藝女學校、鐘ケ淵紡績會社兵庫分工場、京都女子高等技藝學校、伏見高等女子技藝學校、大阪天王寺高等技藝女學校、天下茶屋技藝女學校等である。

更らに、神戸諸流花道團體茗華會の常務として、斯界に盡瘁する處多く、別に日本風教會を創設して、これを主宰し、技術の修養以外、人格の涵養陶冶に寧日なき努

小西池皓甫氏

改傳元祖未生流華道
家元花道從統轄司
日本風教會幹事
茗華會幹事
三光齋 **小西池皓甫女史**

小西家は奥代三草藩の大庄屋を勤め、家風として茶華道を好愛し世家元蒼龍齋石倉可甫先生に師事して、その蘊奥を極はむる處あり、遂に一新機軸を出し、專ら家元を補佐して、後進者を誘導す。

今や、その門下生頗る多く、斯道の普及發展に寄與する處、偉大なるものがあるのである。又、茶道は今日庵裏千家を修業し、現に神戸市立第一高等女學校茶道教授の囑託を受け、其外諸學校、婦人會等の團體に對し、常に生花盛花等を寄贈し、感謝狀を受くる無數に達す。別に諸流團體茗華會幹事、日本風教會幹事等の要職にあつて、斯道のため夙夜精勵を忘らないのである。當流の重鎭なるのみならず、神戸斯界の明星として重んぜられる。(神戸市下祇園町七五番地)

改傳元祖未生流華道
家元花道從統轄司
日本風教會幹事
紫雲齋 **渡邊美壽甫女史**

女史は富山縣の人、生家は累代由緒深き武家の出である。

女史は夙に改傳元祖華道未生流家元石倉蒼龍齋先生の門に入つて當流を學び累進してその蘊奥を極はむ。現に家元花道從統轄司の高職に居り、別に日本風教會の幹事として、當流および斯道に盡すてゐた。されば女史も夙に家鄉にあつて、斯道を學び、造詣する處深きものがあつたが、更らに明治三十八年に至り、改傳元祖未生流花道家元初代花儒者石倉蒼龍齋翁の門に入り、その薫陶を受け、傳書七卷の口授を修得した。

初代蒼龍齋翁の歿するや、現二世家元蒼龍齋石倉可甫先生に師事して、その蘊奥を極はむる處あり、遂に一新機軸を出し、專ら家元を補佐して、後進者を誘導す。

今や、その門下生頗る多く、斯道の普及發展に寄與する處、偉大なるものがあるのである。又、茶道は今日庵裏千家を修業し、現に神戸市立第一高等女學校茶道教授の囑託を受け、其外諸學校、婦人會等の團體に對し、常に生花盛花等を寄贈し、感謝狀を受くる無數の功多し。

又、茶道千家裏流を研修して、造詣する處が深い。(神戸市荒田町三丁目)

渡邊美壽甫女史

女史は幼少より華道に趣味を持ち、夙に改傳元祖未生流華道家元蒼龍齋石倉可甫先生の門に入つて、斯道を學ぶ。

爾來、彫身鏤骨の功を積んで、その奥儀に達し、現に家元總目代、家元門人師範役の高位にあつて、當流のため孜々精勵を怠らない。

又、日本風教會幹事長として、茶道は今日庵裏千家を修得し、これが教授である。(神戸市御幸通六丁目九十八番地)

改傳元祖未生流華道
家元總目代門人師範役
日本風教會幹事長
可樂齋 **三谷玉甫女史**

三谷玉甫女史

女史は福井縣武生町の士族である。名を孝子といふ。

夙に改傳元祖未生流華道家元石倉蒼龍齋先生の門に入り斯道を學ぶ。爾來累進して家元總目代職、教務係長となり、當流のために努むる處多し。

又、日本風教會幹事、彌生會幹事等の要職にあつて、一般斯界に寄與する處多大である。

茶道は今日庵千家裏流を修めて、教授として久しく在職す。

現に神戸女子高等技藝學校茶道華道擔任教授、神戸市立明親高等小學校茶道囑託等の任にあると共に、社中多數を擁して、夙夜斯界のために盡瘁しつゝあり。(神戸市平野下祇園町一五四番地、電話元町一九九九番)

改傳元祖未生流華道 家元目代職教務係 日本風教會幹事 一德齋 市岡政枝甫女史

市岡政枝甫女史

女史は夙に神戸華道界の耆宿として、聲望隆々たる改傳元祖未生流家元蒼龍齋石倉可甫先生に師事し、その蘊奥を極むる處があつた。現に家元目代職、教務係として當流の重きに任じ、又、家元創設する處の日本風教會幹事として、社中の人格向上に盡す處尠少ならざるものがある。

茶道は今日庵千家裏流に達し、これが教授たり。(神戸市中山手通一丁目二一八ノ五番地)

改傳元祖未生流華道 家元師範代役頭 日本風教會幹事 凌雲齋 井上美雪甫女史

井上美雪甫女史

女史名は美雪、兵庫縣下佐用郡幕山村福吉に生る。

早くより改傳元祖未生流華道家元蒼龍齋石倉可甫先生について、斯道を學び、孜々として研修の功を積み、その奥儀に達す。現在家元師範代役頭として、當流のために盡し、別に日本風教會の幹事として、師の事業に參劃功あり。

現に神戸市立湊川夜學校專科正教員を勤務し、傍ら茶花道教授を擔任し、又、神戸市立楠高等小學校花道囑託教授をも兼ねてゐる。

茶道は今日庵千家裏流を極めて、これが師範たり。(神戸市湊川町六丁目一二四番地)

改傳元祖未生流華道 家元師範代諸國總會司 日本風教會咸興支部長 安德齋 賴兼とく甫女史

石田春甫女史

女史は、初め改傳元祖未生流花道家元師範代蘋心齋井上藥甫師の門に入り、夙にその奥儀を極はなるに至る。又、茶道は今日庵裏千家を修め、同じくその蘊奥を修得した。

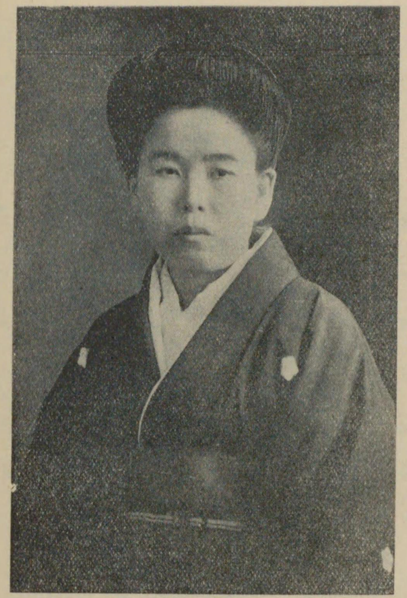
現在職役は家元師範代役頭であり、日本風教會幹事、茗華會幹事等としても盡瘁專らである。

社中亦多く、別に神戸市森高等女學校茶華道教授囑託、神戸市立明親高等小學校茶華道教授擔任等の職にあつて、盡す處多し。(神戸市平野馬場町二二〇番地)

門に入り、當流を研究する處あり、業大に成りて後、更らに家元蒼龍齋石倉先生の直門となり、その蘊奥を極むるに至つた。

現に家元師範代、國總會司の役にあり、日本風教會咸興支部長として、植民地における、斯道普及のため精進する處多く、その功績顯著なるものがあり。（朝鮮咸鏡南道咸興軍營通り、電話三〇五番）

改傳元祖未生流華道 家元執事教務係 日本風教會幹事 幽玄齋 丸龜種甫氏



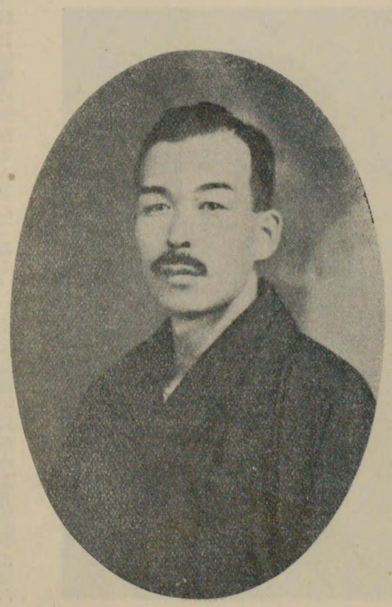
頼傘とく甫女史

氏は德島縣下の出身、夙に神戸華道會の重鎭改傳元祖未生流華道家元石倉蒼龍齋先生について斯道を修め、技術の進境顯著なるものあり、累進して現に家元執事、教務係として、後進の誘掖に力を盡しつゝある。別に日本風教會幹事の職にあつて、師の事業を補佐して功あり。

茶道は裏千家を極はめ、これが師範である。

社中多くを養成するの傍ら、神戸市立八雲高等小學校花道教授囑託、同若松高等小學校並に鐘ヶ淵紡績會社兵庫分工場等の擔任教授として努力しつゝあり。

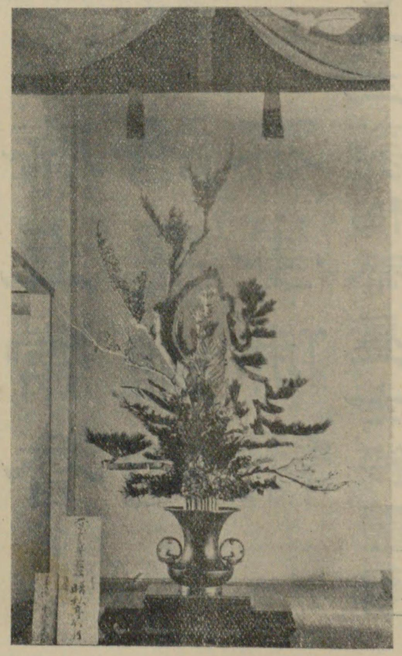
爲人溫厚にして眞摯、當流の重鎭として、將亦扇港斯界の新進として重きを成してゐる。（神戸市吉田町二丁目四〇七番地）



丸龜種甫氏

天皇陛下大阪へ行幸あらせられた際同市廳衞便殿に裝典したる花

小原流盛花瓶華家元　小原光雲氏謹挿



池坊東京研究會副會長

晴秋亭　宇佐美竹月氏作

華道十德

昇交高位
衆多嚴敬
起草木名
朝暮風流
精魂養生

芒無他念
不語成友
席上常香
諸惡離別
不事佛緣

七十三翁松菴居士錄

故翠雲軒武藤松庵先生

先生名は一二、天保十年福井縣武生町に生る。夙に禪學を修め、永平寺悟由禪寺と親交あり、且つ和漢の學に造詣深く、詩文長じ、又書の大家として知らる。明治五年茨城縣古河町曹洞宗松鱗寺の住職として入山、同十七年同地の素封家武藤五八氏に懇望され、その女ナミ子の女婿となつた。五八翁亦學識あり且つ自ら學院を經營、特に地理學者として著聞した。松庵先生は、最初遠州流華道を修め、明治八年池坊家元に入門、累進して蘊奥相傳を得、大日本總華督となり、後、家元代見として全國を巡教す。現在家元發行の花道書は、主として先生の述作にかゝるもので、その當流に盡せる功績甚大、池坊今日の盛運は先生の功に負ふ處過半であり、坊門の恩師として敬仰さる。大正三年遠州岩田立山氏宅において歿す。享年七十六歳。現に一女すゑ子女史二代翠雲軒を繼ぎ松花と號し、總華督の地位にあり、茨城縣古河に在住す。

跋

自然ほど美的なものはなく、美ほど自然的なものはない。兩者の存在は別個のものでありながら、一全體として綜合される時、自然は美を美は自然を、共に完成の域に導くと共に、自からも亦は兩者をも完全な境地に置くことが出來る。それは我が日本の國土が、美的な自然として世界に誇り、一面自然的な美のすべてをもつことを世界に讃美し得らるゝことによりても、何等の誇張もなく主張し得るのである。斯る意味に於ける大自然の美は、我が國土に滿ちてゐるが爲めに、我が國民はその上代から大自然の美に育成され、これを禮讃し、必然のうちにこの大自然美を我の中に寫して、世界無比の一大藝術を作つた。この自然美に生きて來た國民は、更にこの自然美を生かす感謝の心を忘れ得なかつた。自然を生かすことは神の技術として更にこれを尊重した。この最大の使命によつて生れ出たものこそ世界無比獨自な我が華道藝術である。

一枝の草木をも、血の通へるものとして扱ひ、草木と共に語り、共に寢食すると心得て、吾を草木の中に見出すのは、美的な大自然から感化された大和民族の强い本性であり、この本性を無限に語るのが日本の歌であり、茶道であり、花道であり、庭園である。自然の中に解け込む自個の心を、永遠の美に到達させるものが日本の藝術であり、自然の美を自個の中に保存し、所有し、再現し、靈活せしむることを絶對の境地として、そこに草木の一枝一葉を一瓶の中に疊み、この一瓶の中に更に大なる自然の美を見出さうとするのが花道藝術である。それ故に、一瓶の花の中には、一木一草の花姿を通じて、更に偉大なる生命が流れてゐる。それ故に、一瓶の花は、室内裝飾としての生命よりも、室内をして自然美の再現として價値づけることが、どれほど草木への善的行爲でゞもあるかが、尠なくとも日本國民には、古今を通じて理解されて來たのであつた。花を生ける術を、道と稱び來つたのも、實は藝術に於ける美と道德に於ける善とが、眞の世界に於て合致することを語る唯一の證據である。この道と云ふことが、後には道德の先驅をなすものゝ樣に誤解されたのは、それ故に花道本來の精神から考へれば、悲しむ可きことであらねばならない。然し斯樣な本性に遡れば、大自然の美が、如何に吾々の日常生活に於ける目まぐるしさの中にも深い詩境を見出さし

め、美的生命を意識せしめたかを考へさせるであらう。この美的意識の中には、自然が教へ導く、純粋さと必然さと和合さとが中心となつて、花道は更に更に獨自のものとなつた。

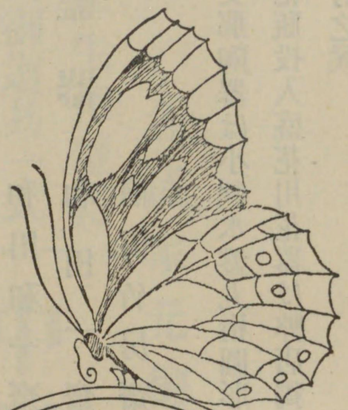
斯る華道藝術は、その特殊なる藝術的領域を有するが故に、今將に世界の藝術として檜舞臺に登らんとしてゐる。誠に日本の華道藝術は、その内的生命の發見に於て、その外的進出に於て、今日ほど一大勇飛の時期はなく、全く古今未曾有の躍進時代でなければならない。内省して一大自然の無上なる藝術領域たることを自覺し、進んでこれを世界の大藝術として、自他共に許し得る處まで努力しなければならぬ。

この秋に當り、『現代華道家名鑑』の刊行は、實に日本華道界の爲めに劃時代を出現するものである。獨り華道界の爲めのみならず、日本精華の發輝に於て、無上の寶典たることは言ふまでもなく、寔に邦家の爲め、藝術の爲め慶賀にたへぬものがある。余はこの日本國粹藝術の世界的展開の爲めに、菲才をもつて當ること可也久しいものあるが爲めに、斯くの如き名鑑の刊行は爾來希望すること切なるものがあつた。幸にしてこの年來の希望が實現したことを、この上もなく喜ぶと共に、松尾、平元兩氏の絶大なる努力に對して、深甚の感謝と敬意とを拂ふものである。願くば他日、本名鑑によつて、我が大日本華道藝術が、眞の輝きを世界に布くと共に、自からの光を内に向つて明示することを要望するものである。華道藝術の現在及び將來を思念する時、余はこの書の完璧にして後世の指針たることを悦びつゝ、茲に皮相の見を叙して跋文とする。

昭和四年六月下浣

重森三玲識

一品で一分で
肌滑かに白くなる……二重化粧作用
レートメリー



煉白粉の時代から
メリーの時代へ
若々しい家庭の主婦も
忙しいオフイスガールも
活潑な女學生諸嬢も
爭つて愛用される
新早化粧料
六〇錢
三五錢

東京・平尾賛平商店・大阪

すゞやの名家作品

銅器　原田峰雲氏

陶器　淺見五郎助氏
　　尾野岩次郎氏

籃器　和田和一齋氏
　　和田一齋氏
　　前田竹房齋氏

支那陶器は小判水盤丸楕圓形長方形水盤壺形
花瓶投入盛花用花器は弊店獨特の品多數取揃
有之候

すゞや花器店

東京赤坂區溜池町三（葵橋前）

電話青山四八八七番

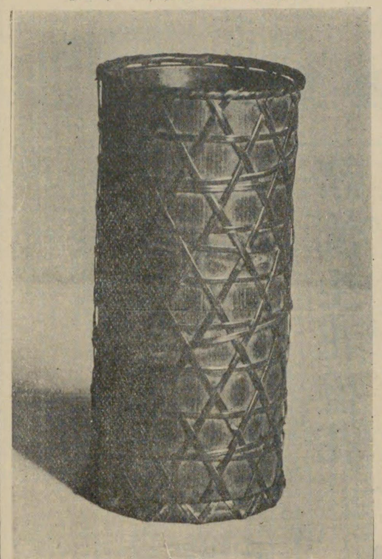
各流家元御用達

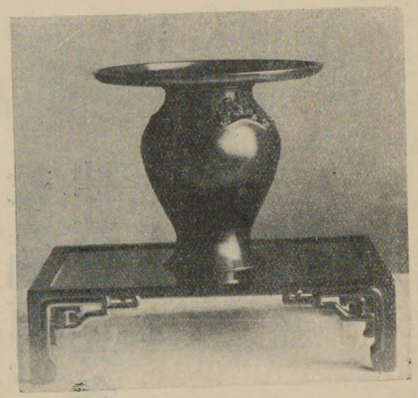
諸流生花盛花
投入御道具一式
抹茶道具各種

中村屋花器店

東京市本郷區本郷一丁目八番地
電話小石川一四〇五番
振替口座東京四三五二番

新案意匠登録第五二八號





正輝作

雲スカシ薄端朱檀花臺付
金四拾八圓

生花投入兼用
あみきせ寸度
銅落し入れ
大參圓五拾錢　中參圓　小貳圓五拾錢

弊店は先代ヨり刄物師を營み。生花用御道具は商標正市印にて。切味の好き事。諸流家元様始め。先生方より多大の好評を得て居りました。其後一般に花道が盛んになり。諸先生方の御引立に依り。花器類全部取揃へ。お花の道具專門店となりました。大正初年より營業上是非必要なる花道をも研究致し。花器花止等に種々の新工夫を致し。自ら製作致して居ります。又御好みに應じ風雅な花器を自製致します何卒多少とも御用命下さい御待ち申して居ります。

諸流生花盛花投入**御道具一式**

茶の湯御道具一式

正市 見澤花器店

東京市神田區豊島町廿二
（市電美倉橋下車）
電話浪花（67）三四六六番

花器の栞無代進呈

營業品目

銅器……薄端、水盤、立華器、御玄猪、不老門、蓬萊山、壺形、眞の花器、月舟、各種

花台……華盤、漆花台、各種、唐木花台、飾花台、敷板、各種

竹器……寸胴、金井、鶴足、一重、二重、三重、置舟、釣舟、花籠、各種

舟虫板製……釣瓶、水盤、置舟、各種

陶器……支那陶器水盤、壺式變形各種、小判長方形丸水盤、各種

其他附屬用御道具一切竝茶の湯道具一式
尙刄物類一切は吟味新製獨特の切味に有之候

諸流生花盛花投入**御道具一式**

竝に茶の湯道具一式

卸小賣

何品も**豊富**に取揃へ**良品廉賣**の**阪東**へ先づ多少共御用命願ひます。一度は**是非御來觀**の程御願ひ致します。

阪東花器店

東京市本郷區湯島天神町三ノ三
（上野廣小路ヨリ一丁電車通リ）
電話下谷七一七八番
振替東京五八一一九番

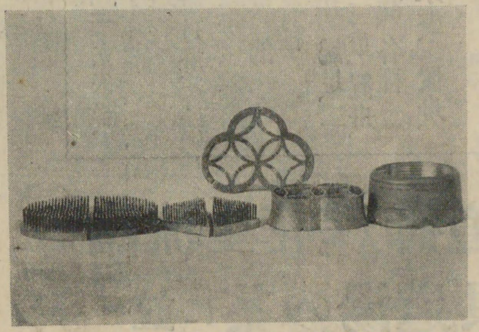
營業種目

立生華用花器各種
盛花投入用花器各種
銅、竹、籠、陶、木、漆、石、等
茶の湯御道具一式
殊ニ弊店ノ花止ハ超文化的トシテ目下諸先生ノ大好評ヲ頂イテ居マス是非御用命ノ程願上マス

滿月劍山（特長）
直徑五寸大滿月二個デハ半月大大水盤ニ御使用恰モ湖上ノ月ノ如ク
定價 貳圓

三角劍山（特長）
二等邊三角形二個一組四角トモ菱形トモ又如何ニ延長スルモ良シ目下大好評
定價 八十錢

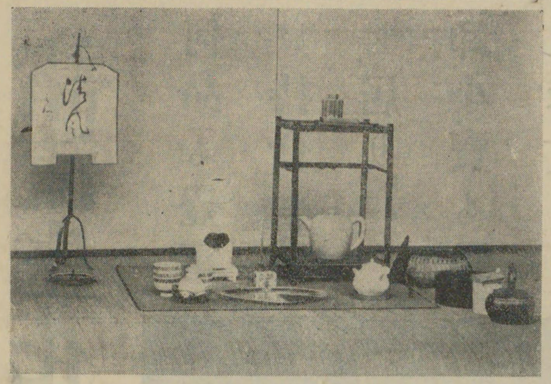
元式七寶及受筒（特長）
水通ヒヨク如何ニ淺キ花器ニテモ御花ノ精氣ヲ永ク保ツ



諸流御用

右衛門堂

東京市本郷區切通坂町三
電話小石川五五八六番（呼出）



（綾瀬棚行々三の飾右勝手）

煎茶道具一式取扱
盆石花器も出高老舗

東洋一の茶道具店
料理製造販賣所八
東京市京橋区永代はし通り
木玉ら
電話京橋二千〇五拾八

花月庵流煎茶 **清玩規**（茶具配列）
花月庵流祕錄 **煎茶法式**（手順がき）
貳冊壹組 金拾貳圓也（各冊六圓づゝ分讓す）

昭和四年八月十日印刷
昭和四年八月三十日發行

不許複製

現代華道家名鑑

非賣品

發行所　東京府大井町南濱川一七四二
大日本華道會内
現代華道家名鑑刊行會

印刷所　東京市京橋區南小田原町二丁目十二番地
今井印刷所

印刷者　東京市京橋區南小田原町二丁目十二番地
今井鐵次郎

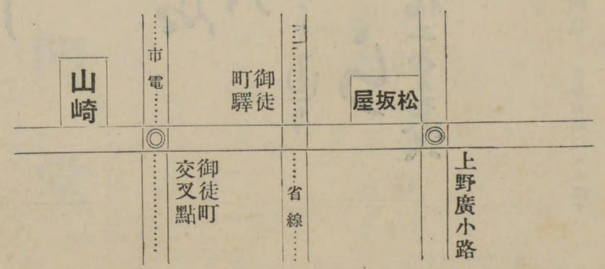
發行者　東京市牛込區市ヶ谷仲之町三十五番地
渡邊倪

著作兼

諸流生花投入盛花御道具一式

何品も豊富に持合せ致し居り
卸小賣も致します

東京下谷區御徒町二丁目
山崎花器店
（御徒町交叉點際）



K 2L-15